



Title	結果構文・結果表現の意味論—日本語・英語・ロマンス語の比較に基づく研究—
Author(s)	濱本, 秀樹
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学
学位申請論文

結果構文・結果表現の意味論

—日本語・英語・ロマンス語の比較に基づく研究—

濱本秀樹

提出先 大阪大学大学院人文学研究科

2022年12月

中学校の英語の授業で「現在完了形」を習った時、先生が「現在完了形は過去を表す副詞とはいっしょに使ってはいけない」と説明されたがどうも腑に落ちなかつた。「たった今昼ご飯を食べたところだ」という完了の用法ならそうだろうが、過去の経験なら「3年前パンダを見たことがある」という意味で“*I have seen a panda three years ago*”と言っても何の不都合もないように思えたからだ。「なぜ過去の副詞とはいっしょに使えないのですか？」と質問しても、先生は「そうなっているからだ」というばかりでどうにも納得がいかなかつた。

そんな私が色々な事情が重なつて、高校の英語教員になつた。英文法に苦手意識が強かったので Quirk らの *A Grammar of Contemporary English* をノートにまとめながら読んでいったが前途に明かりは見えて来ず、逆に巨大な英文法の闇に飲み込まれそうな気がした。授業でも「そうなっているからだ」と言わずに生徒が納得のいくような説明をしたいと思いながらも、なかなかその実現にはたどり着けないでいた。そんなおり、毛利可信先生の『橋渡し英文法』を手にとつてみた。最初の章「伝統文法と新言語学」を読み、「これが求めていたものだ、私が求めていたものは新言語学の中にあるに違いない」と頭に稻妻のようなものが走つた。同時に学問として新言語学、英語学を学びたいという希望が強く芽生えた。大阪大学の大学院文学研究科で学んでいた時には毎日が新しい発見の連続であり、英語学の広がりと奥深さに感動を覚えた。先ほどの問題、*the present perfect puzzle* については Klein(1992)を読んでどうやら納得でき、これが私だけの問題ではなく英語学上の問題であることも知つた。

大学院での学びは本当に楽しかつた。意味論の面白さと難しさは河上誓作先生（大阪大学名誉教授）にご指導いただいた。統語論は成田義光先生（大阪大学名誉教授）にお教えいただき、また大庭幸男先生（関西外国語大学学長）には生成文法の動向をご教授いただいた。先生方には心より感謝の意を表したい。先生方との出会いがなければ、その後の大学の英語教員への道も開けなかつただろうし、また、このような形で論文をまとめるることもできなかつたであろう。

この論文のテーマである「結果構文」についてはかなり前から興味を持っていて、文献を読み自分なりの意見を論文にまとめてきた。しかし色々考えているうちにこれは思いのほか大きな問題であると気付いた。幾つかの学会誌に投

稿を続けているうちこの問題をまとめてみたいと思うようになった。この主題の理解と整理とに関しては大阪大学大学院人文学研究科の岡田禎之先生にはひとかたならぬご指導をいただいた。同研究科の田中英理先生にも最新の意味論についてご教示いただいた。また同研究科の神山孝夫先生にも貴重なご意見を賜った。ここに深い感謝の意を表したい。またルーマニア語の結果構文について貴重な情報を寄せくださった Emma Tămăianu-Morita 先生にもお礼申し述べたい。

一介のデモ・シカ教員だった私が今日まで勉強を続けて来られたことは本当に有難いことと感じている。また「生涯英語教員」として職業人生を全う出来たことも存外の幸せである。関わりのあった全ての人に心より感謝申し上げたい。特に、この論文作成にあたって心の支えになってくれた妻の智子にこれを捧げたいと思う。

目次

第 1 章 結果構文をめぐる 4 つの観点	1
1. はじめに	1
2. 結果構文とは—その諸問題—	5
2.1 Jespersen(1940)の理論	5
2.2 Halliday(1967) <i>depictive</i> と <i>resultative</i> の区別	6
2.3 Dowty (1979) モンタギュー文法での説明	6
2.4 直接目的語制約(DOR):Simpson(1983),Perlmutter (1978) Levin & Rappaport Hovav (1995)の見解	8
2.5 結果述語の制限 Levin & Rappaport Hovav(1995), Tortora(1998)	11
2.6 Wechsler (2005)結果述語の意味論—Maximal end-point constraint	15
3. 結果構文の 2 分類に関する諸理論	22
3.1 Washio (1997) 弱い結果構文と強い結果構文	22
3.2 Croft (2012)の結果構文の 2 分法	24
3.3 Iwata (2006)の 2 分類	27
3.4 整理	28
4. 慣性世界意味論：状態変化を含意する結果構文と慣性世界制約	30
5. まとめ	34
第 2 章 結果構文の系統分類と結果表現	36
1.はじめに	36
2. 「構文」、「語彙」、「結果表現」、「結果構文」の定義	38
3. 英語の結果構文の分類	44
3.1 他動詞をもつ結果構文	45
3.1.1 因果関係的、状態変化を伴わないプロセス動詞、RP の 叙述が目的語の場合	45

3.1.2 因果関係的、状態変化他動詞、RP の叙述が目的語の場合	47
3.1.3 RP が主語を叙述する場合	49
3.2 動詞が自動詞の表現	52
3.3 英語の結果構文の 3 分類	54
4. 日本語の結果表現	60
4.1 Type A: いわゆる「弱い結果構文」と対応する日本語表現	60
4.2 状態変化を伴わない他動詞結果構文に対応する日本語の結果表現	
4.3 結果的複合動詞構文	65
4.4 複文構造の結果表現: S_1 - <i>made</i> S_2 と S_1 - <i>hodo</i> S_2 構文	67
4.4.1 S_1 - <i>made</i> S_2 構文	68
4.4.2 S_1 - <i>hodo</i> S_2 構文	69
4.4.3 日本語特有の結果表現(SRs)と英語の「強い結果構文」	72
5. まとめ	77
第 3 章 CAUSE がどこからくるのか	79
1. はじめに	79
2. 概念構造の合成説 (影山 1996)	80
3. 形式意味論的アプローチ	83
3.1 Kratzer(2005) : type シフト説	83
3.2 Rothstein (2003, 2004) : PART-OF 説	84
4. 統語的機能構造論 (Hu 2018)	87
5. Event-Frames アプローチ(Boas 2003)	91
5.1 導入	91
5.2 Boas の結果構文の機能分類	93
5.3 各 Event frame の検討	95
5.4 Boas 説の総括	99
6. Force Recipient アプローチ(Iwata 2019)	100
6.1 導入	100
6.2 結果構文の捉え方	100
6.3 Iwata の主な論点	103

6.3.1 結果述語の前置詞句と形容詞の違い	103
6.3.2 enabling 型の結果構文	104
6.3.3 目的語制約と force transmission に依存しない結果構文	105
6.4 Iwata (2019)の総括	107
7. 項構造の統語構造への投射理論 Folli and Ramchand (2004)	108
8. なぜ Goldberg and Jackendoff (2004)なのか	111
8.1 まとめ	111
8.2 Goldberg and Jackendoff (2004)を選択する理由	112
第4章 因果関係と意味論	120
1. はじめに	120
2. 因果関係諸説の概観	122
2.1 因果関係論の俯瞰とニューロダイアグラム	122
2.2 恒常的継起性理論 (regularity theory of causation)	124
2.3 反実仮想的因果関係理論	130
2.4 構造的等式フレーム理論(Structural Equations Framework: SEF)	140
3. 結果表現と因果関係理論との対応	146
3.1 日本語と英語の因果的依存性のまとめ	147
3.2 結果構文の統語論	151
3.3 最後の難問たち	153
3.3.1 因果関係ではない (?) ケース	153
3.3.2 「過去」ではない結果構文	154
4. まとめ	156
第5章 同等関係としてみた日本語の結果表現—ルーマニア語、イタリア語との比較—	159
1.はじめに	159
2.ロマンス語の結果表現	165
3. 日本語の「ほど」の意味論	179
3.1 同様表現「ほど」	179
3.2 HODO の特徴	179
4. 結果表現の「ほど」(R-HODO)の意味論	183

5. 結果表現の「まで」(R-HODO)の意味論	192
6. Type C と「ほど」	196
7. 「ほど」と「まで」の間	202
8. まとめ	202
第 6 章 結果構文の 3 分類とその歴史発展に関する通時的考察	206
1. はじめに	206
2. 英語と日本語の因果的結果表現再考	207
3. 英語結果構文の通時的分析	209
4. 言語変化の理論	218
5. Blending 理論	224
5.1 Blending 理論の基礎理解	224
5.2 Blending と Abduction	232
5.3 ME 期の結果構文の変化	236
5.4 ModE～PE 期の結果構文の変化	239
6. 日本語の特定結果表現の通時的観察	245
7. まとめ	249
第 7 章 総括と展望	251
1. 結果構文の 3 分類と因果関係—第 1 章～4 章に関連して—	251
2. 因果と還元性—第 3 章 結果構文の意味論に関連して—	254
3. ロマンス語との共通性と言語相対性—第 3 章と 5 章に関連して—	255
4. 結果構文と結果表現の通時的観察—第 6 章に関連して—	257
5. 英語の結果構文—その意味と属性の総括—	260
6. 展望	263
参考文献	264
Synopsis	275

第 1 章

結果構文をめぐる 4 つの観点

1. はじめに

因果関係は世界に満ち溢れている。それがなくては事象を関係づけられないために「因果関係は世界を束ねるセメントである」と哲学者の Hume は述べている。その因果関係を描写する手段の一つが結果構文である。結果構文は長期にわたり言語学界において広範な議論の対象であり続けてきた。このことはこの話題に関する著作や論文の多さが証明してくれる。この論文の目的はこのすでに取り上げられて久しいこの話題に今までにない新しい観点を導入することである。

第一の観点は、広範な既存の理論と哲学上の因果関係理論との対応を探ることである。結果構文、結果表現とはどのような現象を示すのかを系統的に考察した上で、これらの現象に関する諸理論が因果関係 (*causality*) をどのように説明しているのかを確認する。それらの理論の問題点に關係すると思われる哲学的因果関係理論である Hume 理論、Lewis 理論、最新の理論的発展である Hitchcock 理論も議論の範囲に収め、対応関係を明らかにする。因果関係理論は結果構文の意味論に密接に結びつくのであるが、既存の学説ではほとんど議論されてこなかった。本論文では、哲学的因果関係論と結果構文との関連性を重視し、真理条件の確定のためには因果関係を構成する CAUSE 関数の正確な意味論的規定が必要であることを論じる。

2 つ目の観点は比較言語学的研究と通時的研究の統合である。日本語、ロマンス諸語（イタリア語、ルーマニア語）と英語を比較することにより、英語以外の言語では、結果構文ではなく同等構文などが担っている意味の領域に英語では結果構文が拡張していったのではない

かという仮説を通時的に検討する。通時的観察に関連して「言語変化の理論」を取り入れる。コセリウの言語変化理論(E.Coseriu,1958)の中心的概念を仔細に検討することで、人の伝達活動（パロール）の必要性から生じる変化の要請と、変化に抵抗する規範性を備えた言語（ラング）の動態的性質とはどういうものなのかということを充分認識したうえで結果構文の変化の歴史を整理する。

3つ目の観点はこの発展のプロセスを Blending 理論の援用により明解に説明することである。この理論は比喩の理解や社会事象に関する言説などの分析に多用されてきた。これに言語変化の理論を取り入れることで言語の変化を比較し相対的に説明できるようになる。しかしこの blending 理論だけではなぜそこで規定するようにプロセスが発動され進んでいくのかが明確ではない。人間の推論の一つに帰納でも演繹でもない、「驚き」や「当惑」を解消する原因を探る論理の働きである仮説形成推論を blending のプロセスに組み込むことでさらに説明力ある理論に再構成することができることを示す。

4つ目の観点は日本語の結果表現の「ほど」、「まで」の意味論に形式的説明を与えることである。このことで日本語では同等関係がいわゆる強い結果構文の役割の一部を担っていることを説明し、さらに英語の「強い結果構文」についての意味論にもその説明が拡張され得ることを示す。英語の「強い結果構文」のいくらかは直接的な因果関係を表現するのではなく、2つの事象間の意味的スケールでの程度や同等性を伝達する機能を持っているのではないかという仮説を提示する。

以上のように4つの観点を取り上げて議論を展開するが、一番肝心な視点は、今までの結果構文をめぐる諸理論は共時的でありすぎたという反省に基づき、通時的な見解を導入するということにある。これら4つの観点は各章での議論の中心テーマである場合も多いが、さらに章を跨いで相互に関連することもある。そこでこの論文の構成についてより具体的に述べておきたい。

この1章では結果構文とはなにかについて確認するための見取り図を提示する。結果構文の規定も研究者によって幅があり、結果構文の

範疇が明確ではなく、議論がかみ合わない場合も存在する。この章では研究の流れを概観し、どのような問題が議論されてきたのかを明らかにする。この検討を通じて我々が本論文で研究対象とするべき「結果構文」の範囲、また「結果構文」と「結果表現」の関わりを明確にする。

第2章では、第1章の議論に基づき、日本語と英語の結果構文、結果表現の系統分類を試みる。そこでの結論を先取りしていえば、英語の結果構文については様々な分類が提案されているものの基本的には3分類で概ね特徴を纏められることを提案する。また日本語はいわゆる「弱い結果構文」は存在するが「強い結果構文」は存在しないという通説を原則的には受け入れるのであるが、同時に日本語も英語の「強い結果構文」の意味や機能に対応する表現があることを主張する。これらの表現は結果的複合動詞構文、 S_1 -*hodo* S_2 構文、さらに S_1 -*made* S_2 構文であり单文の結果構文の形式は取らない。これらと弱い結果構文とを合わせ、その機能を基に分類すると日本語の結果表現も概ね3系統に分類可能であることを述べる。英語の3分類と日本語の3分類には完全ではないにせよ興味ある関連性が認められることも指摘したい。

第3章で、第1章でも概観した諸理論を *causality* がどう捉えられているかという観点から精査し、整理していく。手順として形式意味論的アプローチ、語彙概念意味論的説明、さらに構文文法を基礎にした結果構文論を確認していく。それぞれの理論が因果関係(*causal relation*)をどのように捉えているのかを解明しその長所と強み、さらに問題点を明らかにしていく。

第4章は、第3章の結果構文の諸理論の *causality* の扱いの問題と直接関連する。先ず因果関係の哲学史的概観から始め、CAUSE 関数をどのように理解してきたのかを考察する。これは結果構文の真理条件を明確に示すためには避けては通ることのできない作業である。しかし今まであまり議論されてこなかった。この作業を通じ各理論の提案が結果構文にどの程度適用可能性を持つのかを見てみる。ここでは

Hume の恒常的継起的因果関係説、Lewis の反実仮想的因果理論、さらに最近の発展形である Hitchcock の構造的等式フレーム理論(SEF theory)を取り上げ、英語の結果構文の持つ *causality* がどの理論によって、どのように説明されているのかを検証する。この作業により、英語の結果構文の 3 系統が相互にどう関連するかの相対的位置づけもよりはっきりと見えてくる。

1 章から 4 章がこの論文の概念基盤であり、ここで挙げられ可視化された諸論点が 5 章、6 章で独創的な問題点の理解の中に取り入れられ、そこで適切な分析と解決を与えられることになる。

さて第 5 章は本論文の特徴の一つである結果構文、結果表現の他言語間の比較検証を扱う。日本語は「弱い結果構文」のみならず「強い結果構文」に対応する意味や機能を持つ独自の表現があることは 2 章で示されるが、さらに日本語によく似た意味的分布を示すイタリア語、ルーマニア語の結果表現との比較対照分析から、それらの結果表現の一部は直接的因果関係を示す構文ではなく、むしろ同等構文とみるべきであるとする新しい観点を提示する。「原因一結果」の関係が程度 (degree) 比較を含む同等関係論でどのように説明可能かを形式意味論的に解説する。

第 6 章は、本論文の特徴の一つである言語の通時的分析と言語変化の問題を扱う。日本語やロマンス語系諸言語とは異なる性格を持つ英語の結果構文の通時的な進化を辿ることで英語の結果構文が基本的なプロトタイプと考えられるものから歴史的に拡張されて来たことを明らかにする。そしてその特異な発展の過程を説明するために、blending 理論を採用することにするがその不充分な面を補完するため、言語変化の理論と仮説形成推論とを組み込む。これにより結果構文の歴史的発展がより明瞭に説明可能になる。また日本語の結果表現も通時的に分析され、日本語独自の「強い結果構文」に対応する結果表現は古代から現在まで連綿と使用されてきており、そこに意味の場の空白がなかったことが英語との大きな違いであることを述べる。

第 7 章は以上の議論の総括を行う。様々な論点が大きな構図を描く

ことを説明したい。また今後の展望についても述べる。

特に、因果関係理論からの知見や日本語の結果表現との比較により、英語の「強い結果構文」の一部は意味的には直接的因果関係を表現せず、日本語の固有表現と同じく同等関係を表すものに変化してきていることを再度確認する。そこで議論は「言語変化は諸言語の歴史における言葉の創造性の表れである」とする Coseriu(1958)の主張を裏付けるものと言えるかもしれない。

2. 結果構文とは—その諸問題—

2.1 Jespersen(1940)の理論

英語の結果構文に関する最初期の言及は Otto Jespersen の著作に認められる。Jespersen (1970[1940])は次のように述べている：「他動詞であれ、自動詞であれ、それが結果、すなわち主動詞によって示される動作や状態の帰結を表すネクサス関係と結びつけられること」(1970[1940: 23])。例を次にあげる。

- (1) a. It is like a trumpet trumpeting the graves open.
b. A preacher would preach folk asleep.
c. Your father is trying to starve you into returning to Oxford.

(Jespersen 1970 [1940]: 25-27)

これらの例では述語の *open*, *asleep*, *into returning to oxford* が結果状態や結果位置を示しており、それは主動詞 *trumpet*, *preach*, *starve* の示す *action* の結果として生じている。しかしこれらの動詞は *break* や *paint* のように状態変化を意味の一部に含む状態変化他動詞ではないことに注意が必要である。つまり *trumpet* を吹くことは *grave* が開くことを含意しているわけではない。Jespersen は結果構文を後に分類の際に述べる「強い結果構文」を念頭に置いていたことになる。また彼のいうネクサス関係とは *the graves – open*, *folk – asleep*, *you – into returning to Oxford* にみられる叙述関係のことであり、第

二叙述関係(the secondary predicate structure)ともいわれる。

2.2 Halliday(1967) *depictive* と *resultative* の区別

Halliday (1967) は *depictive* と *resultative* との区別のために *attributive* (属性的) という概念を使用した。先ず Halliday のあげた例をみてみよう。

- (2) a. Claire sold the potatoes cheap.
b. Claire washed the clothes clean.

(Halliday 1967: 63-64)

上の例では両方とも NP V NP Adj という構造になっているが意味は相當に違う。*Depictive* は属性的要素が動詞の表現するプロセスに関して随伴的(concomitant)で、結果(result)ではないものを表現するが、*resultative* の方は参加者の特性の変化を示し、動詞の示すプロセスの結果生じた属性を記述するとしている(Halliday 1967: 63)。上の(2a)は「Claire がポテトを売り、彼女が売った時、それらは安かった」ということを示す記述的(*depictive*)表現である。売ったからポテトが安くなつたわけではないのだ。動作の結果が目的語に状態変化を引き起こしたのではない点が重要である。また(2b)は「Claire が衣服を洗つたので衣服はきれいになつた」ということを示す結果表現である。これは明らかに洗つた結果、きれいな状態になつたのであるから状態変化が関与する。

Halliday の記述はこの紛らわしい構造を区別する基準を提供するものであり、この後の議論にも登場する。

2.3 Dowty (1979) モンタギュー文法での説明

さて結果構文を取り上げた重要な古典的分析の一つに Dowty (1979) の研究も含まれる。彼はこの研究の中で結果表現を *factitive constructions* (作為動詞構文)と呼んでいる(Dowty 1979:219-224)。

その定義は「この構文は *activity* 動詞が目的語に伴われ、その目的語が *activity* の結果としてその状態になる形容詞をも伴う」と述べ次のような例をあげている (Dowty 1979:219)。

- (3) a. John hammered the metal flat/smooth/shiny.
- b. John wiped the table clean/dry/smooth.
- c. Mary wrenched the stick free/loose.
- d. Mary shot him dead.

Dowty はこの構文では結果述語が容認されないものもあると述べている。その例を見てみよう。

- (4) a. ?John hammered the metal beautiful/safe/tubular.
- b. ?John wiped the surface damp/dirty/stained
- c. ?Mary shot him lame/wounded.

この容認度の違いについて Dowty は Green の研究に言及し次のように述べている。

Research on this problem (Green 1972) has uncovered no general principle which predicts this difference in acceptability, and I take this is a good indication that this construction is a kind of lexicalized compound verb, though one which typically appears as a discontinuous constituent.
(Dowty 1979:303)

この問題を研究していた Green もこの容認度の違いを予測する一般的な原理を発見することはできなかった。これは私が思うにこの構文は非連續的構成素として現れる語彙的複合動詞である。

この他動詞と形容詞が複合し新たな他動詞を構成し、その因果関係は翻訳規則がもたらすとする。例えば *Mary shakes John awake* であれ

ば次のように解釈される。ここで S は統語規則、T は解釈規則である。

- (5) $S26 \text{ If } \delta \in P_{TV} \text{ and } \alpha \in P_{ADJ}, \text{ then } F26(\delta, \alpha) \in P_{TV}, \text{ where } T26(\delta, \alpha) = \delta\alpha.$

$T26 F26(\delta, \alpha)$ translates into:

$$\lambda x \{ \lambda y [\delta'(x, y) \text{CAUSE BECOME } \alpha'(y)] \}$$

- (6) [shake'(m, j)CAUSE BECOME awake'(y)]

モンタギュー文法では統語規則と意味翻訳規則 ($T26$ は簡略化されている) が対になっている。この構文の翻訳規則 $T26$ に CAUSE BECOME が組み込まれている点に注意が必要である。他動詞 *shake* は状態変化動詞ではないのでその意味に CAUSE も BECOME も含まない。それは翻訳規則が付与すると考えるのである。その結果、この文の意味表示は(6)のようになり、*Mary* が *John* を *shake* したことが *John* の *awake* を引き起こしたことになる。この意味構造は基本的に後でみる語彙概念構造の形式とほぼ同じであり、形式的に結果構文の意味を考える場合の標準的な扱いである。

根本的な疑問はなぜ翻訳規則が CAUSE BECOME を付与できるのかということで、「モンタギュー文法では翻訳規則がそのように規定されているから」では納得のいかないところがある。この「CAUSE がどこから来るのか」という問題は結果構文の意味を考える際の重要なテーマである。

さらに結果構文の構成要素間の関係を見ていくことにする。

2. 4 直接目的語制約(DOR) : Simpson(1983)、Perlmutter (1978), Levin & Rappaport Hovav (1995)の見解

Simpson(1983)の結果構文の定義は「動詞の示す行為から生じた項の状態を記述するもの」としている (Simpson 1983: 143)。Simpson は結果構文の重要な特性として「結果述語は常に目的語を叙述する」と主張する。さて目的語と判断されるのは他動詞の普通の

目的語だけではない。例を見ておこう。

- (7) a. The Indians pounded the coins flat.
b. The door slammed shut.
c. The prime suspect was shot dead.

上記の3例で目的語であるのは、他動詞の表層目的語(7a)、非対格自動詞(unaccusative verb)のD構造の目的語(7b)、受動態のD構造の目的語(7c)である。(7a)の他動詞 *pound* の目的語 *the coins* は他動詞により目的格と被動者の役割を付与され動詞の影響を直接に受け点で典型的な目的語である。他の2例には少し説明が必要である。他動詞、自動詞の簡略的な区分を見ておこう。

(8) 他動詞・自動詞の区分

(i) 他動詞

- a. 他動詞としてのみ使われる：*construct, destroy, devour*
b. 主に他動詞であるが自動詞としても使われる：*break, open, hit*

(ii) 自動詞

- a. 非能格自動詞：主語の意志的な行為：*dance, swim, walk*
生理的現象：*belch, cough, sneeze*
b. 非対格自動詞：状態・位置が変化する theme を主語にする：
fall, sink, slam, slip
：存在・出現を示す：*appear, occur, happen*

Perlmutter (1978) は自動詞を非対格自動詞と非能格動詞に分けることを提案した。非対格自動詞はD構造の内項を主語に持つが外項は持たない。その主語は行為を意図的にコントロールできない。非能格自動詞は外項を持つが内項は持たない。また非能格自動詞は後に来る名詞を下位範疇化できない。(7b)での *slam* は非対格自動詞と考えられ、そのD構造での項構造は次のように表現される。

- (9) []*slam* [the door]

D 構造での内項位置の目的語が表層で外項位置まで移動し、結果述語の *shut* は主語の *the door* を叙述しているが、それは D 構造での目的語であると考える。また(7c)の受動文の主語 *the prime suspect* も D 構造では目的語であったと考えられるのであり、二次述語の *dead* は、本来は目的語であったものを叙述していると解され「結果述語は常に目的語を叙述する」という Simpson の提案は守られている。

Levin and Rappaport Hovav (1995)が指摘する通常の目的語からさらに離れたものを目的語の位置に置く例をみてみよう。

- (10) a. Her boyfriend laughed himself sick.
b. My parents worked their fingers to the bone.

(10a)の *laugh* は非能格自動詞(unergative verb)であり、主語の意志で動作の開始、終了をコントロールできる。しかし本来、自動詞なので目的語を持たない。非能格動詞が目的語を持つように思われる(10a)のような例では、後に来る名詞を下位範疇化していないということから、それは本来の目的語ではないという意味で *fake resultative* と呼ばれることがある。(10a)では主語と同一指標を持つ再帰名詞が現れている。(10b)も非能格動詞の例であり、後に来る名詞を下位範疇化できない。しかしこれらの語は結果述語が叙述する対象として必要である。この目的語位置に来る名詞を結果句が叙述する制約を Levin and Rappaport Hovav (1995)では次のように規定する：

- (11) 直接目的語制約(Direct Object Restriction: DOR)

結果句は動詞のすぐ後にくる NP を叙述し主語や斜格補部を叙述できない。 Levin and Rappaport Hovav (1995:34)

この制約に対する反例として「結果述語が主語を叙述する」ケースも提起されているがこれについては2章で詳述する。

上記の DOR は自動詞の二分法、非対格と非能格の違いを明らかにする働きを持つ。非対格動詞の唯一の項は D 構造の目的語 (theme、内項) であり、非能格動詞の唯一の項は D 構造での主語である。だから非対格動詞は動詞の後に目的語、あるいは *fake* 再帰代名詞を持つことはなく、つまりすでに D 構造で DOR を充足しているという意味で、結果構文に現れうる。一方、非能格動詞は目的語がないと結果構文を構成できない。以上のこととは下記に示されている。

- (12) a. The door slammed (*itself) shut.
b. Her boyfriend laughed *(himself) sick.
c. My parents worked *(their fingers) to the bone.

さらに DOR は次のような事例も説明する：

- (13) a. John pounded the metal flat.
b. *John pounded the metal tired.

(13a) は「金属が叩いたことで平らになった」と解釈され、結果述語 *flat* は *the metal* 叙述しているので DOR を充足する。しかし(13b) の *tired* は *depictive* 用法としては認可されるが結果構文として非文法的である。つまり「ジョンは金属を叩くことが原因で疲れた」とは解釈できず、「ジョンは疲れていた時、金属を叩いた」という意味になる。これは *tired* が *the metal* を叙述できないからである。

2.5 結果述語の制限 – Levin & Rappaport Hovav (1995)、 Tortora (1998)

結果構文には典型的なものからその範疇に入れるべきか判断の難し

い非典型的なケースもある。しかし如何なる場合でも結果状態を示す XP を含むと言える。XP の標準的定義を Levin and Rappaport Hovav(1995)から引用する。

- (14) An XP that denotes the state achieved by the referent of the NP it is predicated of as a result of the action denoted by the verb... (L&RH 1995:34)

これによれば結果状態 XP は「動詞によって示される行為の結果としてそれが叙述する NP の指示対象が到達した状態」を示すということである。この規定に従う典型例をいくつか見てみよう。これにより現象の特徴が見えてくる。

- (15) a. John broke the vase open.
b. Mary pounded the metal flat. (Tortora 1998)

一般に結果構文として想起されるのは(15)のような例であり、他動詞 + 目的語 + 結果状態（下線部）で構成されている。(15)の下線部の結果状態は上記(14)の定義に完全に適合する。(15a)であれば「壊す」という行為の結果、目的語 NP である *the vase* が「割れた」状態に到達した、ということである。下の(16)のように受け身文でもこの関係は維持される。

- (16) a. The vase was broken open.
b. The metal was pounded flat.

既に述べたことだが非対格動詞(unaccusatives)でも主語名詞の結果状態を表現できる。非対格動詞とは表層の主語 NP は D 構造では目的語の位置を占めていたと仮定する自動詞である。

- (17) a. The vase broke open.

- b. The lake froze solid.

ここでも非対格動詞によって示される行為の結果としてそれが叙述する主語 NP の指示対象が到達した状態として「割れた」、「固まった」という結果状態がもたらされている。

ところで非対格動詞でも「固有的方向性運動動詞」(verbs of inherently directed motion: VIDMs) は結果構文を形成しないとの見解がある (Levin and Rappaport Hovav 1995)。VIDMs の例として *arrive*、*ascend*、*come*、*depart*、*descend*、*enter*、*escape*、*exit*、*flee*、*go*、*leave*、*return*、*rise* などが挙げられている。VIDMs の多くは動作の完結性(*telicity*)が意味の一部として組み込まれているのでそれ以外にさらなる完結点を付加することが容認されないとする (Levin and Rappaport Hovav 1995)。

- (18) a. *Willa arrived breathless.

- b. *John came sad.

- c. *John retuned happy.

しかし Tortora(1998)が指摘するように VIDMs の中には *descend* (降りる)、*rise* (上がる) などのように行為動詞として意味的完結性を持たないものもある。これは上記の予想では結果構文を形成できるはずである。ところがそうはならない。

- (19) a. *The hang glider pilot descended breathless.

- b. *The gas rose cool.

Tortora(1998)

これらの例は確かに動詞に完結性が含まれていないが、同時にその動作の結果として結果状態が生じたという読み込みができないから容認されない。(19a)は *depictive* 用法としては解釈可能であることもこ

の見方を指示する。結果構文ではとにかく原因一結果の因果関係 (*causality*) が必要なのである。また同じ *descend* を伴う文で、一見したところ結果構文と思える例もあるがこれにも注意が必要である。

(20)(Edmund Hillary and Tenzing Norgay reached the summit of Mt. Everest.) They took some photographs, left some sweets and a cross, and descended triumphant.

(NHK 攻略リスニング 2013 年 11 月)

この例は NHK の語学番組からの抜粋であるが、放送のあと *descended triumphantly* ではないのかという質問が番組担当者に多数寄せられた様子である。講師は「ヒラリーとテンジンは意気揚々としていた」とし主格補語と解説している。(20)のように文脈が与えられれば「下山して来た時に意気揚々としていた」と理解可能であるがこれも典型的な *depictive* の例である。意気揚々 (*triumphant*) としているのはエベレストに登頂したからであって下山 (*descend*) するという動作の結果ではない。それでは次のような例ではどう解釈できるだろうか。

(21) a. The bottle broke open.

b. *The vase broke worthless.

(22) a. The wedding cake melted into a slimy mess.

b. *The wedding cake melted ugly.

(Tortora 1998)

これらの動詞は VIDMs ではなく一般的な非対格動詞である。この結果から Tortora は「さらなる特定化制約 (Further Specification Constraint : FSC)」という意味的制約を提案した。

(23) FSC (Tortora 1998: 341)

固有の完結性のある動詞が結果構文となれるには動詞の意味の中に既に固有に存在する結果のさらなる特定化に関わる場合に限られる。

この FSC の働きを先の例でみてみよう。(22)では *broke open* は「壊れた→開いた」というように壊れた状態の付加的述語であれば問題がないが、*broke worthless* では「壊れた→無価値になった」は壊れたことに伴う推移とは捉え難い。(23)でもケーキが「溶けた→ネバネバになった」は自然の推移だが「溶けた→醜い」は自然の推移とは言い難い。

結果述語に関する FSC の議論をさらに進めた理論が Wechsler (2005b) で提案されている。次にこの議論を見てみよう。この Wechsler の議論は後でみる「結果構文二分説」にも関係してくる。

2.6 Wechsler (2005b) 結果述語の意味論 – Maximal end-point constraint 説

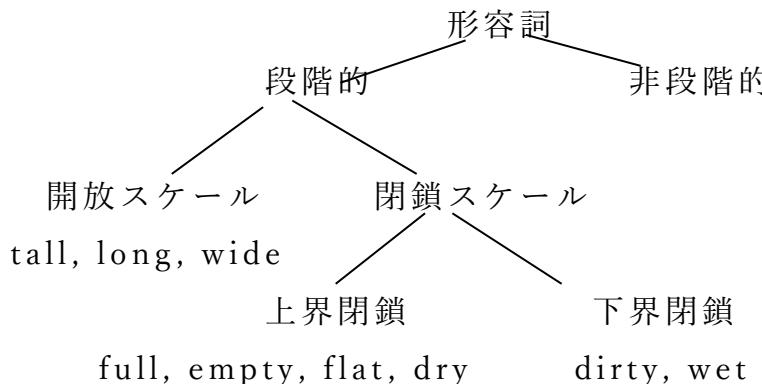
Wechsler は先にあげた Dowty (1979) の動詞と形容詞の複合動詞的他動詞の分析では結果述語の容認度の差の問題について解答が得られないと考え、結果述語の境界性 (boundedness) に解決を求めるようとした。彼は「結果構文は結果述語によって示される尺度上の程度 (degree) に対応する抽象的な経路 (path) を含むと考える。

- (24) a. John wiped the table clean/dry/*dirty/*wet
b. John hammered the metal flat/smooth/into the ground/*beautiful/*safe/*tubular
c. The puddle froze solid/*slippery/*dangerous

これらの例で * マークの付いたものでも有意味にパラフレーズ可能なものもある。例えば、(24a) *John wiped the table wet* は “*John wiped the table, as a result the table became wet*” とパラフレーズでき、これは完全に有意味である。しかし “*John wiped the table*

“wet”は容認されない。これには形容詞の持つ *telicity* が関与するという。形容詞の分類図に基づいて完結性を調べてみよう。

図 1 形容詞の系統図(Wechsler 2005b: 258)



上図で開放スケール、閉鎖スケールの上界閉鎖、下界閉鎖という概念が出てくる。Wechsler(2005b)はこれらの概念を Kennedy & McNally(1999)、Kennedy(2001)の形容詞の分析から援用している。

(25)形容詞とスケールの関係

スケール構造：形容詞のスケールは3つのパラメータで構成される。

- (i) 程度(degrees)：測度の値のこと
- (ii) 次元(dimension):測度の定義されるもの（費用、温度、速度、量、高さ等）
- (iii) 順序(ordering):スケール上での順序

例えば *rich* という形容詞であれば資産の量というスケールがあり、ある対象の *degree* を返す。高橋さんは *rich* スケールで 0.3、山田さんは 0.7 というように。これには *rich* スケール上で高橋 < 山田、という順序が規定される。

(26)形容詞のアスペクト特性とスケール

- (i) 開放スケール：スケール上で上限・下限がない。*completely* がつかない (* *completely tall/big/small*)。D(0,1)と表現される（最小値の *small*、最大値の *big* が存在しない）。
- (ii) 閉鎖スケールで最大終点がある（上界閉鎖）：最大の値が終点になりそこより大きい値はない。*completely* で修飾できる（*completely full/dry*）。D(0,1]と表現される（*dry* なら最大の乾燥状態がありそれを超える *dry* はない）。
- (iii) 閉鎖スケールで最小終点がある（下界閉鎖）：最小の値が終点（*bent, dirty, wet*）。D[0,1)と表現される。それ以上であれば常にその形容詞が成立する。

結局、形容詞は非段階性のもの、閉鎖スケールをもつものは完結性(*telicity*)を持つことになる。また Wechsler は結果構文を control 型と ECM 型に分ける。control 型は動詞が目的語を下位範疇化するもの、ECM 型は目的語を下位範疇化しないものである。この例を下にあげる。

- (27) a. Mary hammered the metal flat. control 型
 b. We yelled ourselves hoarse. ECM 型

(27a) では *hammer* は *the metal* を下位範疇化している。一方 (27b) では *yell* は次に来る名詞を下位範疇化していない。この動詞の結果構文の 2 分法と形容詞のスケールに関する意味論的区別を念頭に置いて Wechsler は結果述語の分布を次のように説明する。

(28) control 型

- a. He wiped the table clean/dry/smooth/*damp/*dirty/*wet.
- b. Mary shook John awake.

c. John hammered the metal flat.

(29) ECM 型

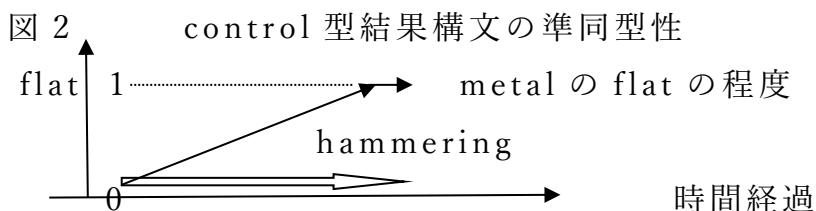
a. We laughed the speaker off the stage.

b. Peter quickly read himself into an inferiority complex,
after a few slow deliberate readings of his classmates'
theses.

c. We yelled ourselves hoarse.

(28) の control 型結果構文で容認される結果述語は全て上界閉鎖的形容詞である。例えば(28a)の *dry* なら *table* が乾燥しきってしまうまで拭けばそれ以上は *dry* にはならない。*1-degree-dry* は *completely dry* であって、それ以上の程度になれない上界である。一方、*damp*、*dirty*、*wet* などは下界閉鎖的で、最小限 *damp*、つまり *0-degree-damp* であればそれは *damp* ではない。それ以上であれば無制限に *damp* であります。つまり上界開放的である。上界開放的な形容詞は（両端開放形容詞も含め）control 型の結果構文には現れない。(28b) も *awake* は上界があり目覚めてしまえばさらに目覚めるということはない。(28c) でも *metal* が完全に *flat* になればそれ以上 *flat* にはなり様がない。

結局、Wechsler は control 型結果構文では動詞の表す程度の進行と形容詞の示す状態の程度との間に準同型性が成立することが必要になると考えている(event-argument homomorphism)。これは次のように図示できる。



一方、(29) の ECM 型では形容詞の例である *hoarse* (声がかれ

る) は下界設定的で、0-degree-hoarse であれば「声がれ」ではないが、そこを離れれば *hoarse* となり、これには上限はない。それでは前置詞句はどう解釈するべきか。(29a)の *off the stage* は位置変化を示すが段階性はない。(29b)の *into an inferiority complex* も状態変化を示すが段階性はない。この例は「Peter はクラスメイトたちの論文を読んだ後自分のものを読み、すぐに自信喪失に陥った」という文脈である。結局、ここでの状態変化 *into an inferiority complex* は「そうであるか、そうではないか」、つまり 0 or 1 である。そこから Wechsler は ECM 型の結果構文では動詞と結果述語との間に準同型性はなく、関係は比較的自由であるとして次のように述べている。

While the exact aspectual conditions on ECM resultatives are not known, it is clear that they are considerably freer than control resultatives. (Wechsler 2005b: 271)

後の章でも見ることになるが、この ECM 型結果構文（2 章で規定する Type C 結果構文）は一つ一つの例にかなり特異性があり、統一的な把握が難しい。この問題には後ほど戻ってくることにしよう。

Wechsler(2005b)の主張は他動詞で目的語を下位範疇化する結果構文ではその結果述語は上界限定的なものでなければならぬとの見解である。しかしこれにも反例がある。Iwata(2019)は次のような例をあげて Wechsler 説に反対する。

- (30) a. The shadow stretched long over the road.
b. The door opened wide.
c. She cut my hair real short.
d. A few people shook themselves loose from the tangle.
e. Dip a soft cloth in the solution, wring it damp and wipe furniture with it.

(a-d: Iwata (2019:333), e: Boas (2003:136))

- (31) a. The whole thing is squashed almost flat.
 b. The hair was bleached nearly white.
 c. The palisaded earthwork was beaten half flat.
 d. The opening was brushed relatively clean.

(全て Iwata 2019:333)

(30)では open scale 形容詞(*long, wide, short*)や minimal end-point 形容詞(*loose, damp*)が結果構文に現れている。特に(30c)は control 型動詞である。また(31)は動詞が目的語をコントロールするタイプの結果構文の受け身文である。この場合、受け身文になっていても上界閉鎖型の形容詞でなければならないはずである。しかし下線部の結果述語は *almost* (ほとんど)、*nearly* (ほとんど)、*half* (半分)、*relatively* (かなり) が付随しているので上限まで到達していない。上限閉鎖的どころか形容詞の比較級が来る場合もある。

- (32) a. Bill hammered the metal flatter and flatter.
 b. I pulled my scarf tighter. (ibid.: 334)

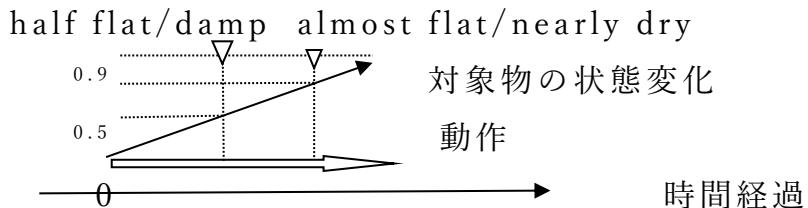
Iwata(2019)ではその他にも多くの証拠をあげて control 型結果構文の上限閉鎖形容詞の制限に反対している。

Iwata の反対にもかかわらず、私は Wechsler の見解に一般論としては賛成である。確かに多くの反例があるものの control 型結果構文が伴う形容詞の示す結果状態が突然出現するのではなく徐々に動作の進行とともに実現してゆくとする方が自然であり物理的な現象の姿に適合する。

それではなぜこのように多数の反例があるのか？たとえ準同型の考え方とは自然なものであっても、言語の世界は人間の認識が決める。最小、最大限界を問わず、対象物が表現者の意識設定した状態にまで変化すれば結果構文として表現できるということになるというのが私の考え方である。(30a)では影が伸びていき、表現者が「長い」と意識し

たところまで影が到達したことを示す。(30b)もあるものが表現者の「ほとんど平ら」と意識した状態まで押しつぶされているということを示す。下界閉鎖的形容詞がコントロール型に現れる場合も同様に説明できる。例えば先の(30e)の Boas の例では、動詞 *wring* (絞る) は対象物 (*soft cloth*) を本来は *dry* の方向に変化させるはずである。しかしこの例のように *damp* (湿った) と下界設定的な形容詞が現れている。表現者が、布を洗剤溶液に漬けた「べちゃべちゃの状態」から、絞って「湿った」状態まで変化させることを意識している。この意識した状態変化が結果状態になる。動詞の示す動作が表現者の意識する状態変化をもたらせばそれで結果構文として容認されているのである。また比較級の現れる(32a)では *flatter* は先の状態より、一層平らに状態変化したのであり、表現者がそれを意識していれば容認される。以上の説明に関して下の図を参照されたい。

図 3 コントロール型結果構文の状態変化推移



上界限定的な形容詞、例えば *flat*、*dry* でも半分くらいの程度 (0.5) を状態変化の目標と意識すれば *half flat/damp* でも結果述語として使用できる。また「ほとんど」、つまり 0.9 程度を状態変化の目標と意識すれば *nearly dry/almost flat* も結果述語として現れうる。

コントロール動詞の多くは対象物に一定の方向で働きかける。従って対象物もその方向に状態が変化していく。そして上界限界がその変化の到達点として普通、意識されることが多い。ゆえに一般化すれば Wechsler の述べる上界限定的形容詞との組み合わせが「相性が良い」ことになる。しかし文脈により、表現者が意識した状態変化の程度が結果状態であると認識できれば多くの場合、容認されるのであ

る。

以上で、結果構文に関連する留意すべき点を一応網羅したつもりである。特に重要なポイントは：(i)目的語制約(DOR)、(ii)結果述語の意味的制約である。まだまだ語るべき話題もあるがそれは以下の章で言及することにする。次に「結果構文の二分法」の問題に移ることにする。これは既に Wechsler の Control 型と ECM 型の区別など一部言及されている問題でもある。

3. 結果構文の2分類に関する諸理論

結果構文の系統分類は2章で行うが、そのための整理という点で英語の結果構文を二分するという考え方に関する諸理論を次に概観しておこう。また Wechsler(2005b)では答えの出なかった ECM 型結果構文の結果述語の問題についても考えることにする。

3.1 Washio (1997) 弱い結果構文と強い結果構文

結果構文を大きく二つに分ける考え方は Washio(1997)で提案されている。

Washio は実際のところ結果構文を3つに分けている。

- (33) a. The horses dragged the legs smooth. (強い結果構文)
b. Mary dyed the dress pink. (弱い結果構文)
c. He cut the meat thin. (疑似結果構文)

ここで「強い結果構文」とは動詞(*drag*)と結果状態(*smooth*)の間に関係がなく意味的に独立しているにもかかわらず因果関係が生じるので、その関係は「強い」と表現しているのである。因果関係は動詞の意味の一部から生じたのではない。逆に「弱い結果構文」とは動詞(*dye*)に「何かを染めるからには色の変化が結果として生じる」という含意があり、その動詞の持つ意味による状態変化(*pink*)であるから因果関係自体は弱いという考え方である。この動詞は状態変化他動詞

と呼ばれる。そして日本語の結果構文は、「弱い結果構文」のみが存在し「強い結果構文」は日本語に存在しないとする。この問題は2章で詳しく取り上げる。

疑似結果構文の例として挙げられている(33c)では動詞(*cut*)がこれも状態変化を含意するが、*thin*は*thinly*と副詞で表現でき動作の様態を示し因果関係が表現されていないので「疑似結果構文」(spurious resultative)と呼んでいる。Washioは疑似結果構文の条件を次のように述べている。

(34) 疑似結果構文の条件

- (i) 疑似結果構文は結果状態の形容詞を副詞に代えても意味は変わらない。
- (ii) 疑似結果構文は反義の対の両方が結果状態として現れる。普通の結果構文では片一方だけが現れる。
- (iii) 疑似結果構文は X causes Y to become Z by Ving でパラフレーズできない。

上の条件を検証してみよう。条件(i)で *He cut the meat thin/thinly* では意味が変わらないように思える。また条件(ii) *He cut the meat thin/thick* と反義語もこの構文に現れる。これは例えば *John washed the cloth clean/*dirty* のように大抵の結果構文は動詞の持つ変化の方向性と適合する方の形容詞のみが選択されることからは異なる。また条件(iii) *He cut the meat thin* は *He CAUSES the meat BECOME thin by cutting* とパラフレーズできないとも言えそうである。なぜなら切ることで *the meat* が *thin* に状態変化したのではなく、切られた部分が *thin* なだけであり「薄く切った」という様態を示すだけであるからと理解できる。

しかし「疑似結果構文」が結果構文ではないという見解には反対もある。例えば Iwata(2019:232-237)では次のように説明する。

- (35) a. He cut the meat thick/thin.
b. He spread the butter thick/thin.

(35)の *thin/thick* の対を *thinly/thickly* と副詞に代えても意味は変わらないというが実際には微妙に異なると Iwata は指摘する。

- (36) cut the meat thin/thinly の区別

- (i) cut the meat thin: They cut the meat, so the resulting entity is thin.
(ii) cut the meat thinly: They cut the meat in such a way a thin object would emerge.

(36i)の方は「切った結果、できたものは *thin* である」という意味。
(36ii)の方は「ものが *thin* になるように切った」というプロセスを示す。Iwata は疑似結果構文の条件の(i)に疑義を示し、(35)のような例は彼の結果構文の判断式：X ACT ON Y, and as a result Y^a is Z と分析できるので結果構文であると主張する。Iwata の結果構文の考え方は後で詳しく解説する (Levin and Rappaport Hovav 2001、Iwata 2006、Croft 2012)。

3.2 Croft (2012)の結果構文の2分法

ここでは Croft (2012)の二分法を中心に説明し、関連する他の研究者の見解も紹介する。彼は2つのタイプの結果構文は下の(37)と(38)のように例示されている (Croft 2012: 321)。

- (37)a. They froze the ice cream solid.
b. The river froze solid.
(38) a. Miss Kitty Perkins, who talked seven warts off my hands...
b. the dog barked him awake...

c. poor Sam...had coughed himself into a hemorrhage...

上記(37)の結果構文は動詞 *freeze* が結果状態 *solid* と結合してできている。このタイプの動詞は(39)のように、「結果状態を伴わない形」でも容認される。

(39)a. They froze the ice cream.

b. The river froze.

このタイプの結果構文(37a)では主動詞のもたらす *ice cream* を凍らせる出来事とその *ice cream* が結果状態(*solid*)に至る事態とに時間推移の依存性が存在する。つまり同時進行性を持つ。たとえば(37a)で「凍る」事態と「固まる」事態とは同時進行的である。これを Croft は「漸進的達成動詞型」(incremental accomplishment)と呼んでいる。一方、(38)のタイプは下の(40)のように「結果状態を伴わない形」では容認されない。

(40)a. *Miss Kitty Perkins talked seven warts.

b. *The dog barked him.

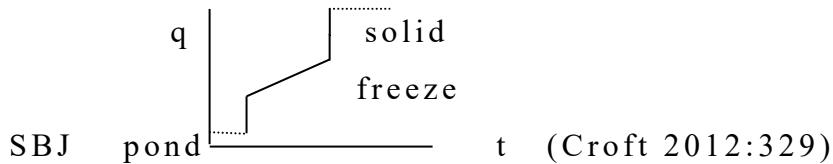
c. *Poor Sam coughed himself.

このタイプの結果構文では同時進行性がない。例えば上記の(39b)で「その犬が吠える」とこと、「彼が目覚める」とことには時間的ずれがあると解するのが普通である。このタイプを Croft は「非方向性、非漸進的達成動詞型」(non-incremental accomplishment)としている。

Croft(2012)は独自の2次元モデルを使って解説している。彼は動詞句のアスペクトタイプを「事態がどのように時間軸上で展開していくか」で捉えようとする。横軸には時間 t をとり縦軸にはイベントタイプを特徴づける質的状態の連鎖(sequence of qualitative states)

を置く。この質的状態は *q* で示す。漸進的達成動詞型結果構文は下の図のように表現される。

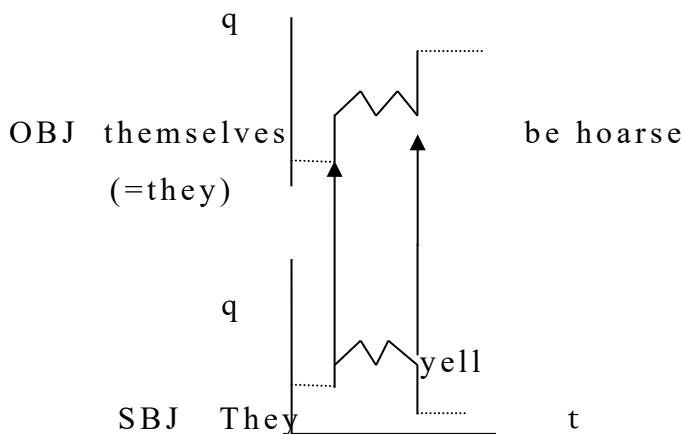
図 4 The pond froze solid.



池(*pond*)は主語(SBJ)で時間経過とともに *freeze* のプロセスが進展し(図中の右上がり直線部分)、やがてある時点で固体化(*solid*)し(図中の縦線部分)、そのまま推移(図中横の点線部分)することを示している。これは固体化の前に、池が漸次的に冷えて少しづつ固まるという方向性を持つ *freeze* のプロセスがあり、それが達成点として固体化(=氷結)をむかえるという質的状態変化を時間軸上で示している。これが漸進的達成動詞型である。

一方、非方向性、非漸進的達成動詞型では次のように説明される。

図 5 They yelled themselves hoarse.



このタイプの結果構文は2つの出来事で構成されている。1つは[*they yell*]であり、もう一つは[*they become hoarse*]である。2つとも行為動詞(activity)であり意味的に内在化された完結点を持たない。

い。またこの2つの事態は元々意味的に含意関係があるわけではない。しかし「大きい声で叫べば声がかかる」事は経験的に周知の事実である。彼らが「叫ぶ」という方向性を持たない行為（方向性を持たないのでプロセスはジグザグで表現されている）を始めると、彼らの声がかかるという事態（これも方向性を持たないのでジグザグである）も開始される（最初の縦の矢印）。この矢印が本来別個の2つの事態に因果関係(*causality*)が設定されることを示す。叫ぶという行為が時間軸に沿って進行し、声がかかる事態が明確になり完結点と意識される（*be hoarse* の縦線）。

この2次元モデルは2つのタイプの結果構文の典型例をうまく表示している。先ず“*the pond froze solid*”であれば *freeze* という動詞の「凍る」という意味には方向性があり、それは完結点を持つ。この完結点に「固体化する(solid)」が対応しそれが結果状態を明確化させている。このタイプは達成動詞の完結性という意味論的特性に動機づけられた結果構文と言える。一方、“*they yelled themselves hoarse*”では行為動詞の *yell* は方向性を持たず完結点も持たない。これは達成動詞の完結性という意味論的契機に動機づけられたのではなく、「日常的経験に基づく知識」に動機づけられた結果構文である。従って、このタイプの結果構文は「2つの事態に自然な因果関係を認められる範囲で容認される」と言わねばならない。しかし疑問が残る。2つの事態に自然な因果関係が認められるとして、その因果関係はどこから来るのか。観察者が自然な因果関係ありと判断すればそれで良いのか。非方向性、非漸進的達成動詞型の場合にはこの *causality* の由来が十分説明されていない。他動詞が固有の CAUSE を内在していない場合、どこから因果関係が付与されるのかという問題は結果構文に関する難問である。これについては3章、4章で議論することになる。

3.3 Iwata (2006)の2分類

さて、この2分類とほぼ一致する分類が Iwata (2006) で提案され

ている。

(41) Iwata(2006)の結果構文の2分類

(i) 付加語的結果構文(Adjunct resultatives)

- a. The house was stripped bare except for the furniture.
- b. She stood up straight and still.

(ii) 結果項追加型結果構文(Argument resultatives)

- a. They hammered the metal flat.
- b. They yelled themselves hoarse.

前者の(i)は「動詞の意味が（結果を示す句なしでも）結果状態を含意しており、結果を示す句は結果状態のさらなる特定化に貢献するものの付加語(adjunct)である」とする。これには他動詞だけでなく自動詞も含まれる。他動詞 *strip* では「剥ぎ取れば裸になる」ので *bare* を含意する。*stand up* は立ち上がれば当然まっすぐになるので *straight* を含意するとする。(ii)は「動詞そのものには結果状態の意味は含まれておらず、結果をもたらす項を追加している」と考えている。他動詞の *hammer* も *yell* もそれぞれの結果状態を含意しない。

Iwata は前者の付加語的結果構文では結果を示す句には意味的制約が課されるとしている。なぜなら動詞の意味に結果状態に関する含意があるのであるからそれをさらに補充するような結果句のみが許容されるとする。

3.4 整理

ここで名称の整理をしたい。類似の現象にもかかわらず研究者たちによって様々な呼名が与えられているので混乱を避けるためである。

表1 結果構文の2分類の名称対応表

研究者名	呼称1・2	特徴/例
Wechsler (2005b)	コントロール型	動詞に目的語が下位範疇化されている John hammered the metal flat.
	ECM型	動詞に目的語が下位範疇化されていない。 We laughed the speaker off the stage.
Washio (1997)	弱い結果構文	動詞の意味に結果状態が含意される。 Mary dyed the dress pink.
	強い結果構文	動詞の意味に結果状態が含まれない。 The horses dragged the legs smooth.
Iwata (2006)	付加語的	動詞の意味に結果状態が含まれ結果述語は付 加語 He could drain it dry/He stood up straight.
	結果項追加型	結果述語は動詞から含意されず追加 的。 They yelled themselves hoarse.
Croft (2012)	漸進的達成動詞型	動詞の示す事態と目的語の状態変 化が同調。 They froze the ice cream solid.
	非方向性非漸進的達成動詞型	動詞の示す事態変化に 方向性がなく対象物の変化と同調的ではない。 John yelled himself hoarse.

以上を比較すると、Wechsler のコントロール型には Washio の「弱い結果構文」を含み、また「強い結果構文」のうち動詞に下位範疇化されているものも含む。その他の研究者の第一呼称のものは基本的に動詞の意味に結果状態が含まれ、そこから動詞の示す事態と目的語の状態変化が同調するタイプを示している。動詞は他動詞で状態変化動詞である。しかし Iwata(2006)は他動詞でなくとも動詞に結果述語が含意されておれば自動詞でも良いことに注意が必要である。また Wechsler のコントロール型は目的語が下位範疇化されていることが条件であり他の研究者の第一呼称のタイプにはズレがある。

Wechsler の ECM 型は動詞に下位範疇化されていないタイプのもの全般を指す。その他の研究者の第二呼称のものもほぼ同様であり、

動詞は他動詞でも目的語の変化を描写しないプロセス動詞(*laugh*)であったり、基本的には自動詞であるのに *fake* 目的語が付与されたもの(*yell oneself*)を含む。

ここで本章の最初に取り上げた結果構文の定義を再考しておく。Jespersen (1970[1940])の結果構文の規定は「他動詞であれ、自動詞であれ、それが結果、すなわち主動詞によって示される動作や状態の帰結を表すネクサス関係と結びつけられること」(1970[1940: 23])としている。これは非常に緩やかな結果構文の規定である。動詞によって示される動作や状態の帰結が対象との間にネクサス関係が生じておればよい、とするものである。ここでは「帰結」を中心として「結果構文」の概念がまとめられているが「原因」には注意が払われていない。原因—結果の関連付けが因果関係であり、それが結果構文の重要な意味とするならば Jespersen の定義はやや不十分である。

最後に前節で結論の出なかった ECM 型結果構文の結果述語の制約の問題を考えてみたい。これは単純な答えになる。つまり、ECM 型結果構文は基本的に他研究者の第二呼称のタイプの結果構文であり、目的語を下位範疇化せず、動詞が状態変化を引き起こす意味的素性を本来的に持っていない。故に動詞が方向性を持たないから結果状態にも動詞の方向性、漸次的変化特性から要求される制約はないということになる。

以上で、二分法をめぐる議論は終了する。この二分法が第 2 章では系統的 3 分類に繋がってくる。さて既にみてきたように結果構文に現れる他動詞の多くは達成動詞である。この達成動詞には意味論的に難問である「進行形のパラドックス」がつきまとう。この問題を次に考えてみよう。

4. 慣性世界意味論：状態変化を含意する結果構文と慣性世界制約

「付加語的結果構文」や「漸進的達成動詞型」、それに「弱い結果構文」は他動詞の場合には状態変化を伴うものを持っていると理解さ

れる。例えば状態変化を伴う他動詞は基本的に達成動詞と分類されてきた。例えば *break the vase into pieces*、*dye her hair pink*、*freeze the ice cream solid*、*drain the puddle dry*などの結果構文に現れる他動詞は、その結果述語は付加的であり、それ自身で達成動詞である。このような結果構文に現れる達成動詞は *John built a house* のような標準的達成動詞とどう違うのかは非常に興味ある問題である。ここではその問題を Dowty(1979)で初めて展開された「慣性世界意味論」の立場から考えてみよう。先ず次の進行形の例を考えてみたい。

- (42)a. John was building a house. \neq John built a house.
b.? They are freezing the ice cream solid. \neq The ice cream became solid.
c. *John was breaking the vase into pieces.
d. *John was yelling himself hoarse.
e. *John was coughing himself into a hemorrhage.

(42a)の *build a house* は典型的な達成動詞(accomplishment)である。この進行形は *John built a house* を論理含意しない。家ができたのかどうかは分からぬからである。つまり達成動詞では全て結果状態(家が出来上がり存在する)を論理含意することはできないのである。では存在が保証されない、つまりできるかどうか分からぬ物を *a house* と言えるのはなぜか、また John が建てている物が *house* になるかどうか分からぬのであれば、この文を “John was building a factory” と区別するのは何かということが問題になる。これを「進行形のパラドックス(imperfective paradox)」(Dowty 1979: 133)という。ところで結果構文も完結点が結果状態であるので達成動詞的であり、特に他動詞で状態変化動詞の場合そうである。以下の例文の文法性判断は 2 名の英語母語話者に確認したものである。(42b)の *freeze the ice cream solid* はかろうじて容認される

がこれもアイスクリームが実際に *solid* になったことまでは含意しない。(42c)の *break the vase into pieces* は進行形そのものが容認されない。つまり「今、花瓶を壊している」ことは表現できても花瓶が粉々になるかどうかはわからない。つまり結果状態が生じていないのにそれが生じているかのように表現はできないからである。

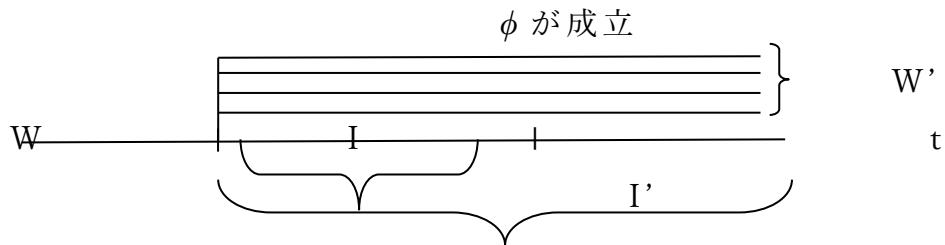
(42d, e)は Croft (2012) の「非方向性、非漸進的達成動詞型結果構文」の進行形である。(42d) *yelling himself hoarse* も叫んでいることは描写できてもその結果、声がかれることまで進行形では描写できない。今はまだ声はかれていないのである。また叫ぶことが一方向的に「声がかれること」に繋がるというわけではない。(42e)の *coughing himself into a hemorrhage* も全く同様であり、咳をすることが、たまたまその結果として出血することになるのだから、それを事態の進行を示す進行形では表現できない。つまり通常の達成動詞の進行形 *John was building a house* は、場面を観察した時点では *a house* が存在しなくともそれを発話しても容認されるが、結果構文の場合、結果状態は今そうではないのでそれを描写することは容認されないのである。この違いはどう説明できるだろうか。

通常の達成動詞の進行形にどのような真理条件を与えるかが長らく問題となった。Dowty はこの意味論上の難問に「慣性世界意味論」を考案することで対処した。これを簡単に紹介する。

(43) *inertia worlds* (慣性世界) の定義 (Dowty 1979: 148)
当該の時間に至るまではある所与の世界と同じであり、この時間以降の未来の事態の進行も過去の事態推移と最も適合して進展するような世界を慣性世界とする。また *Inr* を慣性世界を導出する関数と規定する。

(44) [PROG ϕ] が $\langle I, w \rangle$ において真になるのは、 $I \subset I'$ であり、かつ I が I' の最終部分区間ではないようなある区間 I' について、かつ $w' \in \text{Inr}(\langle I, w \rangle)$ であるような全ての w' について、 ϕ が $\langle I', w' \rangle$ において真であり、そしてその場合に限られる。(下図参照)

図 6



過去から続く事態の推移の中で慣性的に展開していく世界を慣性世界（上図の W' ）と考え、その可能な慣性世界の全てで、しかも現在から未来に続く時間区間 I' で ϕ が真になれば、[PROG ϕ] も現実世界 W 、かつ現実の時間 I で真であることになる。達成動詞では結果の存在を論理含意できず、ただ慣性世界の中にその存在を仮想するだけである。PROG ϕ : [John was building a house] が真になるのは全ての慣性世界 W' 、時間区間 I' で ϕ : [John built a house] が真であると判断されるからである。

この考え方を利用し(42)の結果構文の進行形の文法判断を考えよう。(42b)の“*John was breaking the vase into pieces*”は「弱い結果構文」、「漸進的達成動詞型結果構文」、あるいは「付加語的結果構文」の典型例である。ある世界 w 、時間区間 I でこの文が真になるのは全ての慣性世界 W' 、かつ時間区間 I' で *John broke the vase into pieces* が真にならねばならない。しかし *break* の結果、対象は粉々 (pieces) になるとは限らない (真二つになるかもしれない)。結果構文の結果状態は、動詞の描写する動作の結果、必ずそうなる、というような性質のものではなく、多少の意外性や驚きを含む場合が多い。「非方向性、非漸進的達成動詞型」は当然、全ての慣性世界での結果達成が予測できないのは当然であるが、「漸進的達成動詞型」であつ

ても全ての慣性世界で対象物が結果状態になることを保証できないからである。

5. まとめ

1 節で全体の見取り図を確認した後、2 節においては結果構文をめぐる諸テーマのうち、結果構文の基本的解釈、結果述語の意味的制約、直接目的語制約、*depictive* との違い、疑似結果構文の性質などを中心に議論した。結果構文の定義として Jespersen (1970[1940]) の規定は次のように述べている。「他動詞であれ、自動詞であれ、それが結果、すなわち主動詞によって示される動作や状態の帰結を表すネクサス関係と結びつけられること」(1970[1940: 23])。これは非常に緩やかな結果構文の規定である。動詞によって示される動作や状態の帰結が対象との間にネクサス関係が生じておればよい、とするものである。ここでは「帰結」を中心として「結果構文」の概念がまとめられているが「原因」には注意が払われていない。原因一結果の関連付けが因果関係であり、それが結果構文の重要な意味とするならば Jespersen の定義はやや不明瞭である。

また Holliday は *depictive* との区別を説明する中で「resultative は参加者の特性の変化を示し、動詞の示すプロセスの結果生じた属性を記述する」としている (Halliday 1967: 63)。ここでは「動詞の示すプロセス（が原因となり）その結果生じた属性を記述する」と解釈できる。

Dowty は結果表現を *factitive constructions* (作為動詞構文) と呼び「この構文は *activity* 動詞が目的語に伴われ、その目的語が *activity* の結果としてその状態になる形容詞をも伴う」と規定している (Dowty 1979:219)。

結果構文を結局どのようなものと規定するかは第 2 章での議論を経て決定される。

本章 3 節では結果構文の二分法について様々な見解を確認した。そこでは研究者によって、「弱い結果構文—強い結果構文」、「control

型－ECM 型」、「付加語的一結果項追加型」、「漸進的達成動詞型－非漸進的達成動詞型」等というように結果構文のタイプについての呼称が様々であることから見解の比較と差異の検証を試みた。

また 4 節では慣性世界意味論からみた通常の達成動詞と結果構文を構成する達成動詞の進行形の解釈可能性の問題を確認した。これらのテーマは次章以下の議論にも頻繁に取り上げられる基本的な問題である。特に留意すべきことは「CAUSE の由来」、つまり因果関係の意味表示において出現する因果関係の関数がどのように現れ、使われているかという点である。またこの因果関係の問題が結果構文の系統分類にも大いにかかわってくる。

本章は濱本(2015b)をもとに、それを改訂、加筆したものである。

第 2 章

結果構文の系統分類と結果表現

1.はじめに

1 章は結果構文をめぐる基本的な諸テーマについての見取り図を提供した。この章ではその知見に基づき、さらに結果構文に関わる諸問題を深く掘り下げて行くことにする。まず英語の結果構文の系統的な分類を行い、それに対応する日本語の結果表現の区別に進むことにする。英語の結果構文の分類から始めるのは、それが一番よく研究され文献も豊富であり、その分析により比較分類の足場が構築できると期待できるからである。

その英語の結果構文の系統分類にも一定の視座が必要で、それにより一貫性のある判断が可能となる。その結果構文の意味表示の捉え方として「構文文法」を採用することにする。「結果構文」も後でみるとよう様々なバリエーションがあり、ここでは Goldberg & Jackendoff (2004)で展開された理論を採用する。この論文は多くの結果構文（中には本論では結果構文と認定しないものも含めて）について独自の説明が与えられており、この現象の様々な表れを確認するには最適であると判断した。しかし、本論は彼らの文法理論の枠内にとどまるものではない。1 章で解説した 4 つの新視点を取り入れ既存の諸理論の持つ様々な問題点の解決案を提示している。

結果構文の理論的取り組みは「構文文法」に限られるわけではない。「形式意味論的アプローチ」(Kratzer 2005, Rothstein 2003, 2004)、「統語的機能構造論」(Hu 2018)、「構造的アプローチ」(Boas 2003)、「force-recipient アプローチ」(Iwata 2019)など多岐にわたる。これらについては第 3 章で、特に CAUSE の取り扱いに焦点を当てて検討す

ることにする。

それでは先ず「結果表現」と「結果構文」という用語の確認から始めたい。1章でもこれらの用語は既に使われてきた。「いまさら」という感もあるものの結果構文関連文献でもこれらの用語の示す内容の違いはあまり議論された形跡はない。しかし「構文文法」を扱う以上、そこから見た「結果構文」と「結果表現」との示す対象の差異は重要になってくる。結果構文は「構文」である以上、一定の統語形式に意味が結びついたものであるはずである。因果関係は、しかしこの結果構文に認められる統語形式以外の構文でも表現される。結果構文の統語形式とは、後で詳しく説明するが英語であれば $NP_1 V NP_2 RP$ 、日本語であれば $NP_1 NP_2 RP V$ という固定化された形式のことである（ここで RP は結果述語(resultative predicate)のことである）。従って「結果表現」は「結果構文」を含み、何らかの装置により、因果関係を示す言語表現全般を示すことにする。つまり「結果表現」の方が大きな集合であり、その中に「結果構文」が含まれるとする。

この論文では日本語、英語とも「結果構文」と呼称されるものは原則として上記の「固定化した形式と意味を持つ文構造」を示すことにする。しかし文脈上混乱しない限り、固有の意味を持たないタイプの構造も「構文」と呼ぶ場合がある。「結果構文」という呼称が一般化しているものを敢えて「結果表現」と呼ぶのも理解の妨げになるかもしれないと思うからである。

さて、前章では英語の結果構文を2つに分ける議論を検討した。その見解を考慮した上でこの章では英語、日本語の「結果表現」の系統分類を行う。そして、英語は基本的に3タイプの結果構文を持ち、日本語も分け方の基準は異なるが同様に3タイプの「結果表現」に分類されることを述べる。

この章の構成をもう少し詳しく述べておく。この導入のあと2節で基本的な用語の定義を検討する。また前章での議論にもあった2大別、「弱い結果構文」と「強い結果構文」を再考し、動詞から因果関係が派生するものと構文そのものが因果関係をもたらすものを選び出す。

これにより本来の結果構文として扱うものの範囲を明確にする。またここで「結果表現」と「結果構文」の基本的な定義を示す。3節では英語の結果表現、結果構文の種類分けを考える。英語のいわゆる結果構文の広がりを概観することになる。4節では日本語の結果表現を子細に検討する。日本語にも構文由来の因果関係を持つ結果構文、つまり「弱い結果構文」が存在するが、それは英語の場合と同様に本来の「構文」の規定からは逸脱していることを述べる。また日本語の結果表現では結果を示す複合動詞表現や、さらに2つの節を接続的程度表現 HODO や MADE で関係付けることで因果関係に近似する意味を表す日本語特有の形式を検討する。

これにより、英語では結果表現には強い結果構文と CAUSE が動詞から由来する語彙的結果表現（弱い結果構文）を含むが日本語には語彙的な結果表現、いわゆる「弱い結果構文」のみが存在し、英語の強い結果構文に当たるものは「結果構文」ではなくて、複合動詞、*S₁-hodo S₂*, *S₁- made S₂* という独特的の表現が対応することが明確になる。5節は本章の結論を述べる。

2. 「構文」、「語彙」、「結果表現」、「結果構文」の定義

まず、基本的な用語を規定しておこう。「語彙」(*lexical items*)と「構文」(*constructions*)の定義から始める。これは構文文法(Construction Grammar)に強く関連している。構文文法の主流派は形態素、語、イディオム、文の規則等全てを「構文」としている。

「語」も語彙的構文(*lexical construction*)と考える。英語の表現は構文が集まったものと考え自律的な統語論の必要性を認めない。各構文が固有の構造と意味を持ち言語表現の中核的意味を決定すると考える。例えば他動詞構文であれば、その共通の構造は[X₁ V Y₂]であり、共通の意味は「叙述」(*predication*)であるとする (Goldberg 1995, 2006, 2013)。

それに対し意味と形式を備えたものは「構文」ではなく「語彙」であり、結果構文などの固有の意味と形式を備えた構文は語彙(*lexicon*)

に含まれると考える立場がある (Jackendoff 2002, 2013)。この立場では自律的な統語論を認め、他動詞構文など一定の構造を備えた形式であっても、その意味は動詞の個別的意味に依存し、構文そのものの固有の意味を持たないと判断されるものは「語彙」には含めず本来の「構文」には認定しない。他動詞を持つ文の意味はその動詞に大きく依存し、統語構造から合成的に計算され、構文には依存しないから「他動詞構文」としては認定しないのである。つまり、意味と形式を備え語彙と捉えることのできる構文 (meaningful construction: m-construction、本来の構文) と、形式だけの構文 (form-only construction: f-construction、固有の意味を持たないもの) とを区別するのである。

この論文では Jackendoff 流の考え方を採用する¹。つまり主流派が主張するように「全ての統語構造が固有の意味を持つ」のではなく、自律的な統語論の存在を認め、固有の意味を備えた構文 (m-construction) は語彙の一部と捉える。混乱をさけるためにこれら 2 つの立場まとめておくことにする。

(1) 構文文法各派の「構文」に関する基本的主張

- (i) Goldberg の見解：構造と意味を持つもの ⇒ 全て構文。統語論を認めない。
- (ii) Jackendoff の見解：構造と意味を持つもの ⇒ 語彙。統語論を認める。

(ii) の立場では固有の意味と構造を持つ構文、つまり本来の構文を「有意味構文」とし語彙の一部とする。先にも述べたが「結果表現」とは原因と結果を表現する言語表現の全体を指し、その中でも構造と固有の意味とを備えた構文として形成されるものを「結果構文」と呼ぶ。また結果表現の中で動詞の因果関係的意味に依存し、構文そのものが意味を持つのではないものは本当は「語彙依存的結果表現」と呼ぶべきである。具体例をあげよう。以下の(2)、(3)は全て結果表現で

ある。

- (2) a. John made Keiko go there.
b. John watered the tulip flat.
c. John broke the vase to smothering.
d. John shot the bear dead.
- (3) a. 健はケイコをそこに行かせた。
b. 健は花を水をやって花を倒した。
c. 健は花瓶を粉々にわった。
d. 健はクマを撃ち殺した。

(2)は英語の結果表現の例で、(3)は意味的にそれに近い日本語の表現である。(2a)は語の意味に CAUSE を含む使役動詞(*resultative verb*)である *make* (～にする) が現れている (*make* = X CAUSE Y to V)。それに対応する日本語表現(3a)も「せる」という「使役」の意味を持つ動詞を使う。(2b)は典型的な英語の結果構文の例であり、一文で花に水をやり、それが原因で花が倒れたという結果を示している。日本語ではこの同じ内容を一つの文で表すことが出来ず、「花に水をやる」という行為と「花を倒す」という他動詞で表現する。(2c)も結果構文の例としてよく取り上げられてきたものである。動詞 *break* は「壊す」という状態変化(*change of state*)を示す。対応する日本語の(3c)も(2c)と並行的な構造を持ち、ほぼ同様の意味を持つ。本論ではこのタイプの表現は本来、「結果構文」ではなく「語彙依存的結果表現」とみるべきであると考える。しかし慣習的に「結果構文」と呼ばれてきたことから、特に問題の生じない範囲では「結果構文」と呼ぶことにする。(2d)も典型的な英語の結果構文の例である。対応する日本語(3d)は「結果的複合動詞表現」であり、似た意味を持つが関係する因果関係が異なる。このことは 3 節で詳述する。

1 章で Jespersen (1970[1940]) の結果構文の規定を紹介した。彼は次のように述べている。「他動詞であれ、自動詞であれ、それが結

果、すなわち主動詞によって示される動作や状態の帰結を表すネクサス関係と結びつけられること」(1970[1940: 23])。これは非常に緩やかな結果構文の規定である。動詞によって示される動作や状態の帰結が対象との間にネクサス関係が生じておればよい、とするものである。ここでは「帰結」を中心として「結果構文」の概念がまとめられているが「原因」には注意が払われていない。原因一結果の関連付けが因果関係であり、それが結果構文の伝えようとする意味とするならば Jespersen の定義はやや不明瞭である。そこで 1 章で確認した Holliday や Dowty らの見解も総括し、「結果表現」及び「結果構文」を以下のように規定しておくことにする。

(4) 結果表現と結果構文の定義

- (i) 参加者 A による動作が原因となり、それが参加者 B の状態や位置の変化である結果と結びつけられることを示す言語表現を「結果表現」とする。参加者 A と参加者 B は同一対象でもよい。
- (ii) ここで、單文で主動詞と二次述語を持つ標準的タイプだけでなく、動詞 2 つが複合して 1 つの結果的意味を示す複合動詞構文、さらに複文で 2 つの文が結合され一つの文が原因、もう一つの文が結果と解されるものも「結果表現」とする。
- (iii) またこの結果表現のうち、單文で構成され構文として特定の形式が特定の意味と結びついているものを「結果構文」とする。

原因とは何か、結果とは何かという根本的な問題が明らかでない以上、上記の定義も曖昧で暫定的であることを免れない。これらの問題は 4 章で取り上げることになる。

この定義(4)によれば、(i)が「結果表現」の基本規定であり、これを満たせば語彙的な結果動詞を伴う結果表現、他動詞が状態変化を示すタイプ、動詞が 2 つ複合した複合動詞、さらに複文でも因果関係を示すタイプも「結果表現」と認定してよい。このように「結果表現」は包括的な概念である。また「結果表現」の集合の一部になり、「構

文」として固有の形式と意味を持つ單文が「結果構文」と判断される。上の(4)で規定された「結果表現」と「結果構文」の区別を明確にするため、幾分先走ることになるが具体例をみてみよう（これらは後でさらに詳しく説明することになる）。

(5) a. John made Keiko go there

(i) John CAUSE [Keiko GO there]

(ii) make: $\lambda x \lambda y \lambda P [x \text{ CAUSE } y P]$

b. John painted the wall blue.

(i) John CAUSE [the wall BECOME PAINTED [adjunct blue]]

(ii) paint: $\lambda x \lambda y [x \text{ CAUSE } y \text{ BECOME PAINTED}]$

c. 健司は恵子を揺すり起こした。

(i) Kenji CAUSE [Keiko BECOME awake] by shaking her

\doteq Kenji shook Keiko awake.

okosu (=awaken): $\lambda x \lambda y [x \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME awake}]]$

d. 健司は恵子が目覚めるまで揺すった。

(i) [S₂ Kenji [S₁ Keiko became awake MADE] shook Keiko]

(ii) Kenji's shaking Keiko continued UP-TO Keiko's becoming awake.

\doteq Kenji shook Keiko awake.

文(5a)の意味は概念構造(5i)で示されている（ここでの表記では CAUSE の後に来る不定詞 to は省略されている）。因果関係の CAUSE は動詞 *make* に由来すると考えられる。これは(5ii)に示されている。語彙依存的因果表現と言われる時は因果関係 CAUSE が語に由来するからである。また(5b)は状態変化を含意する他動詞 *paint* が含まれ、これが CAUSE を提供する。(5c)は複合動詞の例であり 2 つ目の動詞が CAUSE をもたらす。(5d)は 2 つの文を持つ複文構造で S₁「恵子が目覚めるまで」は S₂に埋め込まれている。通常このような構文は結果構文とは認められない。しかも因果関係関数 CAUSE が現れていない。確かに因果関係の存在が感じられても、それは 2 つの出来事の同

時性と連結性が生み出す含意なのである。これについての意味論的分析は5章で詳しく議論する。このタイプの複文構造は英文の強い結果構文の意味に極めて近い以上、日英の結果表現の差異の分析には避けて通れない。このタイプも「結果表現」と考えるべきである。

一方、「強い結果構文」と言われる状態変化を含意しない他動詞を持つ文はどのように表現されるだろうか。

- (6) i. John watered the tulip flat
ii. John CAUSE [tulip BECOME flat]by watering

ここでも文の意味は概念構造で示されている。しかし(5a、b)とは違い因果関係のCAUSEは動詞には含まれておらず、どこか別のところにその由来を求めるべきではない。²これを構文そのものが意味の中核を持つという「構文文法」の立場では次のような解釈になる(Goldberg & Jackendoff 2004)。

- (7) John watered the tulip flat.
c-sub: John CAUSE [the tulip BECOME flat]
MEANS (v-sub): John water tulip

結果構文の項構造は動詞からではなく「構文」から付与されると考え、様態、あるいは手段が動詞によって表現されると考えている。結果構文の解釈は一般的には次のように規定される。

- (8) 結果構文規定 (Goldberg & Jackendoff 2004 : 539)
Syntax: NP₁ V NP₂ AP₃
Semantics
c-sub: X₁ CAUSE [Y₂ BECOME RP₃]
MEANS: v-sub: [X₁ V (Y₂)]

統語構造では形容詞 flat は結果状態を示し結果述語(resultative predicate: RP)と解釈される。他動詞 *water* の主語 *John* は NP₁、目的語 *the flower* は NP₂ になる（添え字は対応関係を示す）。また結果構文の意味は構文事象(constructional subevent: c-sub)と動詞事象(verbal subevent: v-sub)で構成され、項構造は動詞からではなく構文事象から与えられると考える。つまり項 X₁ と Y₂、それに RP₃ は動詞ではなく構文によって選択されているとする。動詞は手段(MEANS)を示すのみと理解する。まとめると、結果表現において(5)のように因果関係が語の意味に由来するものは「語依存的因果関係表現」であり、(7)のように構文に由来するものが本来の「結果構文」と考えられる。

3. 英語の結果構文の分類

結果構文は関係する次のような要因で分類できる(Goldberg & Jackendoff 2004、 Iwata 2019)。

(9) 結果構文の分類要因

- (i)因果的(causative)か非因果的(non-causative)か
- (ii)結果述語(RP) が形容詞句(AP)か前置詞句(PP)か
- (iii)RP が属性(property)であるか空間描写(spatial)か
- (iv)動詞が他動詞(transitive)か自動詞(intransitive)か、 また動詞が他動詞の場合:
 - (a)目的語を下位範疇化(subcategorize)するかどうか
 - (b)状態変化動詞(change of state transitive)かどうか
- (v)RP の叙述対象(host)が目的語か主語か

先ず本論で議論対象にする結果表現、結果構文の範囲を定めることを目標にする。この結果構文の分類要因のうち、この目標に特に関連する(i)、(iv)、(v)を選択し、以下で詳しく検討することにする。その後、結果構文の 3 分類に議論を集中する。それでは他動詞を持つ結果

構文の検討から始めよう。

3.1 他動詞をもつ結果構文

3.1.1 因果関係的、状態変化を伴わないプロセス動詞、RP の叙述が目的語の場合

先ず、(i)因果関係的、(iv)動詞が状態変化を伴わない他動詞 (non-change-of-state transitive)、かつ(v) RP の叙述対象が目的語の結果構文、の検討から始めよう。下の例を見ていただきたい。(10)、(11)の違いは他動詞が目的語を選択しているかどうかである。

(10) 他動詞（目的語下位範疇化）

- a. Mary shook her husband awake.
- b. John hammered the metal flat.
- c. Bill wiggled himself through the hole.

(a: Dowty 1979, b: Simpson 1983, c: Goldberg and Jackendoff 2004)

(11) 他動詞（非下位範疇化目的語）

- a. They drank the pub dry.
- b. The critics laughed the play off the stage.
- c. We yelled ourselves hoarse.
- d. The professor talked us into a stupor.
- e. She cried her head off.

(a-d: Goldberg and Jackendoff 2004, e: Iwata 2019)

全ての例で RP は目的語を叙述している (object host) である。この点で「直接目的語制約 (DOR)」は守られている。RP は形容詞句 (10a,b, 11a,c) と前置詞句 (10c, 11b,d,e) とがある。RP が形容詞句の場合は属性を表すが前置詞句は移動空間を描写する場合 (10c, 11b,e) と属性を表す場合 (11d) とがある。また (11e) のように「誇張表現」としてイディオム的に結果構文が使われることもある。以上の例について重要な点はこれらの動詞が状態変化を示す動詞ではなくプロセス動詞である

ことである。これらのうちいくつかについて Goldberg & Jackendoff (2004)に従い意味構造を示そう。

- (12)a. Mary shook her husband awake.

Semantics

c-sub: Mary CAUSE [her husband BECOME awake]

MEANS: v-sub: [Mary shake her husband]

- b. Bill hammered the metal flat.

Semantics

c-sub: Bill CAUSE [the metal BECOME flat]

Means: v-sub: [Bill hammer the metal]

- c. They drank the pub dry.

Semantics

c-sub: they CAUSE[the pub BECOME dry]

Means: v-sub: [they drink]

- d. The critiques laughed the play off the stage.

Semantics

c-sub: The critiques CAUSE [the play MOVE off the stage]

MEANS: v-sub: [the critiques laugh]

- e. She cried her head off.

Semantics

c-sub: she CAUSE[her head MOVE off her head]

MEANS: v-sub:[she cry]

Pragmatics: She cried awfully.

結果構文は 2 つの事象(subevent)で構成されており、Semantics は構文事象(c-subevent)と動詞事象(v-subevent)で複合的に示される。またこれらの例で動詞はプロセス動詞であり完結点を持たないので状態変化動詞ではない。これらの例の意味上の共通点は因果関係を示す CAUSE が動詞からではなく、構文事象から来ている点である。構文

が主語と目的語、それに結果述語を選択するのである。³(11e)は文字通りには「ケイコは泣いて首がちぎれた」という意味だが語用論的には「ひどく泣いた」という意味に解される。

以上の例で動詞が目的語を下位範疇化している(10)の場合、結果述語(RP)なしでも容認される。しかし RP がある場合、動詞句は完結点を持ち達成動詞にシフトする。

- (13) a. Bill shook Lisa for five minutes/*in five minutes.
b. Bill shook Lisa awake in ten seconds/?for ten seconds.
- (14) a. Bill hammered the metal for an hour/*in an hour.
b. Bill hammered the metal flat in an hour/?for an hour.⁴
- (15) a. Bill wiggled himself for ten second/*in ten seconds.
b. Bill wiggled himself through the hole in ten seconds/? for ten seconds.

3.1.2 因果関係的、状態変化他動詞、RP の叙述が目的語の場合

次に、(i)因果関係的、(iv)他動詞でも状態変化動詞、(v)RP の叙述対象は目的語、の場合はどうであろうか。これらは下で見るように結果述語を伴わなくとも容認される。

- (16) 状態変化他動詞(change-of-state transitive)
 - a. John broke the vase (into pieces).
 - b. Bill painted the wall (green).
 - c. Kate bent the iron bar (into a U).

Pustejovsky (1991a)は状態変化を伴う非対格自動詞を持つ *The river froze solid* や他動詞の自動詞用法 *The bottle broke open* のような文は、一見結果構文のように見えても実はそうではなく付加語句のついた表現であるという(Pustejovsky 1991a :76)。それは次のようなことから明確であるとする。

- (17) a. The river froze in 20 minutes.
b. The river froze solid in 20 minutes.

(17a) と (17b) で示される出来事は同じ出来事であり、結果述語を持つことによって動詞がプロセスから完了点のある達成動詞にシフトしていないことに注目したい。全く同様に状態変化他動詞の場合も、

- (18) a. John broke the vase in a flash.
b. John broke the vase into pieces in a flash.
(19) a. Bill painted the wall in half an hour.
b. Bill painted the wall green in half an hour.
(20) a. Kate bent the iron bar in a second.
b. Kate bent the iron bar into a U in a second.

RP を付加することで動詞の意味上のシフトが起こっていない。つまり RP を伴わないでも文は元々完結性をもっており、RP はその完結点を補足したに過ぎないからである。中間構文は結果状態を伴う方が容認度が高いことが知られている（影山 1996:243）。この中間構文について状態変化動詞は(21)のように容認度が高いが、状態変化を伴わないプロセス動詞の場合、(22)のように容認されず結果述語を付加して初めて容認度が上がる。

- (21) a. The vase breaks easily.
b. The wall paints easily.
c. The iron bar bents easily.
(22) a. *The dog shakes*easily.
b. The dog shakes awake easily.
c. *The metal hammers easily.
d. The metal hammers flat easily.

以上のことから、状態変化を伴う他動詞は元々 [CAUSE~BECOME P] で表現される完結的意味を概念的に含んでおり CAUSE は動詞そのものに由来するもので、構文から来るのではないことが分かる。そして結果述語 RP と見えるものも付加語句であり構文に選択された項ではないことになる。結局、状態変化動詞を持つ結果表現の概念構造は以下のようになる。

- (23) a. John broke the vase into pieces.

John CAUSE [the vase BECOME BROKEN] + [adjunct into pieces]

- b. Bill painted the wall green.

Bill CAUSE [the wall BECOME PAINTED] + [adjunct green]

- c. Kate bent the iron bar into a U.

Kate CAUSE [the iron BECOME BENT] + [adjunct into a U]

3.1.3 RP が主語を叙述する場合

以上の例では RP が叙述するものは目的語であった。また他動詞の意味が CAUSE 関数と結果状態を内包していて明確な因果関係を表現している。しかし、(iv)他動詞を持つ結果表現でも、(v) RP が主語を叙述する例もある。この場合、(i) 因果的か非因果的かも問題になる。次の例を検討しよう。

(24) 主語 host、非因果的

- a. Bill followed the thief into the library.
- b. Bill took the train to New York.
- c. Bill traveled the Taconic Parkway to New York.

(Goldberg & Jackendoff 2004)

これらの例で共通するのは目的語が動詞の影響を受ける被動者 (*patient*) ではないということである。前置詞句は目的語ではなく主語

を叙述している。(24a)であれば「Bill は泥棒を追いかけて（その結果）図書室に入った」という意味であり、Jespersen (1970[1940])の結果構文の規定「他動詞であれ、自動詞であれ、それが結果、すなわち主動詞によって示される動作や状態の帰結を表すネクサス関係と結びつけられること」(1970[1940: 23])という緩やかな解釈には適合する。ここでネクサス関係は the thief=into the library ではなく、Bill=into the library になっている。しかしこの文は移動による位置変化を示しているにすぎないので「非因果的」である。これは先に挙げた「結果表現」と「結果構文」の規定(4)には当てはまらない。

これらの文の意味表示に関して、Goldberg & Jackendoff (2004)では二つの可能性をあげている。

(25) Bill followed the thief into the library.

Syntax: NP₁ V NP₂ PP₃

Semantics: c-sub: X₁ GO Path 3

Means: [v-sub: X₁ GO [Path DETERMINED BY Y₂]]

この見方は構文が主語の経路を辿っての移動を指定し、動詞は目的語が決定する経路を辿るという選択制限が課されることを示す。この例のように follow であれば目的語の後を辿るのであるからこの選択制限を満たすことになる。これは(24a)には適合しても(24b,c)の例の説明にはならない。もう一つの解釈は下の(26)と(27)で示される。

(26) Bill followed the thief into the library.

Syntax: NP₁ V NP₂ PP₃

Semantics: C-sub: X₁ GO-AFTER Y₂ Path3

INSTANCE: [v-sub] e.g., follow, track, trace

(27) Bill took the train to New York.

Syntax: NP₁ V NP₂ PP₃

Semantics:c-sub:X1 GO-BY WAY OF Y2 Path3

INSTANCE: [v-sub] e.g., take

OR MEANS: [v-sub] e.g., ride, sail, drive

(26)は「追いかける」という意味を持つ動詞を持つ文についてのものであるが構文の規定に GO-AFTER という「追いかける」という意味が組み込まれている。動詞はその具体的現れ(INSTANCE)であればよい。構文は動詞以外の要素を指定するはずであるがここでは動詞そのものを選択しており、構文の規定としては相応しくない。これであれば構文の効力に頼らずとも動詞 *follow* を語彙的に選択すればよいことになる。全く同様に(27)でも語彙的な意味 GO-BY WAY OF が構文の規定に組み込まれており、構文として扱うには相応しくないと思われる。また前置詞句 *into the library* や *to New York* はなくても容認されるのであるから付加語句と考えられる。結局、これらの意味表示には CAUSE が現れていない。(24)の意味表示は(26)と(27)により次のようになる。

(28) a. Bill followed the thief into the library.

Semantics: Bill GO-AFTER the thief + [adjunct into the library]

b. Bill took the train to New York.

Semantics: Bill GO-BY-WAY OF the train + [adjunct to New York]

c. Bill traveled the Taconic Parkway to New York.

Semantics: Bill GO-BY-WAY OF the Taconic Parkway+ [adjunct to New York]

Iwata (2019 : 440)は同様の根拠をあげてこれらの例は結果構文には当たらないとしている。著者も(24)の文は(4)の「結果表現」と「結果構文」の規定に当てはまらないので単なる移動を示す表現であり結果表現でもなく、結果構文でもないと判断する。

3.2 動詞が自動詞の表現

以上では動詞は他動詞であった。次に(i)非因果的、(iv) 動詞は自動詞、(v) RP は主語を叙述する例、を検討しよう。

(29) 自動詞 非因果的

- a. The pond froze solid.
- b. The ball rolled down the hill.
- c. The trolley rumbled through the tunnel.
- d. The road zigzagged down the hill.
- e. He rode the horse to victory.

(a-d: Goldberg & Jackendoff 2004, e: Iwata 2019)

これらの共通点は因果性がないということである。(29a)では「池が凍って固まる」のは同時進行的で、かつ一つの事象であり、Pustejovsky (1991a)は結果構文には該当しないとしている(3.1.1 参照)。(29b)で「ボールが転がって丘を下った」ことについてもボールの回転と移動については同一の事態を描写しただけで因果関係はない。(29c)の「路面電車はガタガタとトンネルを抜けた」という意味であるがガタガタ音を立てることとトンネルを通っていくことにも因果関係がない。(29d) の「道はジグザクに丘を下っていた」は道がジグザグであることと丘を下っていくことにも因果性がない。(29e)は「彼はその馬で勝利に進んだ（勝利を勝ち取った）」ということであるが馬で進むことと勝利につながることの間に因果性はない。これらの動詞の意味的共通性は動詞が語彙的に、いわゆる結果述語と考えられるものの意味を含んでいるという点である。*freeze* は状態の変化を含意し、*roll* や *rumble* は対象物の位置変化を含意するということである。以下の辞書の定義をみるとこのことが明白になる。

(30) a. *freeze*: if a liquid or something wet freezes or is frozen, it becomes hard and solid because the temperature is very cold.

- b. roll: If something rolls, especially something round, or if you roll it, it moves along a surface by turning over and over.
- c. rumble: to move slowly along while making a series of long low sounds
- d. zigzag: to move forward in sharp angles, first to the left and then to the right etc.
- e. ride: to sit on an animal, especially a horse, and make it move along. (Longman Contemporary English Dictionary)

- (31) a. freeze: to become hard, and often turn to ice, as a result of extreme cold.
- b. roll: to turn over and over and move in a particular direction.
 - c. rumble: to move slowly and heavily, making a rumbling sound.
 - d. zigzag: to move forward by making sharp sudden turns first to the left and then to the right.
 - e. ride: to sit on a horse, etc. and control it as it moves.

(Oxford Advanced Learner's Dictionary)

これらの辞書の定義では下線部に明示的に示されているように *freeze* は状態変化を示す BECOME を意味の一部に持ち、*roll*, *rumble*, *zigzag*, *ride* は移動を示す MOVE の意味を持つ移動動詞であることが分かる。つまり各動詞の語彙的内容がそのまま後続する形容詞や前置詞句に呼応するのであり、構文の意味指定に依存しない。またこれらの表現には原因一結果という因果関係が介在しない。もちろん「主語の示す対象が移動の結果、ある場所に達した」という事態推移も、Jespersen の結果構文の定義のように非常に緩やかに解釈すると結果構文と言える可能性はある。しかしそうすると、“*John walked to the park*”というような移動動詞も全て結果構文と見做さなくてはならなくなる。これらの表現も(4)の「結果表現」と「結果構文」の規定を充足せず、単なる移動動詞構文と判断せざるを得ない。これらの表現の意味は次のように記述される。最初の三例の意味表示をあげよう。

(32) (i) The pond froze solid.

Semantics: The pond BECOME FROZEN + [adjunct solid]

(ii) The ball rolled down the hill.

Semantics: The ball MOVE by rolling + [adjunct down the hill]

(iii) The trolley rumbled through the tunnel.

Semantics: The trolley MOVE making a series of low sounds

+ [adjunct through the tunnel]

再度述べるが、これらの例も結果構文ではなく結果表現でさえないと判断できる。

3.3 英語の結果構文の3分類

今までの議論のまとめをしておく。本論で「結果表現」あるいは「結果構文」として考察するのは(4)の規定を満たすものである。またこの考察の対象にしないのは (i)非因果的な他動詞文で主語が RP の叙述対象であるもの(=(24))、(ii)非因果的自動詞文で主語が RP の叙述対象であるもの(=(29))である。これらを対象にしないのはそれらが重要ではないからではない。動詞の意味に位置変化や状態変化の要素が組みこまれており、しかも参加者の動きが帰結の達成に貢献せず、(4)の規定を充足しないからである。Jespersen の結果構文の定義のように非常に緩やかに解釈するとこれらも結果構文と言える可能性はある。また多くの研究者がこれらを結果構文として扱っていることも理解できる。しかしその多くは移動構文に属するといえるため我々の議論の対象からは外すことにしたい。

従って検討対象とする結果表現は「全て因果的なもの、RP は目的語を叙述するもの」に限定されることになる。つまり、質的な違いはあっても何らかの因果関係の働きが感じられ、文中の要素が「原因」と「結果」の役割を担うものということになる。次に考察の対象になるタイプの例を列挙する。

(33) 状態変化他動詞（他動詞が状態変化の意味を持つ）

- a. John broke the vase into pieces.
- b. Bill painted the wall green.
- c. Kate bent the iron bar in a U.
- d. John washed the car clean.

(34) 非状態変化他動詞（目的語を下位範疇化）

- a. Bill shook Lisa awake.
- b. Bill hammered the metal flat.
- c. The wind blew the wet laundry stiff.
- d. The principle scolded the boy sullen.
- e. The lion's roar scared him stiff
- f. Willy watered the plants flat.

(35) 非状態変化動詞（目的語を下位範疇化しない）

- a. The alarm clock ticked the baby awake.
- b. Bill shaved his razor dull.
- c. The critics laughed the play off the stage.
- d. Dave drank the pub dry.
- e. We yelled ourselves hoarse.
- f. The professor talked us into a stupor.
- g. Toshi drank Ken under the table.
- h. Miss Kitty Perkins, who talked seven warts off my hands when I was fourteen.

(33) はいわゆる「弱い結果構文」と言われるもので状態変化を示す他動詞を持ち、CAUSEはその他動詞から派生する。(34)と(35)は状態変化を表さない動詞を持ち、従って CAUSEは動詞由来ではない。これらは「強い結果構文」と言われるものである。(34)は「強い結果構文」の中でも他動詞が目的語を下位範疇化する。目的語を選択する他動詞は確かに目的語に働きかける意味合いを持ち、目的語は被動者で

ある。しかしこれらの他動詞は状態変化の意味を含んでいないため因果関係は動詞にその由来を求められない。(35)は「強い結果構文」でも動詞は本来自動詞であり、目的語を持っていても下位範疇化しないタイプのものである。このタイプでは動詞は自動詞なのであり、目的語は被動者ではない。動詞からの直接的な働きかけがないにもかかわらず、目的語の示す対象は何らかの結果状態に導かれる。意味は多様であり、イディオム的表現も含む。このタイプは Goldberg & Jackendoff (2004)の構文の意味表示の手法を用いると、

(36) Syntax NP₁ V NP₂ RP₃

Semantics

c-sub: X1 CAUSE Y2 BECOME Z3

MEANS: [v-sub] OR INSTANCE

というように記述できる。意味論は構文事象と動詞事象の2つで複合的に構成されていて中核的な意味は構文(c-sub)により与えられ、動詞(v-sub)は手段(by ~ing)の意味を担うことになる。第3章でみるように、「強い結果構文」の意味表示を巡っては Goldberg and Jackendoff 流の方式以外にも様々なアプローチが存在し、そこでは CAUSE の扱いが一番の関心事となる。

これにより、一応我々は対象とする英語の結果構文について3種類のタイプを選別したことになる。また各タイプを次のように呼ぶことにする。これは基本的に Li (2008, 2014)や影山(1996)に従った分類である。

(37) Type A: 弱い結果構文

Type B: 強い結果構文のうち目的語を下位範疇化するもの

Type C: 強い結果構文のうち目的語を下位範疇化しないもの

しかし結果構文の分類には様々な見解がありこの3分類にも反対意

見も多いと思われる。影山(1996)もほぼ同様に3つに分類しているが、その後6分類になっている(影山2005、2007)。下に影山の6分類とその説明をあげて我々の(そして影山(1996)の)3分類と比較し、本論で分析を進める上では我々の3分類で良いことを説明する。

表1 結果述語の下位区分(影山2007:137)

本来の結果述語(LCSに結果状態が含まれる)	I	(A) freeze solid タイプ: 主動詞の LCS に変化結果が記載され、しかもその主動詞の事象タイプが transition である。
		(B) wash clean タイプ: 主動詞の LCS に変化結果が記載されているが主動詞の事象タイプは process である。
派生的結果述語(LCSには結果状態が含まれない)	II	(C) wipe clean タイプ: 主動詞そのものの LCS は ACT(ON)であるが、目的役割に対象物の特定の変化結果を含む。結果述語は、その目的役割に示された変化結果に対応。
		(D) shake awake タイプ: 主動詞は辞書表記として目的役割を含むがその中身は1つに特定されないので、習慣化の範囲内で様々な結果述語可能。
	III	(E) kiss awake タイプ: 主動詞は本来は目的役割を持っていないが、意図的な状況において何らかの目的役割がオンラインで作り上げられる。
		(F) water the tulips flat タイプ: 主動詞の作為によって偶発的に生じる結果を表す。表現の範囲が限られ、許容度も低い。
		(G) drink someone under the table タイプ: 特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオム。誇張表現と解釈されることが多い。

上の表の内容を説明しよう。LCSとは語彙概念構造のことで *John broke the vase into pieces* であれば [John ACT ON vase CAUSE(vase BECOME into pieces)] のように語彙を概念に分解しその組み立てで文の意味を表示するものである。

また「目的役割」という用語が出てくるのでこれについても簡単に解説する。影山は動詞の意味の記述は LCS だけではなくクオリア構造をも参考にすべきであるという見解(影山2005、2007)である。クオリア構造とは語彙の辞書情報の一部であり、形式役割(外的性質)、構成役割(内的性質)、目的役割(本来的な機能と目的)、主体役

割（出処、成り立ち）で構成されている（Pustejovsky 1995）。このうち結果構文の動詞—結果状態の分析には目的役割が大きく関与すると影山はいう（影山 2007:136）。

上表で(C) *wipe clean* タイプと(D) *shake awake* タイプの区別はどちらの動詞もプロセス動詞であり状態変化を含まないが *wipe* の方はその目的役割に *clean* という（あるいは関連した）概念の記載があるのに対し、*shake* には明確に *awake* という概念が目的役割に記載がないと考えている。III の(E)の他動詞 *kiss* は目的役割を持っていないがその場の状況(on-line)で目的役割が付与されている。*awake* はそのようにして即興で作られた結果述語と考えているようだ。同じく III の(F) *water the tulips flat* タイプでは *water* という動詞には目的役割があるのかどうかは記述されていないが、たとえあったとしても「花を倒す」という目的役割ではないだろう。

結局、II と III の類別は目的語を下位範疇化する他動詞の中で、他動詞—目的語—結果述語の結合が、動詞には根拠がないので、それ以外のどこに根拠があり、意味解釈はどのような推論によりもたらされるかの判断によって分けられている。II 類はクオリアの目的役割に結果述語の概念に関する記載があるので「百科事典的含意」とされ、III 類はクオリアには記載がなく、アドホックに意味解釈が進むので「語用論的含意」が関与するという。

もう一度、表に戻ろう。表の一番左端にある本来的結果述語と派生的結果述語の区別は我々の二分法にそのまま対応する。文の意味である LCS に結果状態が含まれるとは状態変化動詞を持つ結果構文を示し、結果状態が LCS に含まれないとはそれ以外の動詞を持つ結果構文を示す。

I、II、III の分類はクオリアの説明でふれたように、我々の Type A、B、C にそのまま対応するわけではない。I 類はいわゆる「弱い結果構文」であり、これは Type A にそのまま対応する。違いは (B) *wash clean* タイプの扱いである。動詞 *wash* は影山の言うように確かにプロセス動詞であり、固有の動作の完結点を持たないので状態

変化動詞ではない。しかしこの語は “*to make something clean*” とバラフレーズ可能で *causality* と結果状態を意味に内包するので我々の Type A に加えて全く問題ない。

II 類と III 類の区別は細かく (C)-(F) に記載されている。結局、II 類と III 類は全体が我々の Type B (目的語を他動詞が下位範疇化するもの) に対応し、表の (G) のイディオムと分類されたものが我々の Type C に対応する。影山 (2005) で英語の結果構文のうち、動詞—目的語—結果述語の組み合わせで、動詞が本来の他動詞ではなく、目的語も下位範疇化されていないものは (*fake object* の場合も含め) 「イディオム」と包括的にまとめてしまっている。

5 章で検討する日本語やルーマニア語、イタリア語の結果表現との比較でもあまりに意味論的に子細な現象に留意するよりも、大きな流れで捉える方が類似性の確認にも都合がよい。さらに 6 章で通時的な英語の結果構文の発達を見ると、Type A を基本の形式としてそこから Type B、そして Type C と「結果構文」の範囲が拡張してきたことが分かる。その点でも Type C を周辺的なものと扱うのは間違いであると思われる。むしろイディオム的なものの中に発展の方向性が認められるのではないかと考える。このように通時的な発展の流れを観察するにはある程度大きな分類が適合する。よって我々は Type A、Type B、Type C とする分類に従って今後も議論を進めていくことにする。

但し、影山の指摘である結果構文の「含意的階層性」、つまり「派生的結果構文を持つ言語は本来的結果構文も持つが、その逆は存在しない」(影山 2007:136) はその通りであることは、第 5 章の言語間の比較検討で明らかになる。「含意的階層性」の存在は日本語、ルーマニア語、イタリア語の結果表現を英語と比較することによって確認できる。我々の用語で置き換えると「Type B、C を容認する言語は Type A をも容認するが、その逆はない」ということである。

さらに影山の一種の予言「上述の含意的階層は、結果述語の歴史的発達過程にも光を投げかけることができるだろう。少なくとも英語で

は、古英語の時代には本来的結果述語しかなく、派生的結果述語は初期近代英語のあたりから発達してきたものと推測される」（影山 2007:140）も、ほぼ影山の予想通りであることが第 6 章の我々の通時言語学的研究でも明らかになる。

4. 日本語の結果表現

本章 2 節では英語で本来の結果構文と考えられる対象の制限を行った。本論で対象とする結果構文は、因果的、RP が目的語叙述であり動詞は他動詞、あるいは本来は自動詞でも（疑似）目的語を持つタイプに制限した。一般に「弱い結果構文」と呼称される状態変化他動詞を伴う文は、その因果関係、つまり CAUSATION は動詞の意味から由来するのであり本来は結果表現といわれるものである。また動詞から *causality* が出てこないタイプのいわゆる「強い結果構文」とともに大きく 2 つのグループに分けた。

3 節では英語の結果構文の系統的な分類を行い、「強い結果構文」をさらに 2 つに分けることで、結局 3 つのタイプに分けた。このタイプ分け Type A、Type B、Type C と日本語の結果表現との対応をこの 4 節では考察する。先ずこの Type A、すなわち状態変化他動詞を持つ結果構文と日本語の結果表現との対応から始めよう。

4.1 Type A: いわゆる「弱い結果構文」と対応する日本語表現

日本語では英語の状態変化他動詞の結果表現「弱い結果構文」に直接対応するタイプが存在する。

(38) a. John broke the vase (into pieces).

b. Bill painted the wall (green).

c. Kate bent the iron bar (into a U).

(39) a. 健司は花瓶を（粉々に）壊した。

b. 太郎は壁を（緑に）塗った。

c. 恵子は鉄棒を（U 字に）曲げた。

英語の結果表現(38)に日本語の結果表現(39)は完全に対応する。日本語の結果表現は標準的には「主語+目的語+結果状態+状態変化他動詞」と構成されるが語順は比較的自由であり、「主語+結果状態+目的語+状態変化他動詞」も可能である。また英語と同様、結果状態は省略可能である。例として(39a)の意味を概念構造で記述してみよう。

(40) 健司は花瓶を（粉々に）壊した。

Syntax: NP1 NP2 RP3 V

Semantics: kenji CAUSE kabin BECOME broken) + [adjunct konagonani
(pieces)]

kowasu (=break) : $\lambda x \lambda y [x \text{ CAUSE } y \text{ BECOME } \text{broken}]$

(40)で表示される因果関係 CAUSE-BECOME は英語の場合と同じく語彙に由来し構文の作用は見られない。結果構文ではその文の中核的意味要素は構文に由来し、動詞は「手段」として補足するだけである。英語の場合も状態変化他動詞を持つ結果表現は構文に因果関係は依存せず、本来は結果構文ではないとしたが、まったく同様に日本語の状態変化他動詞を伴う結果表現も本来「結果構文」ではないということになる。しかし分類の便宜上、何度も既に述べたが、(39)のような日本語の結果表現も「弱い結果構文」と呼んでおくことにする。

4.2 状態変化を伴わない他動詞結果構文に対応する日本語の結果表現

次に英語の結果構文と見なされる例、つまり因果的であり状態変化を伴わない他動詞文で目的語が結果述語の叙述対象であるような場合を日本語と対応させてみよう。英語の例 (41)は Type B であり他動詞が目的語を下位範疇化している。

(41) English Type B resultatives

- a. Mary shook Lisa awake. (Dowty 1979)
- b. Jack hammered the metal flat. (Washio 1997b)
- c. The wind blew the wet laundry stiff. (Washio 1997b)
- d. The principal scolded the boy sullen. (Randal 1982)
- e. The lion's roar scared him stiff. (Washio 1997b)
- f. Willy watered the plants flat. (Goldberg and Jackendoff 2004)

次に Type C の例をあげる。これは動詞が目的語を下位範疇化（選択）していない。

(42) English Type C resultatives

- a. The alarm clock ticked the baby awake. (Randall 1982)
- b. Bill shaved his razor dull. (Jackendoff 1990)
- c. The critics laughed the play off the stage. (Goldberg and Jackendoff 2004)
- d. Dave drank the pub dry. (Goldberg and Jackendoff 2004)
- e. We yelled ourselves hoarse. (Goldberg and Jackendoff 2004)
- f. The professor talked us into a stupor. (Goldberg and Jackendoff 2004)

日本語の定型の結果構文にはこれら英語の Type B、C に対応するものは存在しない。そのことを確認しよう。下の(43)は、(41)Type B の英語の意味を定型の結果表現に当てはめたものである。また(44)は、Type C の英語の意味を定型表現に組み込んだものとなる。いずれも全て非文法的である。

- (43) a.*メアリーはリサを起こし揺すった。
b.*ジャックは金属を平らにたたいた。
c.*風は濡れた洗濯物を固く吹いた。
d.*校長はその子を不機嫌に叱った。

e.*ライオンのうなり声が彼を固くに怖がらせた。

f.*ウイリーは花を平らに水をやった。

(44) a.*目覚まし時計が赤ちゃんが目を覚ましにチクタクとなった。

b.*ビルは剃刀を鈍くに剃った。

c.*批評家はその芝居を舞台オフに笑った

d.*ディヴは酒場を空に飲んだ。

e.*私たちは自分を声がれに叫んだ。

f.*教授は我々に呆然に喋った。

英語の結果構文(41)、(42)にそのまま対応する日本語の「定型結果構文」は認可されない。それでは英語の結果構文(41)、(42)の意味に近い日本語の結果表現はないのだろうか。この点について下の(45)を検討しよう。これらの日本語の結果表現は英語の結果構文の意味に完全に対応するわけではないが近い意味を表す。

(45) a. メアリーはリサをゆすり起こした。

a' メアリーはリサが目覚めるまで/*ほど揺すった。

‘Mary shook Lisa awake.’

b. ジャックは金属を叩き伸ばした。

b' ジャックは金属が平らになるまで/*ほど叩いた

‘Jack hammered the metal flat.’

c. 風が濡れた洗濯物を吹き乾かした。

c' 風が濡れた洗濯物が乾くまで/?ほど吹いた。

‘The wind blew the wet laundry stiff.’

d. 校長はその子が不貞腐れるまで/?ほど叱った。

‘The principal scolded the boy sullen.’

e. ライオンの咆哮は彼がこわばるまで/ほど怯えさせた。

‘The lion’s roar scared him stiff.’

f. ウイリーは植物が倒れるまで/ほど水をやった。

‘Willy watered the flowers flat.’

g. 目覚まし時計は赤ちゃんが目覚めるほど/?までカチコチ鳴った。

‘The alarm clock ticked the baby awake.’

h. ビルは剃刀が鈍くなるほど/*まで（髭を）剃った。

‘Bill shaved his razor dull.’

i. 批評家はその芝居が終わるほど/*まで笑った。

‘The critic laughed the play off the stage.’

j. ディヴは酒場が空になるほど/?まで飲んだ。

‘Dave drank the pub dry.’

k. 我々は声が嗄れるほど/まで叫んだ。

‘We cried ourselves hoarse.’

l. 教授の話は我々が麻痺するほど/*まで退屈だった。

‘The professor talked us into a stupor.’

上の(45)では二つの出来事間に因果関係が成立し、それを表現するのに日本語では3パターンがあることを示している。複合動詞、 S_1 -*made* S_2 、 S_1 -*hodo* S_2 の3つの方式である。(45a, b, c)は複合動詞表現の例である。(45a', b' c')は複合動詞が表そうとする内容を S_1 -*hodo* S_2 あるいは S_1 -*made* S_2 型の構文で表現したものである。残りの(45d-l)も S_1 -*hodo* S_2 あるいは S_1 -*made* S_2 型の構文で表現したものであるが、それぞれの表現法で容認度が異なる場合がある。 S_1 -*hodo* S_2 あるいは S_1 -*made* S_2 構文は複文構造であり、二つの文が関係付け要素の*made*と*hodo*によって結合されている。これらの構造は確かに因果関係の存在を示すが、日本語の標準的結果構文の構成であるNP-NP-RP-V(太郎は壁を緑に塗った)とは形式が全く違う。もし我々が標準の結果構文の形式にこだわるなら、これらの結果表現は議論から除外しなければならない。そうすれば一般に言われている標準的見解「日本語には弱い結果構文は存在するが、強い結果構文は存在しない」という説を支持することになってしまう。これらの因果関係を示

す複文構造を除外するのではなく、これらを強い結果構文の内容を表現する日本語特有の結果表現であるとしてすることで、言語間に存在する「同じ内容を示す全く異なる構造」についての貴重な分析材料を得ることになる。我々の「結果表現」と「結果構文」の定義(4)には既にこれらの表現も「結果表現」として含めている。現に第5章では英語、日本語、ルーマニア語、イタリア語での「強い結果構文」の意味の表示にあるパターンが存在することが確認される。また英語の強い結果構文であるType B、Cの歴史的な発達状況の分析も日本語や他のロマンス語のパターンとの比較においてより明確になるのである。このことは第6章で詳細に取り上げる。そこで我々は「複合動詞、 S_1 -made S_2 、 S_1 -hodo S_2 」の構文を日本語固有の結果表現、*specific-resultatives* (SRs)と呼ぶことにし、英語の強い結果構文との比較を実行していくことにする。それでは SRs について順に説明していくことにしよう。

4.3 結果的複合動詞構文

日本語には複合動詞という文法形態が存在する。これは動詞が2つ結合してできる動詞である。つまり [_v V_1+V_2] という形態になる。影山(1993)によれば、これには語彙部門で形成されるものと統語的に形成されるものとの2種類があるが表層では一つの動詞として理解される。語彙的複合動詞は様々な意味関係を示すが統語的複合動詞は V2 にくる動詞が「開始」「継続」「終了」などの意味のものに限定される。ここでは語彙的複合動詞のうち「動作の状態・手段」を示すものを取り上げる。下の(46)は英語の結果構文(41a、b)に対応した複合動詞表現である。

(46) 動作の状態・手段を表す語彙的複合動詞

- a. メアリーはリサを揺すり起こした。

Mary-TOP Lisa-ACC shake-awaken-PAST

Semantics: Mary CAUSE [Lisa BECOME awake] by shaking her

≒Mary shook Lisa awake.

okosu (=awaken): $\lambda x \lambda y [x \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME awake}]]$

b. ビルは金属を叩き伸ばした。

Bill-TOP metal-ACC hammer-flatten-PAST

Semantics: Bill CAUSE [the metal BECOME flat by hammering]

≒Bill hammered the metal flat

nobasu (=flatten): $\lambda x \lambda y [x \text{ CAUSE } [y \text{ BECOME flat}]]$

上の英語の結果構文(41a、b)は状態変化を伴わない他動詞で、目的語を選択するものである。このタイプには、意味は完全に一致するのではないかものの、日本語の複合動詞がよく対応する（しかし全てのType B 結果構文に対応する日本語の複合動詞構文が存在するわけではない）。日本語の複合動詞での共通点は二番目の動詞 V2 が状態変化を伴う他動詞であり、意味に CAUSE を含む点である。つまりこれらの表現で因果関係は V2 の意味に語彙的に由来する。これらの日本語の表現も語彙的結果表現と捉えることができる。

注意すべきことは V2 から CAUSE が由来することで動詞の V2 の目的語は結果状態に至ったことが含意されることである。結果状態が成立しない場合は下の例のように非文法的になる。

(47) a. *ビルはリサを揺すり起こしたがリサは起きなかった。

b. *ビルは金属を叩き伸ばしたが伸びなかった。

また V1-V2 構造で問題になるのは複合動詞で因果関係を示すものの、V2 が状態変化を伴う他動詞ではなく意思を伴わない自動詞(unaccusative intransitives)の例があることである。次の例を検討しよう。

(48) a. 京子は遊び疲れた。

Kyoko-TOP play-get-tired-PAST

b. 京子は飲みつぶれた。

Kyoko-TOP drink-get-collapsed-PAST

これらの複合動詞を含む表現の意味は(48a)は「遊んでそれにより疲れる」、(48b)は「飲んでそれによりつぶれる（人事不省になる）」ということであり、そこには因果関係が存在する。しかしこれらの複合動詞のV2は意志を伴わない自動詞であり、従って CAUSE を意味の一部に持たない。しかし「疲れる」のには疲れる理由があり、「つぶれる」のにもその理由が当然存在する。何もなく疲れたり、あるいは人事不省に陥ることはあり得ない。そこでこれらの語の概念構造には「理由項」として FROM が付帯すると考えられる（由本 1996）。

(49) a. 京子は遊び疲れた。

Kyoko-TOP play-get-tired-PAST

Semantics: Kyoko BECOME tired FROM playing

tsukareru (=get tired): $\lambda x \lambda P [x \text{ BECOME tired FROM } P]$

$\doteq Kyoko \text{ played herself tired.}$

b. 京子は飲みつぶれた。

Kyoko-TOP drink-get-collapsed-PAST

Semantics: Kyoko BECOME collapsed from drinking

tsubureru (=become collapsed): $\lambda x \lambda P [x \text{ BECOME collapsed FROM } P]$

$\doteq Kyoko \text{ drank herself almost to death.}$

上の例のような複合動詞でV2が自動詞で、因果関係を示すものはCAUSEではなく語彙に由来する FROM という関数によりその因果関係が与えられると考えることになる。これも語彙的な因果関係である。

4.4 複文構造の結果表現：S₁- made S₂ と S₁- hodo S₂ 構文

次に S₁- made S₂ 構文と S₁- hodo S₂ 構文の働きを考えよう。最初は

「まで」を検討する。

4.4.1 S_1 - *made* S_2 構文

「まで」は元々時間空間的な限界、あるいは終点を示す格助詞である。次の例を参照されたい。

(50) a. この電車は京都まで行く。

This train goes UP-TO Kyoto. (=as far as Kyoto)

b. 僕の夜勤は翌朝 8 時までだ。

My night shift is UP-TO eight o'clock tomorrow morning. (= ends at eight o'clock tomorrow morning)

(50a)では京都が終点(endpoint)である。(50b)では、その人の夜勤は翌朝 8 時が終わる点である。同様に結果表現で使われる S_1 - *made* S_2 では、 S_1 - *made* は、 S_2 で示される動作の終点を示す。上の(45)から例を取り説明しよう。

(51) a. (=45a) メアリーはジョンが目覚めるまで揺すった。

→[S_2 Mary's shaking John] continued UP-TO [S_1 John's becoming awake]

b. (=45b) ジャックは金属が平らになるまで叩いた。

→[S_2 Jack hammering the metal] continued UP-TO [S_1 the metal becoming flat]

(51a)は「メアリーのジョンを揺することは彼が目覚めるまで続いた」ことを示している。(51b)は「ジャックがどの金属を叩くことはそれが平らになるまで続いた」ことを示している。上記の意味表示には CAUSE が介在していない点に注意されたい。 S_1 - *made* は S_2 のプロセスの endpoint を示すので S_1 - *made* は S_2 で示されるプロセスの結果状態を示す役割を持ち、それが因果関係の存在を示すことにな

る。因果関係の存在の表示は CAUSE のみの機能ではないのだ。ここでも留意点がある。S₁- *made* は完結点を示すので結果状態は必ず成立していなければならない。例えば次の(52)はこの理由で容認されない。

- (52) *メアリーはジョンが目覚めるまで揺すったがジョンは目覚めなかった。

結果状態が必ず成立していなければならないという点で、この構文は結果的複合動詞構文と同じ性質を持つ。

4.4.2 S₁-*hodo* S₂ 構文

次に「～ほど」という表現を検討しよう。この表現の形態は S₁-*hodo* S₂ という複文構造である。この「ほど」は概ね 3 つの意味がある：(i) 時間と空間の曖昧な領域(*vague range in time and space*)、(ii) モノと出来事の程度(*degree of things and events*)、(iii) おおよそ(*about*)。この結果表現の「ほど」は(ii)の程度を示す。しかし(i)、(iii)の意味も僅かに混ざり、その表現する「程度」が「曖昧でおおよその程度」と解釈される場合もある。それでは結果表現の「ほど」の前に、「ほど」の一般的な使用例を参照したい。

- (53) a. 今年の夏はいつもほど暑くない。

The degree of hotness of this summer is not to the degree of usual year.

(=This summer is not as hot as usual.)

- b. この薬の効果のほどは僕は疑問だ。

The degree of this medicine's effect is doubtful to me.

(=I doubt the degree of this medicine's effect.)

次に結果表現の「ほど」の意味を確認したい。ある出来事 x のあるス

ケール上の程度が別の出来事 y の程度まで達成されることを示す。

(54) a. (=45h) ビルは剃刀が鈍くなるほど（髭を）剃った。

The degree of Bill shaving came to the degree that the razor became dull.

≒ Bill shaved his razor dull.

b. (=45j) ディヴは酒場が空になるほど飲んだ

The degree of Dave's drinking amounted to the degree that supposedly the pub became empty. ≒ Dave drank the pub empty

c. (=45l) 教授の話は我々が麻痺するほど退屈だった。

The degree of boredom of the professor's talk amounted to the degree that we became stuporous. ≒ The professor talked us into a stupor.

この表現 S_1 -*hodo* S_2 構文の意味論は第 5 章で詳述する。基本的には S_2 が示す出来事 2 の程度が S_1 -*hodo* が示す出来事 1 の程度まで至った、あるいは超えたことを示す。 S_1 -*hodo* S_2 構文もある出来事が別の出来事を引き起こしたという意味での因果関係を示すのではなく、2 つの出来事のあるスケールでの程度比較を示す。 S_1 が比較の基準を設定し、 S_2 の程度がその基準である S_1 の程度と同等かそれ以上であることを示す表現である。 S_2 の程度がその基準である S_1 の程度と同等かそれ以上であるということから、 S_1 は結果状態を示すと解され、原因一結果という因果関係解釈がもたらされる。出来事 1 が出来事 2 の程度まで及ぶという意味で出来事 2 が大げさな内容を持つこともある。この例でも実際に「酒場の酒がなくなるほど飲んだ」という文字通りの解釈ではなく、そのくらい飲んだのだと大げさに表現している。また「酒場の酒がなくなるまで飲んだ」であれば結果状態は実現しなくてはならない。つまり酒場の酒がなくなってしまった状態が実際に生起しなければならない。

ここで S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*made* S_2 の選択で生じる違いを明確にしておきたい。

(55) S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*made* S_2 の選択 (原則)

(i) 私たちは声が嗄れる □ 叫んだ。

(ii) 「まで」を選択 \Rightarrow We cried UP-TO the point where our voice became hoarse.

(iii) 「ほど」を選択 \Rightarrow d_1 : degree of one's voice-becoming-hoarse-by-crying
 d_2 : degree of our crying
 $d_2 \geq d_1$

これら 2 つの言葉「まで」と「ほど」は同じスロットに来ることができる。しかしそれらの意味論的振舞いは異なる。

「まで」は S_2 が至る完結点を示す。この場合、結果状態は必ず実現していかなければならない。下の例を参照されたい。

(56) *京子は声がかかるまで叫んだ。それでも彼女の声はいつもと同じ澄みわたっていた。

上例は矛盾を含んでおり容認されない。一方「ほど」はその事象が起こる程度を示す（声が嗄れるほど：声が嗄れる程度）。「声が嗄れるほど叫んだ」は声が嗄れる程度まで（あるいはそれを超えて）叫んだ、ということを示す。

(57)a. 京子は声がかかるほど叫んだがそれでも彼女の声は澄んでいた。

b. 京子は声がかすれるほど叫んだ。声はかすれて聞き取れなかった。

c.*京子は声がかかるまで叫んだがそれでも彼女の声は澄んでいた。

(57)については著者の周囲の日本人話者に確認したところ(57a,b)ともに容認できるとの答えであった。つまり「ほど」はある客観的な尺

度、基準になっておりその程度まで達すれば結果が出現するが、それはあくまで基準であって結果が出現しないこともあり得るということである。(57c)は聞いた全員が非文法的との判断であった。

日本語には「強い結果構文」を表現するスタンダードな形式はないのは確かである。しかし日本語は特有の結果表現があり、英語の対応表現に非常によく似た意味を伝えることができるということになる。

4.4.3 日本語特有の結果表現(SRs)と英語の「強い結果構文」

ここで日本語特有の結果表現(SRs)と英語の「強い結果構文」との対応を考えておきたい。上の(45)に挙げた日本語の結果表現の例を詳しく見てみると、英語の Type B と Type C と日本語の SRs と間の大まかな対応関係の存在に気付く。次の表を考えていただきたい (一行目 a-l は(45)の英語例文を示す)。

表 2 英語の強い結果構文と日本語の SRs との対応

(45)の英語例	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
英語 強い 結果構文	Type B (subcategorizing objects)						Type C (non-subcategorizing objects)					
日本語 SRs CV S ₁ -made S ₂ S ₁ -hodo S ₂	ok ok *	ok ok *	ok ok ?	n/a ok ?	n/a ok ok	n/a ? ok	n/a * ok	n/a * ok	n/a ? ok	n/a ok ok	n/a ok *	n/a ok ok

CV: 結果の複合動詞, ok: acceptable, n/a: not applicable, *: unacceptable, ?: doubtful

上の表は英語の「強い結果構文」と日本語特有の結果表現(SRs)との対応関係を示しているが、Type C 結果構文は明らかに S₁-hodo S₂ 構文と関連している。Type B は幾らかの複合動詞に関連し、さらに S₁-made S₂ 構文には明確に関連している。しかし例外もあり完全な対応ではない。日本語の結果表現の方から見ると複合動詞は Type B の幾つかと関連するだけであり、Type C とは全く関係がない。CV は結果状態が必ず実現していなければならないので Type C とは関連しないのは当然である。複合動詞には動詞 2 つの組み合わせの相性がありどのよう

な動詞でも生成できるわけではなく語彙的に数が限られている。

また S_1 -*hodo* S_2 はほとんどが Type C と関連するが Type B ともいくつか対応する。このことは S_1 -*hodo* S_2 は文脈により結果状態の実現を許容することから説明できる ((57) 参照)。

まとめてみると一般的に Type B と S_1 -*made* S_2 、複合動詞は結果状態が実現していることを求める傾向が強い。この性質はかなり明瞭である。Type C と S_1 -*hodo* S_2 構文とは結果状態が未実現 (incomplete resulting state) である傾向を示すが先にもみた通り ((57) 参照)、 S_1 -*hodo* S_2 は結果状態の完結を許容する。

しかしさらに留意すべきことは Type C の振る舞いである。本当に Type C が結果状態の未実現を要求し、実現した結果状態を容認しないのだろうか。改めてこの点を次の 4 文例に限って 3 人の英語母語話者に確認した。

- (58)a. John cried himself hoarse.
b. John drank the pub dry.
c. The joggers ran the pavement thin.
d. Kyoko swept the broom to pieces.

結論から言うと、適切な文脈さえ与えられれば全て「結果状態実現」読みが可能であるということだ。しかし (58a) はその可能性が一番高く、その他は「強い程度」で主動詞の行為を修飾するとする解釈が普通であり、従って「結果状態未実現」読みになるという。この問題には改めて第 5 章でもどつてくることにしよう。

以上のデータは日本語特有の結果表現の意味的性質を示している。SRs は結果述語の二つの性質、つまりそれが未完 (incomplete) であるか、完結 (complete) であるかということによって（完全に正確というわけではないが）大きく二つに分けることができる。

結局、「弱い結果構文」と併せて、日本語の結果表現は三つのグループに分けることができる。この区別が次の表にまとめられている。

表 3 日本語の結果表現の三分類

区分	構文	例
弱い結果構文	NP NP RP V	a. 恵子は棒を U に曲げた。 ‘Keiko bent the iron bar into a U.’
特有結果表現 complete RS	複合動詞 S ₁ - made S ₂	b. メアリーはジョンを揺すり起こした。 ‘Mary shook John awake.’ c. メアリーはジョンを目覚めるまで揺すった。 ‘Mary shook John awake.’
特有結果表現 Incomplete RS	S ₁ - hodo S ₂	d. ディヴは酒場がからになるほど飲んだ。 ‘Dave drank the pub dry.’

以上の表 2 と 3 の内容を統合してその内容を再度確認しよう。英語の結果構文、つまり Type A、B、C と近似の意味を持つ日本語の結果表現には次の 4 タイプあることになる。

(58) 日本語の結果表現の種類

- (i) 弱い結果構文 (状態変化他動詞) 英語の Type A に相当する。
(例) 健司は花瓶を粉々に壊した ≈ *Kenji broke the vase into pieces*
- (ii) 動作の手段を表す複合動詞 英語の Type B 相当する。
(例) ビルはリサをゆすり起こした ≈ *Bill shook Lisa awake*
- (iii) S₁-made S₂ Type B に相当する。
(例) ビルはリサが目覚めるまで揺すった ≈ *Bill shook Lisa awake*
- (vi) S₁-hodo S₂ Type B の一部と Type C に相当する。
(例) 先生は我々が唖然とするほど喋った ≈ *The professor talked us into a stupor.*

確認するべき事項を列挙してみよう。

- (a) 日本語の「弱い結果構文」はほぼ完全に英語の Type A に対応する。
- (b) (ii) の複合動詞と (iii) の S₁-made S₂ 構文は結果状態が成立している条件で共通し、Type B と対応する。英語の Type B は CAUSE を持ち、この関数は結果の成立を含意する。日本語の複合動詞も V2 が CAUSE を持ち、同様に結果の成立を含意する。
- (c) S₁-made S₂ 構文の方は CAUSE による因果関係ではなく、2 つの出

来事が「まで」で関連付けられている。それにより S_1 -made が完結点を示し、そこまで S_2 の示す出来事が到達するという意味から、 S_2 の示す出来事が原因となり、 S_1 の示す結果状態になったという解釈が生まれる。これも結果状態の完結が含意され Type B に関連付けされる。

- (d) S_1 -hodo S_2 構文では 2 つのあるスケール上での程度が比較される。 S_1 -hodo が基準の程度を示し、 S_2 の程度がその程度に到達、あるいは超えたことを表現する。ここから S_2 の示す出来事が原因となり、 S_1 の示す結果状態になったという解釈が生まれる。これはあくまで程度の比較であり、本当にその結果状態が実現したとは限らない。例えば「ディヴは酒場がからになるほど飲んだ」という文では「酒場が空になる程度、ディヴは飲んだ」ということになり本当に酒場が空になったとは限らない。これは英語の Type C に相当する。

留意すべきことは「 S_1 -made S_2 は Type B に相当する」、「 S_1 -hodo S_2 は Type B の一部と Type C に相当する」と書いたが日本語特有の表現は 2 つの出来事間の関係性から因果関係解釈が生まれるのであって英語の強い結果構文のように CAUSE 関数が介在しているわけではない。また日本語の結果表現のうち、「結果構文」と呼ばれるのは「弱い結果構文」のみであり、その他の結果表現は日本語独自の装置によって因果関係を示している。以上の議論の要約として、英語の結果構文の系統図（図 1）と日本語の結果表現の系統図（図 2）を下に示す。

図 1 英語結果表現（構文）の系統図

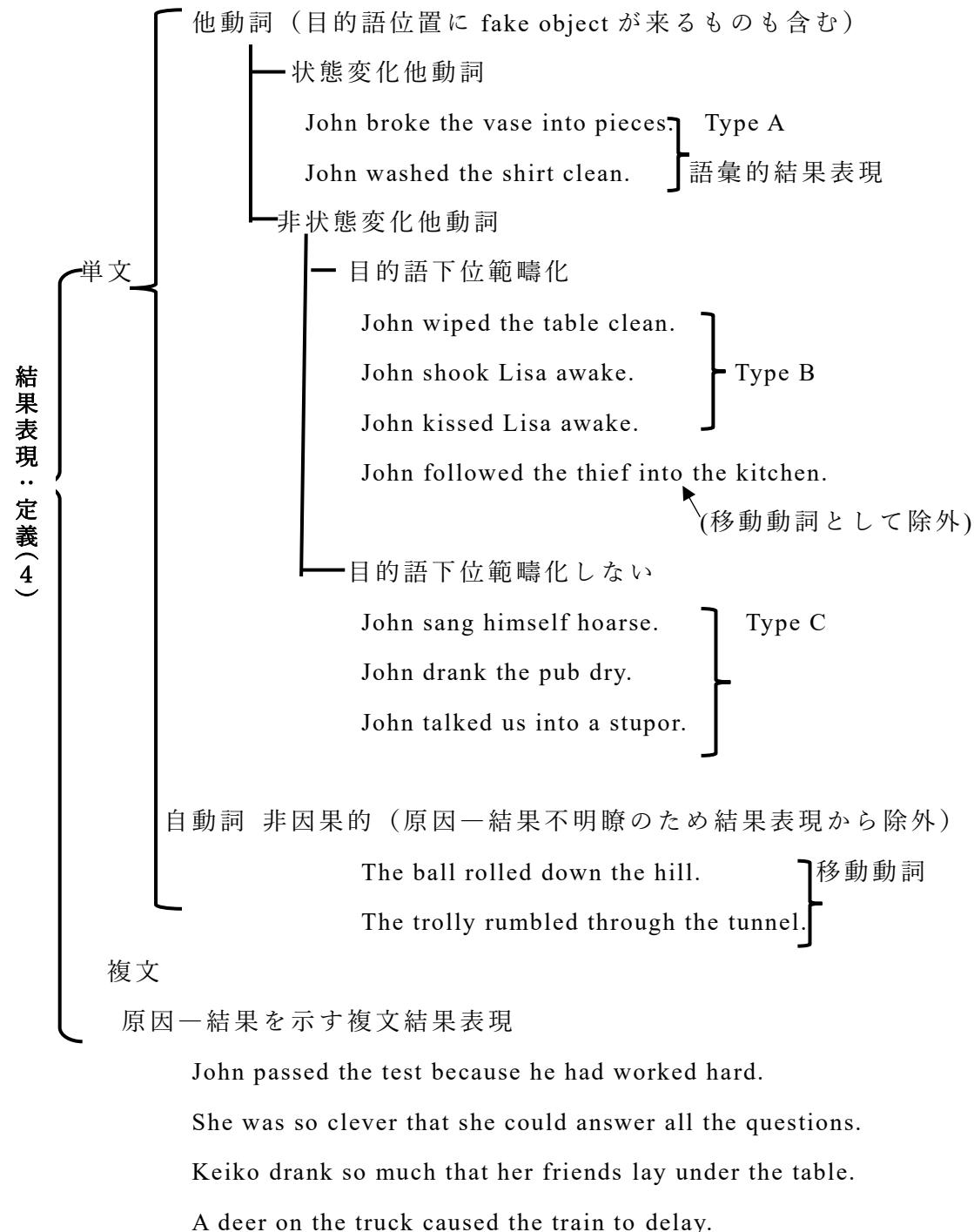
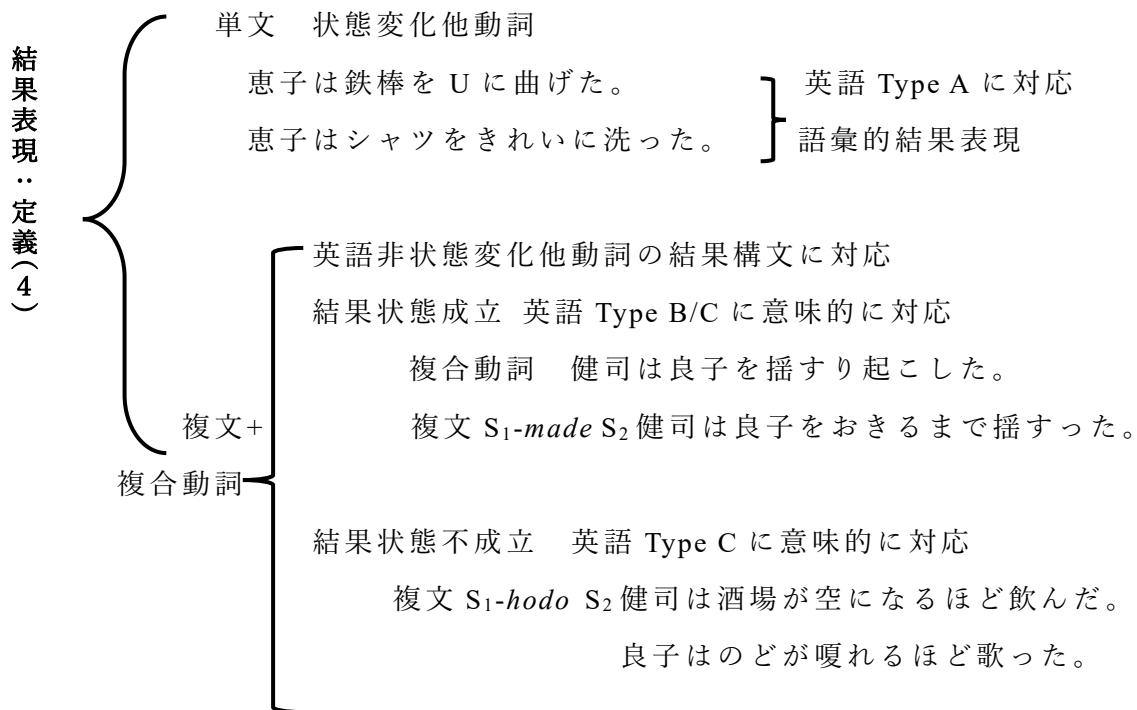


図 2 日本語結果表現の系統図（複合動詞も複文に含めた）



5.まとめ

構文には形式と意味が伴う意味的構文と形式はあっても意味は語彙的に補充されるタイプとがある。結果構文もその意味の中核部分である項構造が構文に依存するという点では意味的構文であり、語彙の一部でもある。英語の結果表現には語彙に因果関係を依存しない「強い結果構文」と、語彙的に因果関係が与えられる「弱い結果構文」がある。英語の結果表現には強い結果構文と語彙的に結果表現の両タイプが存在するが、日本語の場合、語彙の意味に依存する「弱い結果構文」だけである。これは通説でもある。しかし日本語には「強い結果構文」の内容を表現できる特有の結果表現がある。

英語の場合、「弱い結果構文」である Type A と、「強い結果構文」については目的語を下位範疇化するものと、そうしないものとでさらに 2 つに分け、それぞれ Type B と Type C とした。日本語にも Type A に対応する「弱い結果構文」とともに、「強い結果構文」の内容を表す結果表現を、結果状態が未完であるか完結しているかで二つに分け、

3分類とした。

次に問題になるのは英語の Type B 結果構文（例 *Willy watered the tulip flat*）でも語彙的に因果関係が与えられる Type A でも（例 *John broke the vase into pieces*、「ジョンは花瓶を粉々に壊した」）でもその因果関係が CAUSE 関数で表現される場合、この関数の表す厳密な意味の規定を欠いている点である。次章ではこの CAUSE をどう扱うのかに集中して諸理論を検討する。また S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*hodo* S_2 の形式的な意味については第 5 章で扱うことにする。

本章は、Hamamoto(2022a)、濱本(2015b、2018)をもとに、それらを改訂、加筆を行ったものである。

¹ Jackendoff (2016)は前者を *homogeneous Construction Grammar*、後者を *heterogeneous Construction Grammar* と呼んでいる。

² Bittner(1999)では *I drank the teapot empty* のような結果構文では語彙的に因果関係を示す要素がないことから「隠れた因果関係」(concealed causatives)と呼んでいる。例文(4)もこの隠れた因果関係の一例である。ここではこの「隠れた因果関係」について構文文法による解釈を採用したがこれが唯一の解決策ではない。3章でその他の考え方を検討する。

³ Iwata (2019)では force-recipient approach と名付ける方式で結果構文の意味を表示している。 $X_1 V Y_2 Z_3$ という構文は X_1 ACT ON Y_2 , and as a result Y_2 become Z_3 と意味表示される。CAUSE は明示されず定式の中に含まれてしまっている。Iwata の説は 3 章で詳しく検討する。

⁴ Borer (2005b)は *John hammered the metal flat for hours, but the metal did not become flat* という例をあげ、hammer-flat が複合述語であり完結点 (culmination point)が必要とは限らないと主張する。しかし、この例では but 以下の文が先行する文の再解釈を促し、*John tried to hammer the metal flat* と理解し完結性を打ち消しているように見える。

第3章

CAUSE がどこからくるのか

1. はじめに

世の中に因果関係は満ち溢れている。ワクチン接種とウイルスの抑制効果、自動車のブレーキ操作と停止、金利上昇とインフレ抑制、国際紛争と石油価格の高騰、政治家の失言と支持率の低下など枚挙にいとまがない。二つの異なる出来事があり、その二つの出来事間に原因と結果の関係がある場合、それを言語的に表現したものが結果表現であり、その結果表現の中でも単文で、一定の形式と意味を備えた装置を結果構文と呼んでいる。これは第1章で述べたとおりである。我々は第2章で英語の結果構文、日本語の結果表現の分類を行ったが、そこでは結果構文の分類に適した道具として Goldberg and Jackendoff(2004)の「構文文法アプローチ」を採用した。彼らのアプローチでは結果構文の中核的意味である項構造は動詞が与えるのではなく「構文」そのものが与えるのであり、動詞は付帯的な固有の意味情報を与えるのみであるとする。「強い結果構文」の場合、CAUSE は構文が準備するということになる。しかし因果関係を扱う理論は構文文法だけではない。1章でもいくつかの理論の概要に言及したが、この章ではさらに多くの結果構文の理論が因果関係、特に CAUSE をどう捉えているのかという観点から精査してみる。

因果関係を扱う理論には「概念構造の合成アプローチ」(影山 1996, 2007)、「形式意味論的アプローチ」(Kratzer 2005, Rothstein 2003, 2004)、「統語的機能構造論」(Hu 2018)、「Event-Frames アプローチ」(Boas 2003)、「force-recipient アプローチ」(Iwata 2019)、「項構造の統語構造への投射理論」(Folli and Ramchand 2004)などがあり、他にも様々な議論が

展開されてきた。とても全てを検討対象にはできないので以上にあげた代表的な理論の中核的部分のみを概観することにする。諸理論が CAUSE をどう取り扱うのか、あるいは避けて通るのかという点に焦点を当てて検討することになる。そして諸理論の解説の最後に、もう一度 Goldberg and Jackendoff (2004)を取り上げる。Goldberg と Jackendoff の主張には元々根本的な違いがあったことは第 1 章で触れた。また彼らの理論的説明にも問題がある。それにもかかわらずなぜこの理論を本論の骨格の一角に据えたのか、彼らの理論がどのような点で他者のものより柔軟で理論的二次加工に耐えられるのかを解説する。

ここでの議論は第 4 章で示される「人間は因果関係をどのように捉えてきたのか、またどのように表現して来たのか」という哲学的考察と密接に関連することになる。

2. 概念構造の合成説（影山 1996）

影山は結果構文を二つの事象、上位事象と下位事象の結合したものであるとしている。動詞自体が CAUSE を持たない場合の結果構文について、上位事象と下位事象が使役関係 CAUSE により結合され、全体として達成動詞となっていると解説する。上位事象には他者に働きかける機能をもつ働きかけ動詞(ACT ON)と、働きかけの機能を持たない非能格自動詞(ACT)が来る場合があり、下位事象は常に状態変化を示すとする。これを例で示す（影山 1996: 260-262）。

- (1)a. Jane knocked Tom senseless.

上位事象 + CAUSE + 下位事象

[Jane ACT ON Tom] CAUSE [Tom BECOME [Tom BE AT senseless]]

- b. The lecturer talked herself hoarse.

上位事象 + CAUSE + 下位事象

[lecturer ACT] CAUSE [lecturer BECOME [lecturer BE hoarse]]

- c. They drank the teapot dry.

上位事象 + CAUSE + 下位事象

[they ACT] CAUSE [teapot BECOME [teapot BE dry]]

(1a)は上位事象に「働きかけ他動詞(ACT ON)」である *knock* が現れ [Jane ACT ON Tom] という構造が作られる。下位事象は「Tom が senseless な状態になる」という状態変化が来ている。(1b)では上位事象に本来は非能格自動詞である *talk* が来るが fake object の *herself* を従えている。また(1c)では非能格自動詞の *drink* がくる。

この分析方法の長所は概念構造を使った意味論的観点によって上位事象と下位事象の可能な組み合わせが明確になった点があげられる。例えば次の例を見られたい。

- (2) a. *The snow melted the road slushy.

b. *A big earthquake occurred the building apart.

c. *A volley ball rolled the door open.

d. *The old man slipped himself dead.

以上の例はその意味は理解できるものの、全て非文法的である。例えば(2a)は「雪が解けてその結果、道路がぬかるんでいる」というように充分理解可能であるが英文としては容認されない。これらの例では上位事象は全て非対格動詞が組み込まれていて、[非対格動詞を含む事象 + CAUSE + 状態変化事象] という構造になっている。ここで非対格動詞はそれ自身が「状態・位置変化」の意味を持ち、(1a)は「雪がとける」、(2b)「地震が起こる」、(2c)「ボールが転がる」、(2d)は「こける」というように何らかの変化を表す。しかし結果構文は「ある事象の動きが対象物の状態変化を引き起こした」ということを描写し、下位事象の状態変化に焦点をあてる。そこで、上位事象に状態変化を含むものが来ることは結果構文の固有の伝達情報的価値と抵触するので容認されないと説明可能である。非対格性の事象が上位事象に来ることができ

ないことを統語論的に説明する工夫は存在していたが、うまく機能しておらず、ここで意味に基づく説明が可能になったことの意義は大きい（影山 1996: 257）。

概念構造の合成説の問題点は何か。その問題に入る前に因果関係の文演算子として影山は CAUSE と CONTROL という二つのものを想定していることを確認しておく必要がある。

- (3) a. A big noise awoke the baby.
a'. The baby awoke because of a big earthquake.
b. The cook boiled water.
b' *The water boiled because of the cook.

上記の *awake* と *boil* はともに他者に影響を与える他動詞である。(3a) のように *awake* は *because of* で主語の役割を表すことができるが *boil* では *because of the cook* と置き換えができない。つまり(3a)では赤ちゃんの目覚めについて「騒音」が原因であるが(3b)は「調理人」が原因でお湯が沸いたわけではない。*awake* は CAUSE を持つが、*boil* は自然的な推移に関わる CONTROL が関与すると考えている。この使役性の区別を結果構文の因果性にも適用しているのである。

それでは以下に影山自身による概念構造の合成についての疑問点の説明を見てみることにしよう。

それでも、なぜ上位事象と下位事象が CAUSE ないしは CONTROL で結ばれるのかという疑問が起こる。CAUSE ないし CONTROL という関係は必然的なものだろうか、それともたまたま偶然にそのような要素を仮定しただけだろうか。通常、なんらかの行為となんらかの状態があるとき、両者を結び付けようすると、もっとも自然なのは行為の結果として状態が生じるということである。
(中略) 英語の結果述語構文の形成において、行為を表す上位事象と状態を表す下位事象が CAUSE ないしは CONTROL の関係で

結び付けられるというのは、この言語の表示レヴェルとしての語彙概念構造の鋳型に則った必然的な結果なのである（影山 1996：255）。

上位事象と下位事象との概念構造の合成ではその間に来る演算子として CAUSE が出現することが「必然である」と述べている。しかしながら AND ではいけないのかなど疑問が払拭できない。「必然」と言い切れるまでの根拠が示されているとは思えないでのある。

3. 形式意味論的アプローチ

3.1 Kratzer(2005) : type シフト説

強い結果構文では因果関係の存在を示す CAUSE を動詞以外のどこからか探し出さなくてはならない。この結果構文の隠された *causality* の探究について、Kratzer (2005) は *John drank the teapot dry* という例をあげて次のように説明する。

このような構文は因果関係を示す結果構文 (causative construction) である。これらは、Bittner (1999) の用語を使えば、因果関係を意味する可視的な要素 (visible carrier of causative meaning) を全く持たないので「隠された因果関係 (concealed causatives)」というべきものである。Kratzer (2005: 195)

Kratzer はこの隠された因果関係を説明するために本来完結性を持たない行為動詞に結果状態を引き起こす働きを与えるタイプシフトを提案し、先ほどの例は次のような解釈を受けるとする (Kratzer 2005: 198)。

$$(4) T(\text{drink the teapot dry}) = \lambda e \exists s [\text{action}(e) \wedge \text{drink}(e) \wedge \text{state}(s) \wedge \text{empty}(\text{the teapot})(s) \wedge \text{CAUSE}(s)(e)]$$

この *drink the teapot dry* では *drink* はプロセス動詞であって完結点を持たない。もちろん *teapot* を目的語として下位範疇化できない。しかしこの表現は意味として、「*drink* という行為 *e*、*the teapot* が *empty*

であるという状態 s について、行為がその状態を起因(CAUSE)する、そのような e の集合」を示しているという。これは端的に言うと完結点を持たない行為動詞 *drink* を達成動詞として再解釈することを提案しているのである。このタイプシフトに従えば「飲むことによりポットが空になる状態が生じる」という解釈が生まれ、文が理解可能になる。しかしこの考え方も、文の意味には因果関係が認められるものの、文中には因果関係を引き起こす要素がないので「行為動詞を達成動詞に解釈する」という力業でそれを解決したものであると言わねばならない。

Kratzer 自身もこのタイプシフトによって *drink* の語義を追加するという点が強引であると考え、同論文の後半で、「見えない語彙項目」(invisible lexical item)として解釈可能な素性[cause]を持つ音形のない形態素の導入を再提案している。しかしこの音形のない[cause]がどのような場合に付与されるのかは未だ不明のままである。

1章でみた、構文に意味の中核である項構造を担わせ、動詞には様態の解釈のみ担わせる Goldberg & Jackendoff の説明も、そしてこのタイプシフトによる解釈も一般的な意味論的説明とはやや乖離したつじつま合わせの解釈のように思える。もう少し他の意味論的説明とも乖離しない解決案がないだろうか。

3.2 Rothstein (2003, 2004) : PART-OF 説

Rothstein は先ず結果構文と描写構文(*depictive*)との共通点の問題から分析を始める。これら二つの構文は二つの事象(*subevent*)が含まれていて、その二つの *subevent* の和(SUM)が構文全体を構成する点はこれらの二つの構文に共通する。これらの二つの事象を e_1 と e_2 とすると描写構文と結果構文は次のように規定される。

- (5) (i) *Depictives* : $\lambda e \exists e_1 \exists e_2 [e =^s (e_1 \cup e_2) \wedge \text{PART-OF}(e_1, e_2)]$
- (ii) *Resultatives* : $\lambda e \exists e_1 \exists e_2 [e =^s (e_1 \cup e_2) \wedge \text{PART-OF}(\text{Cul}(e_1), e_2)]$

具体例を入れて考えよう。(6)は *depictive*、(7)は *resultative* である。

(6) The police arrested John drunk. (The police: drunk, depictive)

$$\exists e_1 \exists e_2 [e =^s (e_1 \cup e_2) \wedge \text{ARREST}(e_1) \wedge \text{AG}(e_1) = \text{the police} \wedge \text{TH}(e_1) = \text{John} \wedge \text{Drunk}(e_2) \wedge \text{Arg}(e_2) = \text{The police} \wedge \text{PART-OF}(e_1, e_2) \wedge \text{PAST}(e)]$$

この解釈は、「*police* が *John* を逮捕する出来事 e_1 と、*police* が *drunk* である出来事 e_2 の和が（結び SUM）である出来事 e が存在した」というものである。また *police* が *John* を逮捕する出来事 e_1 は *police* が *drunk* である出来事 e_2 の一部(PART-OF)であるという意味である。図示すると下のようになる。

図 1 The police arrested John drunk.



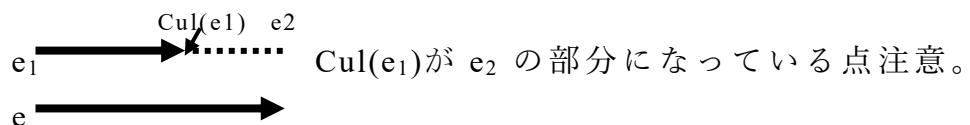
次に結果構文の例を考えよう。

(7) Mary painted the house blue.

$$\exists e_1 \exists e_2 [e =^s (e_1 \cup e_2) \wedge \text{PAINT}(e_1) \wedge \text{AG}(e_1) = \text{Mary} \wedge \text{TH}(e_1) = \text{the house} \wedge \text{blue}(e_2) \wedge \text{Arg}(e_2) = \text{the house} \wedge \text{PART-OF}(\text{Cul}(e_1), e_2) \wedge \text{PAST}(e)]$$

この解釈は *Mary* が家を *paint* する出来事と家が青くなる出来事の SUM である出来事が存在し、*Mary* が家を *paint* する出来事の終了点は家が青くなる出来事と PART-OF の関係にある、ということになる。これも図示する。

図 2 Mary painted the house blue.



上記の説明で描写構文の場合(6)はそれで良いとして、結果構文の場合である(7)を考えよう。結果構文にも二つの出来事が組み込まれ、その内、主動詞が関わる出来事 e_1 の完結点 $\text{Cul}(e_1)$ が、第二述語が含まれる出来事 (=結果状態) に含まれる。*Mary* が家を *paint* する出来事の

終了点は家が青くなる出来事の一部になることをもって因果関係の成立を示している。明確な CAUSE は使われていないが出来事の終了が、結果状態の一部であることから因果関係が推論される。つまり CAUSE を避けながら、因果関係を事象の PART-OF 関係に置き換えて解釈しているのである。

この分析の良い点は CAUSE を使わず因果関係を表示していることである。その点では「CAUSE はそれが必然だから」とか、「タイプシフトによってプロセス動詞を到達動詞に解釈し直す」というような強引さやつじつま合わせは無くなっている。理論としてすっきり納得できる。しかしこれで本当にうまくいくのだろうか。気付くべきなのは(7)は「弱い結果構文」であり、そこに現れる動詞 *paint* は状態変化動詞であって「塗り終わり」が完結点になることは意味の一部である。つまり Cul(*paint*)は無理なくそのまま出てくる。

それでは次のような「強い結果構文」の場合はこのやり方が可能だろうか。(8a)は他動詞が目的語を下位範疇化するいわゆる Type B 型、(8b)は動詞が目的語を下位範疇化しない Type C 型である。これらの意味を適切に表示できて初めて有効な意味論的アプローチと言えるだろう。

- (8) a. Mary shook John awake.
b. Mary drank the pub dry.
c. Mary swept a broom to pieces.

(8a)は「メアリーはジョンが目覚めるまで揺すった」という日本語の S_1 -made S_2 と同様に考えると下の(9)のように意味表示できる。

- (9) $\exists e_1 \exists e_2 [e =^s (e_1 \cup e_2) \wedge \text{SHAKE}(e_1) \wedge \text{AG}(e_1) = \text{Mary} \wedge \text{TH}(e_1) = \text{John} \wedge \text{awake}(e_2) \wedge \text{Arg}(e_2) = \text{John} \wedge \text{PART-OF}(\text{Cul}(e_1), e_2) \wedge \text{PAST}(e)]$

つまり「メアリーがジョンを揺すこと」の終了点を「ジョンの目覚

め」に合わせ、二つの出来事が全体を構成するように組み立てれば一応、形式的には構成可能である。他動詞が目的語を下位範疇化する Type B 型の結果構文ではこのように一応、形式的に意味を表示できることになる。

それでは(8b)はどうだろうか。結論だけ述べるとこの結果構文の意味を Rothstein 流の形式では表示できるかどうかは解釈次第ということになるだろう。(8b)は日本語の結果表現 S_1 -*hodo* S_2 に対応する意味、すなわち「メアリーはパブが空になるほど飲んだ」という意味であれば「メアリーがパブで飲む」事象と「パブが空になる」という二つの事象について、「メアリーがパブで飲む」事象の終了点が「パブが空になる」事象に含まれるとは設定できないことになる。「パブが空になるまで」と endpoint を示す場合にはこの方式で表現できることになる。

この例の場合「メアリーがパブで飲む」ことを「パブが空になるほどである」と程度を修飾しているのであるのか、結果状態の完結を示すのか曖昧あり、「パブは本当に空になった」という解釈のみこの方式での表示が可能である点に注意が必要である。さらに(8c)では「メアリーは箒がバラバラになるほど掃いた」という意味に解釈されるのが普通だとするとこの方式では表現できないことになる。

二つの異なる出来事 e_1 と e_2 があり、 e_1 の終了が e_2 の出現と直結する場合、 e_1 CAUSE e_2 と解釈する考え方は一般的に受け入れられている（第 4 章の Hume の「恒常的継続性理論」参照）。この方式では結果状態が現実に出現した場合にのみ有効であり、程度を示す解釈では使えない。

結局 Rothstein 流の形式表示は CAUSE を使わず因果関係を巧みに取り扱っている点、大いに評価できるが全ての結果構文をカバーできるわけではないということになる（第 5 章で S_1 -*hodo* S_2 の形式的表示にこの方式に似た考え方を提案する）。

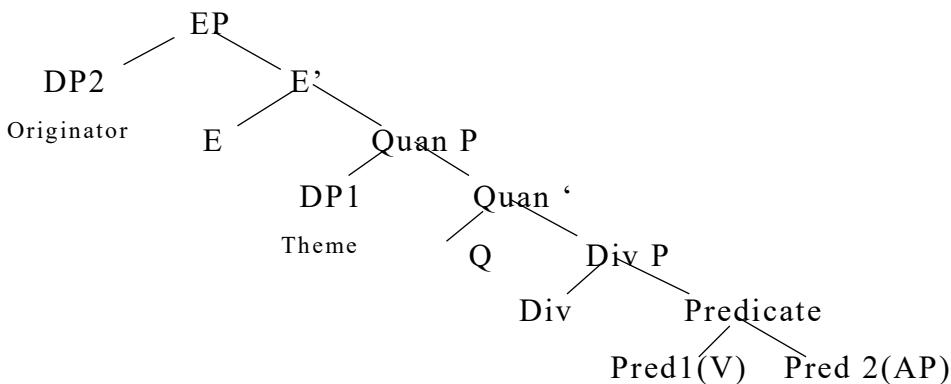
4. 統語的機能構造論 (Hu 2018)

次に統語的機能構造論という新しいアプローチを検討する。基本的な考え方は出来事の項構造については語彙的に捉えるのではなく構造的に捉えるという点である。

意味役割などは動詞の項構造から作られるのではなく統語的、構造

的に元々 originator と theme として配置されていると考える点が従来の説と大きく違うところである。下に文の基本構造を示す。

(10) 結果構文の基本構造

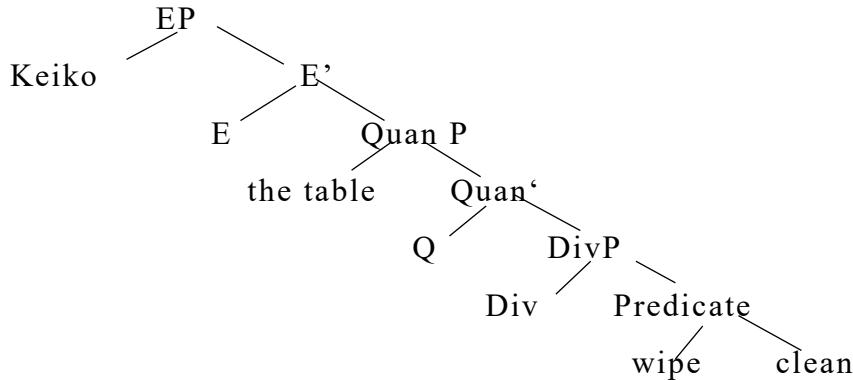


ここで EP は Functional structure を示し Quan P は Functional Phrase の一種で、Q head には、もしあれば *three* などの量化表現が来る (Q head は空でもよい)。Div P は、その head 位置に動詞の性質などのアスペクト情報が来る。達成動詞と活動動詞は dynamic [iDiv] 素性を持つ。状態動詞は static [iDiv] 素性を持つ。EP の spec 位置に originator、Quan P の spec 位置に theme の各意味役割が構造上設定されている。動詞が意味役割をもたらすのではなく構造が意味役割を持っていることが構造的(Constructivist)という名称の理由である。

また述語 predicate 位置には動詞だけではなく、形容詞も来ている。この構造では動詞が意味役割を与えるのではなく統語構造が与えるので 2 つ述語が並列しても問題にならない。

それではこの構造に結果構文の具体例をあてはめてみよう。

(11) Keiko wiped the table clean.



先ず *wipe* はプロセス動詞でそれ自身に完結性はない。これは *dynamic[iDiv]* 素性を持っている。第2述語には形容詞の *clean* が来て いる。ここで Inverse Agree という操作が行われる。

(12) α can agree with β iff:

- (i) α は少なくとも一つの未解釈素性(uninterpretable feature)を持ち、かつ β は相当する解釈可能素性(interpretable feature)を持つ。
- (ii) β c-commands α
- (iii) β は α に最も近い要素である。

α can agree with β とは α の素性が β の素性と一致するということであり、この場合、 β の素性 *dynamic[iDiv]* は α にも共有される。

上の(11)の例では β が *wipe* に相当し、 α は形容詞の *clean* である。この操作により形容詞 *clean* も *dynamic[iDiv]* 素性が共有され、さらに(13)に規定される意味的合成規則によって BECOME 解釈が付与される。

(13)形容詞の意味的合成規則

φ を形容詞述語の属性とする。形容詞と *dynamic[iDiv]* 素性の結合は次の意味的合成をもたらす。すなわち：

$$\text{Dynamic[iVid] 素性} + \varphi = \text{BECOME} \varphi$$

この操作の後、文全体の意味表示は次のようになる。

(14) 第2述語に形容詞をもつ結果構文の意味解釈規則

- (i) e を結果構文の事象を表示するとする。
- (ii) φV は主動詞 V の示す activity とする。
- (iii) φA を第2述語の示す属性とする。
- (iv) [] は e の時間範囲、このとき
- (v) $\exists e [V\varphi(e) \wedge \text{BECOME}\varphi A(e)]$

これは二つの述語で一つの全体を作り *wipe*～*BECOME clean* と達成動詞化するということになる。結局、*Keiko wiped the table clean* という結果構文の意味は $\exists e [V\varphi(e) \wedge \text{BECOME}\varphi A(e)]$ に originator と theme の役割を項に対応させて以下になる。

(15) *Keiko wiped the table clean*

$\exists e [wipe(e) \wedge \text{BECOME clean}(e) \wedge \text{Originator(Keiko, } e) \wedge \text{Theme(the-table, } e)]$

これは二つの述語 *wipe* と *clean* を持つ出来事 e が存在し、*Keiko* がその主語、theme は *the table* であり、動作 *wipe* と状態変化 *BECOME clean* とは同一の時間領域で進行する、ということを表す。同一の時間領域内にあるということから *wipe* の動作と同時進行的に *the-table-be-clean* が始まり、*BECOME clean* で終結すると解釈され、ここから因果関係が推論されるということになる。ここでも CAUSE は表面に出てくることはない。

この理論も統語的に意味役割を設定することで2つの述語を合成させ、その時間領域内での同時進行性から因果関係を導くという大変面白い方法である。しかし Rothstein (2003, 2004) の PART-OF 説のように Cul(e) ポイントを想定していないので時間領域の同時進行というだけで因果関係が表現できるのかは疑問である。

例えば、(a) *John drank the pub dry*、(b) *The Professor talked us into a*

stupor という Type C の場合を考えてみたい。

- (i) 動詞の *drink* と *talk* は活動動詞であるから dynamic[iDiv] 素性を持つ。
- (ii) それが形容詞にも受け継がれ形容詞に BECOME *dry*、BECOME *stuporous* が生成される。
- (iii) 二つの述語を持つ一つの事象として：
 - a. $\exists e [drink(e) \wedge \text{BECOME } dry(e) \wedge \text{Originator (John, } e) \wedge \text{Theme (the pub, } e)]$
 - b. $\exists e [talk(e) \wedge \text{BECOME } stuporous (e) \wedge \text{Originator (the professor, } e) \wedge \text{Theme (we, } e)]$

この(iia、b)が上の結果構文の意味を表すとは思えない。(iia)であれば「*John* が飲み始めると同時に *pub* が *dry* になり始め、*John* が飲み終ると同時に *pub* は完全に（酒類が）空になる」という事態を示しているが、元の文の意味は「ジョンは酒場が空になるほど飲んだ」という飲み方の程度を示していると普通は解釈されるからである。同様に(b)も本来の意味は「先生の話は我々が驚愕するほど退屈だった」という程度を示す意味であり、(iib)の定式はこの意味にそぐわない。

この方式も CAUSE を回避し、因果関係を表示する手法でありそれなりに成功しているのだが先の Rothstein 同様、全ての結果構文の分析には適用できないように思える。また Kratzer のタイプシフトと同じく、素性を動詞から付与させ、[V + BECOME A]全体で完了点のある達成動詞にするという、かなりの力業のようにも思える。

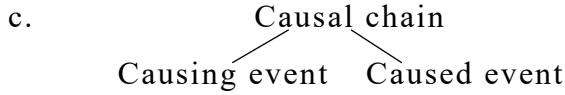
5. Event-Frames アプローチ(Boas 2003)

5.1 導入

次に Boas の提唱するアプローチを概観する。基本的主張の一つは結果構文と慣習化は関係が強くこの傾向を把握するのはコーパスデータによるという。例えば下の(16)と(17)を比較してほしい。

(16) a. Jack ate his food. As a result of his eating the food, the plate became clean.

b. Jack ate his plate clean.



(17) a. *Claire opened the key to pieces.

b. *Brigid loaded the table's legs bent.

上の例で(16a)のような状況を描写するのに(16b)の結果構文が使える。また二つの出来事間には因果連鎖(16c)が成立している。しかし因果連鎖が成立していて、意味が解釈可能でも(17)のように結果構文として表現できないものもある。結果構文として表現できるかどうかは結局、慣習化の問題であると Boas は考えている。また意味の解釈には二つの意味情報が関与するとしている。それらは語彙の辞書的意味で常に参照される *on-stage* と、その語彙に関する世界的情報で必要に応じて参照され意味表示に記載される *off-stage* 情報である。見通しをよくするため Boas の Event-Frames アプローチの装置の概略を先ず見ておくことにする。正式の名称は Event Based Frame Semantics という。例えば *break*, *shatter* という意味の似た文の構成する構文の違いは次のような連続するフレームで表現できるとする。

(18) a. Stevin broke the branch off.

b. *Stevin shattered the branch off.

(19) *break X off* の event-based frame semantic 表示 (Boas 2003:196)

SOURCE	Path	Path	Path	GOAL
↓ Ag Pt	↓ Ag Pt	↓ Ag Pt	↓ Ag Pt	Ag Pt p3

Ag: 力の行使者、 Pt: 当初他の物体に付属していたもの

p3: *off*

break X off という表現の示す事象の参加者は先ず行使者(Ag)、その力の受け手 (Pt) が関わる。この被動者は最初、別の物体の一部だったものという説明がある。また第三の参加者 p3 が関与する。明記されていないが p1 は Ag、p2 は Pt を示す。この三番目の参加者は Pt への力の行使の結果生じる状態を指定していて *off* になる。*break X off* ではこのように Pt の状態を示す要素として *off* が付加されている。しかし *shatter* も上記と同じ *frame* を持つが最後の GOAL にこの p3 要素がないため、(18b)は容認されないことになる。このように結果構文の意味の違いを示す表示としては GOAL だけで充分なので GOAL のみが示されることが多い。

5.2 Boas の結果構文の機能分類

他の結果構文の例を見る前に Boas の結果構文の分類を眺めてみよう。彼は結果構文のタイプを 4 つの異なる談話機能 (different kinds of discourse information) に基づき分けている (Boas 2003: 150-158)。各タイプの談話機能の特徴と例文を (20) にまとめておく。

(20) Boas(2003) 結果構文の談話機能による 4 分類

- (i) 第 1 機能 事象(event)の終了点(endpoint)を強調する。
 - a. She shattered the vase into pieces.
 - b. The fridge froze the water solid.
 - c. Jill suffocated Kim to death.

各文の下線部、結果状態句は動詞が含意する結果状態をもっと特定化し強調する機能を持つ。話し手が事象の状態変化にハイライトを当てたい時その動詞に関連付けられる慣習化されたパターンから結果状態句を選択する。

(ii) 第 2 機能 事象の終了点の曖昧さを減じる。

- a. Jack painted the house red.

- b. Flora washed her sweater clean.
- c. Dave hammered the metal flat.

事象に関する被動者の結果状態の正確な情報を与え曖昧性を減じる機能である。動詞だけでは推論できない事象の結果の特定情報を与える。しかし動詞と結果状態句との成立制約は慣習化に基づく。

(iii) 第3機能(ECM型) 典型的ではない参加者の結果状態を視覚化する。

- a. Erin painted the brush to pieces.
- b. Pam ran her feet sore.
- c. Eric swept the broom to pieces.
- d. Troy ran the pavement thin.
- e. Flora talked herself hoarse.

これらの文の目的語位置NPはfake objectであり、話者はこれらの動詞の典型的、本来的なシナリオから外れた情報を伝えようとしている。目的語位置のNPの役割はoff-stageな世界知識から与えられる。動詞と目的語、結果述語句の連結は慣習依存が強い。

(iv) 第4機能(ECM型) 慣習化した事象場面の外側の参加者を視覚化する。

- a. Stefan sneezed the napkin off the table
- b*Stefan exhaled the napkin off the table.

動詞の創造的使用(creative use of a verb)が関係する。ある場面で因果関係に気づき描写しようとしても既存の動詞が使えない時、描写しようとする動作に近接した意味を持つものとの類推により(sneezeはblowに近いのでblowの類推によって)因果関係を表現する。またnapkinはsneezeという動詞の本来の被動者ではなく

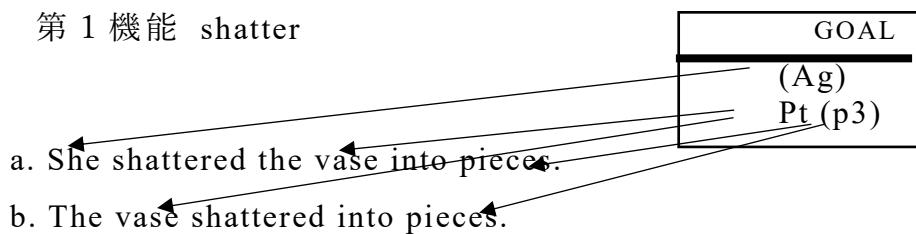
sneeze に関係づけできない。

以上の分類で、上 2 つ、機能 1、機能 2 はいわゆる control 型、「弱い結果構文」、あるいは Type A と分類されるものである。また機能 1 と機能 2 の差は小さい。結果状態が動詞の意味と関連を持つのは一緒だが、動詞の意味から含意できるほど強いかどうかのみが問題となっている。また機能 3 と機能 4 のタイプは「強い結果構文」の内、目的語を下位範疇化しないもの、つまり Type C を扱っている。機能による種類の内、機能 1 ~ 機能 3 は慣習化結果構文 (Conventionalized Resultatives) とまとめられ、機能 4 は非慣習化結果構文 (Non-conventionalized Resultatives) と分類されている (Boas 2003: 150-158)。

5.3 各 Event frame の検討

それでは機能ごとに Boas の分析を具体的に確認しよう。

(21) 第 1 機能 shatter



GOAL に動詞 *shatter* に関わる事象の参加者が記載されている。()はその実現は任意であることを示す。この例で(Ag)は(21a)では *she* として実現しているが(21b)は Pt のみが *the vase* として実現している。p3 は結果状態で(21a,b)に *into pieces* として実現していてこの endpoint を強調している。

(22) 第 2 機能 hammer

GOAL
Ag
Pt p3

- a. Niko hammered the metal flat.
b. *Niko hammered the metal.

Ag: エネルギーを多量に行使する存在

Pt: 物体

p3: SYN: AP

SEM: Ag によるエネルギー行使によって直接的に引き起こされる平面状態を示す

(Denoting a state of flatness or other state that can be construed as being directly caused by the energy emitted by the agent)

上の(22)は第 2 機能の結果構文で *hammer* が現れる例である。ここでは GOAL に登場者が記載され、さらにその下に各登場者の意味記述、統語記述が記載されている。先ず GOAL の設定で Ag 、 Pt、 p3 全て統語上に顕在化しなければならぬので結果述語句 *flat* のない(22b)は非文になる。注意すべき点は登場者の意味記述の p3 で「Ag によるエネルギー行使によって直接的に引き起こされる平面状態を示す」とする説明が詳細に記載されていることである。GOAL で登場者の一覧を示し、意味記述で詳細にその役割を描写しているがこれは事象の描写に必要な言語要素の記述にすぎないのでないだろうか。さらに例を検討する。

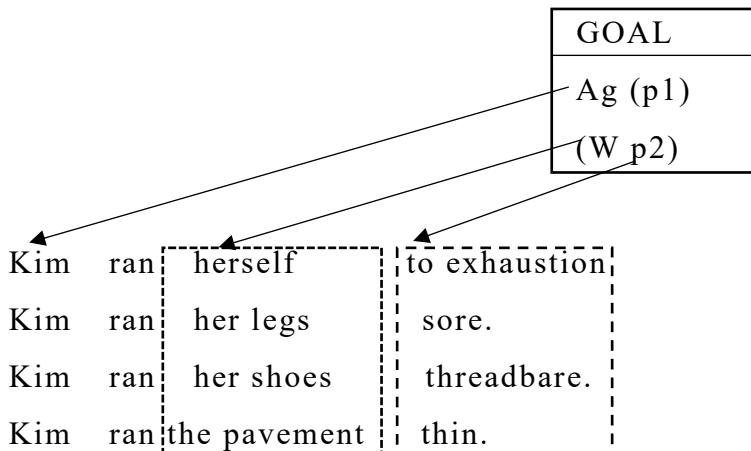
(23) 第3機能 Kim ran herself to exhaustion 他。 (Boas 2003: 247)

Ag: 足を素早く動かす animate object

P1: 方向 PP

W: 世界知識 running 事象の非典型参加者の知識を含む。

p2: 世界知識からの事象参加者の位置・状態変化



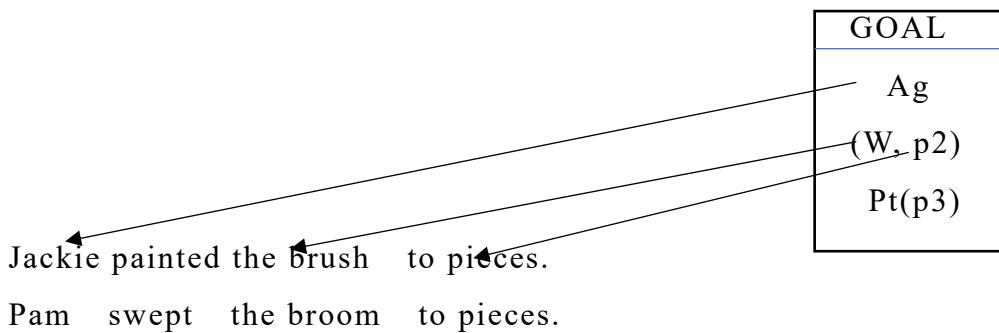
上記の4例は基本的に同じ構造をしている。動詞 *run* の後に来る要素は W に認可され、文末の結果述語は p2 により認可される。最初の例 *Kim ran herself to exhaustion* の例で確認しておかなくてはならないことは *herself* が W によって認可されていることである。この結果構文の機能は典型的 patient ではない対象に焦点をあてるにある。移動動詞 + self + PP の構文では状況によって、「人間は身体を二つの存在、つまり agent と patient に分けて捉える」という事実があるという。つまり agent (意識的自己) によって始められた動作により変化を被る patient という捉え方である。ここで patient はこの特別な見方を伝えるために明示的に示さなければならぬと Boas は言う (Boas 2003: 242)。また Boas は Lakoff(1996)の「自己分割メタファー」(divided-self metaphor)の分析も例にあげている。Lakoff の捉え方では *the subject* は意識主体、経験、知覚、理性判断の主体、であり *the self* は身体、感情、社会的役割などを担うとする (Boas 2003: 243 脚注)。また上図に戻ると、「W は非典型的な running event の参加者の知識を含む」としている。また *to exhaustion* (疲労状態に) は「W からの参加者の状態変化を示

す」とする。まとめると、状況によって世界知識から(i)agent を二つの存在に分け、*agent* と *patient* にする、(ii)走ると疲れるという知識も出てくる、それが *Kim ran herself to exhaustion* を認可する。

その他の例も最初の□に入る要素は全て W から認可され、次の□の要素は p2 として W から出てくる。W に大きな解釈上の負担を負わせているが W の仕組み、構成についての記述はない。また Ag の説明も、*run* なら「両足を素早く動かす主体」、*break* なら「エネルギー移転の実施者」など辞書的記述であり、かなり説明的である。それでは同じタイプの他の動詞の例の説明に移ろう。

(24) a. Jackie painted the brush to pieces.

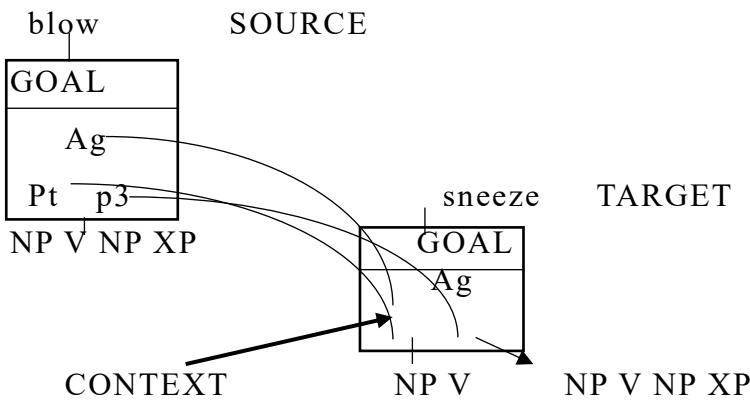
b. Pam swept the broom to pieces. (Boas 2003: 258)



これらの例では出来事の結果について非典型的な観点から描写しようとするものであり、例えば(24a)の典型的な *paint* の用法なら *Jackie painted the wall green* のように描く対象と描かれた色が現れるのだが、世界知識から絵を描くにはブラシがいる、ブラシは使いすぎるとバラバラになるという off-stage 情報が供給され、「Jackie は絵の具を塗るブラシがバラバラになるほど塗った」というように日本語の結果表現 S_1 -*hodo* S_2 の意味に対応する意味を伝達する。また(24b)の *sweep* も「掃く」から「ほうき」が現れる。これも「ほうきがバラバラになるほど掃いた」という意味である。このように道具の *brush* や *broom*、それがバラバラになるという意味の *to pieces* など全て W に認可される。

それでは最後の機能の例に移ろう。

- (25) 第4機能 類推 Tom sneezed the napkin off the table.(Boas 2003: 268)



この *sneeze* を含む結果構文は *blow* との類推の上で成立している。*blow* は結果構文として慣習的に成立しており、その構造は NP V NP XP である。一方 *sneeze* は本来 Ag しか参加者のいない自動詞である。ある人が「Tom がくしゃみでハンカチを飛ばした」のを目撃したとする。その時、その目撃者が状況を描写する際に *blow the napkin off the table* は意味的に近接した使用可能な構文として想起される。それを SOURCE とし TARGET に構造を転写しようとするのが上図であり、*blow* の構文をそのまま利用し *Tom sneezed the napkin off the table* と表現したのである。ここで説明は今までのよう *sneeze* に W から世界知識が補充され、文が構成されるという形を取らず、先ず *blow* と *sneeze* の意味の近接性から *blow* の構文をそのまま *sneeze* に転用すると説明している。*sneeze* では世界知識から *the napkin*、*off the table* を補充するのは無理という判断であろう。この用法は慣習的な出来事の場面にはふつう現れない参加者に視点を合わせている点に特徴がある。

5.4 Boas 説の総括

さて、この理論の良い点は様々な種類の結果構文、特に他の論文では扱われていないような例に説明を与えていていることがある。(24)のように動詞と、それが下位範疇化はしていないが、目的語位置にくる名

詞句との関係が非典型的な結びつきも説明できている。これらの *paint* や *sweep* という動詞が世界知識から *the brush* や *the broom* を呼び出し、さらに「使いすぎるとバラバラになる」というような周辺情報も世界知識が認可している。しかしこの長所が欠点でもある。世界知識 W に過重な負担を負わせている面は否めない。先ずコーパスにおいて当該の結果構文が容認されているかどうかを確認し、容認されるのであれば世界知識を工夫して、「この通りうまく説明できるでしょう」と提示している。しかしながら世界知識がそのような情報を適切に提供できるのか、世界知識の構造はどうなっているのかなどの説明が一切ないため説明の都合が先行している。結果構文のフレームを使った「描写」ではあるが「理論」ではないのではないか、そう思ってしまう。

6. Force Recipient アプローチ(Iwata 2019)

6.1 導入

9部25章549ページの大著で他の著作では脇に追いやられてきたイディオム的結果構文も取り上げ、また当然視されてきた既存の諸説に対し果敢に反論し持論を展開している点、大いに評価できる。結果構文の例は豊富に収録され、動詞ごと、結果述語ごとの個別的な差異にも注意が払われている。最初に結果構文をどう捉えているかを解説し、その定式にヴァリエーションが生ずることにも言及する。また他説とは対立する論点に注目して検討することにしたい。

6.2 結果構文の捉え方

Iwata は主体者の対象に対する力の行使(ACT-ON)が対象物に変化をもたらすという *causal chain* を重視する。先ず基本の定式を確認しよう。

- (26) a. Tracy swept the floor clean.

ACT ON CHANGE
b. Tracy → floor → clean

Syn: NP_x V NP_y AP/PP_z

Sem: X acts upon Y, and as a result Y becomes Z

結果構文定式 ver.1

(Iwata 2019:48)

(26)が示すのは *Tracy swept the floor clean* という状態変化を伴わない「強い結果構文」でしかも目的語を下位範疇化するタイプ、我々の分類では Type B 型の結果構文の意味と構造を構文文法の形式で捉えたものである。Iwata(2019)は構文文法の枠組みを援用している。また原則的には *force recipient* (力の受け手) となる NP が目的語位置にきて *force* が伝達されるというイメージスキーマが成立する構文を結果構文としている (後に修正が加わる)。Tracy が *sweep* することで力を行使し、その力を *the floor* が受け(*force-recipient*)、それにより *the floor* が状態変化し *clean* になった、というイメージスキーマが存在する。意味論は Sem で示されているように X acts upon Y, and as a result Y becomes Z と解釈される。この定式は非常に簡単であるため、因果関係を持つ文の多数を結果構文と認定することができる。「この統語形式を持ち X が Y に働きかけ、その結果、Y は Z に変化した」と言えればそれは結果構文の資格を満たすのである。

例えば *John drank/laughed himself silly* という文も *John* が自分(*himself*)に *drink* や *laugh* により働きかけ、その結果 *John* が *silly* になったと理解できる。つまり *oneself* は *drink* や *laugh* の作用(*force*)の *recipient* であると解釈できるので結果構文であるといえる。

この定式のバリエントも見ておこう。次の例を見ていただきたい。

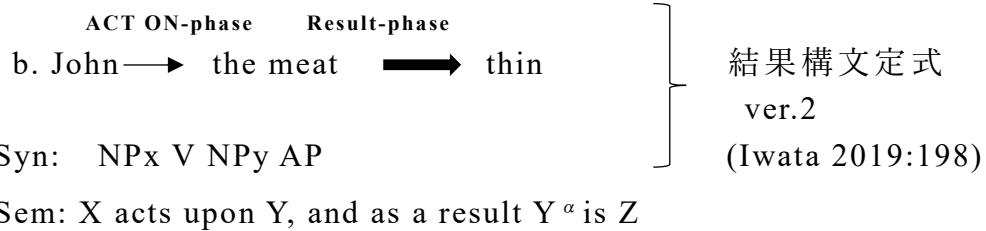
- (27) a. He froze the ice cream solid.

b. He cut the meat thin.

これらは状態変化を含む他動詞を持つ「弱い結果構文」、あるいは我々の分類では Type A と呼ばれる結果構文である。既に何度も述べ

たが、このタイプの結果構文は動詞が結果述語を含意する。(27a)では *freeze* という動詞が *solid* を含意する。(27b)の例について Washio (1997) は疑似結果構文 (spurious) であって真正の結果構文ではないとする (1章 3.1 参照)。Iwata はそれが疑似結果構文であることは認めるが同時に結果構文でもあるとする。但し、そのためには定式 ver.1 の修正が必要であると考える (26) 参照)。上記の *cut the meat thin* や *freeze the ice cream solid* では ACT-ON すると即座に結果状態が出現し、NP が示すものは ACT-ON の前後で異なる (例: Y: the meat, Y^a: sliced meat)。これを考慮し、causal chain を以下のように修正する。

- (28) a. John cut the meat thin.



(28) が示すのは動詞の意味が結果状態を含意する「弱い結果構文」タイプのものはその結果状態への変化は推移が必要な *change* ではなく即座に実現するため Result-phase という用語でそれを示している。また ACT-ON の結果生じる対象物は形状が変わってしまっているので、同じ Y で示すのではなく Y^a としている。

さらに Iwata はこのような「弱い結果構文」のケースは「結果状態付加分析」(result phrase addition analysis) でも規定することができるとする。例えば *He cut the meat thin* なら *He cut the meat* だけでも文として成立し、それに *thin* を追加しただけなので結果構文分析を経ずとも [he cut the meat] + [thin] と分析可能という。また彼は下位範疇化目的語を持つタイプも同じく、結果構文分析も結果状態付加分析も可能だという。しかし我々の Type B、例えば *John shook Lisa awake* は付加分析できないのでどの程度の範囲を Iwata が考えているのかは不明である。それでは Iwata の主張点をいくつか見ておこう。

6.3 Iwata の主な論点

6.3.1 結果述語の前置詞句と形容詞の違い

先ず結果状態の示す状態の生起の時期について二つの意見があった。Goldberg(1995)では動詞の示す出来事の終了時直ちに結果状態が起るとして次のような例を示した。

- (29) a. He ate himself sick.
b. Sam cut himself free.
c. Chris shot Pat dead. (Goldberg 1995)

一方、Rappaport Hovav and Levin (2001)は動詞の示す出来事と結果状態の出現とは常に直ちにというわけではなく時間ギャップがある場合もあるという。彼らの面白い例を下に示そう。

- (30) a. Sam sang enthusiastically during the class party. He woke up hoarse the next morning and said, "Well, I guess I've sung myself hoarse."
b. He is about to party himself out of a job.

(Rappaport Hovav and Levin, 2001)

確かにこれらの例を見ると時間的ギャップが出来事の終了と結果状態との出現の間にありそうである。(30a)は「パーティーで歌いすぎて翌日に声がかかっていた」と取れる。(30a)は「パーティーではしゃぎ過ぎて失業する」ということだから、パーティーではしゃいだことと失業との間には時間差がありそうである。しかしこれらの例について、(30a)は「声が嗄れたのはパーティー直後であったがそれに気づいたのが今朝だ」という Croft (2012)の述べた現在完了の効果によるという説明を Iwata は採用している。結局、Iwata は形容詞の結果述語の示す事態は動詞の示す出来事の終了後ただちに出現し、前置詞句表現は時間のギャップを許す傾向があるとまとめている。しかしこの分析には

抜け落ちていることが一つある。

前置詞句がその結果状態に至るのに時間が介在することを示す傾向があるのは確かに納得できる。しかしそれだけではなく、「程度」を示すこともある。例えば、*to death* は「何らかの動作の結果、時間を経過して死に至る」という解釈以外に「死ぬほど」と程度を示す場合もある。*Kenji worked himself to death*、*Kyoko scared him to death* などはその例である。この解釈を Iwata は見逃していると思われる。また結果表現が程度を示す場合があることは第 5 章で詳しく分析する。

6.3.2 enabling 型の結果構文

結果構文の判別には *force* と *recipient* の存在が重要である。しかし結果構文でも直接的な *force* が介在しないように一見思える場合もあると Iwata は述べる。(31)の一群の動詞には赤ちゃんを眠らせる *force* はなく従って *causality* が作用しないのかもしれない。

(31) She lulled/rocked/read/sang/chaned/talked/hummed her baby to sleep.

これらの例は彼の *force-recipient* アプローチには反例に成りうる。しかしこれらの動詞の表す行為には「宥め、穏やかにする効果」(soothing/calming effect)があり、その受け手(*recipient*)の結果状態への推移を妨げるバリアを取り除く働きがあるという。この例では *her baby* が受け手であり、あやされ、歌を歌ってもらうことによる「宥め、穏やかにする効果」を受け、眠りにつくことのバリアを取り除かれる解釈できる。これを *enabling causation* と呼んでいる (Iwata 2019: 322)。これは(26) 結果構文の定式 ver.1 の ACT-ON に「宥め、穏やかにする効果」を含めればよく、彼の *force-recipient* アプローチの反例にならないという彼の説に同意できると思われる。

6.3.3 目的語制約と *force transmission* に依存しない結果構文

まず次の例を見ていただきたい。

- (32) a. He bowled England to victory.
b. Gareth Rees kicked Canada to a convincing victory.
c. Philippe Rozier rode the same horse to victory.
d. We fought our wars to victory. (Iwata 2019: 394)

上の(32a, b)は目的語制約に従うもので、目的語の示す対象が勝利に至った(*to victory*)となる。(32a)は「クリケットの投球の巧みさで英国を勝利に導いた」という意味であり、(32b)はラグビーで「Rees 選手のキックがカナダを納得の勝利に導いた」という意味になり、勝利に到達したのは英国であり、またカナダである。しかし、(32c, d)では目的語の示す対象が勝利に到達したのではなく主語の指示するものである。(32c)では馬術で、「Philippe Rozier 選手は同じ馬に騎乗し勝利した」というのであって、勝利に到達したのは馬ではなく Philippe Rozier 選手である。(32d)は戦争の状況で、「我々は幾多の戦いを戦って勝利した」という意味であるから当然、勝利に至ったのは我々である。

さてこれらの構文は結果構文と言えるのだろうか。Iwata は全て結果構文であるとする。上二つの例をそのように判断することには十分納得できる。(32a, b)では動詞は目的語を下位範疇化せず、目的語に直接 *force* を行使していないように思える。しかしこの目的語に *force* を行使しないという例は、目的語を下位範疇化しない Type C では普通のことではなかったか。John drank the pub dry; The professor talked us into a stupor などの例では主動詞は目的語に *force* など行使していない。それでも結果構文である。全く同様に(32a, b)も Type C の結果構文とみてよい。しかし下二つの文はどうであろうか。目的語に *force* を行使しないのは(32a,b)と同じだが Iwata は *goal* が比喩的な時、移動表現で目的の達成を示すという。従って *to victory* は移動目標ではなく達成目標であると考え、移動表現ではなく結果構文であるとする。

本当にそうだろうか。真正の移動型構文と比較してほしい。

- (33) a. Keiko rode the subway from Nagai to Tennoji.
b. Keiko took the Hankyu from Umeda to Ishibashi.
c. Philippe Rozier rode the same horse to victory.

(33a, b)は交通手段を利用しての場所移動であり真正の移動構文である。一方、(33c)は場所移動ではなく「勝利」が達成目標であることは確かである。それでもこれらには因果関係がなく、主語が目標に到達するという共通点がある。従って、(33c)を目標が比喩的であるということだけで他の例と区別できるのだろうか。むしろ(33c)は比喩的な移動目標を持つ移動構文であり、結果構文ではないとする方がよいのではないだろうか。

もし(32c, d)のような例も結果構文とするなら、結果構文の規定は次のようになるだろう：

(34) Iwata (2019) 結果構文の規定 (Iwata 2019: 419)

- A. force-recipient 型
(i) 結果構文の定式 Ver 1、2
(ii) 「結果状態付加分析」
B. force-recipient 型ではない
(iii) 比喩的移動タイプ

もし私の理解が正しいとして、因果関係を結果構文の必要条件と認めないのなら何をもってある構文を結果構文と見做すのかが明確ではなくなる。Type C も動詞は目的語を下位範疇化しないがそれでも因果関係は感じられる。「比喩的移動タイプ」は結果構文から外すべきではなかったのだろうか。

6.4 Iwata (2019)の総括

Iwata (2019)は結果構文の広範な領域を検討対象にし、イディオム的な表現にも厳密な検証を加えている点や、またここには紹介しきれていないが maximal-end-of-scale 制約(Wechsler 2005:第1章 2.6 参照)や Croft(2012)の二つの事象のアスペクト関係を重視する2次元モデル(第1章 3.2 参照)にも傾聴すべき反論を展開している点には高い評価をするべきである。しかし彼の結果構文の定式 ver.1, ver.2 については根本的な疑問が残る。それを最後に述べることにする。もう一度、結果構文の規定の ver.1 と ver.2 を見ていただきたい。

(35) 結果構文規定

Ver.1 (Iwata 2019:48)

a. Tracy swept the floor clean.

ACT ON CHANGE

b. Tracy → floor → clean

Syn: NP_x V NP_y AP/PP_z

Sem: X acts upon Y, and as a result Y becomes Z

Ver.2 (Iwata 2019:198)

a. John cut the meat thin.

ACT ON-phase Result-phase

b. John → the meat → thin

Syn: NP_x V NP_y AP

Sem: X acts upon Y, and as a result Y^α is Z

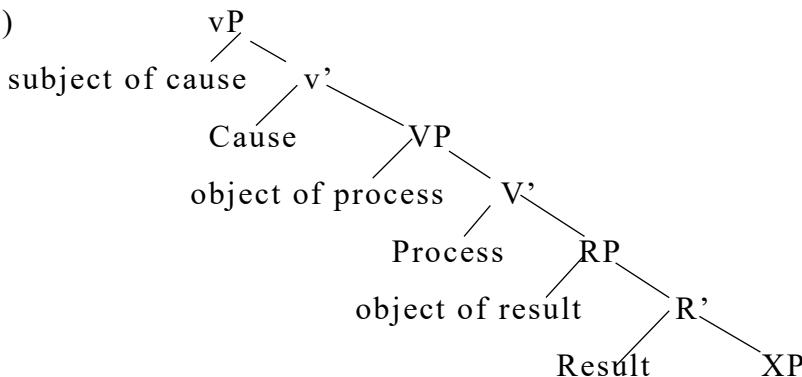
結果構文のイメージスキーマが与えられ、それに対応する統語形式、意味表示が与えられている。この意味表示で *as a result* とは論理的にどのような成立条件が対応するのかが先ず明示されていない。原因と結果で構成される事象の言語表示を考えた場合、*as a result* とは事象の説明なのか、それとも意味表示なのか。意味論なのであればその成立条件が示されて初めて意味をなす。そうでなければ意味を定義するのにその意味を使っていることになり論点先取の誤謬を犯していることになるのではないか。

X ACT-ON Y, and as a result Y CHANGE X という形式で「X は Y に働きかけ、そしてその結果 Y は Z になる」という描写は *causality* のことを間接的に述べているだけではないか、という疑問が生じてしまう。

7. 項構造の統語構造への投射理論 Folli and Ramchand (2004)

Folli と Ramchand は自然言語のプロセスを組み立てる項構造の情報を 3 つのパートに分け、全ての可能な要素を表示するためにそれを統語の vP 構造上に投射することを提案している。それは次のようなものになる：

(36)



(Folli and Ramchand 2004: 84)

上記の構造を説明する。先ず項構造を分解し、構造やアスペクトの特性を記述するのに最小限必要とする要素として 3 つのものを抽出する。動詞句がその 3 つの働きに関わる投射を持っていて、各投射が出来事全体を構成するそれぞれの要素を表示する。一番上の vP は *causation* の要素を持ち、また様々なタイプの外項を認可する。この *causation* は動詞の意味的性質の違いに関わるパラメーターである。また VP は変化やプロセスの性質を特定化し、また変化やプロセスの対象となるものを認可する。この VP 部門は（状態動詞ではない）活動動詞に必須の要素であり唯一義務的に存在が要求される。RP は出来事の結果や目的(telos)を示し、結果の対象を認可する。目的因(telos)あるいは結

果要素も動詞の意味に関わるパラメーターである。この統語構造全体は第一フェーズ統語構造(the first phase syntax)を構成する。ここで示されている構造は項構造の重要な機能を取り出し明示的に示したものである。それではそれぞれの投射の spec 位置に来る DP の意味役割を説明しよう。

- (37) (i) specifier of Causal projection (vP): *Initiator*
- (ii) specifier of Change/Process projection (VP) : *Undergoer*
- (iii) specifier of Result projection (RP): *Resultee*

一つの DP が移動により複数の spec 位置に現れても違反にはならない。この点では Theta 基準の放棄になるがこのシステムでは矛盾を生み出さない。各語彙項目の特性はこの第一フェーズ統語構造の節点 v、V、R を表示する統語素性の束として記述される。もしこの構造が必須のカテゴリー素性を持つ語彙項目の存在によって認可されない場合にはその派生は不適格になる。このことはこの文が解釈可能になるためには必要なことである。不適格な例を次に示そう。(38a)は *Resultee* は一つの XP と対応しなければならないという原則違反、(38b)については XP は *Resultee* とのみ *small clause* を構成するが *Initiator* とはできないことに違反する。

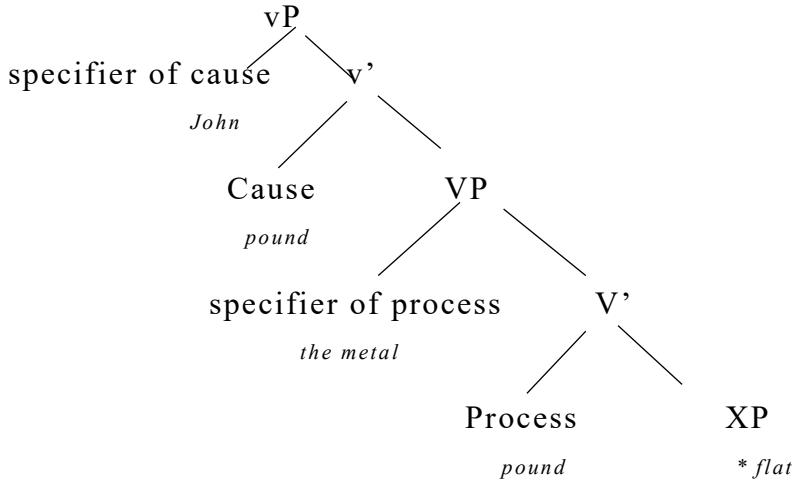
- (38) a. *John wiped the table clean shiny.
- b. *John wiped the table sweaty.

次にもう少し具体的に結果構文の構造表示をみてみよう。次の例を見てみよう。

- (39) a.*John pounded the metal flat.
- b. John broke the stick in pieces.

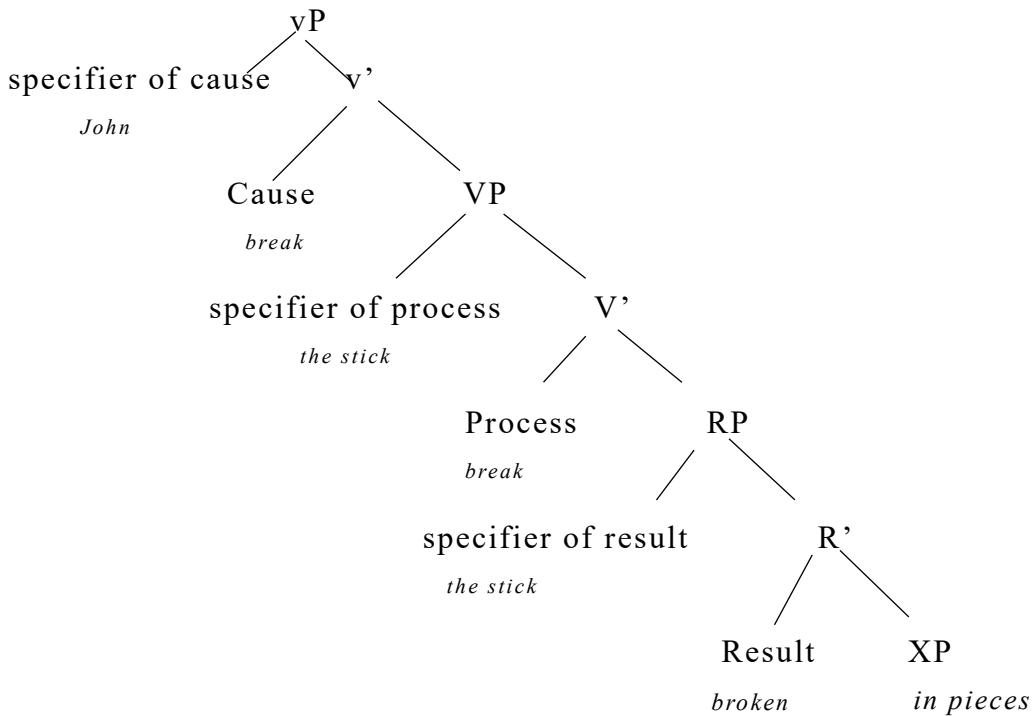
なぜ(39a)の *pound*-*flat* は非文法的で(39b)の *break*-*in pieces* は認可されるのかを統語構造上で確認してみよう。

(40) *John pounded the metal flat.



構造には RP がなく *flat* が置くべき場所がなく認可されない。*pound* というプロセス動詞は [+v, +V] という素性が付与されるが RP を示す +R がない。このため動詞によって特定される *result* がなく *specifier* 位置に DP が来ないため *flat* は描写するものがなく認可できない。

(41) John broke the stick in pieces.



(41) の *break* では $[+v, +V, +R]$ という素性が与えられそれにより構造も RP が現れる。RP 内の結果述語の *in pieces* は *the stick* を描写する。構造上の全ての素性は語彙項目と対応し認可されるので文法的である。

さてこの理論の有利な点は、上の例でも示されているように項構造を明らかに統語構造上に示すことができる点であり、これにより文法上の要請が満たされているかどうかが明確に分かることである。問題点は本当に統語上に機能情報を投射することが許されるのかという根本的問題が説明されていないことであろう。語彙が本来持っている情報が事前に統語上に配置されており、それと語彙項目の素性を照合するという方法の適正さが十分に示されていない。

8. なぜ Goldberg and Jackendoff (2004)なのか

8.1 まとめ

以上で結果構文の諸理論を、特に CAUSE をどう扱っているのかという観点に注目してみてきた。先ず CAUSE 関数を想定する見解が意

外に少なく、それ以外の方法で因果関係を説明しようとする理論が多いことに気づく。CAUSE 関数（あるいは因果関係結合詞）の存在を前提にする立場では Kratzer が述べているように、強い結果構文の CAUSE がどこから出てくるかは大きな疑問である。Kratzer はタイプシフトにより、活動動詞を、結果状態を持つ達成動詞化することで因果関係を説明しようとする。また同様に CAUSE を上位事象と下位事象の結合詞と捉える影山はその出現を「当然」と捉えている。また、CAUSE を想定しない立場では、Rothstein は二つの事象の PART-OF 関係で因果性(*causality*)を説明し、理論的に正確でありかなり成功しているように見える。しかし全ての結果構文をカバーできないように思える。Hu(2018)は全く異なる立場であり、統語構造が意味の基本情報である意味役割を人々持っているとする見解である。二つの述語の統合により動詞と形容詞が同時進行性、同調性を与えられ、そこから因果関係を示すとする。Boas の Event-Frame アプローチでは世界知識の役割を重視し、そこから事象参加者の役割を導き出し、因果関係は Goal frame の参加者情報と世界知識の統合によって説明されている。最後に見た、Iwata の *force-recipient* アプローチは結果構文の事象についてイメージスキーマを示し、それに対応する統語情報、意味情報を対にした構文論的構成により因果関係を描写しようとしている。

以上の理論は優れた着眼点や説明力も持ち、我々の結果構文現象の理解を大いに進めてくれている。しかしどの理論も全ての結果構文の例を、しかも矛盾なく完璧に説明しきれているとは言えない。特に Type C の他動詞が目的語を下位範疇化しないタイプでは多くの理論で説明に破綻がみられる。

8.2 Goldberg and Jackendoff (2004)を選択する理由

我々が理論構築の基礎に置く Goldberg and Jackendoff (2004)について既に第 1 章、2 章でもかなり詳しく述べた。もっとも我々が理論構築の基礎に置くとはいえ、彼らの理論構成をそっくりそのまま受け入れているわけではない。先ず彼らが結果構文と考えている構文

で、(i) 非因果的他動詞文で目的語制約に従わず、主語を結果述語が叙述する構文（下の(42)）や、(ii) 非因果的自動詞文で結果述語は主語を叙述するもの（下の(43)）は、我々は結果構文ではなく移動構文と判断する点で大きく異なっている。

- (42) a. Bill followed the thief into the library.
b. Bill took the train to New York.
c. Bill traveled the Taconic Parkway to New York.
- (43) a. The pond froze solid.
b. The ball rolled down the hill.
c. The trolley rumbled through the tunnel.
d. The road zigzagged down the hill.
e. He rode the horse to victory.

第1章で示した結果表現、結果構文の定義に従って我々がその名称で呼ぶ構文を識別してきた。以上の例は我々の「結果構文」の定義とは外れる。再度確認のためその定義を載せる。

(44)(=第2章(4))結果表現と結果構文の定義

- (i) 参加者Aによる動作が原因となり、それが参加者Bの状態や位置の変化である結果と結びつけられることを示す言語表現を「結果表現」とする。参加者Aと参加者Bは同一対象でもよい。
- (ii) ここで、單文で主動詞と二次述語を持つ標準的タイプだけでなく、動詞2つが複合して1つの結果的意味を示す複合動詞構文、さらに複文で2つの文が結合され一つの文が原因、もう一つの文が結果と解されるものも「結果表現」とする。
- (iii) またこの結果表現のうち、單文で構成され構文として特定の形式が特定の意味と結びついているものを「結果構文」とする。

以上の定義では「結果表現」を「結果構文」を含む大きな概念とし、

同時に「結果表現」には何らかの因果関係の関与をその要件にしている。これにより英語の結果構文と言われてきた一部のものは「因果関係」が見いだされず結果構文から除外され、また日本語の特有の因果関係を表現する構文である結果的複合動詞、 S_1 -*hodo* S_2 、 S_1 -*made* S_2 は結果表現の範囲に収めることができる。¹

Goldberg and Jackendoff (2004)は実際のところ、かなり「構文」について考え方の違う二人の研究者の合作であり、論文中にも意見の齟齬があることが率直に述べられている。例えば、結果構文の基本的定式をめぐっても微妙に食い違う。下の例は因果的他動詞下位範疇化の結果構文（我々の Type B）の具体例(45)と、その抽象化された基本構造(46)である。

(45) Syntax: Willy watered the plants flat:

Semantics: Willy CAUSE[PLANTS BECOME FLAT]

MEANS: WILLY WATER PLANTS

(46) Causative property resultative (Goldberg and Jackendoff 2004:539)

Syntax: NP₁ V NP₂ AP₃

Semantics: X₁ CAUSE [Y₂ BECOME Z₃]

MEANS: [VERBAL SUBEVENT]

上記の因果的結果構文の定式は Jackendoff の意見に沿ったものようであり、彼はこう述べている：

Goldberg would amend each of the representations in (13,14 = 39,40) to include INSTANCE as well as the MEANS relations to indicate that verbs that are lexical resultatives such as *make*, *render*, *become* are instances of the constructions as well; in fact, all overt expression is accompanied via constructions. Jackendoff prefers to treat these verbs as lexically determining their syntax via more traditional linking rules.

(p.539 脚注 7)

Jackendoff は「Goldberg なら上記の定式に手段を示す MEANS だけではなく具体的な例示を示す INSTANCE も追加するだろう」と述べる。さらに、「Goldberg は語彙的結果表現の *make* などでもその因果的意味は構文から来ていて、それを動詞 *subevent* においては手段ではなく具体的な例示と表現しなければならないと考えている。なぜなら全ての表現は構文であるというのが彼女の基本的思想なのだから」と続けている。

ところで Jackendoff は語彙の意味が文の意味を形成するという概念構造による意味論(*Conceptual Semantics*)を展開してきた。どうして「構文文法」に注意を向けるようになったのだろうか。また概念意味論(CS)と構文とはどういう位置関係にあるのだろうか。最初の問題について Jackendoff の解説を簡略化して辿ってみよう(Jackendoff 2010: 222-224)。彼は以下のような「way 構文」ではどうしても従来の彼のやり方ではうまく説明できないことに気づいた。

- (47) a. Bill belched his way out of the restaurant.
b. Joe joked his way into the meeting.
c. Babe Ruth homered his way into the hearts of America.
(48) a. Bill came out of the restaurant, belching.
b. Joe went into the meeting, joking.
c. Babe Ruth entered the hearts of America by homering.

(47)の各文は(48)の意味を伝達する。各語彙の語彙を組み立てても(48)の意味にはならない。(47)の文では動詞は元々の自動詞であり目的語を下位範疇化していない。しかも *his way* という語句が目的語に現れ、これを他の語句に置き換えては非文法的になってしまう。語の配列と意味について特異性(idiosyncrasy)があり概念構造意味論では説明できないのである。

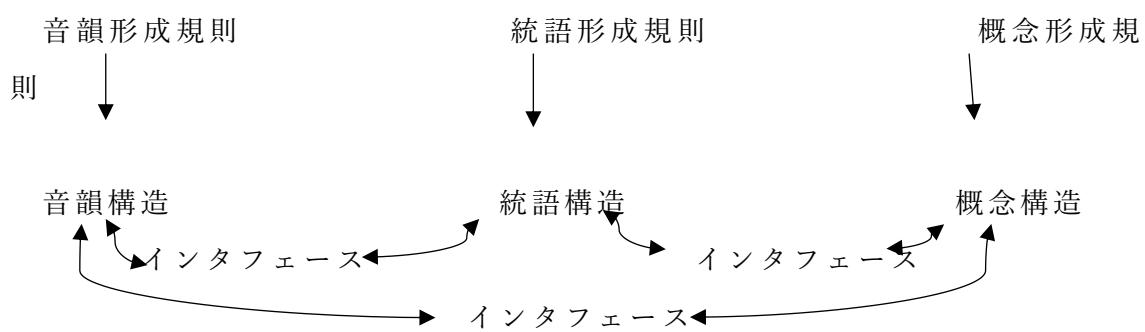
Jackendoff がこの問題に取り組んでいたと同じ頃、Goldberg は

Jackendoff が扱っていたと同じ構文について、「構文」そのものが意味を持っているとする構文文法のアプローチを提案した(Goldberg 1995)。Jackendoff もその考え方を取り入れ、Way 構文はこの形式の構文自体が固有の意味を与えるとする見解を採用するに至る。

第 2 章にも述べたが Jackendoff は Goldberg の「構文」の考えに賛意を示すものの、その思想には根本的に大きな隔たりがある。Jackendoff は Goldberg の考え方、つまり、「全ての言語単位は形式と意味のペアであり統語構造を認めない」というものを取らず、統語構造と各語の語義で組み立てのできないもの (Way 構文、Time-away 構文、二重目的語構文、let alone、結果構文など) のみを「構文」とし、構文が固有の意味を供給するという考え方を採用した。それ以外の構造は語彙と統語論で組み立てられ、意味は概念構造意味論で解釈される。

それでは Jackendoff の立場では「構文」と概念構造意味論、統語論、語彙の位置関係はどうなっているのだろうか。彼の言語観は「平行構造」(The Parallel Architecture)と呼ばれ、次のような構成になっている。

(49) The Parallel Architecture (Jackendoff 2002:125)



このモデルの特徴は音韻部門と統語部門、意味部門は独立し相互にインターフェイスによって連絡されている点である。生成文法主流派では語彙項目は統語構造に挿入され、その音韻素性と意味素性とは派生

の後の段階でそれぞれの部門で解釈される。これはある意味で「異常」な仮説である。意味も音韻も内容が不明のまま派生を経て、やっとそれぞれの解釈が与えられるのだから。

しかし Jackendoff の並列構造モデルでは意味構造は統語構造から派生するようには考えていない。少し分りにくいのであるが語彙項目はインターフェイス部門の一部であり、語彙は音韻素性、意味素性、統語素性も同時に処理されていくという設定である (Jackendoff 2002: 131)。その語彙項目に含まれるものは語、形態素、イディオム、決まり文句 (clichés)、それに構文である。構文はイディオムと同様、それ自身の音韻素性、統語素性、それに意味素性を持っていて意味解釈はその構造自体が意味解釈部門で解釈される。その他の普通の構造は統語構造で構築され概念意味論で意味が与えられる。

我々は英語の結果構文の分析に Jackendoff の「構文」の考え方と並列構造モデルを採用する。「構文」は語彙でありそれ自身が固有の構造と意味を持つ。英語の Type B と Type C の結果構文では固有の構造と意味があり因果関係 (*causality*) もその意味の一部であると考える。一方、英語の Type A、日本語の「弱い結果構文」、日本語と英語の Type B と C の意味に対応する S_1 -*hodo* S_2 、 S_1 -*made* S_2 は「結果構文」ではなく「結果表現」であり、その解釈は統語規則と語彙の意味で構成できると考える。

Goldberg and Jackendoff (2004)、Jackendoff (2002, 2010) の考え方が英語だけではなく日本語の結果表現の解釈を考慮した場合、最良の理論的基盤となる。Jackendoff と同様、語彙から供給されない因果関係の原因要素はその「文型」に存在するという立場をとるが、しかしそれは直接的な因果要素 (*direct causality*) ではなく、「程度」や「同等性」に近い概念の場合もある。これは第 5 章で詳しく論じる。

Goldberg and Jackendoff (2004) では「弱い結果構文」(例 *Bill broke the bathtub into pieces*) は「他動詞下位範疇化結果構文」(*selected transitive resultatives*) の一部とされている (ibid. 537)。しかし実際に構文の力を借りずとも語彙の意味とその統語的組み立てで構成可能

である。そのため彼らの構文の定式(46)には頼らない。構文の定式(46)は「強い結果構文」の分析にのみ援用する。

また Type A は明示的 CAUSE を持つ一方、Type B や Type C は Type A との形式の相似性を持つものの CAUSE は明示的には与えられない。そこで blending 操作により因果関係に関連する機能を得る。これは第 6 章で議論する。英語の結果構文、特に Type B と Type C の構造と意味を明示的に表現するには文法理論が必要であり、それには Jackendoff 流の考え方（もちろん Goldberg and Jackendoff 2004 での Goldberg の見解も含め）が有効だったのである。

しかし、我々は彼らのように CAUSE を構文から由来するものとして済ますのではない。CAUSE は Type A をプロトタイプとし、そこから言語変化理論の定める限界や仮説形成推論による推論の促進作用を受けた blending 操作の結果、Type B と Type C にも適用されていったというように考える。このことは第 6 章で詳述する。そしてその変化は今も続いているように思う。

この第 3 章では英語の結果構文をめぐる多数の理論のうち、代表的と思える議論を選び、その優れた着想や長所、さらに短所に至るまでを確認した。因果関係の解釈、特に *causality* が動詞由来ではない場合、それをどう扱うのかについては様々な工夫が認められた。

この 3 章の議論、また 1 章、2 章での全ての問題提起が、5 章の他言語間での結果表現の共通性と異質性の話題、6 章の英語と日本語の共時的変化の議論、それに 7 章の総括的議論に繋がってくる。しかしそこに進む前に次章では、3 章での因果関係をどう扱うのかのテーマをさらに掘り下げて理解するため、「人は *causality* そのものをどのようにみてきたのか」、「因果関係は哲学ではどのように扱われてきたのか」という根本的問題を確認しておくことにする。そこで議論は後で明らかになるように、英語の結果構文の系統分類にも大きな関わりを持つのである。

1. S_1 -*hodo* S_2 、 S_1 -*made* S_2 は結果表現の範囲に収めることができるとしているが「ほど」は程度であり、「まで」は行為の endpoint である。従って「ほど」の場合は S_2 の行為が S_1 の程度に及ぶということから S_2 が原因、 S_1 がその結果だと間接的に解釈できる。「まで」は基本的には 2 つの事象のうち、 S_2 の行為の終点が S_1 に達するということから S_2 が原因、 S_1 が結果という解釈になる。

第4章

因果関係と意味論

1. はじめに

因果関係は世界に満ち溢れている。それがなくては事象を関係づけられないために「因果関係は世界を束ねるセメントである」と哲学者の Hume は述べている。しかしその正確な意味づけ、つまりある出来事 c が別の出来事 e を生起 (CAUSE) するとは何を示しているのかという根本問題に関しては様々な理論が提唱されてきており、一つの理論に収束していないというのが現状である。むしろ、あまりに多様な因果関係論の共存（競存？）はそのまま世界の多様な因果性の在り方を反映しているのではという解釈さえ唱えられている (Hall 2004)。また結果構文で現れる因果関係も決して一様ではなく、実際に多様な因果性を反映したものと理解するべきであることも議論する。

さてなぜ因果関係理論を観察することが結果構文の理解に必要であるのかという問題に答えておかねばならない。英語の結果構文では Type A、Type B、Type C と三種に分類しその意味の表示は(1)のようである。

(1) Type A John broke the bathtub into pieces.

John ACT ON the bathtub CAUSE [the bathtub BECOME into pieces]

Type B Mary shook her husband awake.

Semantics

c-sub: Mary CAUSE [her husband BECOME awake]

MEANS: v-sub: [Mary shake her husband]

Type C John drank the pub dry.

Semantics

c-sub: John CAUSE [the pub BECOME dry]

Means: v-sub: [John drink]

英語では Type A は概念構造で意味を表示している。構文の出番はない。Type B と Type C は Goldberg and Jackendoff (2004)の構文文法を使って意味表示されている。いずれの表現でも明示的に CAUSE が出てきている。次に日本語の結果構文と Type B、C に対応する結果表現を確認しよう。

(2) (i)弱い結果構文 健司はバスタブを粉々に壊した。

Kenji ACT ON bathtub CAUSE[bathtub BECOME into pieces]

(ii)結果表現 恵子は夫が起きるまで揺すった。

Keiko shook her husband UP-TO he BECOME awake

(iii)結果表現 健司は酒場が空になるほど飲んだ。

Kenji drank TO THE DEGREE THAT the pub BECOME dry.

日本語では Type A に対応する結果構文には CAUSE が現れるが、Type B、C に意味的に対応するものは S_1 -made S_2 、 S_1 -hodo S_2 表現が使われ CAUSE は出でこない。もちろんそれでも因果関係は表現されている。

ここで意味表示の CAUSE は因果関係の演算詞とされているが、どのような事象が起これば α CAUSE β は真になるのか、それが実際どのような意味を持つのかは明示されていない。この章では因果関係理論での CAUSE の扱いからそれをどう捉えればよいのかを探る。また日本語の特殊な結果表現(*specific resultatives*)は程度の「ほど」、同等性の「まで」で表現されているが、諸理論での CAUSE の規定との比較で「程度」や「同等性」がどのように因果関係と繋がるのかも探ることにする。これが因果関係理論を観察することが結果構文の理解に必要であることの理由である。

この章では第 2 節で因果関係理論を概観する。その際、英語の結果構文での表現可能性にも当然言及するが基本は因果関係理論そのものの概説である。そして第 3 節で因果関係と言語現象、結果構文、結果表現といわれる一群の文法構造との関係を整理する。日本語と英語の結果構文では関わる因果性の種類とその程度に違いがあり、これは「世界の因果性の多様性を言語構造にどう反映させるのかが言語によって異なる」ことを示している。これはいわゆる「言語

相対性」の存在の強力な根拠になるかもしれない。第4節は議論の総括である。

2. 因果関係諸説の概観

2.1 因果関係論の俯瞰とニューロダイアグラム

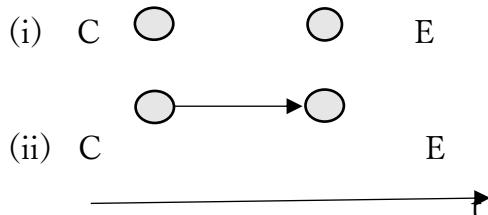
ここでは基礎知識の整理として Hume (1748) に始まる因果関係の恒常的継起性理論、Lewis らが発展させた反実仮想的理論、Hitchcock (2001) の提唱する構造的等式フレーム理論(*the structural equations framework theory*)を検討する。これらの諸理論は言語の意味現象と関係づけられることにも言及する。

ここで各論に入る前に Psillos (2009) に従い、俯瞰的見解を述べておくことにする。それは、出来事 c と e の間に *causality* があるとは出来事間に依存性 (*dependence*) があることまでを前提とする立場 (*causation as a relation of dependence*) と、2つの出来事間には必然性や力が介在し、 c が e を CAUSE するとは、結局 c が e を産出する関係にあること (*causation as a productive relation*) であるとする見解の 2 つに大別できるとするものである (Psillos 2009:132)。これによれば上記の 3 流派、恒常的継起性理論、反実仮想理論、構造的等式フレーム理論は出来事 c と e の依存性を前提にしていることでは共通していることになる。一方、因果関係を産出的関係とみる流派では、出来事 c と e の間に何らかの「力」や「継起性を起こす必然性を説明する要因の存在」を想定している。この論文では前者の流派のみ議論の対象として考察する。ここで注意が必要なことは、 c と e の依存性がそれらの産出的関係を否定するわけではなく、その逆も同様であるということである。 c と e の間の依存性が力の介在によって保障される場合も、もちろんある。因果関係の存在の見方が結果の原因に対する依存性の存在と見るか、原因と結果の間に何らかの力の介在を主要因にみるかという点の違いがあるということである。ただし言語の世界で取り上げる因果関係では力の介在を全く伴わない場合があり、依存性説の方が適切であると判断されることも多い。この点に関連して各因果関係理論に入る前に議論を明確にする道具を紹介する。

因果関係全般についてその関係する要素の相互関係や全体構成を明瞭にする道具として *causal graph* (因果関係グラフ)、あるいは *causal modelling* (因果関係モデル) といわれるものが提案されている。ここではその一つである Paul

and Hall (2013) で展開されている「ニューロンダイアグラム」を説明用の道具として使用することにする。下の図 1 が例である。

図1 ニューロンダイアグラム



円は出来事を示す。(i)では C と E とは独立した別々の出来事であることが示されている。時間は左から右に流れるとする。(ii)では C と E との間に因果的依存性がある場合である。後で詳しく見るので因果的依存性は次のように規定される(最後の(エ)は代表的因果理論の一つとして取り上げたが本文中では言及しない):

- (ア) 恒常的継起性理論では C と E の間に「常に連接関係がある」場合。

(イ) 反実仮想的因果理論では C と E の間に「反実仮想的依存性 (C が起きなければ E も起きないだろうというもの)」がある場合。

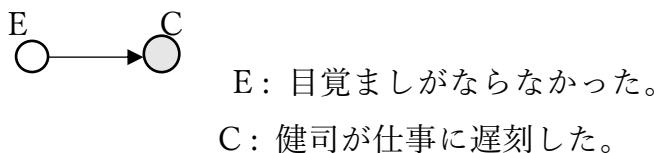
(ウ) 反実仮想的因果関係論の発展形である構造的等式フレーム理論では C と E の間に活性化因果ルート (*active causal route*) が存在する場合。

(エ) 確率論的因果関係理論では C が E の原因であるとは C の存在は E の出現確立を C の不存在の場合よりも高める場合である。¹

これら（ア）、（イ）、（ウ）、（エ）のいずれの場合でも、「E は C に因果的に依存する」と考える。この場合に C から E に→が引かれる。矢印は E が C に因果的に依存する、すなわち C が E の原因である (C *causes* E) ということを表現する。一見すると Langacker らの認知意味論での「ビリヤードモデル」と似ているが根本的に異なるのは出来事間にエネルギーの転移などのプロセスを前提にしていないことである。従って力学的運動による力の移転などは全く考えていない。あくまで C と E に因果的依存性が存在することを示している点に注意を要する。

このニューロンダイアグラムを使った見解の優位性をみるために、さらに例を検討しよう。次の状況を考えよう。「健司は目覚まし時計をセットすることを忘れ目覚まし時計は鳴らなかった。それで健司は仕事に遅刻した」。この時、健司の遅刻の原因は「目覚まし時計が鳴らなかったこと」という否定原因 (*negative causality*) である。本来起きるべきことが起きなかった事は「存在の不存在 (*absence of existence*)」ということになり、ニューロンダイアグラムでは白い円で表現される。図 2 を見てみよう。

図 2 否定原因



E と C の間には力の受け渡し等は一切関与していない。E と C の間には因果的依存性があるだけである。このように否定原因でもこの図式は明瞭に事態を捉えることが出来る。それでは各理論を詳しく見ていく。

2.2 恒常的継起性理論 (regularity theory of causation)

Hume の因果関係のとらえ方は単純で素朴なものである。「誰かが投げたボールが窓ガラスにあたりそれをバラバラに壊した」という事象を考えてみよう。事象とは一連の出来事で構成されているものとする。出来事 c はボールが窓に向かって飛んでいき、それにあたること、e は窓ガラスが割れることとする。これはその時、その場所で起こった事象であり *token* としての 2 つ出来事で構成されている。このような事象は何度も生じ、我々はそれを経験している。そこでボールが窓に向かって飛んでいくことに関して個々の出来事を包括したタイプ的出来事も想像できる。これを C で示そう。窓ガラスが割れることもタイプとしてとらえられる。それを E で示す。タイプ C と E はそれぞれ出来事 c と e の類似的出来事を包括したものである。そうすれば c は C の具体的現れであり、e は E の具体的現れということになる。人が経験から通して得られることは出来事のみである。すべての出来事はバラバラで別のものであるが、一つの

出来事が他の出来事に続いて起こる場合、それらの間にはなんらかの繋がり自体は観察できない。2つの出来事は連接しているが、それぞれは独立別個であって結びついていない。その別々な出来事の継起的、連接的事象が恒常に起こることが因果関係であるとするのがこの恒常的継起説である (Hume[1748] 2007:170, Mumford and Lill Anjum 2013: 15, Psillos 2009: 131)。この主張を定式化してみよう。

(3) Regularity View of Causation (Psillos 2009:131)

c が e の起因となる (c causes e) となるのは次の場合そしてその場合に限られる：

- (i) c が時間空間的に e に連接 (*contiguous*) している。
- (ii) e が時間的に c に先行する。
- (iii) C のタイプの全ての出来事は継起的恒常にタイプ E の出来事を伴う。

例えば、京子がテーブルを拭いてその結果、テーブルがきれいになったという事象があれば、 c_1 が「京子がテーブルを拭いた」というトークン事象であり e_1 は「テーブルはきれいになった」というトークン事象である。 c_1 と e_1 とは時間空間的に連接し、 c_1 が e_1 に先行する。ここまでが(3)の(i)(ii)の段階である。次に、この二つの個別的事象（トークン）のタイプを考えよう。

(4) (i) C: $\lambda c[c \text{ is similar to } c_1]$

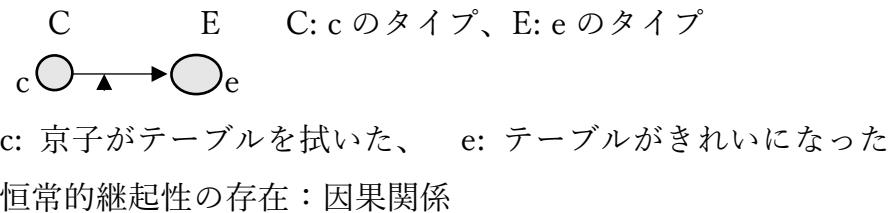
(ii) E: $\lambda e[e \text{ is similar to } e_1]$

c_1 : 京子がテーブルを拭いた、 e_1 : そのテーブルはきれいになった

C は「ある人があるものを拭く抽象的事象」を示し、E は「ある対象物がきれいになる抽象的事象」を表示する。京子のテーブルを拭く出来事と、そのテーブルがきれいになる出来事とはそれぞれのタイプに帰属するトークンである。タイプ C はタイプ E に恒常に連接されると考えてよい。つまり誰が任意の対象物を拭いても、その対象物がきれいになるということが継起的に起こると考えられるからである。このため(iii)も充足される。(i)(ii)(iii) の充足により、 c は e を起因した (c causes e)、つまり京子のテーブルを拭く動作が、テーブル

がきれいになるという状態の原因となったことになる。図3は「京子がテーブルをきれいに拭いた」状況の恒常的継起性に基づく因果関係を示す。

図3 恒常的継起性



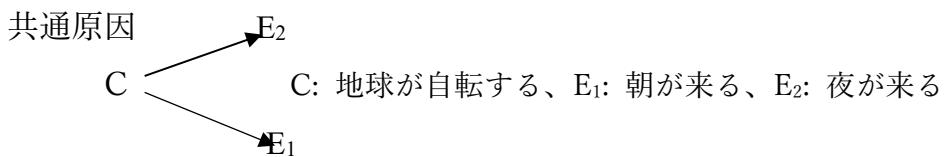
ヒュームは言うまでもなくイギリス経験論の完成者であり当然、観察可能な外世界と観念世界とを分けている。恒常的継起性理論は外世界での因果関係を記述するもので、観念世界での物事の捉え方を記述するものではない。恒常的継起性理論を観念世界の表示である言語現象に適応することは Hume の本来の考えにはない。しかし外世界の事象と言語事象は相互に写像関係にあるとしなければ言語は外世界の事態を描写できないし、外世界の事象は伝達されないことになる。故に観察された外部事象が因果関係を持つ場合に言語表現に投影されることは当然と認めてよい。日本語話者が世界での因果関係の成立(図3)を観察した場合、それを例えれば「京子はテーブルをきれいに拭いた」と結果構文を用いて表現する。ここで日本語の結果構文は「主語 + 目的語 + 結果状態(形容詞、形容動詞+NI) + 他動詞」と規定される。英語でも “*Kyoko wiped the table clean*” とまったく同様に表現できる。これらの日英表現は外世界の因果事象をそのまま写し取ったものと言える。この日英表現とも第2章すでに議論した「弱い結果構文」にあたる。この因果性の特徴は動詞が状態変化他動詞であり、動詞固有の意味に CAUSE 関数が組み込まれていることであった。

ここまででは良い。しかしこの恒常的継起性は何らかの改良をしなければそのままでは因果関係の説明理論としては不十分であることはほぼ定説となっている(Psillos 2009:132)。恒常的継起性を因果関係の説明理論とみることにはいくつかの反論がある。もっとも有名なものは Reid (1788) によって述べられたものである。Reid は「もし因果関係を2つの出来事の恒常的継起性と見做すならば夜は昼の原因となり、昼は夜の原因と言わなくてはならない」と述べた。し

かし、昼と夜の推移では眞の原因は地球の自転(C)であり、それが「昼になる(E_1)」、「夜になる(E_2)」を引き起こしているのであるから C CAUSES E_1 AND E_2 と理解すべきである。本来の原因がありそれが2つの事象を引き起こしている場合にあたる。

これを図示すると図4のようになる。 E_1 と E_2 には「見かけ上の恒常的継起性」があることに注意。

図4 共通原因



恒常的継起性理論にはもっと強力な反例がある。それは「雨男（女）現象」である。ある男（女）が来ると必ず雨になる、それが例外なく起こり、恒常的連接性があるとなれば、2つの事象に必然性がなくとも、外世界の現象として因果関係を認めなくてはならなくなる。ヒューム自身も観念世界では原因と結果の間に必然性があることを認めている。しかし外世界で観察される事象には2つの出来事が恒常的に連接するだけであり、必然性は入り込む余地がないと考えている。それならば雨男（あるいは雨女）が雨の原因であることを認めざるを得なくなる。これを避けるためには外世界でも連接関係に偶然以上のものを求めざるをえない。恒常的継起性だけでは外世界の現象の因果関係の実際を捉えることができないのである。この立場を「恒常的継起性 + α 」とする。

恒常的継起性 + α の α に何を置くかにも諸説ある。Mill はそれを自然法則と考える。自然法則とは公理と定理で完全に完結するシステムである。Millによれば雨男や雨女が雨をもたらすことは、それが常に起こることであっても、自然法則では規定できず偶発性の範囲を出ることがないということになる。「恒常的継起性 + 自然法則」が現状では最も有効な恒常的継起理論を守る方策である。この Mill の改良版恒常的継起理論を採用すれば「雨男現象」は外世界の因果関係からは外れることになる。

恒常的継起理論を「恒常的継起性 + 自然法則」とみる立場まで我々はたどり

着いた。ここまで議論を振り返ると、ある事象と別の事象との時間的連結性を因果関係とみなす解釈についてはどこかで聞いた気がする。第3章でCAUSEをどう扱うのか諸理論を探求した際、Rothstein (2003, 2004) : PART-OF説（第3章 3.2 参照）で同じようなアイデアが扱われていたことを思い出して頂きたい。

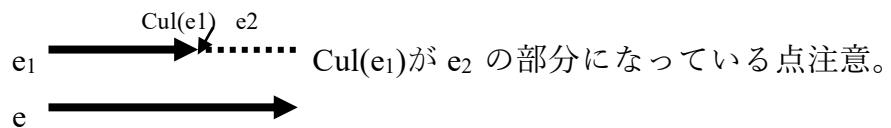
Rothstein 説では英語の Type A の結果構文 *Mary painted the house blue* の意味解釈は次のように考えられていた。

(5) *Mary painted the house blue.*

$$\exists e_1 \exists e_2 [e =^s (e_1 \cup e_2) \wedge \text{PAINT}(e_1) \wedge \text{AG}(e_1) = \text{Mary} \wedge \text{TH}(e_1) = \text{the house} \wedge \text{blue}(e_2) \wedge \text{Arg}(e_2) = \text{the house} \wedge \text{PART-OF}(\text{Cul}(e_1), e_2) \wedge \text{PAST}(e)]$$

この解釈は *Mary* が家を *paint* する出来事と家が青くなる出来事の SUM である出来事が存在し、*Mary* が家を *paint* する出来事の終了点は家が青くなる出来事と PART-OF の関係にある、ということであった。ある出来事の終了点が次の出来事の部分であればこれを *causality* と考えるのである。図示すると下のようになる。

図 5 *Mary painted the house blue.*



ここで e_1 : *Mary* が家を塗る事象、 e_2 : その家が青くなる事象、であるから $\text{Cul}(e_1)$ は *Mary* が家を塗る事象の *endpoint* にあたり、 $\text{PART-OF}(\text{Cul}(e_1), e_2)$ はその *endpoint* がその家が青くなる事象に繋がっていることを示す。これは Hume の継起性にあたる。つまり Rothstein (2003, 2004) の PART-OF 説はその背後に Hume 流の *causality* 解釈があったということになる。違いは、もちろん Hume 説は恒常性を重視していることがある。恒常的継起説では、その場一回限りのトーケン的因果事象では正当な因果関係と認めず、タイプ的恒常的因果事象でありそのトーケン的現れに *causality* を認める。これが継起性に基づく Rothstein 説の弱点

でもある。つまり *John broke the bathtub into pieces* という言語表現が恒常的継起説によりその *causality* を裏付けされるということは、外世界で *break* という行為が実行されれば必ず対象物の破損に繋がる恒常性を持つという外世界の知識を、言語的に *break* という動詞が対象物の破損状態(*broken*)を含意することにより写し取っているからである。

それではこの恒常的継起説と結果表現との関連についての考察をさらに進めてみよう。日本語の特有の結果表現(specific resultatives: SRs)である S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*made* S_2 の意味論は第5章で詳しく論じるが、恒常的継起説との関係についてはここで述べておくことにする。結論を言うとこれらの表現は基本的にタイプ的因果関係を示さず、トークン的な一回限りの因果事象を描写する。次の例を見られたい。

- (6) a. 健司はバスタブを粉々に壊した。
b. 健司は酒場が空になるほど飲んだ。
c. 健司は声がかかるまで歌った。
d. ??健司はバスタブを粉々になるほど壊した
e. ?健司はバスタブを粉々になるまで壊した

(6a)に出てくる「壊す」は語義的に対象物が破損されることを含意している。そのため「壊す」はその結果の破損が生じることの恒常性を表す。この結果構文の「因果関係」は恒常的継起性(つまりタイプ的特性)を要求するため「粉々に壊す」はその条件に適合する。(6b)の「ほど」はある行為の程度(degree)を示す。(6b)は「健司は、その時は、酒場が空になる程度まで飲んだ」というようにトークン的因果関係事象の描写に用いる。同様に(6c)の「まで」は行為の限度を示し、(6c)は「健司は、その時は、声がかかるまで歌った」という解釈になる。(6d)では「壊す」と「粉々になる」とは「壊す」が「粉々になる」を含意するため、同義反復的に聞こえ「粉々になるほど」という表現がトークン的な、その時の「壊す」行為の程度設定とは解釈しがたくなり容認度が落ちる。(6e)の「健司はバスタブを粉々になるまで壊した」の方は、「まで」が endpoint を示していてトークン的な解釈も可能で「その時は徹底的に壊した」という意

味になり(6d)よりは容認度は高い。いずれにせよ S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*made* S_2 はトーケン的因果関係の描写に使われ恒常的継起性を持つタイプ的因果性の描写からは距離があるように感じられる。

ここで新たな問題が生じる。次の事態とその言語表現を考えよう。健司が花に水をやり、花がペシャンコに倒れた状況を考える。確かに花に水をやることが、花がペシャンコになることの原因と言えそうである。しかし花に水をやる行為は恒常的に花が倒れることと連接するわけではない。水をやることと花が倒れることは自然法則に従っているとしても、それはある質量の水がある形状にある花にあたる場合に引き起こされる状況であり、恒常的であるとは言えない。つまりこの事態は因果関係にないと言わなければならない。日本語話者が外世界で「誰かが花に水をやり、花がペシャンコになった」事実を観察しても、この事態を描写する表現としては「健司が花に水をやって、花はペシャンコになった」というように2つの文を含む複文構造にするか、あるいは「健司は花がペシャンコになるほど水をやった」という S_1 -*hodo* S_2 にしなければならず、結果構文を使った「健司は花にペシャンコに水をやった」は容認されない。一方英語では“Kenji watered the flowers flat”と通常の形式の結果構文で表現できる。いったいこの日本語、英語の違いは何だろうか。これは両言語の外世界と観念世界の投射関係の違いとして説明できる（もちろん言語構造上の制約が関与するのは当然である）。

日本語では外世界での恒常的継起理論による因果関係が成立する事態のみを、観念世界においての因果関係を反映した結果構文で描写できるのに対し、英語では恒常的継起理論による因果関係の認定の場合以外の「恒常性を欠いている因果関係的事態」も結果構文で表現できるということになる。それでは英語世界の外界解釈では恒常的継起理論以外にどのような因果関係を認めるだろうか。それを次に見ることにしよう。

2.3 反実仮想的因果関係理論

Humeの因果関係理論をもう一度みてみよう。

We may define a cause to be an object followed by another, and where

all the objects, similar to the first, are followed by objects similar to the second. Or, in other words, where, if the first object had not been, the second never had existed. (Hume 1748, Section XII)

原因とは他の対象に追随される対象であり、そこでは最初の対象に似たすべての対象は第二の対象に似たものに追随されるのである。別の言い方をすればもし最初の対象が存在しなければ第二の対象は決して存在しなかつたといえるのである。

彼の主張の前半部分はすでに見た恒常的継起説について述べている。Hume の主張の後半部分は「反実仮想的因果関係説」の端緒になるものである。しかし当時は反実仮想の真理条件がはっきりしていなかったので、ほとんどの経験主義論者は因果関係を反実仮想で説明することに価値があるとは考えていないかった。しかし後年、Lewis (1973) は反実仮想の真理条件を可能世界意味論の考え方を採用することで精密化することを考案し成功した。彼の反実仮想に基づく因果関係の基本定義は次のようである。

(7) 反実仮想文 $A \square \rightarrow B$ (もし A ならば B だろう) が真になるのは：

(i) A が成立する可能世界が存在しない場合 (*vacuously true* 空の真)、

あるいは

(ii) B が成立するある A 世界が、 B が成立しないどのような A 世界よりも現実の世界に近い (似ている) 場合、そしてその場合に限られる。 (Lewis 1973)

(7i) は条件文の前件が偽の場合、条件文全体が真になるという規定に基づいている。これは空の真と考えてよい。本当に問題になるのは (7ii) の規定である。反実仮想文が真になるのは、前件が成立し、かつ後件も成立するような可能世界が、後件は成立しないが前件が成立するどのような可能世界よりも現実世界に近い (似ている) 場合である、と規定している。余談だが、Lewis は可能世界の実在を信じていた。たいていの哲学者は可能世界の実在論から当然のように距離を置いていて、最大に合致した (つまり相互に矛盾しない) 命題の集合 (*maximally consistent sets of propositions*) として可能世界を捉えるか、あるいは

は道具的に有効な実在を伴わない理論存在物(*Useful theoretical entities having no independent reality*)とみなしている。

この分析の要は、*if C were the case, E would be the case* が真と言えるのは、前件 C が成立し後件 E が成立する世界が、後件 E が成立しないが前件 C が成立する世界よりも現実に近いとし、反実仮想文の意味を可能世界の現実世界との類似性（接近性）で捉えたことがある。この考えのもとでは前件 C と後件 E が現実に成立している世界では $A \Box \rightarrow B$ は成立していることになる。

また Lewis はある出来事が別の出来事の原因になる、つまり原因 (*cause*) と結果 (*effect*) の関係にあることを「因果的に依存する」と捉え次の規定(8)を置いている。

(8) 現実に出現した 2 つの出来事 e と c がありそれを含む命題をそれぞれ C と E とする場合、出来事 e と c において e が c に因果的に依存する (e depends causally on c) のは次の反実仮想文が成立する場合に限られる。

- a. $C \Box \rightarrow E$ “if c were to occur, then e would occur”
- b. $\sim C \Box \rightarrow \sim E$ “If c hadn’t occurred, then e wouldn’t have occurred”

(Lewis 1973:563)

これは出来事 c と e 、それらを表現する命題を C と E としたとき（ここでは C と E はタイプを表示していない点に注意）、命題 C と E に (4a, b) の反実仮想文が成立した場合に出来事 e は出来事 c に「因果的に依存する」、つまり「 c は原因であり e はその結果である」ことになる。先に述べたように前件 C と後件 E が現実に成立している場合には条件(a) $C \Box \rightarrow E$ は成立しているので、結局因果依存性は短縮されて下記の(9)になる。

(9) c と e という 2 つの異なる出来事が、もう起こっている現実の出来事ならば、 e が c に因果的に依存するのは、もし c が起こらなければ e も起こらない場合に限られる。

ここで根本的な問題を検討しておこう。それはなぜ *causation* を反実仮想と結

びつけられるのかという点である。これは Lewis の説明を見てほしい。

- (10) We think of a *cause* as something that makes a *difference* and the difference it makes must be a difference from what would have happened without it. Had it been absent, its effects – some of them at least and usually all – would have been absent as well.(Lewis 1973b:161)

「原因」というものは「違ひ」を作り出す何かであると考える。原因が作り出す違ひはそれがない場合に起こったであろう事とは違うものである。もしその原因たるもののがなければ、結果のいくらか、あるいは多くはその全体も生じないのだから。

具体的な例を見てみよう (Mumford and Lill Anjum 2013:51 から)。「線路にヘラジカがいた」という事象と「列車が遅れた」という事象が連接して生じたとする。線路にヘラジカがいたことが原因で列車が遅れたという結果をもたらしたと言えるためには、まず(8a)の条件「ヘラジカが線路にいること」と「列車が遅れたこと」が真である必要がある。これは現実に起こっている場合には自動的に充足される。もう少し説明しよう。反実仮想の意味論規定(7)により $C \square \rightarrow E$ が真になるためには E が成立しかつ C が成立する可能世界が、 E が成立しないが C が成立するどのような可能世界よりも現実に近い場合である。しかし現実世界では E 、 C ともに成立しているのだから E が成立しかつ C が成立する可能世界は現実そのものということになり $C \square \rightarrow E$ は成立していることになる。

さらに(8b)の条件「もしヘラジカが線路にいなければ列車は遅れなかっただろうに」と言えることが必要である。 $\sim C \square \rightarrow \sim E$ が真になるには、これも反実仮想文の意味論規定(7)により、 $\sim E$ が成立する $\sim C$ 世界 (ヘラジカが線路に現れず列車が遅れなかつた世界) が、 E が成立する $\sim C$ 世界 (ヘラジカが現れなかつたのに列車が遅れた世界) よりも現実世界から乖離が少ない場合に限られる。そしてこれは真であると判断してよい。以上のような状況が外世界で起こった場合、反実仮想的因果関係論では、「列車が遅れたこと」は因果的に「線路にヘラジカがいたこと」に依存すると言えるのである（注意 このヘラジカ

の状況は恒常的継起性理論でも因果関係を認めることができる。トークン的事態だけではなく、ヘラジカが線路に踏み込めば、列車が立ち往生し遅れる、というタイプ的理解も当然可能だからである)。この状況を図示してみよう。

図 5

C (ヘラジカが線路にいた) E (列車が遅れた)



反実仮想的依存性

(これは恒常的継起性による因果関係も充足する)

それでは結果構文の検討に戻り 1 節で取り上げた問題となる例を考えてみよう。それは「健司が花に水をやって花はペシャンコに倒れた」という事態である。この事態は「もし健司が花に水をやらなければ花はペシャンコにならなかつた」と言えるので「花がペシャンコになった」は「健司が花にみずをやつた」ことに反実仮想的に依存する。つまり「健司が花に水をやつた」ことは「花がペシャンコになった」ことの原因(*cause*)と言えるのである。

英語では反実仮想条件的な因果関係でも“*Kenji watered the flowers flat*”と結果構文で表現できるのに対し、日本語では結果構文「健司は花にペシャンコに水をやつた」は容認されない。「健司は花に水をやって花はペシャンコになった」というように「動詞+て」を持つ複文で表現するか、あるいは「健司は花がペシャンコになるほど水をやつた」のように「 $S_1\text{-}hodo S_2$ 」という程度を示す同等構文(*equative construction*)を使う。あるいは *cause* を明示した使役的結果表現「健司は花に水をやりペシャンコにした」ともいえる。「花に水をやる」という事象と「花がペシャンコになる」という事象には恒常的連接性がない。誰かが花に水をやれば花はペシャンコに倒れるという事態が常に起こるわけではなく、この「健司の水まきのケース」にたまたま起きたことであって、タイプ的に抽象化できない。このような場合、日本語では「目的語+結果状態+動詞」という結果構文は使えず、2 つの出来事の間のトークン的因果関係を明示的に示す複文構造を使って表現する。英語の場合の Lewis 流の反実仮想分析での真理条件は下記の(11)になる。

(日本語の対応表現「花が倒れるほど水をやった」の真理条件は「ほど」と「まで」の意味論を第5章で詳説する際に示す)。

(11) *Kenji watered the flowers flat.*

c-sub: *Kenji CAUSE [the flowers BECOME flat]*

MEANS (v-sub): *John water tulip*

P: [c *Kenji's watering the flowers*] CAUSE [e *the flowers BECOME FLAT*]

$\|P\| = \text{true iff (i) } c \text{ holds and } e \text{ holds in the real world.}$

(ii) *e is causally dependent on c.*

上の内容を説明しよう。*Kenji watered the flowers flat* という Type B の英語の結果構文について構文文法に従い C-sub が CAUSE—BECOME の基本意味構造を与え動詞は手段 MEANS を示すと考える。これを一本化し一つの命題で示すと:

P: [c *Kenji's watering the flowers*] CAUSE [e *the flowers BECOME FLAT*] となる。

この命題の真理条件は(i)と(ii)が成立することである。

結局、英語では外世界で反実仮想的に捉えた因果関係が成立すれば、それを観念世界で結果構文として表現できるのに対し日本語では恒常的継起性により解釈できる外世界の因果関係のみが通常の結果構文で表現できることになる。ここまで議論を下にまとめてみる。

(12)論点整理

- (i) 外世界で「壊す」、「塗る」、「洗う」などの動作は結果状態を強く示唆する。それらの動作を含む出来事を描写する言語表現は Type A 型の「弱い結果構文」と呼ばれ、英語、日本語ともに定型の結果構文で表現できる。この結果構文に現れる CAUSE は恒常的継起性をもつタイプ的因果関係演算詞である。
- (ii) 外世界での「花がペシャンコに倒れるまで水をやった」、「目覚めるまで夫を揺すった」などの出来事において「水をやる」、「夫を揺する」という動作は結果を必ずしも示唆しない。これらの出来事の言語表現は Type B 型

結果構文と言われ、英語では *Kenji watered the flowers flat* や *Kyoko shook her husband awake* のような表現になる。反実仮想的因果理論での条件をこれらの結果構文は満たす。そこでの *causality* はトーケン的で恒常的継起性は持たない。日本語では定型の結果構文では恒常的継起性を伴わない因果関係を表現できないのでトーケン的因果関係を許容する S_1 -*hodo* S_2 や S_1 -*made* S_2 構文で表現する。

以上のように、因果関係理論を検証することは、英語の結果構文での CAUSE の性質を確認するだけではなく、日本語の弱い結果構文と、特有の結果表現の因果関係の意味論的特性をも明確にすることに貢献する。

さて理解を正確にするためにもう 2 例考えてみよう。外世界の事態として二つの事態が起こりそれらを描写する日本語と英語の表現が下に記されている。

(13)a. 健司は出血するほど咳をした

b. Kenji coughed himself into hemorrhage.

(14)a. ジョギング走者達は舗道が薄くなるほど（長年にわたって）走った。

b. The joggers ran the pavement thin.

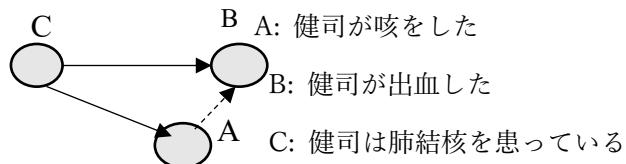
日本語では定型の結果構文の形式ではなく S_1 -*hodo* S_2 構文で表現している。何故なら日本語の結果構文は恒常的連接性が認可される場合に限定されるのでこのケースは標準的な結果構文での表現は不可能であるからだ。一方、英語はいわゆる強い結果構文として標準の結果構文の形式で表現できている。

先ず(13)の例を考えよう。「健司が咳きこみ、出血した」という事態の描写である。この事態で「健司が咳をすることが出血につながった」という解釈が可能である。なぜなら「健司が咳をする」とことと「健司が出血した」とこととの間に何らかの因果関係が存在するように感じられるからだ。この因果関係の存在はどのように捉えることが出来るのだろうか。恒常的継起性説、あるいは反実仮想的因果理論で捉えることが出来るのだろうか。

先ず、恒常的継起的因果理論では、その条件の(iii),すなわち、「C のタイプのすべての出来事は継起的恒常的にタイプ E の出来事に従われる」を充足できない。「咳をすること」と「出血する」の間に「恒常的連接性」が成立することはあり得ない。咳をすれば出血するということを常に成立するタイプ的事象とは認められないからだ。我々は「雨男」の例を考慮し、「恒常的連接性 + α 」を考え、 α に自然法則を想定している。C と E との間に自然法則としての連接性が認められねばならないと考えれば、上述の出来事間に自然法則的恒常的連接性を認めることはできない。

それでは反実仮想的因果関係理論ではどうであろうか。これは「もし C が起らなければ E が起らなかつた」と言えれば E は C に反実仮想的に依存し、したがつて C causes E と判断できるということである。ここで本当に「咳をしなければ健司は出血しなかつた」と言えるのだろうか。もちろん咳がひどくて喉の血管から出血することもあり得るだろう。しかし隠れた原因がある場合がある。その場合には反実仮想的依存性は想定できない。つまり咳をする事が出血の原因の本当の原因ではない可能性があるからだ。これを図示してみよう。

図 6 隠れた原因



矢印は因果関係の成立を示す。健司は肺結核を患っておりそれが健司を出血させたのである。これが隠れた原因である。C は A だけではなく B も引き起こした。しかし A が時間的に先行した。そのため A が B の原因のように捉えられた。これを仮に点線の矢印で示そう。

外世界では、「C が起らなければ B が起らなかつただろう」ということは事実であるが、「A が起きなければ B が起きなかつた」という事は事実ではない。しかし一応 A と B の間に連鎖を想定できれば A は B の原因であると、それが事実ではなくても、観察者の主観では捉えられるだろう。このような状況で日本語話者であれば「健司は出血するほど咳をした」と複文で表現するこ

とは可能である。しかし恒常的継起性は充足しないので単文の結果構文では表現できない。

一方、英語ではどうなるだろうか。“Kenji coughed himself into hemorrhage” というように立派に結果構文で表現できる。これはどのように解釈すればよいのだろうか。結論は、日常的な言語使用では常に厳密な事実把握に基づいてはいないということに帰着する。反実仮想的因果関係でも観察可能な 2 つの出来事、「健司が咳をする」、「健司が出血する」間の関係として因果関係を捉え本当の原因「健司が肺結核に罹患している」は背景にあり考慮の対象外である。従って「健司が咳をしなければ出血しないだろう」は真と判断され、「出血する」は「咳をする」に因果的に依存し、causality が承認され“Kenji coughed himself into hemorrhage”と結果構文で表現される。

この例の意味表示を次に示しておく。

(15) Kenji coughed himself into hemorrhage

c-sub: Kenji CAUSE [Kenji MOVE into hemorrhage]

MEANS (v-sub): Kenji coughs

P: [c Kenji's coughing] CAUSE [e Kenji MOVE into hemorrhage]

$\|P\| = \text{true iff (i) } c \text{ holds and } e \text{ holds in the real world.}$

(ii) e is causally dependent on c.

上記の CAUSE 関数は条件(i)(ii)で規定される反実仮想的因果関係関数である。

さて、(14)の「ジョギング走者達は舗道が薄くなるほど（長年にわたって）走った」を考えよう。「ジョギング走者達が舗道を長年走った」ことが「舗道が薄くなった」という結果を引き起こしたという解釈には確かに因果関係が感じられる。日本語では「ほど」という程度表現を使っているので「ジョギング走者達が舗道を走る」ことの程度と「舗道が薄くなる」ことの程度とが等しいということを中心に述べ、そこから因果関係を間接的に表現している。実際にジョギングする人たちが多く走れば舗道は薄くなることもあるがかなり誇張的で恒常性のあるタイプ的事象ではない。あくまでこの件についてのトーケン的因果関係である。

一方、英語の方は結果構文の標準形式に載せて表現しているので、原因一結果の解釈が先ずあり原因一結果の判断を伴う以上、*causality* をもたらす CAUSE 関数を想定しなければならない。この英文の因果関係の記述はどのように理解出来るのだろうか。恒常的継起性説、あるいは反実仮想的因果理論で捉えることが出来るのだろうか。

先ず、恒常的継起的因果理論では、その条件の(iii)、すなわち、「C のタイプのすべての出来事は継起的恒常的にタイプ E の出来事に従われる」を充足できない。すなわち、「ジョギング走者が舗道を走る」ことのタイプ E が「舗道が薄くなる」ことのタイプ C を恒常的に伴うとは判断できないからである。これはあくまでトークン的因果関係なのだ。

次に反実仮想的因果論ではどうであろうか。判断基準は E が C に反実仮想的に依存するか(*counterfactually dependent*)どうかである。これはもし C が起きなければ、E も起きなかっただろうことが言えればよい。これも成立しそうではない。舗道である以上、ジョギング走者以外にも多数の歩行者がその舗道を利用するのは当然で、これは背景的条件として考慮の範囲から外すわけにはいかない。もう一度(7)の反実仮想文の意味論規定を確認しよう。

(16)=(3) 反実仮想文 $A \Box \rightarrow B$ (もし A ならば B だろう) が真になるのは：

- (i) A が成立する可能世界が存在しない場合 (*vacuously true* 空の真)、
あるいは、
- (ii) B が成立するある A 世界が B が成立しないどのような A 世界よりも現実の世界に近い（似ている）場合、そしてその場合に限られる。

これより $\sim A \Box \rightarrow \sim B$ が真になるのは、(i)は無視してよいので、 $\sim B$ が成立する $\sim A$ 世界が、B が成立する $\sim A$ 世界よりも現実に近ければよいのだから、「もしジョギング走者が舗道を走らなかったなら、歩道も薄くならなかつた」という文が真になるには「ジョギング走者が舗道を走らず、歩道も薄くならない世界」が「ジョギング走者が舗道を走らず、歩道が薄くなつた世界」よりも現実に近ければよいことになる。これは成立しない。ジョギング走者達が走らなくとも多数の（おそらくはジョギング走者よりも多数の）歩行者が舗道を（もし

本当に薄くなるのなら)薄くしたであろうから。これはいわゆる *preemption* 問題の一種である。反実仮想が無効化される現象のことである。

結局、恒常的継起性説、あるいは反実仮想的因果理論でも CAUSE の存在をこの場合には想定できない。しかし英語では結果構文で表現できている以上、なんらかの見方で *causality* を確保しているに違いない。その因果関係の別の捉え方を考えてみることにする。

2.4 構造的等式フレーム理論(Structural Equations Framework: SEF)

Hitchcock (2001) は因果関係 (*causal relations*) を因果関係モデル (*causal model*) として記述できると考える。このモデルは順序対 $\langle V, E \rangle$ で構成されており、ここで V は変数 (*variables*) の集合、 E は変数間に成立する関係を表示する等式の集合である。彼の提案した規則や定式に従って説明する前に、考え方の概略を図示することにする。

図 7 SEF の基本的捉え方: John shook Lisa awake の場合

- ①John shook Lisa : $JL=1$ } JL, SL, LA は変数 0 か 1 の値を取る。
- Shaking affected Lisa: SL } 関係等式 $JL=SL, SL=LA$ 。
- Lisa was awake: LA } $JL=1$ なら $SL=1, LA=1$ になる。
- ② $JL \rightarrow SL \rightarrow LA$ If $JL=0$, then $SL=0$. If $SL=0$, then $LA=0$.
- ③ $\langle JL, SL, LA \rangle$ is active. LA counterfactually depends on JL .
- ④ $\therefore JL$ causes LA

上図で、① JL, SL, LA は状況を構成する要素であり変数と捉えられている。それは実際に起こっていれば 1, 起こらなければ 0 という値が付与される (値は 0 か 1 でなくてもその間の値でよい)。また $JL=SL$ という等式は SL の生起は JL に依存することを示す。これは $JL \rightarrow SL$ とも書ける。 $SL=LA$ も同様である。②これらの 3 変数はルート $\langle JL, SL, LA \rangle$ を構成し、 JL の値は実際に起ったので 1 が与えられている。もし起こらなかつたとすれば 0 になり、 LA も 0 になる。③変数の値を変えたとき、ルートの最終値も変わればそのルートは *active* と呼ばれる。そしてルートが *active* のときルートの最終位置の変数は最

初の変数に因果的に依存すると考えるのである。④そして、この場合に因果関係が成立する。

この考え方にも反実仮想因果関係が組み込まれているが違いはルートが *active* の時にのみ因果的依存性が生まれるとする点である（もちろんここでの例 *John shook Lisa awake* は反実仮想因果関係論でも説明可能である）。

それでは構造的等式フレーム理論の規定の詳細を、理解の容易さのために出来事 X、出来事 Z に関して *X causes Z*、つまり X が Z の生起の原因であるとはどういうことなのかという点から逆算的にみてみよう。

- (17) (i) 出来事 X、Y において X が Z の原因になるのは、適切な因果モデル $\langle V, E \rangle$ において X から Z への *active route* が存在すること、その場合に限られる。
- (ii) モデル $\langle V, E \rangle$ において *route* $\langle X, Y_1 \dots Y_n, Z \rangle$ が *active* であるのは E から構築された新等式システム E' 内で、Z が X に仮想現実的に依存する場合のみである。新しい等式システム E' とは V の全ての T についてもし T が X と Z の間に存在しても *route* $\langle X, Y_1 \dots Y_n, Z \rangle$ に所属しない場合、T についての等式を E での実際の値に T を設定する新しい等式で置き換える、そのような等式のシステムである。
- (iii) 変数 Z が変数 X に反実仮想的に依存するのは次の場合に限られる。すなわち、 $X=x$ 、 $Z=z$ が現実の値として $x' \neq x$ 、 $z' \neq z$ という x' 、 z' の値が存在し、 $X=x'$ に代えたときに $Z=z'$ になる場合。

(Hitchcock 2001: 287)

この理論が考案された背景には反実仮想因果理論には哲学上の幾つかの難問がありその解決に向けての新提案がこの理論であった。その問題の代表的なものは「先取り」(*preemption*)と呼ばれるものである。これを先ず具体的に解説することでこの理論の定式の意味が明らかになる。

- (18) 狙撃手 A、狙撃手 B がターゲット C を狙う。A が先ず撃つがもし A が（動揺して）撃てなければ B が撃つという設定になっている。A は射撃しその弾は

あたり C は死んだ。

この状況で P: *The sniper A shot the target C dead* と言えるか？

P は成立しない。反実仮想因果関係論では「もし A が撃たなければ C は死ななかつた」が真でなければならない。しかしこの文は成立しない。もし A が撃たなくても B が撃つからである。A の射撃が原因で C が死んだのであるから P は成立すべきである。これは明らかにおかしい。しかし本来の Lewis の反実仮想因果関係論では *causality* の存在を主張できない（先ほどの *joggers* の例もこの *preemption* の一例）。

(19) (18)の SEF での説明

①変数 AS: The sniper A shots at the target C

BS: The sniper B shots at the target C

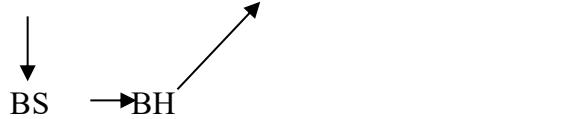
AH: A's bullet hit C

BH: B's bullet hit C

CD: C is dead

②等式 AH=AS, BH=BS, BS=AS, CD = AH \vee BH,

③関係図式 AS \rightarrow AH \rightarrow CD ここで AS=1



(20) 上記 SEF の解説

①5 つの変数が関係する。AS、BS、AH、BH、CD である。

②そしてその変数間に等式が成立する。AH=AS は A の弾が当たるのは A が撃った場合に依存することを示している。ここでは簡単に「撃てばあたる」という設定にする。つまり AS=1 なら AH=1 である。BH=BS も同様の内容。BS=AS は B が撃つ(BS=1)のは AS が 0 の場合のみであることを示す。

③CD=AH \vee BH はターゲット C が死ぬのは A の弾があたるか B の弾が当たるかのどちらかである（この場合、排他的選言になっている）。

④ $\langle AS, AH, CD \rangle$ と $\langle BS, BH, CD \rangle$ は route を構成する。

- ⑤(10i)の規定で *route* が *active* であれば因果的依存性が成立する。
- ⑥(10ii)の規定で *route* が *active* なのは *route* 内の変数間に反実仮想関係が成立するときである。
- ⑦ (10iii) の規定により、*route* 内の変数間に反実仮想が成立するのは<AS,AH,CD>においては現実には AS=1、CD=1 であるが AS=0 とした時、CD=0 になるかどうかである。またこの時、(10ii)の規定により、この *route* に所属しない変数の値は現実の値に固定しておく。確かに AS=0 とした時、CD=0 である。
route <AS,AH,CD>は *active* であり、CD は反実仮想的に AS に依存する。故に *AS causes CD* が成立する。

回りくどい方式のように思えるがこの方式の利点は、潜在的な関与可能要因（この例では *route* <BS,BH,CD>）を考慮から除外し実際に起こった2つの出来事間に反実仮想的に依存関係があるかどうかを的確に判断できるという点である。

それでは反実仮想因果関係論では説明できなかった *The joggers ran the pavement thin* の因果関係がこの方式でうまく捉えられるかみてみよう。

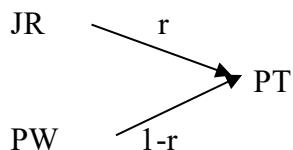
(21) *The joggers ran the pavement thin* に関する SEF

- ①変数 JR: The joggers run on the pavement
 PW: Pedestrians walk on the pavement
 PT: The pavement becomes thin

②等式 PT=JR、PT=PW ここで JR=1, PW=1, PT への寄与率 JR: r,

PW:1-r

③関係図



(22) 上記(21)SEF の解説

- ①変数は JR、PW、PT の 3 つ。

- ②等式は $PT=JR$ と $PT=PW$ である。PT には 2 つの要因が関与している。
 ジョギング走者達と歩行者たちである。PT への関係比率は r と $1-r$ とする。
- ③ JR causes PT が成立するには $\langle JR, PT \rangle$ が active でなければならない。
- ④この route が active であるのは PT が JR に反実仮想的に依存していなければなければならない。
- ⑤現実には $JR=1$ と $PW=1$ で合わせて $PT=1$ 。もし $JR=0$ でも $PT=0$ にはならず、 $PW=1$ であるから $PT=1-r$ になる。
- ⑥ PT が JR に反実仮想的に依存しているとは、(10iii)の規定から $JR=1$ から $JR=0$ に変えた時 $PT=1$ から変化すること。これは 0 でなくてもよい。
- ⑦ $PT=1-r$ になるので PT が JR に反実仮想的に (r 分だけ) 依存する。
- ⑧故に $\langle JR, PT \rangle$ が active となりその結果、 JR causes PT が成立する。

以上のこととは *The joggers ran the pavement thin* の真理条件が与えられそれが充足されることとして示すことができる。

(23)P: The joggers ran the pavement thin

(状況 M) ここで JR の PT への寄与率 r 、 PW の PT への寄与率 $1-r$ とする。

- (i) $\| P \| ^M = \text{true} \text{ iff } JR = 1 \wedge PW = 1 \wedge \text{route } \langle JR, PT \rangle \text{ が active.}$
- (ii) $JR = 0$ の時 $PT = 1-r$ になり、 $\langle JR, PT \rangle$ が active.

ここで注意が必要なことは $\langle JR, PT \rangle$ が active であるということは低い程度であっても現実に PT が生じていなければならないという点である。日本語の「ジョガー達は舗道が薄くなるほど走った」では本当に薄くなつたとは限らない。しかしこの定式では舗道は多少とも薄くなつていなければならない。この英語を SEF 理論に従って解釈するならば日本語としては「ジョガー達は舗道が薄くなるまで走った」という方が正確であるということになる。

この構造的等式フレーム理論は *Dave drank the pub dry* のような文にも真理条件を与えることができる。この文も恒常的継起的因果関係説ではその因果関係を説明できない。また反実仮想的因果では「もし *Dave* がパブで飲まなかつたらそのパブは空にならなかつただろう」という反実仮想文が完全に成立する

とは言えない(これも *preemption* の例)。この結果構文についても変数と関係図を下に示す。

(24) *Dave drank the pub dry*

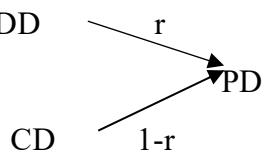
変数 DD: *Dave drank at the pub*

CD: *Other customers drank at the pub*

PD: *The pub became dry*

等式 PD=DD, PD=CD, DD の寄与率 r 、CD の寄与率 $1-r$

関係図



(24)は(21)~(23)と同様に *route* <DD, PD>が *active* になり従って DD causes PD、つまり *Dave drinking at the pub CAUSE the pub BECOME dry* が成立する。

このように直感的には因果関係の存在が感じられるのに、Lewis 流の反実仮想因果関係理論では説明できない現象—*preemption*: 2人の狙撃者、ジョギング走者、Dave の飲みすぎの例—に直感に合う形で形式的説明を与えることに成功している。これによりそれらの状況を描写する文にも真理条件を対応させることができ、従って英語の結果構文の守備範囲を拡張することに貢献している。

実際のところ、構造的等式フレーム理論は *preemption* やジョギング走者の例以外にも恒常的継起的因果理論で説明できる「弱い結果構文」(例 *John broke the vase into pieces*) や反実仮想因果関係理論で説明される「強い結果構文」(例 *Kenji shook Lisa awake; Kenji watered the flowers flat*) などにも真理条件を与えることができ、それは関係する *route* が *active* であることに集約される。簡単に変数と関係図を示そう。

(25)弱い結果構文 *John broke the vase into pieces* SFE の説明

変数 JV: John acted on the vase.

VB: The vase became broken into pieces.

等式 VB=JV

関係図 JV —————> VB

以上で、 route<JV,VB>は *active* になり、従って VB causally depends on JV、JV causes VB、つまり John acted on the vase CAUSE the vase BECOME broken into pieces が成立する。

(26)Type B *Kenji shook Lisa awake* SFE の説明

変数 KL: Kenji shook Lisa.

LA: Lisa became awake.

等式 KL=LA

関係図 KL —————> LA

以上で、 route<KL,LA>は *active* になり、従って LA causally depends on KL、KL causes LA、つまり Kenji's shaking Lisa CAUSE Lisa BECOME awake が成立する。

それでは構造的等式フレーム理論さえあれば英語の結果構文の全ての例についてその原因一結果に説明を与えられるのだろうか。残念ながらそんなことはない。一応、結果構文の定型形式を持ち、直感的に因果関係が感じられる文でも構造的等式フレーム理論でも扱えない（当然、他の理論では歯が立たない）例も存在する。

次節では英語の結果構文、日本語の結果表現、それに対応する因果関係理論の関係をまとめてみる。その後で構造的等式フレーム理論でも扱えない英語の結果構文の意味を考察する。

3. 結果表現と因果関係理論との対応

この節では前節での因果関係理論と意味論的結びつきを結果構文に焦点をあ

て整理する。先ず日本語の出来事間の因果的依存性を表現する方式を確認し、それを英語の場合と比較する。その後で、最後の難問に取り組む。構造的等式フレーム理論でも対処できない英語の結果構文の CAUSE を探すのである。

3.1 日本語と英語の因果的依存性のまとめ

日本語ではある出来事と別の出来事に因果的依存性があり、動作が結果状態を含んでいると判断される場合には「京子は花瓶を粉々に割った」、「俊江はテーブルをきれいに拭いた」のようないわゆる「弱い結果構文」で表現できる。前節の分析で見たように、この日本語の定型の結果構文は「恒常的継起性」による因果的依存性がある出来事の描写にのみ使用可能で、反実仮想的因果依存性、構造的等式フレーム理論によって因果依存性が認められてもその状況を定型の構文では表現できない。いずれにせよ、恒常的継起性による因果依存性の場合以外には複文を使う。英語では以上のいずれのケースも単文の結果構文で表現可能である。下にまとめてみる。

(27) (i) 恒常的継起性因果依存

- a. 京子は花瓶を粉々に割った。
Kyoko broke the vase into pieces.
- b. 京子はテーブルをきれいに拭いた。
Kyoko wiped the table clean.
- c. 京子は壁を緑に塗った。
Kyoko painted the wall green.

(ii) 反実仮想的因果依存

- a. 健司は花がペシャンコになるほど水をやった。
Kenji watered the flowers flat.
- b. 京子は健司が目を覚ますまで揺すった。
Kyoko shook Kenji wake.
- c. 京子は健司が気絶するほど殴った。
Kyoko knocked Kenji senseless.
- d. 健司は出血するほど咳いた。

Kenji coughed himself into hemorrhage.

e. 我々は声がかかるほど叫んだ。

We yelled ourselves hoarse.

f. 先生の話は我々が呆然とするほど退屈だった。

The professor talked us into a stupor.

(iii)active route 依存性 (構造的等式フレーム理論: SEF)

a. ジョギング走者達は舗道が薄くなるまで走った。

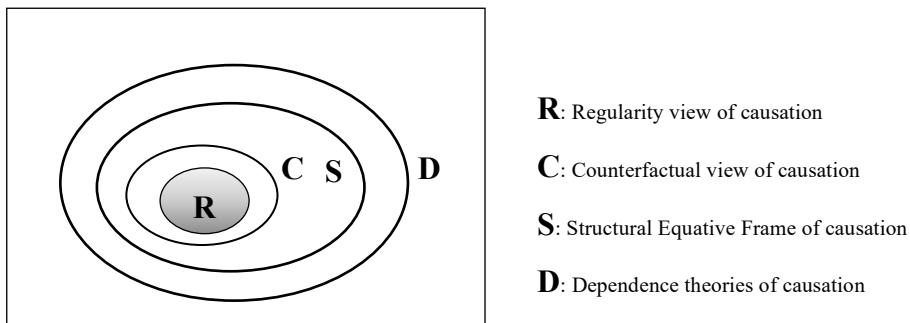
The joggers ran the pavement thin.

b. デイヴは酒場が空になるまで飲んだ。

Dave drank the pub dry.

以上の例をよく観察すると、恒常的継起性による因果依存の例は英語の Type A や日本語の「弱い結果構文」の *causality* を説明できる。また恒常的継起性で説明できる結果構文の因果関係は反実仮想による因果依存性も併せ持つようと思われる。例えば、京子がテーブルを拭かなければテーブルはきれいにならなかっただろうし、壁に塗る作業をしなければ、壁が緑になることはなかっただろう。つまり恒常的継起性による因果関係が成立すれば必ず反実仮想的因果関係も成立するのであるから、前者は後者を論理含意(*entail*)すると考えられる。つまり意味関係でいえば、恒常的継起性に基づく因果関係の方が反実仮想的因果関係よりも強いことになる。また反実仮想的因果関係は(Type A 以外に)Type B の全ての因果関係 ((25 ii a-d))、それに一部の Type C の因果関係 ((25ii e-f)) に関する *causality* も説明可能である。反実仮想的因果関係が成立すれば、必ず当該の *route* は *active* になるのだから、構造的等式フレーム理論による因果関係が成立することになる。また反実仮想的因果関係による *causality* は Type C の例を説明できる。以上の関係を図示すると次のようになる。

図 7 因果関係空間での因果関係論の位置



中核に来る R は恒常的継起性に基づく因果関係の捉え方であり、その外には反実仮想的因果関係 C が来る。それに少し離れて構造的等式フレーム理論による因果関係 S が配置される。これらは全て因果関係を依存性と捉えているので D カテゴリーに包摂される。その他の空間は因果関係を依存性とみる D カテゴリー以外の、本論では対象にしなかった「産出関係としての因果関係論」(*causation as a productive relation*)と一括して理解できる因果関係の捉え方に対応する。

確認しよう。我々が考察の対象とした 3 つの因果関係理論、恒常的継起性理論、反実仮想理論、構造的等式フレーム理論では全て出来事 c と e の間に *causality* があるとは出来事間に依存性 (*dependence*) があることを前提とする立場 (*causation as a relation of dependence*) であった。つまり *e causally depends on c* が *c causes e* と理解する立場であり、依存性について、恒常的継起性、反実仮想性、*active route* 性から判定する立場である。

それとは別の流れでは、2 つの出来事間には必然性や力が介在し、c が e を CAUSE するとは、結局 c が e を産出する関係にあること (*causation as a productive relation*) であるとする見解がある。これら二つの理論系が因果関係論の意味論を構成する (Psillos 2009:132)。後者は Iwata の force-recipient 説や Croft の force dynamic 流の解釈に近いと思われる。

日本語の定型の結果構文はこの因果関係空間の内、恒常的継起性にその *causality* の説明を置くものであり、その場のみのトーケン的因果関係の表れでは認可されず、タイプ的恒常性をも要求するものであった（この意味で恒常的継起性は強い因果関係であり、それに意味的基盤をおく結果構文を「弱い結果構文」と呼ぶのは意味論的には矛盾している）。英語では Type A は日本語と同

様、恒常的継起性にその基礎を置くものの、Type B や Type C は反実仮想性にその因果関係の説明の基盤を置くものや、さらに因果関係を広範囲に適用する *active route* 説で説明されるものを含む。英語の結果構文、日本語の結果表現（「弱い結果構文」も含む）と *causality* の対応をまとめてみよう。

表 1 結果構文、結果表現と *causality* の対応表

因果理論	英語の結果構文の例	日本語の結果表現とその例
恒常的継起説	Type A 弱い結果構文 John broke the vase into pieces.	弱い結果構文 健司は花瓶を粉々に壊した
反実仮想説	強い結果構文 Type B: Lisa shook her husband awake. Type C: We yelled ourselves hoarse	causality 関与せず リサは夫を目覚めるまで揺すった。 我々は声が嗄れるほど叫んだ。
SEF 理論	強い結果構文 Type C: The joggers ran the pavement thin.	causality 関与せず ジョッガーは舗道が薄くなるほど走った。
?	強い結果構文 Type C : Pam swept the broom to pieces.	causality 関与せず 春子は箒がバラバラになるほど掃いた。

日本語の特有の結果表現 S_1 -made S_2 、 S_1 -hodo S_2 は、恒常的継起性のある因果事象の描写には適用されにくく、その場限りのトーケン的因果関係の描写に特化している。その意味特性から英語の Type B や Type C の伝達内容に対応する表現である。

恒常的継起性に基づく *causality* が一番強く、次いで反実仮想に根拠を置く *causality* がそれに次ぎ、説明範囲が一番広いが *causality* として一番弱いものが構造的等式フレームによる *route* の *active* 性に根拠を持つものである。後の章でみる内容を少し先取りして述べると、英語の結果構文はその端緒こそ動詞に根拠を持つ明確な *causality* を基盤にしたものであったが、時間の経過とともに *causality* の関与を薄めながらも同一の固定した形式で原因一結果の関係を表現してきた。しかし、日本語やルーマニア語（ラテン系言語一般）では *causality* の明確なものは定型の「結果構文」で表現し、*causality* の薄い原因一結果関係

はそれに代わる「程度」(degree)や「限度」(endpoint)を示す「結果表現」で表現してきたのである。

3.2 結果構文の統語論

ここで日英の結果表現を少し統語論的に考察しよう。日本語と英語との比較においてよく言われることは、日本語は動詞フレーム言語、英語はサテライトフレーム言語というものである。先ず基本のパターンの確認から始めよう。

- (28) (a) 健司はベッドから床に転がり出た。
(b) John rolled out of his bed onto the floor.

経路と移動の様態で構成される移動動詞の場合、日本語では移動の経路を動詞そのもので示し（転がり出た）、様態は補助的に示す（転がり出た）。英語では様態を主動詞が示し（rolled）、移動経路は前置詞句で示される（*out of his bed onto the floor*）というパターンの区別が日英語で存在する。

この考え方を結果構文の分析にもあてはめてみよう。日本語と英語の短文で表現する「弱い結果構文」は下の例(29)で見るよう語句の配置こそ鏡像的になるが基本的に同一構造である。上記の「図7 因果関係空間での因果関係論の位置」でも見た通り、恒常的継起性因果関係、つまり強い因果関係を表現するには日英ともシンプルな他動詞型の結果構文を採用していることになる。このような構造を持つ結果構文を Wechsler (2005)では「Control型結果構文」と呼んでいるのは第1章(2.6)でみた通りである。

- (29) a. 京子はテーブルをきれいに拭いた。
b. Kyoko wiped the table clean.

結果状態を到達点とし動詞はその到達点に至る様態を含むので、構文全体としては英語表現(29b)は完全なサテライトフレーム型、日本語(29a)「きれいに拭いた」でもサテライトフレーム近似型になっている。しかしこの因果関係の中核から離れると様子が変わってくる。次の例を考えてみよう。

- (30)a. 京子は花に水をやつてペシャンコにした。
 b. 京子は花がペシャンコになるほど水をやつた。
 c. Carol watered the flowers flat.

この恒常的継起性では捉えられず、反実仮想的因果関係を表現する場合、日本語では複文で表現する。この時、(30a)では時間的順序を規定する「て」を使い、因果性につきものの原因の先行性を表示している。あるいは S_1 -*hodo* S_2 を使い、程度表現で因果関係を示している。 S_1 -*hodo* S_2 の場合、 S_2 の行為が S_1 ほどになったという意味であり、 S_1 が結果状態の解釈を受ける。一方英語では他動詞型の結果構文の形式に固執している。英語では最後尾にくる結果状態は到達点の解釈が可能であるから二つの出来事の時間順序を明示する必要がない。日本語では何らかの手段で時間的前後関係を示す必要がある。これは、英語は基本的にサテライトフレーム型言語であることに起因する。さらに中核から離れた場合の例である(31)をみてみよう。

- (31)a. 健司は出血するほど咳いた。
 b. Kenji coughed himself into hemorrhage.

日本語では「出血するほど」は程度を示し、それが到達点であることを明示している。その帰着点に至る様態「咳く」が主動詞になっている。一方、英語では他動詞型結果構文への固執がさらに顕著になり、自動詞 *cough* に見かけ上の目的語 *himself* を置き、至りつく経路の終点である結果状態は最後尾に前置詞句 *into hemorrhage* で表現している。Wechsler (2005)はこのような下位範疇化しない要素を持つ英語の結果構文を ECM 型と呼んで、先の Control 型と区別しているのは周知の事実である（第 1 章 2.6）。

結局、英語でも因果関係において中核から周辺にいたる状況を表現する場合に恒常的継起性因果関係の場合には Control 型で表現し、周辺的因果関係である場合にはかなり変則的な ECM 型結果構文になっている。

以上のこととは、英語のサテライトフレーム型言語であること、つまり他動詞

型結果構文への固執性が関与していると言ってもよいだろう。

3.3 最後の難問たち

3.3.1 因果関係ではない（？）ケース

最後に因果関係を広範囲に捉えることのできる SEF 理論 (*active route* 説) でも完全には *causality* を捉えられない英語の結果構文の例を考えてみよう。

(32)a. Jackie painted the brush to pieces.

b. Pam swept the broom to pieces. ² (Boas 2003: 258)

(33)a. ジャッキーはブラシがバラバラなるほど絵を描いた。

b. パムは箒がバラバラになるほど掃いた。

(32)の英語の結果構文に(33)の日本語の結果表現 S_1 -*hodo* S_2 が対応している。

これらの英語の例は Boas(2005)で第 3 機能の結果構文に分類されていたものである (第 3 章 5.3 参照)。上記の日本語の対応例が示すように、(32)の結果構文も「結果」を示すとは言えず、むしろ主動詞の程度の修飾要素として結果表現が使われていると思われる (その意味では日本語の結果表現の方が單刀直入に結果状態語句は結果の記述よりも動作の描写に焦点があることを示している)。

なぜ(32)の結果構文の例は構造的等式フレーム論(SEF)でも *causality* の存在を確保できないのだろうか。反実仮想理論の延長線上にある SEF 理論では二つの事象が実際に起きていることが前提である (もっとも箒やブラシが完全にバラバラになっていなくてもよいが)。しかし(32)が「ブラシがバラバラになるほど」、「箒がバラバラになるほど」という表現で、実際には全くそのような事象が起きていないともかかわらず、主語の動作の程度を強い表現で修飾しているだけであれば原因と結果の間に *route* を構築できず、従って *active route* が成立せず因果関係を見出すことができなくなる。

ここで振り返って考えてみると、今まで Type C の結果構文は反実仮想的因果関係、あるいは構造的等式フレーム論(SEF)での *causality* の理解をベースにしてその因果関係を考えてきた。つまり「結果構文」として扱ってきた。しかし上記の「ブラシがバラバラになるほど」、「箒がバラバラになるほど」という表

現が程度であれば、結果構文としてではなく程度の同等性を示す「同等構文」(*equative construction*)と考えるべきかもしれない。また *Dave drank the pub dry* と上記の(32)の文、*Jackie painted the brush to pieces* との間にはそれほどの差があるのだろうか。どちらも「程度」の修飾の機能を持ち、「結果状態の描写」の機能は薄まっているのではないだろうか。どこで「結果構文」と「同等構文」との線を引けるのだろうか。この問題は 5 章で改めて議論する。

3.3.2 「過去」ではない結果構文

普通、結果構文は“*John shook his wife awake*”のように過去形で示される。ある出来事 c を e の原因と呼ぶとき、すでに e が生じたことは前提とされているからである。この例の場合には反実仮想的因果理論でその因果関係が示される。その反実仮想因果論での依存性の定義 (Lewis 1973) をもう一度思い出してみよう。

(34)=(8) 現実に出現した 2 つの出来事 e と c がありそれを含む命題をそれぞれ C と E とする場合、出来事 e と c において e が c に因果的に依存する (e depends causally on c) のは次の反実仮想文が成立する場合に限られる。

- a. $C \square \rightarrow E$ “if c were to occur, then e would occur”
- b. $\sim C \square \rightarrow \sim E$ “If c hadn't occurred, then e wouldn't have occurred”

以上は既に見た反実仮想因果関係説での依存性の定義である。ここで問題になるのは下線を引いた部分、「 C と E が実際に起こっている」ということが前提になっていることである。さらに反実仮想文の意味規定は次のように規定された。

(35)=(3) 反実仮想文 $A \square \rightarrow B$ (もし A ならば B だろう) が真になるのは：

- (i) A が成立する可能世界が存在しない場合 (*vacuously true* 空の真)、
あるいは、
- (ii) B が成立するある A 世界が、 B が成立しないどのような A 世界よりも現実の世界に近い (似ている) 場合そしてその場合に限られる。

上記のように反実仮想文の意味規定には「現実世界に近い（似ている）」という条件が含まれている。

結局、この反実仮想因果関係説だけではなく恒常的継起説、構造的等式フレーム理論も「現実に起こった c と e 」についての理論である。過去に起こった事実を描写する結果構文にはこれらの因果関係説が適用可能であり、そこからその文の真理条件が導き出される。真理条件とはある文が真である場合、世界がそのようになっている条件であることを思い出してほしい。ところが言語は現実に起こったことばかりを描写するわけではない。次の結果構文の意味を考えてほしい。

- (36) a. Kenji usually shakes his wife awake.
b. Mothers lull their crying babies to/into sleep.

(36a)は現在形で記述され Kenji の習性を示している。この場合、その出来事自体は現実には起きていない。*Kenji's shaking his wife* を c 、*his wife becoming awake* を e とした時、この文の c も e も過去の出来事を指示していない。現実に起きていないのだから、 $\sim c$ を考えることができない。また $\sim c \square \rightarrow \sim e$ が真になるのは(35)の規定より「 $\sim e$ が成立する $\sim c$ 世界 (Kenji が妻を揺らさず妻が目覚めない世界)」が「 e が成立する $\sim c$ 世界 (Kenji が妻を揺らさず妻が目覚めます世界)」よりも現実世界から乖離が少ない場合に限られることになるが、現状では実際起きていない事象では現実世界との比較が不可能である。

この解決には現在時制の意味論解釈が必要であり、例えば Brisard(2002)の提唱する「現在時制の認識様態としての理解」(*epistemic approach*) などが候補として考えられる。この場合、現在形は現実とは別の「第2現実」を作り、その仮想現実から見た可能世界の集合を想定し、その第2現実では e も c も実現していて、そこで $\sim c \square \rightarrow \sim e$ の解釈を行うことになる。これ以上の考察は本論文の範囲ではないが、現状の規定ではこのような単純な結果構文についても形式的意味を与えられることになる。

さらに(36b)は総称結果構文であり、一つの個別の出来事について語る「単称

因果」ではなく、一般的な起こりうる出来事を語る「一般因果」である。³ Kutach(2014)が言うように単称因果から一般因果を導き出す規則は今のところ存在しない。今まで述べてきた因果関係理論は全て単称因果に関するものであって、このような一般因果を扱う場面には全く無力である。総称文の意味論を組み込んだ結果構文の形式的意味を考案しなければならないがこれは著者の手に余る。恐らくは確率的因果関係説がその第一歩に成り得るかもしれないという予測だけが可能である。結局、「結果構文の意味論」は完成には程遠いと言わねばならない。

4. まとめ

この章では 2 つの出来事間に依存性があることを因果関係と見做す理論 (*causation as a relation of dependence*) の代表として恒常的継起性因果関係説、反実仮想的因果関係説、構造的等式フレーム論を確認した。またそれが結果表現の因果性の説明にどうかかわるのかを中心に検討した。

意味論は人の観念世界を表現する言語を意味の点から構成する部門である。人をとりまく世界では様々な現象が起こる。出来事と出来事に因果関係が存在する場合、どのような事象が起こっていればそれを因果関係の成立と見做すのかは存在論の領域である。因果関係の存在論的理解（外世界の理解）が意味論的な因果関係の解釈（観念世界の理解）の背後にあるのは当然であるが今までこのような観点からは全く議論されてこなかった。この章での議論に独自性、があるとすればこの問題を初めて検討したことになるだろう。

本章の結論として、日本語の結果構文は恒常的継起性依存による因果関係のみを表現する言語手段になっていること、英語は恒常的継起性以外の反実仮想的依存性、構造的等式フレーム論に基づく因果関係をも表現できる手段となっているということが明らかになったことである。このことは、認識の点では日本語話者も英語話者も、同じような知覚経験には同じような観念を生じたとしても、言語手段が異なるので表現方法の違いとなって表出されると考えられる。日本語話者も反実仮想的依存性、構造的等式フレーム論の因果依存性に基づく因果関係を当然認識できるが、それを單文の結果構文には投射できず、複文を使った表現法をとるということである。言語圏で思考が同一であったとしても

言語表現がたまたま異なるとするのである。これが普通の見方であろう。

しかし、ここで言語の違いを思考へと逆に投射してみよう。英語話者では Control 型、ECM 型と統語構造上は異なった形態をとるもの、他動詞型構造 (self を含む疑似他動詞型構造を含む) で因果関係の諸事象を一括的に表現できるということを考えてみれば、日本語話者では正当な因果関係と捉えられていない事象をも、英語話者には因果関係的に理解している証拠とも解釈できる。極端に言えば、日本語話者には正当な因果関係に思えない事象でも、英語話者ならば因果性を認めてしまうということなのかもしれない。これはつまり言語相対性の一つの証拠なのかもしれないということである。この点は非常に興味深いがさらに議論を深めなければならないと思う。

ここで 5 章への持ち越しになった問題は Type C で結果状態が実現していない場合の意味論は CAUSE 関数の適用範囲なのかどうか、また日本語の結果表現である S_1 -*hodo* S_2 の解釈が曖昧であることを説明しなければならないことである。それではこれらの問題も念頭に置いて第 5 章に進むことにしよう。

本章は濱本(2018)をもとに、それを改訂、加筆したものである。

1. 確率論的因果関係説は実際に一番多用されている因果関係説である。

例えば、ある新薬の投与(C)が症状の改善(E)に有用であるかどうか、C が E の原因となりうるかは次の確率を統計的に計算すればよい。

$P(E|C,B) > P(E|\sim C,B)$ B: E, C 以外の全ての共通条件

しかしこれは集団での確率を問うもので、単称因果には適用できない。

2. a. Jackie painted the brush to pieces.

 b. Pam swept the broom to pieces.

これらの 2 つの英文を著者の勤務先の大学で学生たち 25 名 (法学部 2 年生) に意味をたずねたところ、(a)の文は 7 名のみが正しい解釈をした。(b)の文の方は正答数が多く、25 名中 17 名が正しい解釈を行った。(a)の方が状況を想像し難いことがその差の原因であろう。

3. 「一般因果」は「総称因果」ともいわれる。「単称因果」と「総称因果」の関係は「ト

ークン因果」と「タイプ因果」との関係に近い。Kutach(2014)によれば違いは存在していて、一般因果は観察可能な個別的な単称因果が起こってそこから因果的規則性が導かれ一般因果になる。タイプ因果は仮想的な存在についても語ることができ「ユニコーンが歩けば蹄の跡が残る」というように表現できる。この場合、トークンは全く存在しない。

本文で例にあげた“*The joggers ran the pavement thin*”は「定的なジョギング集団が実際ある期間舗道を走った、その結果舗道が薄くなった」という意味なので単称因果と理解したが総称文“*Joggers run the pavement thin*”であれば総称因果になり Hitchcock 理論でも扱えなくなる（実際起こったことではないので確率論的因果関係論で扱うことになるだろう）。

第 5 章

同等関係としてみた日本語の結果表現 —ルーマニア語、イタリア語との比較—

1.はじめに

第 1 章から 4 章までが本論の基本部分であり、後に続く本章第 5 章以下がその基本の上に構築される新しい考え方の体系をなす。新しい提案や議論におもむく前に今まで議論してきた内容を整理し、基盤的知識をもう一度確認しておきたい。

第 1 章では結果構文に関わる様々な問題を確認した。Jespersen の結果構文の定義から始まり *depictive* と *resultative* の区別、直接目的語制約、結果述語のさらなる特定化制約やアスペクト制約、結果構文の 2 分類に関する諸理論、達成動詞の進行形のパラドックスと慣性世界意味論など誠に多くの問題が結果構文には関わることを確認した。

第 2 章の中心テーマの一つは「構文」とは何かの議論を土台にして「結果構文」と「結果表現」の定義(1)を確定することであった。

(1) 結果表現と結果構文の定義

- (i) 参加者 A による動作が原因となり、それが参加者 B の状態や位置の変化である結果と結びつけられることを示す言語表現を「結果表現」とする。参加者 A と参加者 B は同一対象でもよい。
- (ii) ここで、單文で主動詞と二次述語を持つ標準的タイプだけでなく、動詞 2 つが複合して 1 つの結果的意味を示す複合動詞構文、さらに複文で 2 つの文が結合され一つの文が原因、もう一つの文が結果と解されるものも「結果表現」とする。
- (iii) またこの結果表現のうち、單文で構成され構文として特定の形式が特定の意味と結びついているものを「結果構文」とする。

「構文」とは固有の構造と固有の意味とを備えた言語構造のことであり原因と結果を表現する構文として形成されるものを「結果構文」とするという考え方を我々は採用する。この定義に基づき、結果表現（結果構文を含む）の系統分類を行った。そこでの結論は、第1章でも出てきたことだが大きく二つの基本的な類別の存在を認めている。「弱い結果構文」と「強い結果構文」である。「強い結果構文」はさらに他動詞が目的語を下位範疇化するタイプと、動詞が目的語を下位範疇化しないタイプとに分けられることもその意味論的振る舞いの違いから明らかである。下に再掲する。

(2) 英語の結果構文のタイプ

Type A: 弱い結果構文

Type B: 強い結果構文のうち目的語を下位範疇化するもの

Type C: 強い結果構文のうち目的語を下位範疇化しないもの

次に日本語の結果表現の系統的分類に探求は進んだ。そこでの結論は、英語のType Aには日本語の「弱い結果構文」がほぼ完璧に対応するがType BとCに対応する「結果構文」は日本語には存在しないというものであり、これは通説の通りである。我々はこれを受け入れる。しかし日本語には独自の「結果表現」があり、これは「結果表現の定義」に認可されるものである。これらの日本語独自の結果表現(*specific resultative expressions: SRs*)には「結果複合動詞」、 S_1 -*made* S_2 構文、 S_1 -*hodo* S_2 構文である。

英語の「強い結果構文」と日本語特有の結果表現(SRs)との対応関係についてType C結果構文は明らかに S_1 -*hodo* S_2 構文に意味的、機能的に対応している。これらは結果状態が不完全(*incomplete resulting state*)である傾向を共有する。Type Bは幾らかの複合動詞と S_1 -*made* S_2 構文に機能的、意味的に対応している。これらは結果状態が完全(*complete resulting state*)である傾向を共有する。日本語の「酒場が空になるまで飲んだ」であれば「空になった」のである。

日本語特有の結果表現 SRs は結果述語の二つの性質、つまりそれが未完(*incomplete*)であるか、完全(*complete*)であるかということによって大きく二

つに分けることができる。この対応関係も今後の議論に大きくかかわるので再掲しておく。

表1 日本語の結果表現の三分類 (RS: resultative state)

区分	構文	例
弱い結果構文	(i)NP NP RP V	a. 恵子は棒を U に曲げた。 'Keiko bent the iron bar into a U.'
特有の結果表現 Complete RS	(ii)複合動詞 (iii)S ₁ - made S ₂	b. メアリーはジョンを揺すり起こした。 'Mary shook John awake.' c. メアリーはジョンを目覚めるまで揺すった。 'Mary shook John awake.'
特有の結果表現 Incomplete RS	(iv)S ₁ - hodo S ₂	d. ディヴは酒場がからになるほど飲んだ。 'Dave drank the pub dry.' e. 恵子は箒がバラバラになるほど掃いた。'Keiko swept the broom to pieces.'

英語の結果構文と日本語の結果表現の対応関係を明確にするために下に再度留意点を列挙しよう (i)~(iv)は表1に記載の構文)。

(3) 英語の結果構文と日本語の結果表現の対応関係の留意点

- (a) 日本語の「弱い結果構文」はほぼ完全に英語の Type A に対応する。
- (b) (ii)の複合動詞と(iii)の S₁-made S₂ 構文は結果状態が成立しているという条件で共通し、Type B と対応する。英語の Type B は CAUSE を持ち、この関数は結果の成立を含意する。日本語の複合動詞も V2 が CAUSE を持ち、同様に結果の成立を含意する。
- (c) S₁-made S₂ 構文は CAUSE による因果関係ではなく、2つの出来事が「まで」で関連付けられている。それにより S₁-made が完結点を示し、そこまで S₂ の示す出来事が到達するという意味から、S₂ の示す出来事が原因となり、S₁ の示す結果状態になったという解釈が生まれる。これも結果状態の完結が含意され Type B に関連付けされる。
- (d) S₁-hodo S₂ 構文では2つのあるスケール上での程度が比較される。S₁-hodo が基準の程度を示し、S₂ の程度がその程度に到達、あるいは超えたことを表現する。ここから S₂ の示す出来事が原因となり、S₁ の示す結果状態になったという解釈が生まれる。

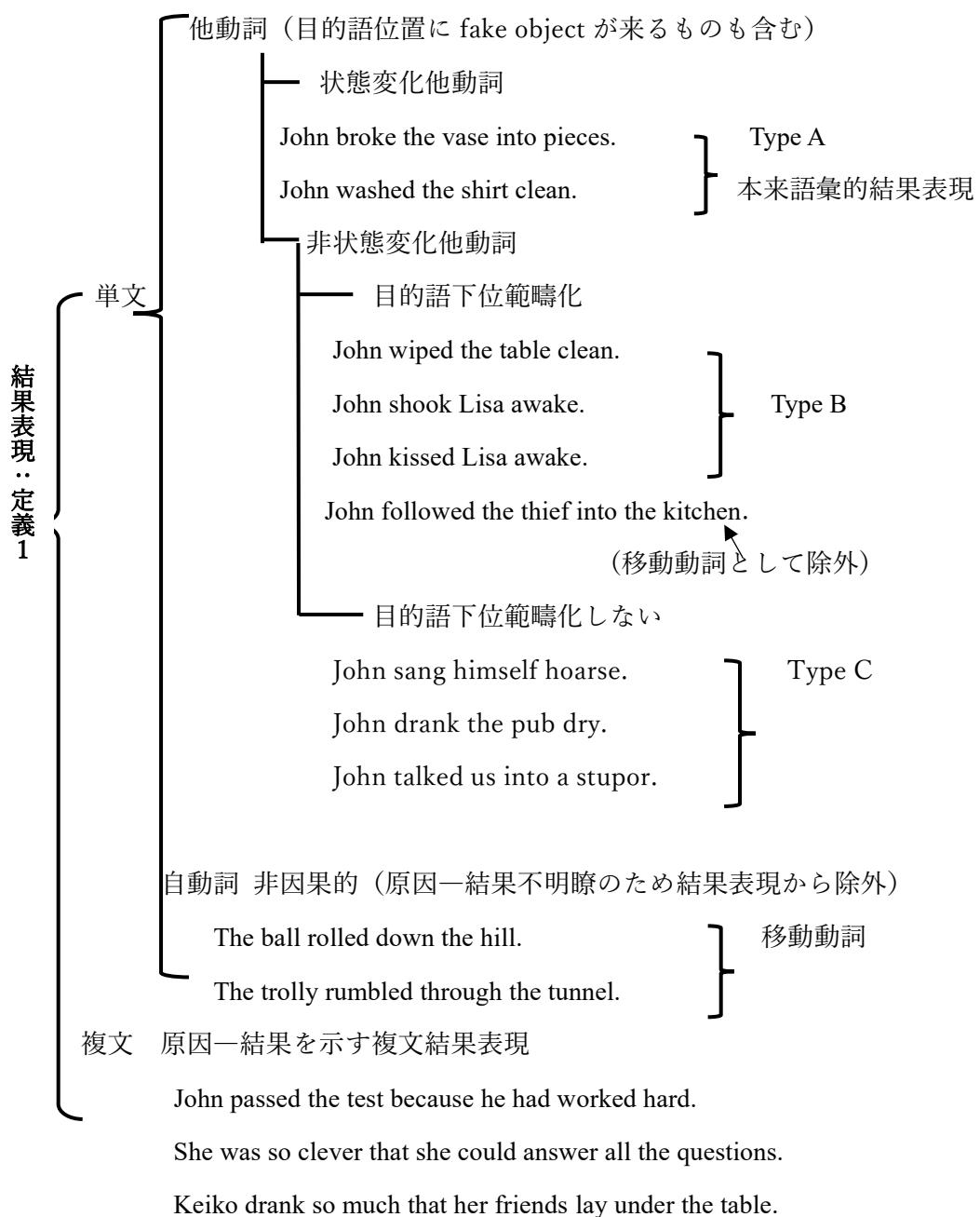
これはあくまで程度の比較であり、本当にその結果状態が実現したとは限らない。例えば「ディヴは酒場がからになるほど飲んだ」という文では「酒場が空になる程度、ディヴは飲んだ」ということになり本当に酒場が空になったとは限らない。これは英語の Type C に相当する。

- (e) Type C でも S_1 -*hodo* S_2 構文でも結果状態が実現しているという解釈の可能な場合もあり得る。例えば“*Dave drank the pub dry*”は「酒場が空になるほど・まで飲んだ」の両方の解釈が可能である。ただ“*Keiko cried her eyes out*”のような誇張法では明らかに結果状態は実現していない。
- (f) 日本語の「酒場が空になるほど」は程度でありそれが実現したかどうかは問わない。「空にはなっていない」という含意が伝達される。

繰り返しになるが我々は「日本語には弱い結果構文はあるが強い結果構文はない」という主張に反論するものではない。我々の主張は「日本語には定型の結果構文としては、いわゆる強い結果構文にあたるものはない。しかし意味や機能において英語の Type B, Type C に相当する『結果表現』は存在する」というものである。

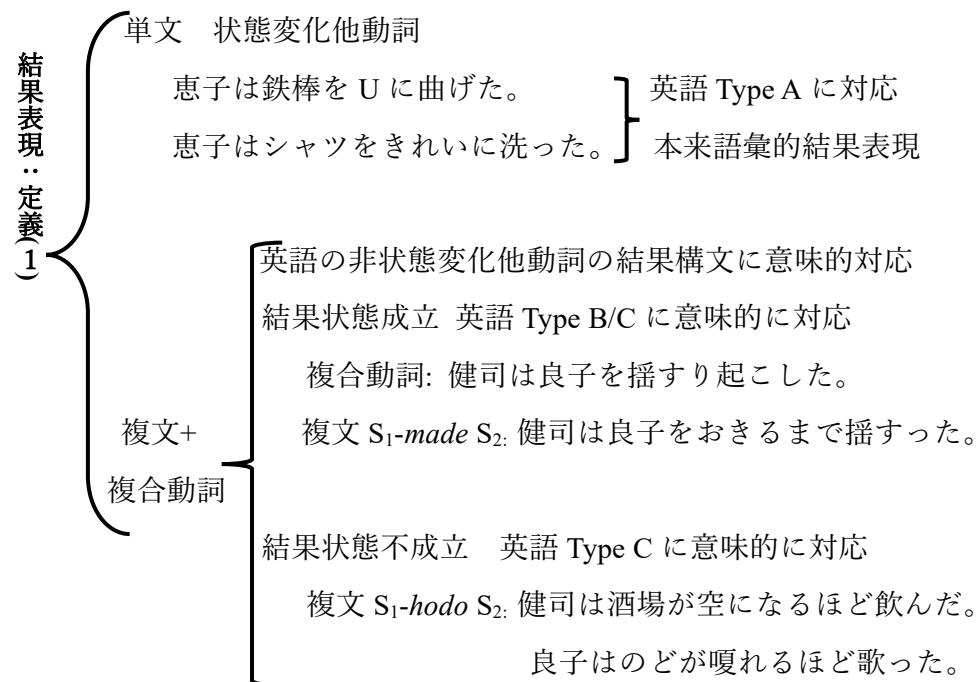
また日本語の S_1 -*made* S_2 や S_1 -*hodo* S_2 は複文であって、单文である英語の結果構文との比較は、「ミカンとリンゴの比較のようなもので比較すべきではない異質のものを比較している点で範疇間違いの誤謬を犯している」という批判があるかもしれない。¹ しかしもともと原因一結果の関係は2つの事象が関わっており複文構造で因果関係を表すことは自然でもあり、また多くの言語でもそのような表現は存在する。英語の結果構文が特異なのは本来、複文的内容を持つ意味構造を一つの文で表現している点でありその特異性を明確にするためにも日本語やルーマニア語の複文の結果表現との比較は大いに意味のあるものである。英語の結果構文と日本語の結果表現の系統図を再掲する。

図1 英語結果表現（構文）の系統図



英語の結果構文も大きな範疇である結果表現の一部である。結果表現の内、单文で、他動詞のものを結果構文として分類してある。また上記の図では一部の研究者が結果構文と認識している移動動詞構文も一応比較の意味で記載してある点注意されたい。

図2 日本語結果表現の系統図（複合動詞も複文に含めた）



以上の英語、日本語の系統図を比較すると類似点、相違点が明確になる。日英語に共通する注目すべき点は「因果関係」つまり *causality* がどのように各結果表現で捉えられているのかという点である。英語の Type A、日本語の「弱い結果構文」とともにその *causality* は動詞由来である。英語の「強い結果構文」である Type B と C の結果構文はどのようにその *causality* をそれぞれの理論において捉えているのか、あるいは解釈しているのかということが第3章でのテーマであった。

また第4章では因果関係の諸理論、Hume の恒常的継起説、Lewis の反実仮想理論、さらに Hitchcock の構造的等式フレーム理論(SEF)などを検証し、それぞれ英語の結果構文と日本語の結果表現との対応を検討した。もう一度その対応表を下にあげておく。

表2 結果構文、結果表現と *causality*の対応表

因果理論	英語の結果構文の例	日本語の結果表現とその例
恒常的継起説	Type A 弱い結果構文 John broke the vase into pieces.	弱い結果構文 健司は花瓶を粉々に壊した
反実仮想説	強い結果構文 Type B: Lisa shook her husband awake. Type C: We yelled ourselves hoarse	cause 関与せず リサは夫を目覚めるまで揺すった。 我々は声が嗄れるほど叫んだ。
SEF理論	強い結果構文 Type c: The joggers ran the pavement thin.	cause 関与せず ジョッガーは舗道が薄くなるほど走った。
?	強い結果構文 Type C : Pam swept the broom to pieces.	cause 関与せず 春子は箒がバラバラになるほど掃いた。

英語の「強い結果構文」の全てに *causality*が関与し、そしてその *causality*は異なる因果関係理論で捉えられている。もっとも一番意味論的に関与する *causality*が弱いと理解される Type C の結果構文は、「希薄な因果関係」でも検知できる SEF 理論でのみその因果関係の存在を認めることができる。上表「?」のところは本章の結論のところまで答えを待っていただきたい。

次にこの章の紹介を含む今後の展望もみておくことにしよう。この第5章では、先ず日本語の結果表現のパターン、すなわち「弱い結果構文のみ存在しいわゆる強い結果構文は存在しない、しかしその強い結果構文に意味的に対応する結果表現は存在する」というものは、実はルーマニア語、イタリア語にも認められるある程度普遍性を持った現象であることを説明する。また日本語の SRs、特に S_1 -made S_2 と S_1 -hodo S_2 の意味論は正確にはどのように表現できるのかを詳しく見てみることにする。次章では英語の結果構文の系統的進化がどのような動機付けによるものかを通時的観察も含めて検証する。

2.ロマンス語の結果表現

驚くべきことに、日本語の結果文で観察されるパターンは、ルーマニア語やイタリア語においても対応するものを見つけることができる。ルーマニア語、

およびイタリア語も若干の違いはあるが、「弱い結果構文」は存在するが「強い結果構文」は存在しないと言われている。²

ここでルーマニア語とイタリア語の結果表現の議論に入る前に例を理解するために最低限必要な範囲で両言語の特徴を説明しておきたい。ここでの説明はロマンス語間の相互関係については小林(2019)、イタリア語は坂本(1979)、ルーマニア語については鈴木・鈴木(2004)、鈴木・菅井(2014)などに基づくものである。

先ずルーマニア語の語順は SVO 型言語であるがイタリア語と同様に主語はしばしば省略される。また主題として目的語を前置し OVS 型になることもある。格は主格・属格・与格・対格・呼格の 5 つあるが主格と対格、属格と与格が同形になるため実質 3 種類しかない。名詞、形容詞、代名詞、冠詞は性・数によって変化する。名詞、形容詞は格変化を受けない。但し女性単数属格・与格が複数と同形になる。名詞は男性・女性・中性の 3 つの性を持つが中性は単数で男性、複数で女性として扱われる名詞を示す。格表示は名詞そのものではなく冠詞によって行われる。また面白い特徴として定冠詞(-ul/-a)は後置され名詞と結合し单一の語のように表記される。時制については過去を表現するには半過去、複合過去を使う。またイタリア語とは違い複合過去形は *a avea* (have に相当)と過去分詞を複合する。

イタリア語の語順は、基本は SVO 型であるが代名詞(接合辞 CL)は動詞の前に置かれる。主語は省略されることが多い。格は主格・属格・与格・対格である。名詞、形容詞、代名詞、冠詞は性・数によって変化する。名詞、形容詞は格変化を受けないのもルーマニア語と同じである。名詞は男性・女性と通性名詞 (-e で終わる名詞で単数・複数ともに同形のもの) と呼ばれるものもある。また複合過去(近過去)は助動詞の *avere* (=have) か *essere* (=be) のどちらかと過去分詞で構成され *avere* は他動詞と一部の自動詞、*essere* は再帰動詞と一部の自動詞とに対応する。⁴

それでは、ルーマニア語において状態変化他動詞が定型の結果構文を作る例を見てみよう。下の略号では煩雑さを避けるため名詞の性は省略し、過去分詞は PP の付加、定冠詞は *the* で示した。複合過去の例: *a vopsit* [has paint-PP]、名詞 + 定冠詞の例: *gard-ul* [fence + the]、SG: 単数、PL: 複数、REFL:

再帰代名詞、CL: 接辞。

(4) ルーマニア語の弱い結果構文

- a. Ion a vopsit gard-ul alb
John has paint-PP fence-the-SG white-SG
John has painted the fence white.
- b. Maria s- a vopsit roșcată blondă
Maria REFL has dye-PP red-SG blonde-SG
Mary has dyed herself blonde.
- c. Am tăiat hârti-a rotundă
have cut-PP paper-the-SG round-SG
have cut the paper round
- d. Copil-ul a spart gream-ul țăndăr-i
the child has break-PP window-the splinter-PL
The child has broken the window into splinters

次にイタリア語の例を見てみよう。略号はルーマニアに準じる。

(5) イタリア語の弱い結果構文

- a. Giovanni ha dipinto la macchina rossa.
John has paint-PP the-SG car red-SG
John painted the car red.
- b. Maria ha pettinato i cappelli lisci come seta.
Maria has comb-PP the hair-PL smooth like silk
Mary combed hair smooth like silk.
- c. Quel macellariò ha tagliato le carni sottili.
That bucher has slice-PP the meat-PL thin-PL
The butcher sliced the meat thin.
- d. Mia figlia ha cucito la gonna stretta.
My daughter has sew-PP the skirt tight
My daughter sewed the skirt tight.

e. Gli operai hanno caricato il camion pieno.

The worker-PL have load-PP the truck full

The workers loaded the truck full.

f. Quell'anitra, l'hai cucinata saporita.

That duck, CL-SIG you-have cook-PP tasty

That duck, you cooked it tasty.

g. Ho intrecciato i fiori in una ghirlanda.

I have weave-PP the flower-PL in a garland.

I weaved the flowers into a garland.

(All from Napoli, 1992)

以上の例で明らかなように、「塗る」、「髪をすぐく」、「切る」、「縫う」、「積み込む」、「調理する」、「編む」というような状態変化を伴う他動詞ではイタリア語も標準的な $NP_1 V NP_2 RP$ という英語と同様の語句の配列で「弱い結果構文」を構成することができる。

Napoli(1992)によればこの構文で形容詞が来る場合、文法性の判断を低くする母語話者も多いという。例えば(5a)で「車を赤く塗った」では *rossa* という形容詞を持つ文を容認せず、*di rosso* という前置詞句を伴う結果構文のみを容認する人々も多いという。さらに「塗る」と近い意味を持つ *macchiare* (汚す、シミをつける) では結果構文は作れず“* *Ho macchiato la camicia rossa*” (私はシャツに赤くシミをつけた) は容認されないという。このため Napoli は「AP 付の結果構文についてはそれが語彙項目において結果構文に使えるかどうかが指定されている」(Napoli, 1992:75) と主張している。しかしこの *macchiare* の定義は“*Sporcare, imbrattare con una o più macchie (anche + di, con)*” (Zanichelli) であり、シミの色を指定するのではなく汚したものを作成する動詞であり、汚す素材を *di* の後に置く構文をとるプロセス動詞である。状態変化動詞ではないため結果構文を構成しないとみる方が適切であると思える。

Napoli (1992) は結果状態の意味が強化され焦点を集めると容認度があがると提案し、(5b)では AP を *liscio* (滑らか) では容認されないところ、*liscio come seta* (絹のよう滑らか) として初めて容認されるという。このような微妙な差異はあるにしても、ルーマニア語、イタリア語ともに「弱い結果構

文」が存在することは間違いない。

次に他動詞で状態変化の意味を持たないプロセス動詞ではどうだろうか。先ずルーマニア語の例を見て頂きたい（これらの例で英語訳は意図された意味を示し、ルーマニア語ではそのような意味を表せないことに注意）。

(6) 状態変化を伴わない他動詞の場合

- a.* Copil-ul a împins uș-a deschisă
child-the has push-PP door-the-SG open-SG
The child has pushed the door open.
- b.* Ion a ciocănit fir-ul plat
John has hammer-PP metal-the-SG flat-SG
John has hammered the metal flat.
- c. * Cutremur-ul l- a scuturat frezit
earthquake-the CL3rd-SG has shake-PP awake
The earthquake shook him awake.
- d. *Dora si- a strigat rugușita
Dora REFL has shout-PP hoarse-SG
Dora shouted herself hoarse.
- e. *Câine-le l- a lătrat trezit
dog- the CL3rd-SG has bark-PP awake-SG
The dog barked him awake.
- f. * Ei au băut ceainic-ut uscat
they have drink-PP teapot-the-SG dry-SG
They drank the teapot dry. (all examples: Farkas 2009)

これらの例で明らかになることは、日本語と同じく、状態変化を伴わない他動詞では定型の「結果構文」は容認されないということである。ルーマニア語で「結果構文」は状態変化動詞とともに構成される場合に限定されるということになる。

次にイタリア語の類例を見てみよう。これらは Napoli(1992)の例以外は著者

が作成し、イタリア語母語話者2人に文法性、自然さを確認したものも含まれる。1行目はイタリア語の文例、2行目は構成、3行目はその意図した意味の英語表現になっている。

- (7)a. *Gianni ha martellato il metallo piatto.
Gianni has hammer-PP the metal flat.
Gianni hammered the metal flat.
- b.*Samuele ha riso Renato fuori della stanza.
Samuele has laugh-PP Renato out of- the room
Samuele laughed Renato out of the door.
- c. *Il terremoto lo ha scosso svegliato.
The earthquake CL-SIG has shake-PP awake.
The earthquake shook him awake.
- d. *Dora si ha urlato roca.
Dora self has shout-PP hoarse.
Dora shouted herself hoarse.
- e. *Il cane lo ha abbaiato svegliato.
The dog CL-SIG has bark-PP awake.
The dog barked him awake.
- f. *Hanno bevuto la teiera asciutta.
(They) have drink-PP the teapot dry.
They drank the teapot dry.
(a, b : Napoli 1992, その他: 濱本)

イタリア語の場合も状態変化を伴わないプロセス動詞の場合に結果構文は作れない。また(7a)の容認度は結果述語を繰り返し *piatto, piatto* とすると良くなると Napoli (1992)は主張する。そこからイタリア語には強い結果構文はないものの結果述語の焦点化、意味的強化を施せば容認されるケースがあると Napoli (1992)は次のように述べている：

結果状態の AP を持つ文においては、第一述語はその述語によって示される *activity* の終了点に焦点があたるように解釈されねばならない」(Napoli, 1992: 75)。

この具体的現れとして、動詞の示す動作が一瞬の変化を作る場合、*activity* の終了点に焦点があたるとも述べている。それについて、(7a)は容認されないが、これに意味が似ているものの動作が一瞬で、かつ終了点に意識のいく動詞 *pressare/pesare* (圧縮する、圧迫する) を伴うと、*Quella pressa idraulica ha pesato/pressato il metall piatto* (水圧圧延機がその金属を平らに圧縮した) は容認されるという。

しかし、この動詞は *martellare* (ハンマーで叩く) がプロセス動詞なのに対し、*pressare/pesare* (圧縮する) の方は状態変化動詞だからと非常に単純な説明が可能である。Napoli は動詞の意味的区別にやや無頓着な感じを受ける。

ところで最近、イタリア語の「強い結果構文」が存在するという研究が発表された。もし事実であればイタリア語には「弱い結果構文」はあるものの「強い結果構文」は存在しないという通説の反例になる。その論文は Romagno (2020) で次のような例をあげている：

“*La professoressa ha portato finite tutti*” のように [*portare* 人 *finito*] あるいは [*portare finite* 人] の構造をとり「人を精神的に困った状態にいたらせる」という一種のイディオムである。しかも南部イタリア北部カラブリア州の一地域の方言であるということである。また同地域内でも使用する人々に強い社会階層差が存在するともいわれている。これは日本語のネガティブな状況描写イディオム「これで終わった (= 困った)」と内容的にはほぼ同じなのは面白いが、極度に狭い使用地域であり、また社会言語学的なスピーチレジスターも制限されているので、反例にしなくてもよいと思われる。

結局、イタリア語にも状態変化動詞による「弱い結果構文」は存在するが、プロセス動詞を用いた「強い結果構文」は存在しないと結論してよいことになる。

Farkas(2006:66-70)は英語とルーマニア語との結果構文をめぐる非対称性に関する「沈黙の UP-TO 仮説」(*the silent UP-TO hypothesis*)を提案した。彼女は

英語には抽象的な経路を示す音形のない要素が存在すると主張する。この沈黙の要素が *hammer* のようなプロセス動詞を UP-TO に導かれる *endpoint* を持つ達成動詞と解釈可能が可能になるという。例えば、“*John hammered the metal flat*” は “*John hammered the metal UP-TO (being) flat*” というようにである。ルーマニア語にはそのような音形のない UP-TO は含まれていないのでプロセス動詞では動作の完結性を持つ結果表現は容認されないとということになる。

また Farkas は UP-TO の意味を持つルーマニア語表現 *până (ce)* をつければプロセス動詞を持つ文も完結性が与えられ結果構文と同様の解釈が可能であるという。この *până (ce)* は *până* が従属節を導き複文を構築する従属接続詞の機能と *până ce* + 前置詞となって複合的前置詞句を作り文末に置かれて「～まで」を示す付加語句を作成する。出来上がった文は複文の場合も単文の場合もある。

イタリア語でも *până (ce)* と同じ意味を持つ *fino (a)* を付加すればプロセス動詞を伴う文も結果構文と同じ意味を表せるとも主張する。イタリア語の *fino* は前置詞であり、その後に場所を表す副詞やさらに前置詞を伴って *fino qui* (ここまで、*qui: here*)、*fino a tarda notte* (夜遅くまで、*a* : 前置詞) のように空間、時間の区切りや限界を示す。

また *fino a* + 不定詞 (～するまで)、あるいは *finché* + 接続法 (*fino a che: UP-TO-THE*) で従属節になり「～するまで」を示すことができる。ルーマニア語の *până (ce)* では *până* は「まで」を示す接続詞で *ce* は前置詞で *to* に近い意味を示す。イタリア語の *fino* も「まで」を示し *a* は *to* に当たる前置詞であるからこれらの表現は日本語の *S₁-made S₂* と *S₁-hodo S₂* に近い意味と機能を持っている。

次に「まで」との対応を見ていただきたい。英語には隠れた要素 UP-TO があると想定しての説明である（また文中で *pe* は前置詞で対格を表現している。この場合には目的語を示す接辞 *1* と呼応している）。

(8) a. John beat Paul (UP TO) dead. ⇒ There is a hidden UP TO in English.

b. *Ion l- a bătut pe Paul mort.

John CL3_{rd}-SG-M has beat-PERF Paul-ACC dead.

⇒ Romanian has no hidden UP TO

- c. Ion l- a bătut pe Paul până ce a murit.
 John CL3_{rd}-SG-M has beat-PERF Paul-ACC UP-TO has die-PERF
 John beat Paul dead. ⇒grammatical with *până ce*
- d.*Giovanni ha battuto Paul morto.
 John has beat-PERF Paul-ACC dead ⇒Italian has no hidden UP-TO
- e. Giovanni ha battuto Paul fino alla sua morte.
 John has beat-PERF Paul-ACC UP-TO his death
 ⇒grammatical with *fino a* (up to)
- f.*ジョンはポールを死に叩いた。
 John-TOP Paul-ACC dead-NI beat-PAST
 ⇒Japanese has no hidden UP-TO
- g. ジョンはポールを死ぬほど叩いた。
 John-TOP Paul-ACC dead-HODO beat-PAST
 ⇒grammatical with *hodo* (Paul was not dead)
- h. ジョンはポールを死ぬまで叩いた。
 John-TOP Paul-ACC dead-MADE beat-PAST
 ⇒grammatical with *made* (Paul was dead)

以上はルーマニア語、イタリア語、日本語の対応を明確に示している。Farkasの説明を模倣して言えば、英語には隠れた UP-TO 要素があり、それが作用して *beat* というプロセス動詞でも完結性のある達成動詞になる。またルーマニア語ではプロセス動詞はそのままでは結果表現になりえないが *până* を付加することにより複文ではあるが結果表現になる。またイタリア語でも *fino (a)* を付加することで同様の結果になる。日本語でも「叩く」はプロセス動詞でありそれだけでは結果表現にならないが「まで」や「ほど」と複文を構成すると結果表現として機能する。しかし *până (ce)* と *fino a* は結果状態や結果位置に繋がる時間的・空間的経路の完結点を示すので、この点「まで」に近い。日本語の「ほど」は文脈に関連する程度を示す節の主要部になりそのスケール上でのある程度を示す。

それではイタリア語の *fino (a)* が現れる表現をいくつか見ておこう。これらの例もイタリア語母語話者の確認をお願いした。

(9) a. (=8e) Giovanni ha battuto Paul fino alla sua morte.

Giovanni has hit-PP Paul UP-TO his death

Giovanni hit Paul dead (to his death)

ジョバンニはポールを死ぬまで殴った。

b. La guardia ha affamato i prigionieri fino a morire.

the guard has starve-PP the prisoners UP-TO die.

The guard starved the prisoners dead.

看守は囚人たちを死ぬまで飢えさせた（飢え死にさせた）。

c. Il terremoto lo ha scosso finché si fosse svegliato.

the earthequake CL3_{rd}-SG-M has shake-PP until he became awake

The earthquake shook him awake.

地震は彼を目覚めるまで揺すった（揺すり起こした）。

d. Dora ha urlato finché la sua voce diventasse roca.

Dora has cry-PP until her voice became hoarse

Dora shouted herself hoarse.

ドラは声がかかるまで叫んだ。

以上のようにイタリア語では *fino a* + 名詞で「～に至るまで」を表現したり

(9a)、*fino a* + 不定詞で「～するまで」を示すこともある(9b)。また接続詞 *finché* (= *fino a che* ある目標までの制限された期間、あるいは制限された時間の期間を示す複合接続詞) + 接続法でも「～するまで」を表現できる(9c, d)。状態変化を伴わないプロセス動詞であっても、イタリア語でも「まで」を示す要素を付け加えれば結果としての解釈が可能な表現を作り出すことができる。また結果状態は完結していなければならないことがイタリア語母語話者によって確認された。

次にルーマニア語の *până* が現れる例をもう数例みてみよう。

(10) a. Ion l- a bătut pe Paul până ce a murit.

John CL3_{rd}-SG M has beat-PP Paul UP-TO has die-PP

John beat Paul to death.

ジョンはポールを死ぬまで殴った。

b. Cutremurul a scuturat orașul până la trezire.

Earthquake has shake-PP town until at wakening

The earthquake shook the town awake.

その地震は町中が目覚めるまで揺すった。

c. Paznicui i- a înfometat pe prizonieri până la moarte.

Guard CL.3PL.M ACC has starve-PP prisoners until at death

The guard starved the prisoners to death.

看守は囚人たちを死ぬまで飢えさせた。（=餓死させた）

上の例に関し Coseriu 研究者として著名なルーマニアの言語学者 Emma Tămăianu-Morita 博士²は次のように指摘する (pc. June 20,2022)。少し長いが正確さを期すために引用しよう：

Even in this case (10 a), the grammatical *significatum* of the construction with *până ce* is in fact just a temporal one, totally equivalent with *până când* (until he died), and we can only identify it as “resultative” from a referential point of view, based on our knowledge of the world. Examples like (10b, c) are treated in traditional Romanian grammar as “*complement circumstanțial consecutiv*.” This “*complement circumstanțial consecutiv*” is usually a noun preceded by a preposition, most commonly *până*. I think the term “*consecutive*” (showing the consequence of...) is quite telling, in the sense that it shows the loose nature of the relationship between the events/states - not so specifically a result, though it might be an actual result in some cases.

In other words, I would say that whereas the English construction “*John beat Paul dead*” is a resultative at the level of the grammatical structuring itself, in the

system of the English language, the Romanian sentence (10a) is not – it is actually a temporal which can be interpreted contextually as designating a result. E. Coseriu calls these ‘normal’ or ‘frequent’ co-/contextual acceptations ‘significata-in-use’ (*Sprechbedeutungen*, or sometimes *Verwendungstypen*), as they are the actual manifestations, in real speech, of the significata as mere systemic virtualities. In this case (these constructions with “până (ce)”), one has in fact a temporal construction in the system of the language, which is instantiated in diverse acceptations, among which we can find a ‘resultative’ one, a purely ‘temporal’ one etc.

(10a)のような *până ce* を伴う構文の文法的意義は実際のところは「時間的」なものであり、それは「彼が死ぬまで」を示す *până când* と同じ意味内容を持つ。我々がそれを「結果」と解釈するのは世界知識に基づくある観点からのものである。例の(10b,c)も伝統的なルーマニア語文法では「環境的結果補部」(*complement circumstantial consecutiv*)と言われるものであり前置詞、たいていの場合 *până* に続く形式をとる。この「結果的」という言葉が伝えるようにその構文は明確に「結果」を示すというよりも出来事、状態間の緩やかな性質を示すものであり、幾らかの場合に実際の結果を示すということである。

言い方をかえれば、“*John beat Paul dead*”は英語の体系の中で文法化された結果構文であるがルーマニア語の(10a)の表現は時間表現であり、文脈上そのような結果解釈がなされるというものであり E. Coseriu はこれらの通常の、あるいは頻繁な文脈上の意味の受容を「使用意義」(significata-in-use)、あるいは *Sprechbedeutungen*, また *Verwendungstypen* とよんでいる。それらは実際の言語使用に置いて意味を伝える現れではあるが単なる文法体系上の虚像ともいえるものである。これらの *până (ce)* を伴う文は文法体系の中では時間構文であり文脈により様々な意味受容が可能になり、その中には「結果解釈」もまた純然たる「時間解釈」もあるのである。

(pc. June 20,2022)

ここでの指摘はルーマニア語の *până (ce)* を伴う結果表現は元来の結果構文ではなく、「時間的」に 2 つの事象が連接していることを示し、文脈により結果解釈が生まれるということである。また(10)の例について被動者が結果状態に陥ったのか、単なる程度を示しているのかを Emma Morita 先生に確認したところ、すべての例で結果状態が完結しているとの答えであった。つまり「Paul は殴り殺された」のであり、「町中の人々は揺すぶられて目覚めた」のであり、さらに「囚人たちは餓死させられた」のである。これは我々の「まで」の完結点(*endpoint*)解釈に近い。

上の(10a)の例では *până ce* は AUX+VP (a murit) に伴われている。つまり複文である。(10b,c)では *până* は経路を示す句の主要部であり、さらに前置詞句 *la trezire*、*la moarte* (la は at に当たる前置詞)を伴っている。また *până* は形容詞の前に置かれることはない。これらの *până* を伴う文の地位について Farkas(2013)は次のように述べている。

ルーマニア語で(254)(=(10))のような文を作ることは問題がない。形態論的に複合的前置詞句は主語や内項の結果状態を示すために いかなる動詞とも結合できるのである。しかしながら、それらは文末の付加語 (*sentence-final adjuncts*) であるので本当の意味で「強い結果構文」ではなく、「強い結果構文」はこの言語では全く存在しないのである。

(Farkas 2013:262)

Farkas の UP-TO 仮説は我々の議論にも大いに関連する。Farkas は 2009 年の論文では UP-TO の存在・不存在に「強い結果構文」の言語による存在と不存在の根拠としたが 2013 年の著作では上記に引用したように「本当の意味での結果構文ではない」という理由から *până (ce)* を伴う文を「結果構文」から除外して考えている。また同時に英語に「強い結果構文」が認められることを、隠された UP-TO の存在に帰する説も触れられていない。

確かに Farkas の UP-TO 仮説には弱点があるようと思える。英語の結果構文がどのようにこの UP-TO を意味構造に隠し持っているのかは明らかにされていない。さらにルーマニア語やイタリア語では状態変化を伴わない動詞の構

文中に *până ce* や *fino a* などの明示的な要素が現れて初めて結果解釈が可能になることから、この隠れた UP-TO に対応する要素を持っていないことを推定し、そこから直ちに英語にはそのような要素が存在すると仮定するのはいささか論理的飛躍があると批判されても不思議ではない。こういうことから Farkas (2013) では UP-TO 仮説が言及されておらず、それを放棄したのだと思える。

我々の日本語の *S₁-hodo S₂*、*S₁-made S₂* 構文に対する考え方と上記の Emma Morita、Farkas のルーマニア語の結果表現との考え方とを比較しておきたい。第一に我々は定義において「結果構文」と「結果表現」を分けており、日本語には「強い結果構文」は存在しないことを認めている(表 1 参照)。*S₁-hodo S₂*、*S₁-made S₂* 構文を「結果構文」と主張しているのではない。英語の強い結果構文との機能的、意味論的類似性に焦点を当てて分析をしているのである。「ほど」は程度であり、「まで」は終点を基本的に表し、これらの構文が結果の解釈になるのは、Emma Morita がルーマニア語の結果表現について述べていたのと全く同様に「使用意義」(significata-in-use) や *Sprechbedeutungen* に当たるともいえる。また我々は明示的な「ほど」や「まで」の存在が日本語にあるからといって英語にはこれらの要素に匹敵する暗黙の要素(*concealed MADE?*)があるとは考えていない。さらに Kratzer のいう隠された因果関係 (concealed CAUSE) も想定しておらず、英語の強い結果構文にはなんらかの CAUSE があると考えている。しかし既に第 4 章で述べたように因果関係 *causality* には強弱があり、CAUSE で表現される意味も結果構文により異なると考えている。

さらにすぐ上に述べたことと矛盾するように思えるかも知れないが、全ての強い結果構文になんらかの CAUSE が関与するとはいいうものの、一部の Type C 結果構文は「ほど」解釈に近い、あるいは同等構文なのではないかとも考えている。因果関係と同等関係は完全に分かれたものではなく意味論的には連接した関係にあるのではないかと考える。この見解は英語の強い結果構文の発展史を眺めると現実味を帯びてくる。

さてなぜこのような意味論的に違いがある *causality* が生まれてきたのかという極めて興味ある問題は、歴史的発展を踏まえたうえで Blending 理論を用いて解明することができることを次章で議論する。特に、結果の状態を示すと

いうよりも程度表現として機能する「不完結な結果状態」(*incomplete RS*)を持つ英語の結果表現も、恐らくは「同等関係構文」としてより適切に分析される可能性があることも提起する。

この章の残りでは、これらの言語で観察される現象に焦点を当てる。まず、日本語の *hodo* の意味を考えてみる。それからルーマニアの *până(ce)*、イタリア語の *fino(a)* と *hodo* を比較する。最後に日本語の同等表現 *made* の意味を明らかにする。これらの事例を注意深く観察すると、日本語で結果表現と見なされてきたいいくつかの事例は実は「同等関係構文」として扱われるべきであることが判明する。この考えは、因果関係を表すために使用される論理演算子 CAUSE が、私たちの関心のある構造には適していないという事実によってさらに支持される。

このように 5 章、6 章は今までの章の分析の上になりたち、また相互に密接な関係がある。

3. 日本語の「ほど」の意味論

3.1 同様表現「ほど」(Tanaka et al. 2019, 2020, Tanaka, 2022)

何度も繰り返してきたことだが日本語の「ほど」とルーマニア *până(ce)*、さらにイタリア語の *fino a* を使った構文は英語の強い構文に近い意味を表す。また日本語の S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*made* S_2 構文は CAUSE を持たない。これらを考慮すると我々は日本語の、さらにルーマニア語、イタリア語の結果表現の意味理解には CAUSE 関数を適用するアプローチとは違った考え方が必要になると思える。既に述べてきたが「ほど」は程度(*degree*)であり、「まで」は終点(*endpoint*)を示すのであるからそれらの意味表示も CAUSE を想定したものとは全く違うものになるだろう。簡単に言うと S_1 -*hodo* S_2 という複文構造で、 S_1 -*hodo* は主節 S_2 を修飾していてそれはあるスケールでの程度を示しある種の基準でもある。 S_2 の対応する程度はその従属節の示す基準の程度とイコールか、あるいは超えていることをこの構造は示すのである。「ほど」を程度として作用する操作子(HODO operator)とみる形式的説明に移ろう。

3.2 HODO の特徴

我々の関心の焦点にある S_1 -*hodo* S_2 という構文に使われる「ほど」は、本来的には程度を示すが文脈により「結果の解釈」を可能にする。この解釈を「結果解釈の HODO」(resultative-HODO: R-HODO)ということにする。

先ず元来の程度の論理操作子として HODO の意味論を確認し、そこから結果解釈の HODO の意味を導き出そう。

「ほど」は名詞であり、「物事の度合い、程度、限度、ころあい」などを示す。また文と文を結合し「～ほど…である」という同等関係を導くこともできる。Tanaka et al. (2019, 2020)、Tanaka (2022) では同等関係を導く「ほど」について 3 種類のタイプの存在を議論している。先ずこれら 3 種の「ほど」の意味論を上記の論文を参照し確認することにしよう。

(11) 3 種類の HODO (Tanaka, 2022: 290).

(i) as-HODO 太郎は次郎ほど背が高くない/*背が高い。

= Taro isn't as tall as Jiro.

(ii) so-HODO 太郎はバスケットボール選手になれるほど背が高い/高くな
い。 = Taro is/isn't so tall that he could become a basketball
player.

(iii) amazingly-HODO 太郎は驚くほど背が高い/*高くない。

= Taro is/*isn't surprisingly tall.

(11i) は HODO が否定極性項目(NPI)であることを示し, (11ii) は極性には反応しない HODO の使用法を示している。また (11iii) は HODO が肯定極性項目(PPI)であることを示している。これは同じ HODO が否定極性項目として使用されたり、また極性項目に反応しない使用法があることと対照をなしている。最後の「驚くほど」(amazingly-HODO)は極端な程度を示している。

それでは次に我々の関心の中心である「結果解釈の HODO」を観察してみよう。

(12) a. 健司は酒場が空になるほど飲んだ。

- =Kenji drank the pub dry
- b. 太郎は声がかかるほど叫んだ。
 =Taro cried himself hoarse
- c. 先生の話は我々が麻痺するほど退屈だった。
 =The professor talked us into a stupor

これらの文に現れる動詞は状態変化を示さないプロセス動詞であり、固有の終結点を持たない。これらの「結果解釈の HODO」(R-HODO) 文の意味を探っていく。先ず上記の 3 種類の HODO と比較すると R-HODO は *amazingly-HODO* とその意味的振る舞いが似ていることに気づく。順に見ていく。

(13) 肯定極性的

- H *Amazingly ODO*: 太郎は驚くほど背が高い/*高くない。
 R-HODO: 健司は酒場が空になるほど飲んだ/*飲まなかった。

上の例で明確に分かることだが *amazingly-HODO* と R-HODO は両方とも肯定極性的であり、否定環境では容認されない。しかし対照性を示すマーカーである「は」をつけると否定環境でのみ容認されるようになる。つまり否定極性的になる。下の(14)を見ていただきたい。

(14) 対照性マーカーの「は」と否定環境での容認性

- a. *Amazingly-HODO*: 太郎は驚くほどは背が高くない/*高い
 b. R-HODO: 健司は酒場が空になるほどは飲まなかった/*飲んだ。

さて次の共通性を調べてみよう。上記 2 つの HODO, すなわち *Amazingly-HODO* と R-HODO は様々な異なる程度、段階を示す選択肢の集合を想起させる。選択肢の集合を{…}で示すと、「驚くほど背が高い」であれば、その段階にまで及ばない程度、{「かなり背が高い」(rather tall)、「まあまあ背が高い」(fairly tall)} などが考えられる。また「酒場が空になるほど飲んだ」で

あれば {「かなり飲んだ」(*drink reasonable amount*)」、「普段より飲んだ」(*drink more than usual*)} などが想起できる。

どちらの場合でも「驚くほど背が高い」、「酒場が空になるほど」は他の選択肢より程度が高いことが考えられ、同時にその段階まで至る可能性は他の選択肢より低いことも容易に考えることができる。ここで選択肢の順序を考えてみよう。

(15) 選択肢の順序

(i) amazingly-HODO

- a. 太郎は驚くほど背が高い

可能な選択肢 : {かなり背が高い (*reasonably tall*), 標準より背が高い (*taller than the standard*) ...}

- b. 太郎はかなり背が高いが驚くほどではない。
- c.*太郎は驚くほど背が高いがかなり背が高くない。

(ii) R-HODO

- a. 健司は酒場が空になるほど飲んだ。

可能な選択肢 : {そこそこ飲んだ (*drink moderately*), かなり飲んだ (*drink a fair amount*) ... }

- b. 健司はかなり飲んだが酒場が空になるほどではない。
- c.*健司は酒場が空になるほど飲んだがかなり飲んだのではない。

以上の例が示すことは amazingly-HODO も R-HODO も関連する尺度上で最高の段階を占めていて、低位段階 + 否定の高位段階は可能だがその逆の順序では容認されない点である。この点でもこの 2 つの HODO は共通する。

これも Tanka(2022)の指摘であるが Amazingly-HODO を使った表現では実際にその段階にあったとしてもそこで描かれていることが実現するとは限らない、むしろ実現しないと予想できることである。

(16) Amazingly-HODO の内容の実現可能性

- a. 太郎はギネスに載るほど賢い。

- =Taro is so intelligent that he may appear in Guinness
- b. しかし彼がギネスに載ることはないだろう。
- =It is unlikely that he appears in Guinness

これは重要な指摘である。なぜなら日本語の結果表現 S_1 -*hodo* S_2 では S_1 -*hodo* はあくまで程度を示し、実際の実現や達成を示さないからである。次の例を考えてみていただきたい。

(17) R-HODO の内容の実現可能性

健司は酒場が空になるほど飲んだ。しかし酒場が本当に完全に空になったのではない。

ここで、 S_1 HODO の示す事態の実現性は非常に低いものと思える。

以上の検証により、*amazingly*-HODO と R-HODO は極めて近い関係にあると結論してよいと思われる。すなわち、この 2 つの HODO は、①肯定極性的、②対照を示すマーカー「は」により否定極性的になる、③選択肢集合を想起し、関連する尺度の最上位に位置するが可能性は低い、④ S_1 -*hodo* が示す事態の実現性はほとんどない、という点で共通性を持つ。

4. 結果表現の「ほど」(R-HODO)の意味論

ここでは R-HODO の意味を形式的に分析することを考えてみたい。形容詞は程度(*degree*)を持つことは一般的に了解されている。

- (18) a. 段階形容詞(*gradable adjectives*)はその項を抽象的な測度表示、すなわち程度(*degree*)に投射する。

- b. ある次元に関して全順序的な程度 d の集合は尺度(*scale*)を形成する。

(Kennedy 1999, Kennedy and McNally 2005, Kennedy and Levin 2008)。

測度関数としての段階形容詞は、ある対象を項にとると、それについての程度

を返す関数と捉えるのだから、 $y=f(x)$ というおなじみの関数表記をそのまま採用すれば、 $d=f(x)$ と表記できる（つまりタイプとしては $\langle e, d \rangle$ と簡便的に捉えている）。ここで f が段階形容詞であり、対象物について形容詞の関与する尺度でその程度 d を返すということに他ならない。しかし形容詞以外の述語でも段階性を考えることができる。

程度表現とは何らかの段階性を持つ述語を修飾しその述語の意味特性のより高い程度での適応を示す強意作用(*qualitative degree intensifying effect*)、あるいは述語の持つ意味特性の量的度を示す作用(*quantitative degree increasing effect*)が考えられる。前者は「とても安い」の「とても」の作用、後者は「もっと評価する」の「もっと」の作用と考えればよい。ここで逆に考えてほしい。程度表現が付加可能ということはその付加される対象自身に段階性があるということである。「とても安い」といえるのは「安い」に段階性があり、「もっと評価する」といえるのは「評価する」という言葉の指示する対象には段階性があるということになる。いったいどのようなものに段階性があるのかを例によって示そう。

- (19) a. John is a very intelligent man.

ジョンはとても知的な人だ。

- b. Haruki's work is as good as Yuto's.

春樹の作品は優斗のものと同じほど良い。

- c. Toshie is cleverer than her father in linguistics.

俊江は言語学では父より偉い。

- d. Satoshi appreciated Kae's advice than she thought.

聰は佳恵が思うよりもっと忠告を評価した。

- e. I much regreted what I had done to her.

私は彼女にしたことをとても悔いている。

- f. Tomoko danced a lot yesterday.

智子は昨日たくさん踊った。

- g. Yusuke was much pleased with her present.

祐介は彼女のプレゼントをとても喜んだ。

h. This article is well written.

この記事は良くかけている。

i. Kae has many friends who help her willingly.

佳恵には喜んで助けてくれる多くの友人がいる。

j. He does not have much patience.

彼にはあまり辛抱がない。

(濱本 2015)

程度表現が修飾する対象は形容詞(19a,b,c)、動詞(19d,e,f)、動詞派生形容詞(19g, h)、複数可算名詞(19i)、不可算名詞(19j)に及ぶ。これらには段階性が意味的に内包されていることになる。非常に多くの概念が段階性を備えていることになり、上の動詞では評価動詞(*appreciate, regret*)が取り上げられているが、普通のプロセス動詞でも関連する尺度で程度を持つことは次の例からも確認できる。

(20) walk too much, talk too much, drink too much, cry too much

このようなプロセス動詞の場合、程度表現は動作の量を示すことも多く *walk too much* では程度表現は歩行の蓄積的な量に言及している。しかしプロセス動詞でも程度表現が動作の蓄積量ではなく質的変化に言及する場合もある。「声がかかるほど叫んだ」では「声がかかるほど」は「叫ぶ」行為の量にも関係するが同時にその「叫び方」にも関係するだろう。「太郎は声がかかるほど叫んだ」(*Taro cried himself hoarse*) は意味的に次のようにパラフレーズ可能である。

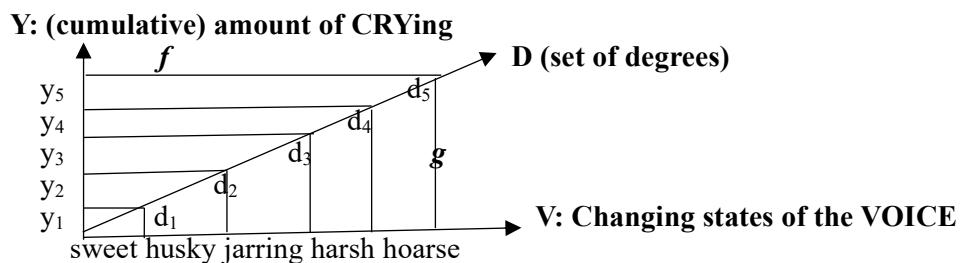
(20) 太郎は声がかかるほど (=程度まで) 叫んだ。

Taro cried *even to the extent that* he (his voice) became hoarse.

(20) には 2 つの意味的次元が関与している。すなわち太郎の叫ぶ行為の蓄積的量、彼の声の質的変化の *dimension* である。太郎が叫ぶことを続けその行為の量が増えることと、彼の声の質的状態が変化していくことには相関がある。

る。叫ぶ量が増えるに従って、声はかすれ声 (husky)、しゃがれ声 (grating, jarring)、声がれ (hoarse) になっていく。叫ぶ行為は「叫びの量尺度」である程度をなし、声のかすれ変化は「声がすれ変化尺度」である程度をなす。これらのスケールは異質であるが確かな相関がある。一つのスケールの程度を別のスケールの程度と仲介的な抽象的スケールにより関係付けることができる。これは次の図で示される。

図3 異なる2つの次元- *crying* と声の質変化の対応



縦軸は叫ぶ行為の強さ、あるいは蓄積量を示す。これがその時一時の叫びの強さなのか、蓄積的な量なのかは文脈に依存する。もし太郎が声の強さの最上級段階でたった一度叫んだために声がされたのであれば強さを示し、継続して叫び続けた結果が声の質の変化に繋がったのであれば蓄積量を示すことになる。

上図で我々は2つの関数 f と g を想定する。これらは異なる次元での変数間の関数である。関数 f は叫びの量、あるいは強さを抽象スケール D に写像する ($f : Y \rightarrow D$)。もう一つの関数 g は程度スケール上の変数 d をとり声の質の変数 v を返す関数である ($g : D \rightarrow V$)。

例えば、ある人の叫びの程度（強さ、あるいは量）が尺度 Y 上で y_5 の程度とする。それは関数 f により D 上の d_5 に写像される。さらに関数 g はその値を取り、 V スケール上の値 *hoarse* に対応させる。このように異なる2つの次元の変数は仲介尺度 D の仲介を経て、2つの変数間に対応が生じる。Tanaka (2019) の *amazingly-HODO* では一つの次元（例。背の高さ）を扱っているがここで検討する同等表現 *R-HODO* は2つの異なる次元の程度を抽象的スケールを仲介することにより関係づけする。この違いが2つの類似する *HODO* の機能的相違点である。

「声がかかるほど」が程度表現であるとして、それが修飾する事態は発声・

発話に関するものに限られる。例えば「声がかかるほど歌った」、「声がかかるほど英語を音読した」、「声がかかるほど議論した」、「声がかかるほど演説した」等が考えられる。通常、「声がかかるほど走った」、「声がかかるほど飲んだ」は状況が想起されないし容認されないと思われる。

以上の議論を背景にして S_1 -*hodo* S_2 構文での R-HODO は基準の程度 d^* を表すと考え、「声がかかるほど」の意味を形式的に捉えたい。発声・発話に関する行為一般を抽象化し UTTER とする。当然、UTTER もプロセス動詞であり段階性がある。ある発声・発話行為の程度（強さ・蓄積量）の程度 d^* が、声がかかる程度と対応することを以下のように規定する。

(21) 「声がかかるほど」の意味

||PRO's voice-become-hoarse-hodo||

= $\lambda d^*. \text{if PRO UTTER at } d^* \text{ degree at } w', \text{ then his/her voice can be hoarse at } w'.$

= $\lambda d^*. \text{sufficient-for-PRO's voice-to-be-hoarse-by-UTTER } (d^*)$

ここでさらに UTTER を抽象化し外に取り出すと

= $\lambda U \lambda d^*. \text{sufficient-for-PRO's voice-to-be-hoarse-by-U } (d^*)$

$U \in \text{UTTER}$

(21)の PRO は「一般的な人」を指している。(21)は結局、「声がかかるほど」の指示対象、つまり意味とは「UTTER という段階性のある行為にはある程度 d^* が存在し、その程度は一般の人々の声がかかるといえる程度に対応する、そのような程度の集合」ということである。ここで注意してほしいのは、上記の(21)の規定は UTTER、例えば「叫ぶ」の程度は特定の場面に固定されたものではなく、一般的な場面、状況での人々の声がかかるその程度と対応することを指しているということである。従ってそれはある意味では架空の程度であって現実のものではないのであるから現実に人の声がかかるることを含意しない。あくまで一般的基準として「声がかかる程度」を示している。最終的にその発話・発声のプロセス行為も抽象化すると最後の規定にたどり着く。

また意味論的に R-HODO が示す程度はスケール上の最高位にきてるのであるから、「声がかかるほど」の場合もスケール上で他の程度を示す選択肢よ

りも上位に位置しているはずである。次の(22)は R-HODO の程度の最高位置にあることを示している。

- (22) $\forall d \in C [d \neq \min(\|R\text{-hodo}\|) \rightarrow d < \min(\|R\text{-hodo}\|)]$, where C is a contextually assigned comparison class with a specific dimension.

比較クラス (=選択肢集合) を C とすると、その全ての選択肢の要素の持つ程度 d よりも R-hodo の程度は大きいはずである。つまり選択肢の持つ程度 d はそれが R-hodo の最小値でないならば、R-hodo の最小値より常に小さいことを(22)は示していることになる。

さてさらに意味論的に技術的な話に移ろう。R-HODO の前提の議論である。R-HODO は先述の通り選択肢集合を導き出す。そしてその選択肢集合の中での最上位の程度を示す。例えば「声がかかるほど」ならば「声がかかることさえ」という「さえ」の意味を隠れた意味(=covert even)として、つまり前提として持つ。この前提の「さえ」の意味とは「その示す命題が状況描写において一番適格であるが、他の選択肢よりは生起する可能性は低い」(=the original proposition must be more informative and less likely than the others) ということになる。この前提について Chierchia (2006, 2013) は「いかなる言語表現でもそれが焦点化効果(focusing effect)を持ち選択肢集合を想起させるのであれば、それは EXHE 関数によって照合されねばならない」と主張する。照合が適正でなければそのような表現を持つ文は矛盾を構成し、非文法的になるという。そのような言語表現には *any*, *ever*, *every*, そして *hodo* も含まれる。

R-HODO は even の前提を持ち EXHE_E 関数によって照合されねばならない。EXHE_E は次に定義されている。

- (23) $EXHE_E = \lambda p. p \wedge \forall q \in ALT(p) [p < \mu q]$

Chierchia (2013: 148)

(23) が述べていることを解説する。先ず ALT はある命題についてその選択

肢集合を返す関数である。また μ は文脈上関連する確率測度である ($p < \mu q$ ならば p の方がより起こる確率が低い)。ここで命題 p が成立し、その p の選択肢集合の要素である全ての q について、 p は q より生起する可能性が低いといえる、そのような命題 p の集合を EXHE_E は示す。

なぜこのようなややこしい操作が持ち込まれるのか。何らかの選択肢集合をもたらす言語表現で *even* の前提を持つものは、それが作る命題は他の選択肢集合の確率より低いという隠れた意味があり、それが文脈において満たされないと意味解釈での齟齬が生じ非文法的になる、その照合が必要であるということなのである。さてこの照合関数 EXHE_E に我々が関心を持つ「声がかかるほど」を示す(21)を適用してみよう

$$(24) \text{EXHE}_E(\|21\|) = \|21\| \text{ holds} \wedge \forall q \in \text{ALT}(\|21\|) [\|21\| <_{\mu} q]$$

「声がかかるほど」という事態が成立しているとしてその選択肢集合 {耳障りな声になる(*harsh*)、かすれ声になる (*husky*)、しゃがれ声になる(*grating*) } のどれよりも上位であることは(22)の *R-hodo* が規定しているのでそれが確率の低いことを含意し、(24)は充足される。

それではいよいよ「太郎は声がかかるほど叫んだ」の真理条件表示の準備が整ったので次にそれを示そう。

(25)p: 太郎は声がかかるほど叫んだ

(i) 「声がかかるほど」

$$= \lambda U \lambda d^*. \text{sufficient-for-PRO's voice-to-be-hoarse-by-U}(d^*)$$

(ii) 声がかかるほど叫んだ

$$\lambda d^*. \text{sufficient-for-PRO's voice-to-be-hoarse-by-crying}(d^*)$$

(iii) Assuming f, g at w'

$$\|p\|^{f, g, w'} = 1 \text{ iff } \exists d^* [\text{sufficient-for-PRO's voice-to-be-hoarse-by-crying}(d^*) \wedge f(\text{amount-of-cry}(\text{taro})) \geq d^*] \text{ holds true at } w'$$

(iv) $[\forall d \in \text{C} [d \neq \min(\|koe-ga-kareru-HODO\|) \rightarrow d \leq \min(\|koe-ga-kareru-HODO\|)]]$

(v) EXHE (p) does not create a contradiction.

ここで(iii)までが真理条件の成立の過程であり、(iv)と(v)は EXHE の検証プロセスである。

(iii) 真理条件の述べていることは：ある世界 w' において呼びの程度 d^* が「声がかかるほど」に対応し、それを基準としたところ、太郎の呼びの程度（強度、蓄積量）がその程度に等しいかそれを超えたことを示す。

(iv) ここで「声がかかるほど」は他の選択肢集合の要素より高位でしかも確率は低いのであるから、

(v) EXHE (p) は適切である。

以上の(iii)の真理条件は同等の程度の比較、つまり「同等関係」を示す真理条件であるから当然 CAUSE 関数は全く現れない。その点では「因果関係」ではない。また真理条件は「声がかかるほど」は一般的な程度であり、本当に太郎の声がかれたのかは示されていない。この真理条件は「太郎は声がかかるほど叫んだ」の持つ意味を非常に的確に捉えているように思う。この同等関係はそれでも「太郎が叫んだ」ことが原因で「声がかかるほどだった」という結果的状態（本当はそうはならなかったが）を捉えることができている。このようにこの同等関係構文は CAUSE に依存しないので「causality を伴う因果関係」ではないものの「原因一結果関係」を表現しているといえると思う。

また *amazingly-HODO* と *R-HODO* はどちらも「同等構文」であり意味論的に近い関係にあるが前者は同一次元での程度比較になり後者は異なる 2 つの次元の程度を媒介尺度 D の仲介で結び付け、比較している点が大きな違いとなっている。

それでは次に S_1 -*hodo* S_2 で表現できる他の日本語の結果表現の意味解釈の例を確認してみよう。以下では EXHE 関数による照合プロセスは簡略化のため省略することにする。

(26) q: 健司は酒場が空になるほど飲んだ。

(=Kenji drank the pub dry.)

Assuming f, g at w'

$\|q\|^{f,g,w'} = 1$ iff $\exists d^* [\text{sufficient-for-a-pub-to-be-dry}(d^*) \wedge f[\text{cumulative-amount-of-drink}(\text{Kenji})] \geq d^*]$ holds true at w'

この意味は「酒場が空になるという表現があてはまる状況の程度が存在し、かつ健司が飲んだ量はその程度に匹敵する」ものであるということになる。注意すべきことは、「酒場が空になるほど」という程度表現ではそれが修飾する事象は「飲む」ことだけだという点である。「声がかかるほど」であれば「歌う」、「議論する」、「外国語を音読する」などの発話、発声のプロセス動詞が示す内容の程度に言及できたが「酒場が空になるほど」は「歌う」、「話す」ではなく「飲む」にのみ対応する。

(27) r: 先生の話は我々が呆然とするほど退屈だった。

(=The professor talked us into a stupor.)

Assuming f, g at w'

$\|r\|^{f,g,w'} = 1$ iff $\exists d^* [\text{sufficient-for-PRO-to-be-stuporous-by-being-bored}(d^*) \wedge f[\text{cumulative-amount-of-boredom}(\text{professor's talk})] \geq d^*]$ holds true at w'

以上の意味は、「人が退屈で唖然してしまう」という程度が存在し、かつ先生の話はその程度に等しいかそれを超えている」というものである。英語の対応表現 *The professor talked us into a stupor* には退屈という言葉は全く出てきていないがこの解釈について 3 名の英語母語話者に確認したところ、「先生の話があまりに退屈なので呆然としてしまった」という解釈しか考えられないと全員が答えてくれた。「先生の話が素晴らしいので我々が呆然とした」という解釈の可能性も聞いたところ、全員がそれはあり得ないとの答えであった。また日本語では「先生は我々が呆然とするほど話した」だけでは意味が伝わらないのは英語と同じである。「先生の話は我々が呆然とするほど退屈だった」というように「退屈で」という言葉を明示的に加えた。

5. 結果表現「まで」(R-MADE)の意味論

R-HODO は程度の表現であり、「声がかかるほど」であれば発話・発声の程度を描写する。これは結果状態の実現を含意しない。R-MADE は基本的に「完了点」を示し結果状態の実現を含意する。前者は「程度」、後者は経路の「完結点」を示すので関わる意味領域が異なっている。従って「健司は声がかかるほど歌った」と「健司は声がかかるまで歌った」では我々の意味理解はかなり異なることが予想できる。2つの例文の意味を考察してみることにする。

(28)a. 佳恵は慧が目覚めるまで揺すった。

Kae shook Kei awake.

b. 聰は声がかかるまで歌った。

Satoshi sang himself hoarse.

(29)a. ?佳恵は慧が目覚めるまで揺すらなかった。

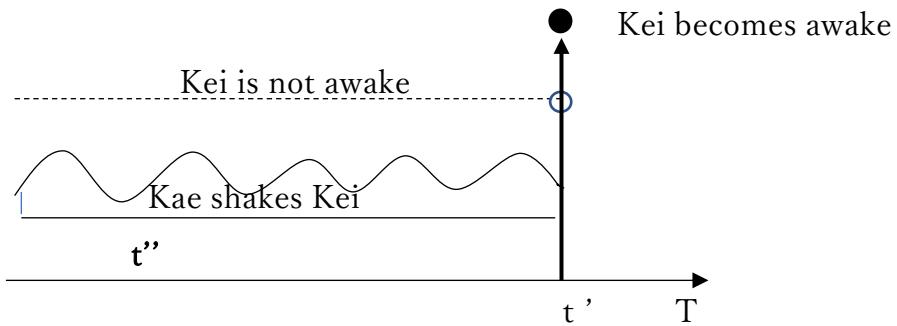
a' 佳恵は慧が目覚めるまでは揺すらなかった。

b. ?聰は声がかかるまで歌わなかった。

b' 聰は声がかかるまでは歌わなかった。

「まで」を伴う表現は完全に肯定対極的というわけではなく否定辞ともある程度は共起できるようである。もっとも「は」がある場合には落ち着きが良いようである。また「まで」は程度表現ではないため *even* の意味合いではなく、選択肢集合を想起させることはない。慧は「目覚めるまで」は眠っているのである。聰の声も「かかるまで」はかれていない。もちろん、「しづがれたり」はしていようがそれは問題外である。選択肢集合の中で最上位を占める、あるいはそれが一番生起する確率が低いというようなことも問題にはならない。「ほど」のもつ *even to the extent* という意味がないからである。従って、Chierchia (2013) で規定する EXHE 関数による照合も考えなくてよいことになる。結局、どのように「まで」を考えればよいのだろうか。

図4 「佳恵は慧が目覚めるまで揺すった」の意味の構成図



上図の表すことは、まず横軸に時間軸 T があり、左から右へと時間が流れている。*Kae shakes Kei* というプロセス動詞の示す行為が波線で表されている。これにはそれ自身には完結点はない。この時間区間は t'' になる。この時間区間の間 Kei は目覚めていないことは破線で示されている。時間軸上 t' 点（これも時間区間とみなす）が存在する。その直前まで Kei は目覚めていない。これは t' 上の○で示されている。その時点で *Kae* の *shaking* が功を奏し、 Kei は目覚める。それが●で示されている。 t' 時点で ○ → ●への変化が起こっている。*Kae shakes Kei* に対応する時間区間 t'' の最終時点に t' 点が存在し、その時点で *Kei becomes awake* が成立する。これは「佳恵は慧が目覚めるまで揺すった」の意味を的確に捉えている。形式的に表現しよう。

(30) 「佳恵は慧が目覚めるまで揺すった」

- (i) $t', t'' \subset T$ 、 t : 時間の変数
- (ii) $<$: T 上の時間順序 $T_1 < T_2 : T_1$ is earlier than T_2
- (iii) at は「時間区間において」を示す。
- (iv) $\exists t' [\text{become-aware}(Kei) \text{ at } t' \wedge \text{shake}(Kae, Kei) \text{ at } t'' \wedge t' \subset t'' \wedge \forall t (t \subset t'' \rightarrow t < t')]$

(30)の意味を確認しておこう。(i) t', t'' はいずれも時間区間（ t は時間の変数）であり、(ii) $<$ は時間の順序を示すから $t < t'$ は、 t' が t より後であることを示す。(iii) at は後に時間区間が来て「～の時に」を示す（瞬間的な時間も時間区間と見做す）。(iv) は「佳恵が慧を揺するプロセスの時間区間 t'' に慧が目覚

める時点 t' が存在しその t' は t'' の終端に位置することを示す。

「佳恵は慧が目覚めるまで揺すった」が真になるのは(iv)が成立する時に限られることになる。結局 P -made Q の意味は次のように示される。

(31) P -made Q

$$\exists t' [P \text{ at } t' \wedge Q \text{ at } t'' \wedge t' \subset t'' \wedge \forall t (t \subset t'' \rightarrow t < t')]$$

R -hodo では程度がその示す対象であったが、 R -made ではあるプロセス（この例では「揺する」）の *endpoint* に来る事態を示す。かなり意味的には隔たりがある。

次にもう一例、「聰は声がかかるまで歌った」を考えてみよう。

(32) 「聰は声がかかるまで歌った」

$$\exists t' [\text{become-hoarse (Satoshi) at } t' \wedge \text{sing(Satoshi) at } t'' \wedge t' \subset t'' \wedge \forall t (t \subset t'' \rightarrow t < t')]$$

ところでこの我々の定式は、第3章 Rothstein (2003, 2004) の PART-OF 説に極めて近い考え方をしている。思い出してみよう。

(33) Mary shook John awake.

$$\begin{aligned} \exists e_1 \exists e_2 [e =^s (e_1 \cup e_2) \wedge \text{SHAKE}(e_1) \wedge \text{AG}(e_1) = \text{Mary} \wedge \text{TH}(e_1) = \text{John} \wedge \text{awake}(e_2) \\ \wedge \text{Arg}(e_2) = \text{John} \wedge \text{PART-OF}(\text{Cul}(e_1), e_2) \wedge \text{PAST}(e)] \end{aligned}$$

つまり「メアリーがジョンを揺すこと」の終了点を「ジョンの目覚め」に合わせ、二つの出来事が全体を構成するように組み立てている。Rothstein (2003, 2004) の PART-OF 説では event を中心に意味を組み立て、 $\text{PART-OF}(\text{Cul}(e_1), e_2)$ によって一つの event の終了点が別の event の部分になっていることを示している。一方、我々の方法では時間区間を使ってほぼ同様の内容を説明している。

Rothstein は英語の結果構文(特に Type B)の意味を、CAUSE を使わずに規

定しようとしてこの方法にたどり着いた。我々は日本語の R-MADE の意味を規定しようとしてこの方法にたどり着いた。このことは別の視点から見ると、英語のプロセス動詞を伴う結果構文と日本語の S_1 -made S_2 という結果表現には意味的に類似性があることの傍証になっているとも思える。

さてルーマニア語については弱い結果構文の存在は確認されているがいわゆる強い結果構文は存在せず、*până (ce)*を付加した場合にその意味に近い意味を表現できることは既に確認した。またイタリア語の場合も *fino (a)*あるいは *fino a che*を示す接続詞 *finché*で同様に強い結果構文に相当する意味を表現できるのであった。これらを伴う表現は結果状態が完結していることを含意するのであるから、日本語の S_1 -*hodo* S_2 よりも S_1 -made S_2 に近い、つまり「程度」ではなく「終了点」を示すことが分かる。これら両言語では暫定的な見解としてではあるが、「まで」という程度を示すことにより結果を示すような表現は存在しないように思われる。彼らの結果表現は基本的に「終了点」(*endpoint*)解釈のものようである。さてこれらの表現についても S_1 -made S_2 と同様の方式で意味を表示してみよう。

(34) a. Ion l- a bătut pe Paul până ce a murit.

John CL3_{rd}-SG M has beat-PP Paul UP-TO has die-PP

John beat Paul to death. ジョンはポールを死ぬまで殴った。

$\exists t' [become-dead (Paul) at t' \wedge beat(John, Paul) at t''] \wedge$
 $t' \subset t'' \wedge \forall t (t \subset t'' \rightarrow t < t')]$

b. Cutremurul a scuturat orașul până la trezire.

Earthquake has shake-PP town until at wakening

The earthquake shook the town awake.

その地震は町中が目覚めるまで揺すった。

$\exists t' [become-aware (the town) at t' \wedge shake(the earthquake, the town) at t''] \wedge$
 $t' \subset t'' \wedge \forall t (t \subset t'' \rightarrow t < t')]$

c. Il terremoto lo ha scosso finché si fosse svegliato.

the earthquake CL3_{rd}-SG-M has shake-PP until he became awake The
 earthquake shook him awake.

その地震は彼が目覚めるまで揺すった。

$\exists t' [become\text{-}awake (he) at t' \wedge shake(\text{the earthquake}, him) at t'' \wedge t' \subset t'' \wedge \forall t (t \subset t'' \rightarrow t < t')]$

このようにルーマニア語の結果表現(34a, b)もイタリア語の結果表現(34c)も「まで」と同様に表示することが可能である。(34a)は *John* は *Paul* をある時間区間 t'' の間殴り続け、その時間区間の最終時点 t' で *Paul* は死んだ、というものである。(34b, c)も全く同じ意味内容である。影響を与える出来事が続いている、その最終時点において結果として出来事が起こるという形式なっている。このように *până (ce)* と *fino (a)* の場合にも日本語の「まで」と同じようにその意味を捉えることができる。一言でいえば、これらの言語でも「弱い結果構文」は確かに存在するが「強い結果構文」と呼ばれるものは存在せず、*până (ce)* と *fino (a)* を付加することで R-made 解釈が可能になるということである。

6. Type C と「ほど」

ここで結果構文、結果表現についての英語の系統分類、日本語の系統分類、さらにロマンス語の系統分類を統合的に眺めてみることにしよう。結果構文の3分類で Type C と Type A、B とは違いが鮮明に存在する。この Type C には結果状態の実現を想定できるものとできないものがある。後者は Hitchcock の SEF 理論でも説明できないものであった。次の表で確認して頂きたい。

表3 英語の結果構文のタイプロジー

type	例	RS 実現?	恒常的継起説	反実仮想説	SEF 理論
A	John broke the vase into pieces.	yes	yes	yes	yes
B	Bill shook Lisa awake.	yes	no	yes	yes
C	Dave drank the pub dry	yes/no	no	no	yes
C'	Sam cried his eyes out	no	no	no	no

日本語の結果表現も「弱い結果構文」と結果状態が完結性のもの(複合動詞

と S_1 -made S_2)、結果状態が未完結的(S_1 -hodo S_2)なものとに分けている。これも確認して頂きたい。

表 4 日本語の結果表現の三分類

区分	構文	日本語の例 (対応する英語表現)
弱い結果構文	(i)NP NP RP V	a. 恵子は棒を U に曲げた。 (Keiko bent the iron bar into a U)
特有の結果表現 complete RS	(ii)複合動詞 (iii) S_1 - made S_2	b. 恵子は健司を揺すり起こした。 (Keiko shook Kenji awake) c. 恵子は健司を目覚めるまで揺すった。 (Keiko shook Kenji awake)
特有の結果表現 Incomplete RS	(iv) S_1 - hodo S_2	d. 太郎は酒場がからになるほど飲んだ。 (Taro drank the pub dry) e. 恵子は箒がバラバラになるほど掃いた。 (Keiko swept the broom to pieces)

この表では日本語の結果表現は「弱い結果構文」、「特有の結果表現(状態実現型)」、「特有の結果表現(状態未実現型)」で 3 系統に分けている。

それでは以上の 2 つの表をまとめ英語の結果構文とその意味に近い日本語の結果表現の対応関係を見てみよう。

表 5 英語/日本語の結果構文(表現)の対応関係 I 群 弱い結果構文

因果理論	英語	日本語
恒常的継起説	Type A causality 関与 John broke the vase into pieces.	弱い結果構文 causality 関与 健司は花瓶を粉々に壊した

英語の Type A と日本語の弱い結果構文とはほぼ完全に対応する。これらは動詞の意味由来の CAUSE を持つので causality は関与する。また結果状態は実現している。但し、恒常的継起説が CAUSE を与えるのではない点に注意されたい。CAUSE は動詞由来であり、その構文は恒常的継起説が説明できる因果事象に対応しているということである。

次に強い結果構文でも目的語を下位範疇化する Type B と、下位範疇化はないが結果状態の実現を含意する種類の Type C と日本語の特有の結果表現、結果的複合動詞と S_1 -made S_2 の対応関係の確認である。複合動詞も S_1 -made S_2 も結果状態は実現している。

表 6 英語/日本語の結果構文(表現)の対応関係 II 群 結果状態実現

因果理論	英語	日本語
反実仮想説	強い結果構文 RS 実現 Type B: Lisa shook her husband awake. Type C: We yelled ourselves hoarse.	causality 関与なし。RS 実現 リサは夫を揺すりおこした。我々は声が嗄れるまで叫んだ。

英語は Type B を主に、Type C の一部もこのグループに入る。このグループの結果構文は反実仮想因果説で根拠を与えられる *causality* に対応する。日本語は因果理論とは無関係であり、本章で詳説した S_1 -made S_2 の意味論によつて 2 つの事象の時間継起的接続によって因果関係的解釈が与えられる。つまり CAUSE は関与しない。

そこまでは比較的まとまりがよいのだが次のグループ以降はやや煩雑である。

表 7 英語/日本語結果構文(表現)対応関係 III 群 結果状態実現/未実現

因果理論	英語	日本語
SEF 理論	強い結果構文 RS 実現? Type C: The joggers ran the pavement thin.	causality 関与なし RS 実現? ジョッガーは舗道が薄くなるまで走った。

英語の結果構文は Type C でも原則的に結果状態が実現しているという解釈のものを含む。しかし、「ほど」という程度解釈も可能でありその場合 IV 群に移る。要点は、SEF 理論では $route < \alpha, \beta >$ が active でなければ α causes β が言えず、そのためには β が程度は完全でなくてもよいが実現していなければならぬ (4 章 2.4 SEF 理論参照)。だから “The joggers ran the pavement

thin”という Type C の結果構文は「舗道が薄くなる」ことが実現していれば III 群に入り、実現していないければその *causality* の根拠は別に求めなければならない。つまり IV 群に分類されなければならない。一方このグループの日本語結果表現 S_1 -*hodo* S_2 もこの章で詳述した R-HODO の意味論に規定する通り、結果実現に関しては曖昧である（本章 4 参照）。「ジョッガーは舗道が薄くなるほど走った」とは誇張表現なのか、それともほんの数ミリでも舗道は薄くなったのか、両方共の解釈が可能である。この「ほど」が「まで」読みになることについてはさらに後で言及することにする。

次に Type C でも結果状態が実現していない解釈のものとそれに対応する日本語の結果表現の比較である。

表 8 英語/日本語結果構文(表現)対応関係 IV 群 結果状態未実現

因果理論	英語	日本語
程度の <i>hodo</i>	強い結果構文 RS 実現せず Type C' : Pam swept the broom to pieces. Sam cried his eyes out.	RS 実現せず 春子は箒がバラバラになるほど掃いた。健司は目が飛び出るほど叫んだ。

Type C は反実仮想的因果関係論で説明されるものもあるが、それでは説明されず一番 *causality* の弱い SEF 理論で説明されるものもある。しかしそこまで一応すべて因果関係論で対応する CAUSE の存在を想定できるものである。しかし現実に結果状態が生起したのではないと思われる状況では如何なる因果関係論でも *causality* の関与を予測できない。先ほども述べたように SEF 理論においても $route < \alpha, \beta >$ が active でなければこの回路に因果関係の存在を想定できない。そうであれば Type C'、つまり結果状態が実現しないものはその「因果と思われる関係」をどう説明すればよいのだろうか。いかなる因果関係論にも対応関係がないものをどう扱えばよいのかという問題である。ここで Type C' の意味に対応する日本語の結果表現は S_1 -*hodo* S_2 で表すことができる。もちろんこの「ほど」は結果状態が実現しない「程度」を表している。ここから一つの予想が生まれてくる。この章の導入時に同様の表(表 2)を提示

したがそこでは Type C' の因果理論の欄に「?」を入れていた。この空欄に答えを与えることができる準備が整った。結論から言うと、Type C で結果状態が実現しない表現(Type C')は英語でも、もはや「結果構文」ではなく「同等関係構文」であり、程度の比較をしている表現ではないのか、と考えるのである。その意味論として「ほど」の意味論 R-HODO を置くのである。

このように英語の結果構文の一部は程度表現ではないのかという着想は、実は我々が初めてなのではない。Hoekstra(1988)は「*fake object*を持つもの、持たぬものを含めて英語の結果述語を持つ文の多くが、動詞が表す行為が高い程度(*to a great degree*)でなされていることを表現している。またこの結果解釈は文の意味自体から決定されるのではなく推論されるのである」(Hoekstra 1988: 15)と述べている。

また Napoli(1992:70)も「"Sam cried himself sick," "Sam cried his eyes out"などの表現は、極端な程度を示すだけであり、*himself* も *eyes* も *theme* 役割を持っているわけではない」と述べている。

我々はこの着想をさらに進めて、英語の Type C で結果状態が実現しないものについては「～ほど」という程度修飾的機能が中心であって結果的色彩はかなり薄い、つまり程度比較の同等構文であると考えるのである。上記の例でいえば“Pam swept the broom to pieces”や “Sam cried his eyes out”は形式的には結果構文の形をしているが、その解釈は日本語の S₁-*hodo* S₂ に近い解釈になると予想される。これについて英国人、カナダ人 2 名の英語母語話者に確認したところ、両者ともこの 2 例はともに大げさな表現であり、実際に結果状態が実現したという解釈はほぼ不可能であり強い程度を表現しているだけであるとの見解であった。もちろん彼らが心の中で、これらの英文の意味を理解する際に日本語の S₁-*hodo* S₂ に通じる意味理解を行ったかどうかは知る由もないが、彼の「強い程度」という言葉にそれが想像できる。

次にロマンス語の結果表現も加え表に示しておこう。

表9 ロマンス語も加えた結果表現の比較表

タイプ	英語	日本語	ルーマニア語	イタリア語
弱い結果構文 (Type A)	John painted the wall white.	健司は壁を白に塗った。	Ion a vopsit gard-ul alb.	Giovanni ha dipinto il muro (di) bianco.
(RS 実現) 英:Type B 日:まで ロマンス語: <i>până/fino</i>	John beat Paul dead.	健司は太郎を死ぬまで殴った。	Ion l- a bătut pe Paul până ce a murit.	Giovanni ha battuto Paul fino alla sua morte.
(RS 未実現) 英:Type C 日:ほど ロマンス語:?	Pam swept the broom to pieces.	京子は箒がばらばらになるほど掃いた。	?	?

この表は言語間の比較を簡潔に表示するために Type C は結果状態未実現の場合のみを取り上げている。この表から明瞭に分かることはルーマニア語、イタリア語ともに弱い結果構文は存在するが「強い結果構文」は存在せず、このパターンは日本語とも共通することである。また「強い結果構文」の意味や機能を担う結果表現がこれらの言語にも存在している。しかもその結果表現が3言語とも意味は「まで」であって、これも共通する。Type B や *până*, *fino*、また *S₁-made S₂* 構文は結果状態の実現を含意することも共通する。イタリア語、ルーマニア語の母語話者ともに *fino*, *până* は結果状態の実現を表すと述べており、「まで」解釈が中心であるのは間違いないと思われる。しかしこれらに関して「ほど」解釈が本当に不可能かどうかはもう少し詳しく観察してみる必要がある。これら *fino*, *până* も *endpoint* とそこまでの経路を示すのであるが、文脈によっては「程度」がその解釈に入ってくる余地はあるのではないかとも思われる。確かに結果状態が未実現の表現がこれらの言語に存在するということを明確に主張する文献、論文は著者の知る限り見かけたこともなく、母語話者に聞いてみてもその意見は明瞭ではない。⁵ これについては今後確認の必要がある。一応この表では「?」をつけておいた。

7. 「ほど」と「まで」の間

「ほど」と「まで」が同じような環境で使われ、時には互換的に使われる2つの表現が、全く異なる論理の基づくことが明らかになった。「ほど」は程度の意味論に基づいている。これはある事象（例：声がかかる）と別の事象（例：叫ぶ）の間に中立的なスケールを仲介として写像関係が成立し、ある事象の強さの程度（声がかかるほど）が別の事象（叫ぶ）の程度を描写するとした時、叫ぶという行為がその程度に等しいか、あるいは超えているということを示す。一方、「まで」は2つの事象の継続的連接性、ある事象 α の成立している時間区間の *endpoint* が別の事象の開始時間点になることを示している。

「太郎は声がかかるほど叫んだ」という場合、程度であれば本当に声がかれたことを含意せず、結果状態の実現を当然とする必要がない。しかし「ほど」は「声がかかるほど」の例でも明らかなように程度を超えていて、実際に「声がかかる」事態が起こっている可能性もあり得る。この場合、どう意味論的に理論を組み立てるのかが問題となるだろう。「ほど」は程度であるから結果状態の実現に至る程度そのものの出現を描写するが、それが本当に起こったかどうかまでは確実には伝達できない。そこで考え方としては結果状態が実現したと判断される時点で「まで」の意味論に移行すると考えておきたい。そうすることで相互に矛盾は生じない。本当に「声がかれた」のなら叫ぶ行為の最終点に近いところで「声がかかる」事象が発生したと捉えるのである。ただこの考え方にも疑問は残る。何故なら「叫ぶ」行為の最終点ではなく中間時点では声がかけ、その後も呼び続けたかもしれないからである。これについては残念ながら答えを持ち合わせていない。今後の課題としておきたい。

8. まとめ

第5章の内容の総括は前節で完結した。ここでは本章を終えるにあたって次章とのつながりを明らかにしておきたい。本章では上で述べたように英語の結果構文も Type C で、かつ結果状態が未実現であることを許す表現については「結果構文」の色彩は薄く、むしろ程度の比較を示す「同等構文」と言えるのではないかという仮説を提示した。次の第6章では英語の系統分類のテーマに

戻り、どのようにしてその3系統が生まれてきたのかを歴史的に辿り、その言語変化のあり方を Coseriu 理論の助けを借りながら一つの仮説を提案する。これは Blending 理論といわれるもので言語変化を説明するには有力な理論であると思われる。このように、英語の結果構文の3系統が辿ったと推定される道筋を我々も辿ることで、Type A、B と Type C、特に結果状態の実現を含まない Type C との間には長い時間の隔たりと人々の意識の変化が介在したことがおぼろげながら分かってくる。英語の「結果構文」が徐々にその成員を増やしていく物語を垣間みるとともに、日本語の「まで」、「ほど」という表現が実に長い間、現代にも通じる意味を持ち続けてきたことも古典の幾つかをみることで確認する。

結果構文、結果表現の意味の従来からの解説には歴史的な視点が欠けているように思われる。歴史的視点が入り初めてこの言語事象の姿が見えてくるよう感じられる。この第6章の考察がその隙間を埋めるものの端緒になればと思いつつ作業を進めることにしよう。

本章は Hamamoto(2022b)、濱本(2015)をもとに、それらを改訂、加筆してまとめたものである。

1. この議論を扱った初期論文についてのある reviewer の見解。
2. Eugenio Coseriu (1958[1973]) *Sincronía, Diacronía e Historia El problema del cambio lingüístico* 田中克彦訳(2014)『言語変化という問題 共時態、通時態、歴史』(岩波書店) 解説「E.コセリューその人間像」執筆者。
3. まずロマンス語という言葉が何を示すかが問題となり、さらにそのロマンス語の中でなぜイタリア語とルーマニア語を取り上げたのかということを説明しなければならないだろう。

小林標博士の『ロマンスという言語—フランス語は、スペイン語は、イタリア語は、いかに生まれたのか—』に従うと、ロマンス語というときのロマンスは英語の Romance から来ている。先ず中世ラテン語の ROMANICE という語があり「ラテン語ではなくローマ語で話す、書く、読む」という文脈で使われた。つまり LATINE

に対立する概念である。ローマ語とは特定の言語ではなくフランス、イタリア、スペインなどの地域で使われていた日常語の総称である（前掲書:31）。

ROMANICE は古フランス語 *romanz* に変化し、さらに逆形成により *roman* が産出され、形容詞で「日常語」を意味し、さらに「日常語で書かれた物語」も示すようになる。フランス語の影響が大きい中英語期に *Romance* として英語に入ってきた。意味は「ローマ語（日常語）」、「伝奇小説」などの意味を表す。

ロマンス語の示す対象は、ローマ語（日常語）の意味から、現状のイタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語、カタルーニャ語、オック語、サルディーニャ語などになる。

次になぜイタリア語とルーマニア語をロマンス語の結果表現を議論する対象言語に選択したのかの問題に移ることにしよう。先ずイタリア語はローマ世界での日常言語としてラテン語、ローマ文化の影響を一番強く長く受けてきた言語であり、執筆者が学部生時代イタリア語、イタリア文化専攻であったことを考慮の外においても、ロマンス語の代表とすることに異論はないと思われる。一方、ルーマニア語については前掲の小林標博士の著書によれば、ルーマニア国家の位置は古代のダキアと一致し、ローマ支配は 2 世紀初頭から始まり、西ゴートの圧迫によりアウレリウス帝がその地をローマの領土から放棄した 271 年までのわずか 170 年に満たないことから、ローマ文化やラテン語の影響する期間は極端に短く、その結果ルーマニア語は他のロマンス諸語と対照したとき特別異なって見える（前掲、416）との指摘がされている。つまり最もロマンス語らしいイタリア語とその要素が希薄なルーマニア語を研究対象とすることで考察に幅をもたらすことができると考え、この 2 つの言語を選択したのである。

4. イタリア語の *avere* と *essere* の選択については「Burzio の一般化」（Burzio's generalization: Burzio, 1986）に伴って、自動詞を unaccusative 動詞（Burzio の ergative 動詞）と unergative 動詞に分けた場合、全ての他動詞は *avere* が使われるが自動詞については主語が theme 役割のもの（unaccusative 自動詞）では *essere*、主語が agent のものの場合（unergative 自動詞）では *avere* が使われると規定される。若干の例外はあるものの一般的な原則と考えてよい。

例えば：

- (a) Giovanni ha telefonato. (他動詞)
has telephoned
- (b) Giovanni ha camminato sulla strada. (unergative 自動詞)
has walked on the pavement
- (c) Giovanni è arrivato alla stazione. (unaccusative 自動詞)
is arrived at the station

- (d) Giovanni è caduto come un sacco de patate. (unaccusative 自動詞)
is fallen as a bag of potatoes
- (e) Giovanni ha corso con il suo cane. (correre の unergative 用法)
has run with his dog 単なる走行動作を示す用法
- (f) Giovanni è corso dal medico. (correre の unaccusative 用法)
is run at the doctor's office 方向を伴う走行を示す用法

5. イタリア語の場合、一つの可能性は *finché* (「まで」を示す接続詞) で従属節に冗語の *non* が来ることがあるが、*non* を加えることで「まで」を緩め「ほど」の解釈を生み出すことができるのかもしれない。

例えば「恵子は箒がバラバラになるほど掃いた」は:

“Keiko ha spazzato (le strade) con una scopa *finché non si è rotta.*”となる。しかしこの文についても:

“Keiko ha spazzato una scopa *finché non si è rotta*”

と *spazzare* (掃く: 他動詞) の目的語位置に箒(*una scopa*)を置くことはできない。いずれにせよ今後の研究が必要である。

第 6 章

結果構文の 3 分類とその歴史発展に関する通時的考察

1. はじめに

この章では日本語と英語の結果表現に関する新しい見方を提示する。既に 1 章、2 章でみたとおり英語の結果構文については「弱い結果構文」と「強い結果構文」に分けることが基本になっている。さらに Li (2014)などの研究により「強い結果構文」はさらに 2 つに分類し、目的語を下位範疇化する強い結果構文と、下位範疇化しない強い結果構文に分ける提案が出されており、この論文でもその見解に従っている。

日本語の結果表現については、「弱い結果構文」は存在するが「強い結果構文」は存在しないと言われてきた。しかし日本語の場合でも結果を表現する複合動詞や同等性を示すマーカーである *hodo* や *made* を使えば英語の強い結果構文に対応する意味を表現できる。結局、日本語も 3 種類の結果表現が存在することになる。

この章では英語の結果構文の歴史的発展を探ることに注目する。この通時的観察は英語の結果構文は Type A で始まり、Type B に拡張し、最終的に Type C が結果構文ファミリーの仲間に加わったことを明らかにする。また英語の結果構文の歴史的発展プロセスを日本語の結果表現、*hodo* と *made* と比較すると、英語の type B や C は意味論的場の空白を埋めるために発展してきたことが分かる。我々はこの英語の結果構文の通時的拡張は blending 理論で適切に説明が与えられることを示す。またこの観察は前章の仮説、「英語の Type C で、結果状態の完結を示さないものは結果構文の色彩が薄く、むしろ日本語と同様の同等構文に近い」という考え方を補強してくれる。

この章での重要概念は通時的見解(diachronic view)、Coseriu の言語変化理論、Fauconnier たちの提唱する Blending 理論である。

この章の構成は、2 節で先ず歴史的考察の対象となる英語の 3 つの結果構文のタイプと日本語の S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*made* S_2 を確認した後、3 節で英語の 3 つの結果構文の歴史的な出現の順序を確かめる。4 節で Coseriu の言語変化理論の概略を確認する。5 節では Fauconnier らが提案する Blending 理論を歴史的な言語変化の文脈で再構成し、どのように英語の結果構文が変遷を遂げたかの合理的な説明を提案する。次に 6 節で日本語の S_1 -*hodo* S_2 と S_1 -*made* S_2 の通時的な位置を確認する。7 節は英語の結果構文の歴史的変遷、日本語の結果表現の歴史的な事実、さらに Blending 理論に基づく仮説から英語の結果構文の変化の意義についての議論を総括する。

2. 英語と日本語の因果的結果表現再考

この章では Visser の英語の統語構造の歴史的研究や OED を使って結果構文の歴史的出現を探る。また日本語の S_1 -*hodo* S_2 や S_1 -*made* S_2 構文の歴史的な位置付けについても探っていくことになる。その前に歴史的検討の対象になる英語の Type A、B、C の結果構文と、それに対照的に位置する日本語の結果表現を再度確認しておきたい。先ず英語の場合からはじめよう。

- (1) Type A: 状態変化動詞を持つ結果構文
- a. John broke the vase into pieces.
 - b. Bill painted the wall green.
 - c. Kate bent the iron bar into a U.
 - d. Bill washed his shirt clean.

これらは結果述語 RP がなくても成立する。これは動詞そのものの意味構造に CAUSE 関数と BECOME 関数が組み込まれているからであ

った。これらの動詞は意味的に完結点を持つ達成動詞である。またこれらの意味表示は簡略的に語彙概念構造で下のように示される。

- (2) a. John broke the vase into pieces.

John's action on the vase CAUSE [the vase BECOME BROKEN]
+ [adjunct into pieces]

- b. Bill painted the wall green.

Bill's action on the wall CAUSE [the wall BECOME PAINTED]
+ [adjunct green]

- c. Kate bent the iron bar into a U.

Kate's action on the iron CAUSE [the iron BECOME BENT] +
[adjunct into a U]

主語が指示する人の行為がそのまま原因となり、目的対象に変化を生じさせる。そして結果述語は意味を補足する。この英語の Type A はそのまま日本語の「弱い結果構文」に対応することは(3)で確認できる。

- (3) a. 健司は花瓶を粉々に壊した。

b. 健司は壁を緑に塗った。

c. 健司は鉄棒を U 字に曲げた。

次に英語の「強い結果構文」、すなわち Type B と Type C、またそれに対応する日本語の結果表現を再度確認する。

(4) Type B

- a. Mary shook John awake. (Dowty 1979, Li 2014)
- b. Jack hammered the metal flat. (Washio 1997, Li 2014)
- c. Willy watered the plants flat. (Goldberg & Jackendoff 2004)

(5) Type C

- a. Dave drank the pub dry. (Goldberg & Jackendoff 2004)
- b. We yelled ourselves hoarse. (Goldberg & Jackendoff 2004)
- c. The professor talked us into a stupor. (Goldberg & Jackendoff 2004)

(6) Type B の意味に対応する結果表現

- a. 京子は健司を揺すりおこした。
- a'. 京子は健司が目覚めるまで揺すった。
- b. 健司は金属が平らになるまで叩いた。
- c. 京子は花が倒れるほど水をやった。

(7) Type C の意味に対応する結果表現

- a. 健司は酒場が空になるほど飲んだ。
- b. 我々は声がかかるほど叫んだ。
- c. 先生の話は我々呆然とするほど退屈だった。

これから上記の例に近い英日の結果表現がどのように歴史の中に現れてきたのか眺めてみることにしよう。まず次節では英語の結果構文の変化、5節では日本語の結果表現の歴史上の事実を確認する。

3. 英語結果構文の通時的分析

我々は既に第2章で(i) 英語の Type C の強い結果構文と日本語の S_1 -*hodo* S_2 構造の間には強い相関関係があり、(ii) Type C の強い結果構文と他のタイプの明確な違いに気づいた。これら2つの興味深い点について、通時的観察を先ず行う。次節では認知意味論的見解、特に Blending 理論の見解に基づく仮説を提案することにする。

この仮説の提案は、英語の結果構文に対してかなり目新しい視点を提供することになるだろう。

Visser (1984, *An Historical syntax of the English Language I-III b*) は、英語の構文構造の歴史的出現を記録し分析している。神谷(2008, 2009)はこの Visser の研究を子細に検証し古英語時代 (OE: 1150 年以

前) の結果構文については、結果構文を構成する 5 つの動詞を記録している。中期英語時代 (ME: 1150-1500) には、さらに 18 の動詞が追加される。神谷の研究を基盤にして、我々も Visser (1984) の small clause の項を中心に再度探索し、OE 期と ME 期におけるこれらの動詞の年代順の出現の 2 つのリストを作成し、それらを結果構文のタイプ (タイプ A, B、および C) に関連付けてみることにする (表 1, 2)。

次に、Oxford English Dictionary から結果構文の例を探し ModE 期間と PE 期間の結果構文の例をリスト化する (表 3)。この観察は、英語の結果構文の出現を時系列に捉えることを目標にしており、そこから各タイプの出現時期の関係を明らかにすることが期待できる。表 1、2 および 3 の結果構文の例は、これまで本文で示した例文とは必ずしも一致しないがそれらの間には類似点があり、そこから各タイプの出現の歴史を把握するのには役立つと思われる。

最初に Visser により古英語期の結果構文の出現例を見てみよう。

表 1 Examples of English resultatives in OE (Based on Visser 1967)

verb	examples and glosses	type
awæscan : wash	gif ðu nabbe buteran genoge, awæsc hit swiðe clæne, if you not-have butter enough, wash it very clean	A
bindan : bind	Þæt þu mec þus fæste fetrum ȝebunde æȝhwæs orwizne That you weak this firmly bind defenceless	A
feormian : farm	Foermige man þone pŷt clæne Clean (vt.) man the pit clean	A
	[He] mec [sc. a lance] fægre foermað weak a lance fair cleaned	A
gescearfian : cut	ða wyrta ealle gescearf a swiðe smale. the herb ale cut very small	A
gnidan : grind	and gnid swyðe smale to dus grind strongly small to dust	A

(N.B. 一部の gloss は意味が明瞭ではない)

お気づきだろうが古英語期にはごく少数の例が掲載されているだけである。出てくる動詞は *wash, bind, farm, cut, grind* でその中で *feormian* は（農作業に関連して）「片づける」（=他動詞 *clean*）の意味である。これらの動詞は状態変化を含む動詞であり、Type A と判断できる。

上記の表で *wash* が状態変化動詞かどうかについては、やや疑義の起こるところである。既に、第 2 章 3.2、表 1 で影山（2007）の結果構文の分類を見た。そこで影山は結果構文を、大きくは 3 分類（I~III）、細かくは 6 分類（A~G）にし、その中で *wash* は I 類の（B）として主要なメンバーが入る（A）とは区別している。その説明を再度確認してみよう。

(8) I (B) *wash clean* タイプ：主動詞の LCS に変化結果が記載されているが主動詞の事象タイプは process である（影山 2007:43）。

ここで LCS は語彙概念構造のことであり、そこには *wash* には結果まで記載されているが、完結点を持たないためプロセス動詞であるという説明がなされている。動詞 *wash* は影山の言うように確かにプロセス動詞であり、固有の動作の完結点を持たないので状態変化動詞ではない。しかしこの語は “*to make something clean*” とパラフレーズ可能で causality と結果状態を意味に内包するので我々の Type A に加えて全く問題ないと判断する。

次に中英語の結果構文を見てみよう。

表 2 Examples of English resultatives in ME (Based on Visser 1967)

verb	year	Examples and glosses	type
brak :break	1300	And to-brak it al to smale peces And to break it all small pieces	A
laughe :laugh	1387	þey haue an herbe.. þat makeþ men laughe hem selue to deþ They have an herb..that makes men laugh themselves to death	C

beaten :beat	1399 1460	Take clene whete and bete it small in a morter Take clean white and beat it small in a mortar Bett hym blak and bloo Beat him black and blue	B
bürsten :burst	1446 1450	There came a wind and brast the dores ope There came a wind and burst the doors open He... brest oppyn þe dure. He... burst open the door.	B
chewen :chew	1425	That þey ne chewe þat ost to small The they not chew that ost to small	B
choppen :chop	1410	Take þe roote of an herbe...and choppe it smale Take the root of an herb... and chop it small	A
dyen :dye	1486	It hade need to be died other green or blew need to be died other green or blue	A
eaten :eat	13..	In þat medu sa lang þai war þat etten had it erthe bare . In that meadow so long they were that eat had it earth bare	B
floberen :soil	1377	Couthe I neuere kepen it clene...þat I ne flob it foule fro morwe tyl eue. I not soil it foul from morning to evening	A
grynd grind	1450	Take þe rote of horshele and grynde hem smale in a morter Take the root of horseheal and grind them small in a mortar	A
paint	1377	Pieres þe plowman was painted al blody , Pieris the plowman was painted all bloody	A
rub	1377	As rody as a rose rubbed his chkis As rosy as a rose rubbed his cheeks	B
searcen :sift	1440	and sarce it smothe at al sift it smooth at al	B
wipe	1200	Wassce and wipe wol clane ða eizene. Wash and wipe well clean the eyes	A
shaven :shave	1412	Hir berdes shauen he right smothe & clene . his beard shaven he right smooth and clean	B
swepen :sweep	1483	Theyr chambres were dayly made swiped clene Their chambres were daily made swept clean Tell forth,my Son, and schrif the clene .	A

schriven :schrive	1390	tell forth my son, and schrive you clean	A
stripfen :strip	1300	he dude hire strepe..naked. he dandy her stripe naked	A

ME 時代 (1150-1500) では、18 例中 10 例が Type A、7 例が Type B、1 例のみが Type C 型であった。OE に引き続き結果構文のプロトタイプともいえる Type A が増加し、それと同時に Type B も徐々に「結果構文」ファミリーの成員になりつつあるという様子が分かる。しかしながら Type C の参加はほぼない状況である。もちろん執筆者が取りこぼした例もあるだろうが、大体の傾向はこの表から窺えると思われる。

それでは ModE の時代に移ろう。ここからは OED を調べていくことにする。最初に語の定義をあげた。それからその説明に該当する例を出現の年代順にあげることにした。

表 3 Examples of English resultatives in ModE and PE (Based on OED)

1. talk: To bring or drive (oneself or another) into some specified state by talking				
	Year	source	examples	type
talk	1600	Shakespeare	They would talke themselves madde	C
talk	1623	Shakespeare	Talke us to silence.	C
talk	1711	A. Pope	Nay, run to Altas; there they'll talk you dead	C
talk	1738	S. Johnson	And here a female Atheist talks you dead	C
talk	1816	W. Scott	I talkd them to death	C
talk	1920	R. Macaulay	He...used to talk one sick about how little scope he had in his parish	C
2. run: With various prepositions and also with object complement. To bring, lead, or drive into a specified state or to a specified action by running. Frequently reflexive. Figurative.				

run	1548	W. Patten	Sum also seen in this race all breathles to fal flat doun, and haue run themselues to death	C
run	1592	R. Greene	Feare not, ile run all danger out of breath.	C
run	1637	J. Shirely	They will run him quite out of all.	C
run	1666	Robins Char	Having ran three miles, he ran himself, for then he fell down and died.	C
run	1802	L. Engelbach	As to the refreshments, I have almost run my legs off to get you the rum.	C
run	1834	J. Webb	If they [calves]are closely confined, and let out where they have room to gallop about, they will run themselves to a state of madness.	C
run	1850	<i>Jrnl. Royal Agric. Soc.</i>	To use the ordinaly phrase used by farmers, 'they run all the flesh off their bones.'	C
run	1917	<i>Outing</i> . Aug.	Half-a dozen deer.. ran the gauntlet, having first run the keepers into a state of collapse.	C
run	1898	R. Whiting	They would.. run themselves silly for two hours.	C

3. work: With prepositional phrase or adjective as complement: to bring an object into some condition.

work	1599	T.Moffett	Working themselues to death both night and day,	B
work	1727	A.Hamilton	So many innocents... would be wrought and starved to death	B
work	1919	E.M.Knox	If you refuse to rack yourself to pieces by night, and then work yourself to pieces by day.	B
work	1997	<i>Sunday Times</i>	You worked yourself into the ground to pay for your wife, Zelda's psychiatric treatment.	B

4. look: With various complements. To cause (a person or thing) to pass into a certain place, state, or condition by means of one's gaze.

look	1611	B.Johnson	Ile looke thee dead	C
look	1616	Shakespeare	Thou hast look'd thy selfe into my grace.	C
look	1694	J.Dryden	While you stay,..every Moment looks a part of me away	C
look	1766	O.Goldsmit	They had learnt the lesson of looking presumption out of countenance.	C
look	1818	S.E.Ferrier	Lady Mattilda tried to look her into decency, but in vain.	C
look	1860	A.Trollope	I really thought Mrs.Townsend would have looked him into the river when he came to her.	C
look	1919	F.F.Shannon	One of these deep-eyed facts which look us out of countenance.	C
look	1983	S.Mitchell	Let me assure you, those eyes could have looked Venice right into this room.	C

5.speak: To send to, to cause to pass or enter into another state, condition, or position by speaking. Also reflexive and with adjective complement.

speak	1684	T.Brooks	God can speak or nod you to hell in a moment.	C
speak	1781	W.Cooper	He will be found..Too just to wink, or speak the guilty clear.	C
speak	1820	A.A.Whatts	With gratitude thy bosom swelleth to him who spoke them into birth!	C
speak	1833	New Monthly Mag	He spoke himself into the Common Council.	C

6. drink: to drink (a person) out of or into some condition

drink	1597	Shakespeare	The taske he vndertakes, Is numbering sands, and drinking Oceans drie.	C
-------	------	-------------	--	---

drink	1608	E.Topsell	Where-vnto the vipers coming, easily drinke themselues tame	C
drink	1616	Shakespeare	Ere the ninth hour, I drunke him to his bed.	C
drink	1636	J.Rogers	They get beer of extraordinary strength, and..make matches who shall drink each other drunk under the bed.	C
drink	1653	H.Binning	Some boast of drinking, and being able to drink others under the table.	C
drink	1659	D.Pell	These lads drink the Land out of quiet.	C
drink	1720	<i>Humourist</i>	Drinking a man to death.	C
drink	1849	<i>Fraser's Mag</i>	He..drank himself diurnally into incoherence.	C
drink	1883	<i>R.L.Stevenson</i>	Til he had drunk himself sleepy.	C

7. laugh: With complement. To bring (a person or thing) into a particular state or position by laughing. Frequently in *to laugh (a person) out of* it.

laugh	1577	N.Breton	but made me laugh my hart sore, I wot wel	C
laugh	1616	Shakespeare	Will you laugh me asleepe, for I am very heauy.	C
laugh	1679	J.Goodman	The company..laughed the cunning man out of countenance	C
laugh	1785	W.Cowper	Whom has it laughed into reform?	C
laugh	1810	A.Charlmers	..,and shall words presume to laugh th' unhappy actor off the stage.	C
laugh	1838	J.V. Hare & A.W. Hare	Is there anybody living..who has not often been laught out of what he ought to have done, and laught into what he ought not to have done.	C

laugh	1863	C.C.Clarke	A fellow who will joke and laugh the money out of your pocket.	C
laugh	1973	<i>New York Magazine</i>	Just as we might laugh someone off the stage today who tried to perform with the aesthetic of 1900.	C

上記のデータは、ModE から PE 期に新たに出現した英語の結果構文の性質をよく示していると思われる。ここで動詞の項目として基本的には自動詞を取り上げている。もちろんこのリストは取りこぼしも多いだろうが（例えば新規に加わった他動詞の Type A など）一定の傾向は捉えることができるだろう。

各項目の最初の欄に動詞の用法の定義が記載されている。例えば *laugh* では “*To bring (a person or thing) into a particular state or position by laughing*” (笑うことにより人または物をある特定の状態や位置に連れていく) となっていて、これらの自動詞であるものがこのような結果構文の形式に組み込まれ、意味的には結果状態への変化を持つことが明瞭に示されている。

さて以上の表 1、2、3 を全て概観したうえでこれらが示すものをまとめてみることにする。

- (i) OE 時代 (1150 年以前) には、結果構文の例は少数しかないが、それらは全て A 型である。これは、英語の結果構文が Type A で始まり、動詞に由来する causality を備えたものだけが結果構文として認識されていたことを示している。この点で、Type A は英語の結果構文のプロトタイプともいえるだろう。
- (ii) ME 時代 (1150-1500) では、18 例中 10 例が A 型、7 例が B 型、1 例のみが C 型であった。Type B、C はその因果関係が語彙から派生したものではない。Type B の強い結果構文には、目的語を下位範疇化する他動詞を持つ。タイプ C の強い結果構文では目的語を下位範疇化しない動詞を持つ。この事実は、ME の

時代に、英語の結果構文は独特の意味的特徴を持つ仲間、タイプ B を獲得したことを教えてくれる。それらは NP V NP RP の形式を共有するが、因果関係の由来が異なる。

- (iii) ModE および PE (1500 から現在) に関しては、表 6 で Type B に分類されている *work* を除いては全てタイプ C に分類できる 7 つの動詞を記載している。このリストは全てを網羅しているわけではないが、一つ重要なことは Type C の結果構文は、ModE 以前には、例外を除いて全く出現していないことである。この用例について OED は例えば *talk* であれば「*talk* は話すことによって自分自身または他の人を特定の状態にする、または追いやる」と定義している。*talk* 項の最初の例“*they would talke yourself madde*”は、「話することで自分自身を狂わせる（怒らせる）」と解釈される。この訳からわかるように、動詞 *talk* はその目的語を下位範疇化していない。したがって、これは偽の目的語(*fake object*)の例である。この時代になって初めて下位範疇化しない目的語を持つ構文が「結果構文」ファミリーの新たな成員になったのである。以上の説明は、*work* を除く他のすべての表 3 の動詞に当てはまる。この *work* に関しては、他のものと同様に C に分類することも可能であるが、その目的は動詞の影響を受けているため、単なる *fake object* ではないと考え Type B とした。
- (iv) 表 3 は、英語の結果構文がそのメンバーシップのリストを完成させる最後のメンバーとして Type C を獲得したことを示している。従って、結果構文の出現順序は、Type A ⇒ Type B ⇒ Type C と考えてよいと思われる。

それでは次に、言語変化を考える視座として Coseriu 理論をとりあげ、その内容を概説することにしたい。

4. 言語変化の理論

前節で英語の結果構文というファミリーの構成要素の拡大という観点からその歴史的変遷を眺めてみた。データの不十分な可能性は残されているものの、傾向としてその共時的な変化の方向性は明らかになったと思う。古英語期に結果構文は Type A というプロトタイプともいうべきものを唯一の成員として誕生した。中英語期には原型とはかなり性質の違うもの Type B を仲間に入れた。これが同一のファミリーの仲間と言えるのは、この新規参入者は元の成員と統語的に全く同じ形態をとり、意味論的には相互にかなり違いがあるものの「原因—結果」という因果関係を持つという強力な共通性があるからである。さらに時が経て、この結果構文ファミリーに Type C という新規参入者が加わった。Type C はそれ以前のものと形態は全く同じであるが、意味的には大きくかけ離れている。Type B までには明らかな意味的素性であった因果関係も、新規のものの中には希薄なものが現れた。この新参者については全ての言語使用者が新規のメンバーとして了承するのを躊躇うような事例もあったからである。

前節の表 3 の *talk* の欄に、*talk: To bring or drive (oneself or another) into some specified state by talking* という結果構文に現れる動詞として *talk* が示されている。この定義を了解したとしても次のような例をそのまま「結果構文」の例として素直に了解できるだろうか。

- (9) Miss Kitty Perkins, who talked seven warts off my hands when I was fourteen, I no longer questioned how such things worked.

(‘Margaret Maron, *Home Fires*. 1998: 94)

「Perkins さんが 7 つのイボを話すことで取ってくれた」という意味であるが 2 人の母語話者に感想を聞くと、その Perkins さんが healer であることが分かって初めて意味が理解できたとのことである。このような新奇な用例も母語話者の運用知識に加わってくるのである。つまり「結果構文」だけでなくあらゆる構文についても新たな用例は増えており、その構成は変化し続けている。次節で「結果構文」の変化の

可能性についての仮説を提案するが、その前に「言語変化」とはどういうものなのか、どう捉えるべきなのかについて少し考えてみたい。

E. Coseriu (1921-2002)はルーマニアの言語学者であり、様々な言語の変遷を研究し「コセリウ言語学」ともいすべき独特的な学問領域を完成した学者である(エマ タマヤヌ-モリタ, 2014:411)。彼はその思考体系を『言語変化という問題』という書籍にまとめている。この本の冒頭に彼はこのように述べている。

言語変化という問題は、明らかに一つの根本的な矛盾を抱えている。そもそも、この問題を原因という角度からとりあげて、言語はなぜ変化するのか（まるで変化をしてはならないかのように）と問うこと自体、言語には本来備わった安定性があるのに、生成発展がそれを乱し、破壊すらしてしまうのだと言いたげである。

（田中訳, 2014 『言語変化という問題』:19）

言語は安定したもので変化などしないのが普通であり、変化をすればそれは秩序を乱すものとする通念がある。そのような考え方が言語変化の本質的な理解を妨げているとコセリウは考えている。

コセリウはソシュールのラングとパロールの概念的区分と、言語の共時態、通時態との区分に否定的であると言われる。しかし、実際はこれらの概念を対立的に捉え、思考の極に置いて峻別して理解することに反対なだけあって、個人の話す行為、つまりパロールから切り離して人々の集団意識の中に位置付けたラング（抽象的ラング）を想定するのではなく、言語的活動からは切り離さない具体性を持つラングを考えることを提唱しているように思える。彼は「言語は個々人の話す行為（パロール）の中にしか現れないし、話すとはいつでもある一つのラングを話すということに他ならない」と述べているのだから(第2章 1.2)。

また活動性（エネルゲイア）との関係ではエネルゲイアを伴うパロ

ールは理念としてのラングに常に先立つものであり、この意味で「言語を使うとはすでに出来上がった記号を用いる活動であると言ったのでは満足な定義とは言えないのであって記号を想像する活動と定義すべきである」とも言う(第2章 2.2)。話すという行為はすべて歴史的であると同時に自由であり、歴史的な必然、つまりラングという極に繋がっているが、他方ではまだ定まらぬ意味の創造を目指して既に確立されたラングを乗り越えて進もうとする性質も同時に持つとする。このことは我々も少し時間の幅をとって考えればよく分かる。個々の言語使用の中にも、そしてその繰り返しの中にも、既存のラングを使っているようでいてその使用は新しい意味や、使用法に関して常に創造の契機を宿しているということである。

また彼は「体系」と「規範」という概念にも独特の意味を与え、それらを駆使して言語変化を素描しようとする。先ずラングを「規範的」なものと「体系的」なものに区別する。「体系」とはある言語共同体の中で「理解されうるパロール」の色々な可能性の体系であり、言語の実現の理念上の諸形式を備えたものである。これは既に実現されたものを超えて進む可能性を示している。「規範」とは特定の言語社会、文化によって定められた「義務的に実現するべき体系」のことで既に言われたことや伝統的に言われていることを指す(第2章 3.1.3)。ここである言語の話し手を想像してみると彼の思想が良く理解できる。話し手は自分が用いる言語、すでに出来上がっている言語を使用に先立って変更することはできない。コセリウの「なぜ言語は根こそぎ変化しないのか。なぜ作り直されるのか」という問い合わせにも答えなければならない。話し手は共同体の提供する体系を利用するのであり、伝統的な規範が提供するところの実現を受け入れなければならない。言葉の本質は対話の中に現れ、それは他者と同じように話し、既に話されたように話すことが要請される。聞き手に理解されたものは、理解された限りにおいて習得され、言語知識(ラング)となり、そしてその後の表現行為のためのモデルとして利用可能になる(第3章 3.1)。変化は一挙に起

こののではなく、共同体の中の既存のモデルを利用しつつ理解されうる範囲で徐々に変わっていく。

話し手は自分の表現上の必要からその言語の規範性をどうにかして乗り越える。彼は「言語は可能性の「体系」でもあるので、それ自身を乗り越える装置でもあり、特殊な性格を帯びた道具でもある」と述べている(第3章 1.3)。

言語の性質を上述のように捉え「可能性」を内包した装置、道具としても、それでも話し手の表現意図はその大部分が既存の言語(つまり規範)によって許容された範囲にとどめられている。しかし言語は選択の可能性を備えており、話し手の話す行為(パロール)での選択は言語の変動の可能性を常に伴っている。規範に気づいていてもそれをモデルにしないこともあり得る。彼は「話し手は体系の可能性に従って自分の表現を創造する」と主張する(第3章 2.3.2)。

言語的知識の観点から見ると、体系の認識と規範の認識との間には不整合が認められる。規範の認識は教養や伝統的現実についての理解を示す。子供の言語習得を観察するとすぐに分かることだが体系の方は規範よりも習得の段階が早く来る。人は伝統的な現実を知る前に可能性の体系を学習する。年少者は規範からの逸脱を気に留めない。この体系からの創造をコセリウは「体系的創造」と呼ぶ(第4章 5.2)。

この「体系的創造」は変化を好む文化的状況では増大する可能性が高いとも思われる。同じ言語文化圏でも歴史上、言語変化を許容し寛容である時代とはパロールのエネルゲイアが相対的に強い時代ともいえよう。

以上のような「言語変化」に関する観察を理解した範囲でまとめてみよう。

(i) 言語は「体系」と呼ばれる変化の可能性を含む部分と「規範」でできてている。つまり強固な固定構造ではなく変化の可能性を内包する柔構造の部分を併せ持つ。また言語はラングを乗り越えようとする

エネルギーを持っている。

- (ii) 言語の使用には常に変化の可能性を伴う。通常は規範の許容する範囲での使用であるが話し手はその必要性に応じて体系の可能性を利用しようとする。言語使用は記号の規範性を乗り越えて創造性を発揮する契機を持っている。言語の持つ体系の変化可能性を利用し新しい使用例を作り出すことを「体系的創造」という。
- (iii) 体系的創造はそれを許容する文化環境においては増大する。
- (iv) 言葉の本質は対話の中にあり、聞き手に理解されて初めてラングに取り入れられる。

コセリウは諸言語の音韻理論的、形態論的な比較観察から彼の言語変化の理論を導き出したがこれらの言語変化に関する考え方は「構文」レベルの変化にも適用可能であると思われる。我々の定義での「構文」は特定の意味と構造を持ち語彙の一部と捉えられる言語単位である(2章2節参照)。従ってその言語単位はコセリウ流の概念である「体系」と「規範」を内包し、既存の使用法の範囲に留まろうとするベクトルと、必要に応じて変わろうとするベクトルとは常にその単位の中に存在すると予想できる。

もっとも結果構文においてもその中に「体系」と呼ばれる変化を受容する部分と、頑なに変化に抵抗する「規範」部分があり、時間の経過の中で人々の必要性に応じて体系が規範を乗り越えて今の形態に変化したのだということは、実は何も述べていないことと同じである。極めて空虚な絵空事をまことしやかに述べているだけで、何の変化のメカニズムについても言及していない。つまり「結果構文」に特化した変化の説明理論がなければ何事も説明したことにならないのだ。もちろん過去の変化の流れを完全に再現できない以上、すべては仮説である。

次節ではここで述べた言語変化の理論を念頭に置き、結果構文の変遷を合理的に、そしてできる限り説得的に説明したい。

5. Blending 理論

5.1 Blending 理論の基礎理解

言語変化について特に興味深いトピックは意味と構造が固定された組み合わせから構成される言語単位のファミリーが、そのメンバーシップをどのように拡張または縮小するかということにある。

英語の結果構文は、Type A に分類される形式と意味の対を持つ言語単位から始まり、Type B と Type C をその成員と認めることによってその範疇を拡大してきた。このプロセスを通じて、結果構文はその構造的特徴を維持しながら、新しい構成要素を受け入れるのにより適したものにするために、その意味的特徴を徐々に変えてきたように思える。これはちょうど生き物が環境に合わせて進化するように、変化を続け今日の姿になったということである。もっともコセリウは、言語というものは、変化はするが進化はしないと述べている。言語はその言語共同体の人々の必要に応じて変わり続けてきたのであって、その変化の前後で「進化」したのではないという（第 2 章）。

この「変化」を説明するメカニズムとして Blending 理論が有力な候補と考える。先ずその理論を詳細に検討し、それを結果構文の変化の議論に適用することにしよう。しかしその前に、それらの 3 つのタイプの特徴、特にそれらの形式的および概念的側面にもう一度注意しておきたい。次の例は上の表 2、表 3 からのものである。

Type A He brak it al to smale peces. (OED 1300)

- (i) 統語構造: NP V NP PP
- (ii) 意味構造:

[he act on it CAUSE it BECOME BROKEN into pieces]
(CAUSE は動詞に由来)

Type B He rubbed her cheek rosy as a rose. (OED 1377)

- (i) 統語構造: NP V NP AP

- (ii) 意味構造: [his rubbing her cheek CAUSE the cheek BECOME rosy]
(*rub* は目的語を下位範疇化するが CAUSE は動詞由来ではない)

Type C I drank him to his bed. (OED 1616)

- (i) 統語構造: NP V NP PP
(ii) 意味構造: [I CAUSE him GO to his bed by drinking(competition)]
パラフレーズ: [I drink so much that he goes to bed]
(*drink* は対象である *him* を選択しない。CAUSE は動詞由来ではない)

これら 3 つのタイプは、NP V NP RP という同じ形式的パターンを共有している。意味的特徴に関しては、Type A は状態変化動詞を持ちそこから CAUSE が派生する。Type B は、目的語を下位範疇化する非状態変化動詞を持つ。Type C は目的語位置に来る要素を選択しない動詞がくる。後者の 2 つの CAUSE は、動詞からではなく、別の場所から派生している。

OE 時代には、花瓶を壊したり、家にペンキを塗ったりといった固有の状態変化動詞を含む出来事を表現する Type A の結果構文のみが使用されていた。この制限は、状態変化動詞のみを認可する Type A の制約から来るものである。しかし人々は「誰かを揺すったり、頬をこすったりする」ことも結果の状態を生成することに気が付き、現実にこれらの動作が原因となって結果が生じるのであれば「揺する」や「こする」というような結果状態を含意しない動詞でもこれらを使って結果の状態の出現を表現したいと考えるようになった。そこで彼らは意図する意味を表す非状態変化動詞を、使い慣れた形式である NP V(他動詞) NP RP という構造に適用し、彼らの意図の達成に成功した。話し手と聞き手はこれらの発話の意味を難なく理解することができたからである。

より多くの人々がこの新しい結果を表現する構造を使用するにつれて、この新しい結果構文 (Type B) が人々の間でより定着するようにな

なった。その後、この拡張プロセスは NP V (自動詞) NP RP という形式の違う構造にも適用され、別のタイプの結果構文も生まれることになった。この最後の拡張 (つまり Type C) は元のプロトタイプからかなりかけ離れているためその構造はまだ人々の受け入れの過程にあり、全ての人がこの構文のあらゆる出現を受け入れているわけではない。

Type A タイプ (プロトタイプ) から Type B、さらに Type C へのこの拡張プロセスは、形式的な同一性によって強く動機付けられ、blending のプロセスを通じて構造の新しい創発的な解釈を可能にしたと考えることができる。この考え方を詳しく見てみよう。

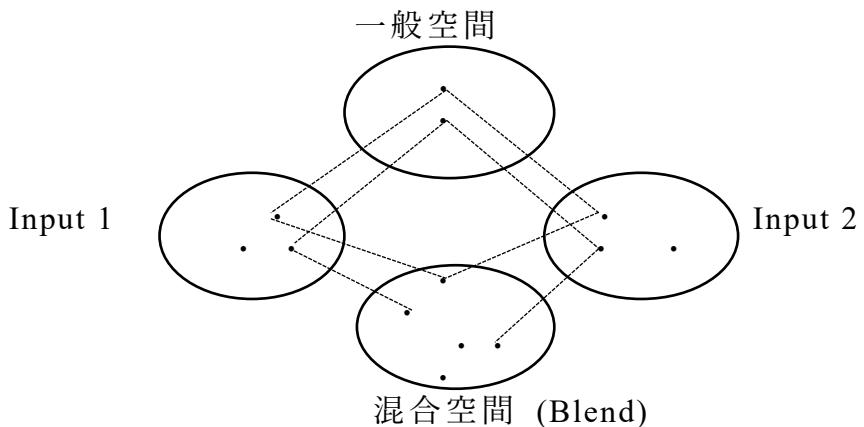
Blending 理論とは統合的ネットワークの包括理論で概念メタファー理論とメンタルスペース理論の 2 つの理論から統合的、発展的に生まれてきたものである。これは意味創出の動態的側面を説明する理論である。ここで blending とは形式的な構造と概念構造の融合を含む一般的な認知プロセスであって、複数の入力ドメイン (Input 1, 2) からの部分的なマッピングが混合空間に行われ、その混合空間 (Blended space: Blend) において新しい創発的特性を含む概念が生成することができるとする考え方である (Fauconnier and Turner 1996)。

以上をもう少し具体的に Fauconnier and Turner (1998, 2002) からみることにしよう。彼らは意味構築の動的な側面を説明するために、Blending 理論の中で統合ネットワークの理論 (the theory of integration networks) を生み出した。統合ネットワークは複数のインプット空間 (input spaces) でできていて、各インプットの要素が写像関係によってリンクされている。ネットワークには、両方のインプットに共通するのに十分な抽象的情報を提供する「一般的空間」 (generic space) が含まれている。さらにネットワークは「混合空間」 (blended space) または「ブレンド」 (blend) ともいわれるものを持つ。これは、創発構造を含むスペースである。つまり、どちらのインプットにも含まれていない情報をそこで作り出すことができる。

Blending Theory の基本概念図 (図 1) は 4 つの空間とそれらのネ

ネットワークで構成されている。もっとも Multiple blending ではネットワーク上の空間はさらに増加する(Fauconnier and Turner 2002:292)。

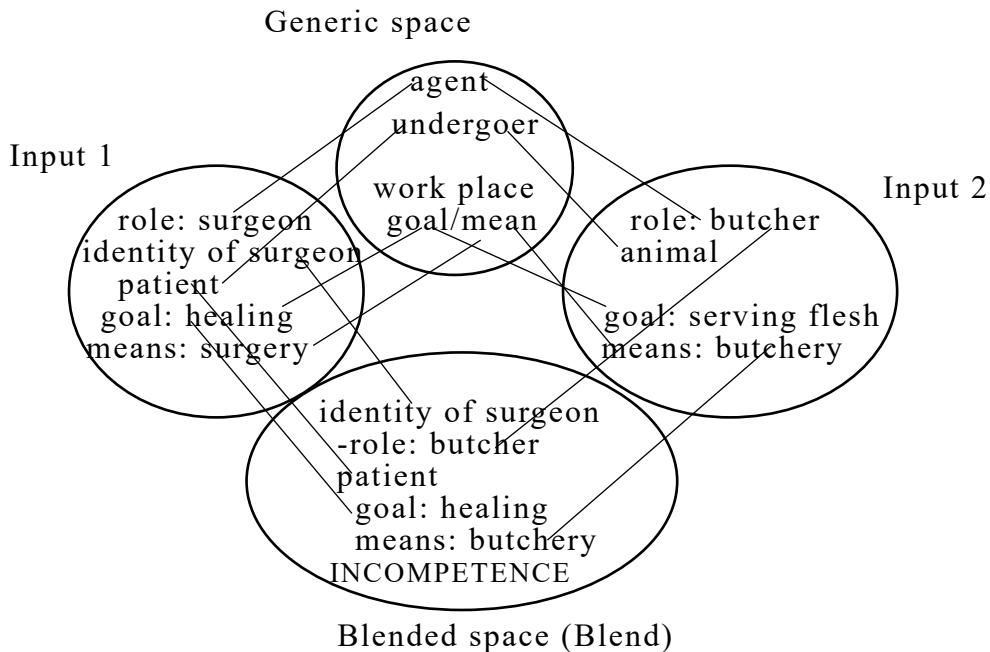
図 1. 基本統合ネットワーク (Fauconnier and Turner 2002)



上に一般空間(generic space)があり 2 つのインプット空間の共通する要素が含まれている。2 つのインプット空間から幾つかの要素が混合空間と写像関係を結んでいる。Blending 理論は当初メタファー表現の解釈などに使われていた。例えば“*That surgeon is a butcher*”などのメタファーでは関連する 2 つの領域、surgeon と butcher はそれぞれ高度な専門職であり、そのままではなぜ否定的な意味がこのメタファーから出てくるのか説明できない。否定的な意味は「創発的意味」(emergent meaning)であり統合的ネットワークのメカニズムによって現れてくるものである。各領域ではプラスの価値がある概念でも blend 空間で組み合わることにより否定的な意味が出てくる。

図 2 . That surgeon is a butcher の blending 理論での説明

(Evans and Green, 2006: 404)



Input 空間から blend 空間への投射は選択的であって外科医の identity と肉屋の技術、それと外科医の役割（患者の病気を治すために身体にメスを入れる）と目的（患者の病気の治癒）が blend 空間で組み合わされることになる。対象は患者が surgeon の input から写像される。そうすると blend 空間では肉屋の技術しか持たない外科医が患者を相手にして治療を施すことになり、そこから INCOMPETENCE というどちらの input にもない意味が創出される。

一般に Blending は下に示す 4 つの基本プロセスで構成される。

- (10) a. selective projection(選択投射): input 空間のそれぞれから要素を選択し blend 空間に投射すること
- b. composition (合成) : blend 内で概念を合成すること。例えば surgeon である個人 X が input space 1 から来て、input space 2 から来た butcher role, means と融合(fusion)する。
- c. completion (完結): blend の中の情報、パターンなどを補充、

拡充して充分な情報量にすること。例えば blend で fusion された X: role & means: butcher というものから長期記憶から外科医の仕事が想起されその外科医 X が incompetence であることが導出される。

d. elaboration (表象想起) : 無意識的な表象の想起。詳述化。

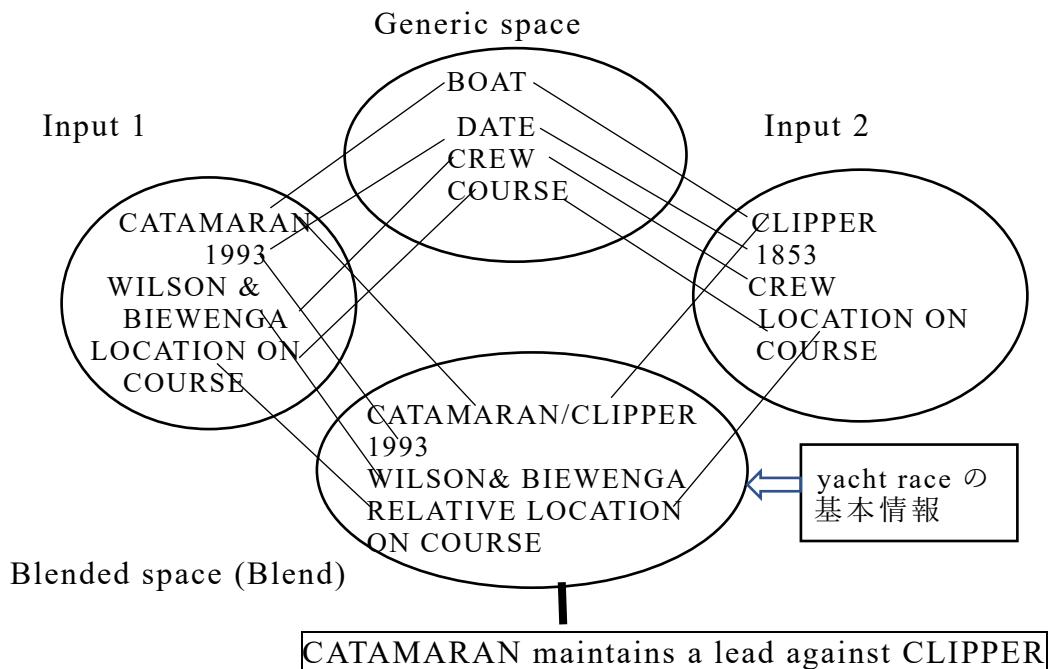
肉屋が患者を切り刻む様子の想起など。

この Blending 理論はメタファー理論としてだけではなく時事的話題の解釈 (例えば “*In France, Bill Clinton wouldn't have been harmed by his relationship with Monica Lewinsky*”) などにも使われた。この例の場合、Input space 1 はアメリカ合衆国での政治家の位置、Input space 2 はフランスでの政治家の立場、blend では場面はフランスが選択されそこで 「Clinton がフランスの首相であれば」という composition(fusion)が実行され、そこから completion、elaboration と進み「Clinton は政治家としての地位を脅かされることはない」という創発的見解が導出される。

もう一例少し言語解釈よりの例を考えてみたい。これは良く知られた Boat race のシナリオである。次の英文 (ヨット専門誌 *Latitude 38* からの引用)を理解するためには下に示す統合ネットワークを想起できなければならないという。

(11) As we went to press, Rich Wilson and Bill Biewenga went barely maintaining a 4.5 day lead over the ghost of the clipper *Northern Light*.

図 3 BOAT RACE : blend (Fauconnier and Turner 2002:64)



(11)は現在(といっても 1993 年のこと)カタマラン型ヨット *Great American II* でサンフランシスコ-ボストン間のレース出走中の Wilson と Biewenga は *Northern Light* が 1853 年に打ち立てた記録を 4.5 日リードしているということを述べている。これが分かるには以下の思考をたどる必要がある。

Input 1 は 1993 年時点のレース参加の状況を構成する要素が配置されている。Input 2 には 1853 年当時のレースの状況を構成する要素が配置されていて、Generic Space には 2 つのスペースの共通要素が取り出されている。共通する要素項目がなければ比較、たとえは成立しない。先ず同じコースである。そしてヨットとそのクルーがそこに置かれる。

Blend にはカタマランとクリッパーの 2 艦が写像され同じく写像された同一のレースコース上に配置されている。クルーは Wilson と Biewenga だけが写像されている (selective projection)。その同一コース上での比較がなされる (composition/fusion)。この比較には RACE

frame からの情報が補填される(completion)。blend 内での比較によりカタマランのリードが読み取れる。2 艘のヨットが大西洋の波を切って進む場面が思考者の脳裏に浮かんでくるかもしれない(elaboration)。

Blending 操作の基本的要件とその操作の流れをもう一度整理する。先ず比較、比喩のために複数の input 空間が設定され（もちろん思考者の頭の中に）、その複数の input 空間内の要素に共通事項があり、その各 input から選択された要素が blend 空間に転写され(selective projection)、そこで異なる空間からの要素の組み合わせが行われ（composition）、また比較され(elaboration)、新たな事項が創出されるというのが標準的な流れである。

しかしここで根本的な疑問に突き当たる。各 input からの要素の選択はどのように行われるのか、思考者はどのように要素を選び出し、blend 空間に導いていくのかという点である。私の理解する範囲では Fauconnier and Turner (1996, 1998, 2002) はこの点には触れていないようである。彼らの blending プロセスも推論の一種であるのに、これを論理的な考察のパターンとは結び付けず、人間の認知作用とのみ説明している。我々は従って、blending 理論はこのままの形では不十分であり、なんらかの論理操作との対応付けが必要であると考える。また blending での思考とそこからの新規の生成物が思考者による試行錯誤の結果たどり着いた組み合わせによると考えるのは不合理である。言語解釈は Relevance 理論でも前提にされるように同時並行処理的、合目的的であるからである。人間は全く無意味な、処理労力に見合う文脈効果の得られない言語処理は実施しないし、またしても放棄する (Sperber and Wilson 1986)。

我々はこの blending 操作に論理的根拠を与えることが可能な合理的思考法を求める必要があると思う。我々は今最も適切な候補は仮説形成推論であると考えている。次にこの仮説形成推論の話に移ろう。

5.2 Blending と Abduction

人間の推論方式には演繹、帰納、仮説形成推論の 3 タイプが知られている。これは記号論学者パース (Pierce 1986) が唱えた学説である (Aliseda 2006, 濱本 2009、内田 1986、米盛 1981)。このうち、仮説形成推論が唯一、新しい事実や法則の発見に関わっていると言われる。 Aliseda (2006) から引用しよう。

人間の推論研究の中心的テーマは我々が住んでいる世界の理解を我々に与える説明の構築である。広く言うと仮説形成 (abduction) は人を困惑させる観察 (puzzling observation) を説明するための推論プロセスのことである。仮説形成推論は観察 (証拠) から説明にたどる思考であり不完全な情報を伴う多くの様々な場面に特徴的な推論のタイプである。

例えば「事務所の灯りが消えている」という観察があればそこから可能な説明として停電、スイッチを切った、電球が切れたなどの選択が生まれる。仮説形成推論は 2 つのフェーズがあり仮説設定 (hypothesis construction) と仮説選択 (hypothesis selection) が考えられる。

仮説形成推論は帰納推論とよく間違われる (Aliseda 2006: 33)。仮説形成推論は事実を前にしての説明の導出であり、いったん説明が規則化されればそこからは帰納推論の一部となっていく。帰納推論は多くのサンプルからの一般的説明への帰納プロセスであるが、仮説形成推論は単一の観察からその説明への推論である。似ている点は両方とも演繹とは逆方向の推論であることである。

極めて単純化した例を考えてみたい。ある人が犬と出会い、その犬は愛想よく彼に尻尾をふり近づいてくる。彼は驚いた。そんなことが何度も起こった。そこで彼は “Dogs are friendly” と一般化した仮ルールを発見する。このようなルールがあるので犬は愛想がいいのだと納得するのである。ここまでが仮説形成である。その後も、彼は出会う犬、

出会う犬、例外なく *friendly* なので、この仮ルールを規則化する。これが帰納推論である。

パースによると仮説形成推論は 3 つの段階を経るという (Aliseda 2006: 35)。

- ①事実を説明できる。
- ②検証されるまでは *suggestion* にとどまる。
- ③検証されるべき多数の説明仮説の中で最良の説明が最終的に選ばれる。

この最初の段階を見てみよう。(12)は基本構造を単純化したものである。

(12) (i) ϕ

(ii) $\theta, \alpha \rightarrow \phi$

(iii) α

(a) abductive novelty: $\theta \rightsquigarrow \phi$

(b) consistency: $\theta \rightsquigarrow \sim \phi$

θ : 既存の知識、規範

ϕ : 観察事実 (しばしば驚き、困惑をもたらす)

α : 推論結果

例えば地動説の発見の場合を考えてみよう。天体の運行観察(ϕ)があり、それは既存の知識 θ からは ϕ を導けない(abductive novelty)。困ったことになった。しかし地球が回る(α)なら観察事実(ϕ)の通りになる。また既存の知識 θ は「 ϕ ではない」ことを含意しない。そこから $\alpha \rightarrow \phi$ という推論規則を発見する。さらに「地球は回る(α)」という結論に到達する。この場合、発見対象は α だけではなく推論規則 $\alpha \rightarrow \theta$ でもあることに注意が必要である。

それではいよいよこの仮説形成推論を *blending* に組み込んでみよう。先ほどの *That surgeon is a butcher* の例で考えよう。ある人がこの文の発話を聞いた。これは新規の表現である。しかしながらネガティブな感じは伝わってくる。しかしその人は外科医であって肉屋ではない。この文だけからは否定的意味は出てこない。既存の知識、状況理解では意味は不明である。しかし「その外科医が肉屋だ (α)」とは「その医者はその程度の腕前だ」(composition/fusion)と捉えれば「それは不適当である (ϕ)」(completion)という結論になる。

Blending は新規の比喩的な表現を仮説形成推論で理解していく手順でもあり、その推論を確かめる装置なのである。

Input 1 から医者の *identity* を、Input 2 から *butcher* の役割や使う手段を選択(selective projection)したのは、そうすれば意味が分かる規則(fusion/completion)に到達できるという見込みがあるからである。見込みを立て、それを同時並行的に確認するプロセスが *blending* なのである。*Boat race* のシナリオはどうだろうか。もう一度英文をあげよう。

(13) As we went to press, Rich Wilson and Bill Biewenga went barely maintaining a 4.5-day lead over the ghost of the clipper *Northern Light*.

下の解説では *blending* の概念と *abduction* の概念が混在して出てくるので混乱を避けるために *blending* の概念は () に、*abduction* の概念は [] に入れて整理することにする。1993 年時点このニュース (13) を聞いた、あるいは読んだ人は、最初は当惑するだろう。Rich Wilson と Bill Biewenga は遙か昔の幽霊船 *Northern Light* 号と競争し、リードしているというのだから。これが[驚くべき観察事実 ϕ]である。この読み手はしかし、Input 1 に 1993 年のレース参加者とその競争状況を置き Input 2 に過去の *Northern Light* 号と競争の状況を置く

(selective projection)と共に項の存在に気づく。さらにもしこれらの 2 艇を同一のコースにおいて(composition)、比較すればよいのではとも気づく $[\theta, \alpha \rightarrow \phi]$ 。その操作を *blending* に組み込んでいく(completion)。つまりそれぞれの Input から必要な要素を blend に選択的に写像する。その blend 空間で Rich Wilson と Bill Biewenga の現在のタイムと過去の *Northern Light* 号のタイムとの比較をしてみて(fusion/composition)、初めて(11)の意味を完全に理解できる(completion)/ $[\phi \wedge [\theta, \alpha \rightarrow \phi]]$: α の発見]。つまりここでも *blending* は *abduction* の気づきと確認を同時並行的に行う装置になっているのである。

以上が「結果構文」の歴史的変化を説明するための準備である。我々が確認したことは以下の 4 つの事項であった。

- (14) (i) コセリウ流の「言語変化理論」、
 - (ii) blending 理論
 - (iii) 仮説形成推論
 - (iv) blending と abduction の同時並行処理的関係

以上の 4 項目の内、言語変化理論と abduction との関係がまだ見えてこない。思い出してください。コセリウは言語には「規範」と「体系」の部分を持ち、規範は既に言われたように話すこと、他者と同じように話すことを要求する。また「体系」は変化を受け入れる言語の部分であり、その言語共同体で聞き手が理解する範囲で言語の変化を許容する。このことを仮説形成推論の仕組みで書き換えてみよう。

- (15) 仮説形成推論から見た言語変化
 - (i) ある言語共同体で新規な用例が使われた。これが観察事実 ϕ である。
 - (ii) 現状の規範ではその意味は不明瞭である。
abductive novelty: $\theta \nrightarrow \phi$ にあたる。
 - (iii) しかしこの新規表現は既存の規範から否定されるものではない。

consistency: $\theta \rightsquigarrow \phi$

- (iv) 聞き手は既存の知識にある想定 α を加えてみる。そうすると ϕ の示す内容が見えてくる。これが $\theta, \alpha \rightarrow \phi$ に相当する。
- (v) 話し手は α を言語知識に加え、そのルール $\alpha \rightarrow \phi$ も規則化する。

5.3 ME 期の結果構文の変化

以上が抽象的な「言語変化」のプロセスである。これを具体的に結果構文の変化のプロセスに当てはめてみよう。

時代は ME 期、英語話者のラングには結果構文として Type A のみが既存の知識 θ 、コセリウのいう「規範」の中に存在する。先ず架空のシナリオを考えてみよう。シナリオには仮説形成推論のプロセスも加味することにする。

(16) ME 期の結果構文の変化：Type A から Type B へ

ME 期の英国。人々は “*Ken broke it all to small pieces*” (OED 1300) のような表現は結果構文で表現できていた（表 2 参照）。また「Ken が Mary の頬をこすって Mary の頬がバラ色になった」などの状況を目撃し、原因一結果の連鎖の存在を感じる。しかしその時期には結果構文ではその状況は描写できない（困惑する事実 ϕ ）。使用例が規範 θ にないからである (abductive novelty $\theta \rightsquigarrow \phi$)。

人々はそれでも状態変化のない活動を伴うシーンの「原因一結果」を描写したいと考える。一方彼らの規範には使用可能な文法リソースとして、「ケンは花瓶をバラバラに割った」のような Type A の表現が存在する。それは NP V NP RP の構成を持ち V は状態変化他動詞であり CAUSE を持つ。

ある人が心の中で *Ken rubbed Mary's cheek rosy as a rose* と呟いてみた。それは NP V NP RP と形式こそ全く同じであるが動詞は非状態変化動詞であり CAUSE がない。しかしこの新規の構文に従来か

らの意味構造[*NP's V CAUSE NP BECOME RP*]を対応させてみたところ意味が充分分かることも内心で確認した(θ , $\alpha \rightarrow \phi$)。

それを他者にそのまま発話してみた。つまり他者との対話で使ったのである。その相手は少し怪訝な顔をしたがやがて肯定的に応じた(α の社会的承認)。意味は伝わったのである。

やがて同様な状態変化を伴わないプロセス動詞で表現される結果表現、*Ken shook Mary awake*なども使われるようになって来た(α : Type B の拡散)。

上記のシナリオでは Type A の結果構文の言語知識が θ である。「ケンがメアリーの頬をこすってバラ色にした」と伝えたい内容が ϕ にあたる。“*Ken rubbed Mary's cheek rosy as a rose*”という新規の用法は発見された α になる。そして既存の知識 θ のもとで $\alpha \rightarrow \phi$ が成立するというのが新知識でありこれがラングに加えられる。状態変化を伴わない動詞を使った文でも、構造を全く既存の結果構文 Type A と同じにすることで、その構文でも *NP's V CAUSE NP BECOME RP* の意味を伝えることができる事が確立されたのである。

上記のようなシナリオは、blending 理論で構成してみることができる。人々に発話欲求がおこり心に¹統合ネットワークが設定される。統合ネットワークには 2 つの Input 空間が含まれる。1 つは説明したいシーンに関連するもの(ターゲット)でありもう 1 つは既存の文法リソースに関連するもの(ソース)である。一般空間(generic space)には *syntax*、*action-doer*、*under-goer*、および *resultative state* に関連する項目が含まれておりマッチング操作と空間間の接続を動機付ける。次に選択的射影プロセスによってそれぞれの input 空間から混合空間(blend)へ、推論を完了するのに十分な情報が射影される。Blend に投影される情報が構成され完成する。追加の情報構造は構成と完成の結果として現れる。最後に、精緻化プロセスも、blending 特有の構造の生成に貢献する。

以上のこととを以下の図 4 で検討してみよう。

図 4. Blending operation to produce Type B based on Type A

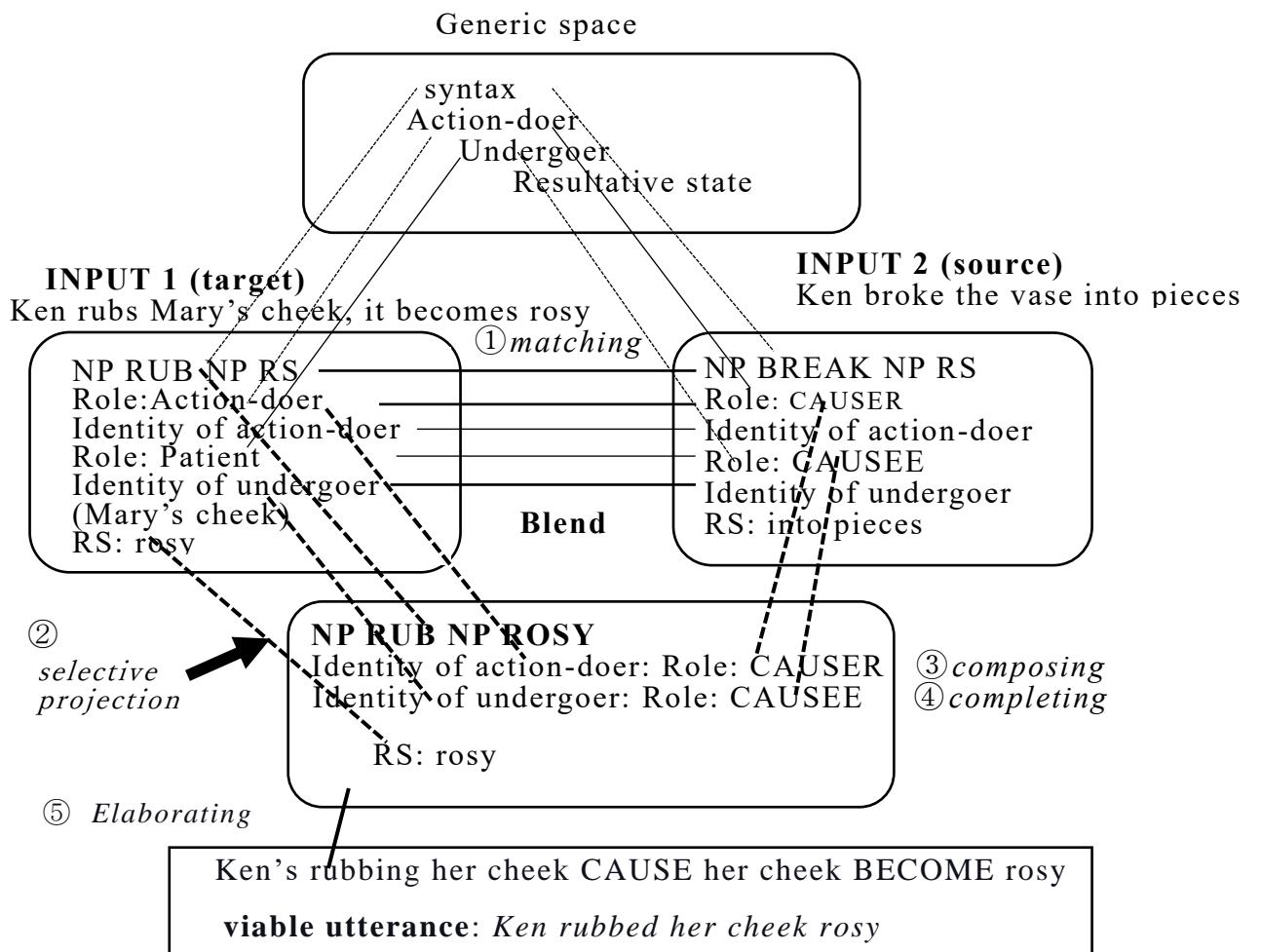


図 4 での blending 操作は次のように進行する。

- ① 人々は(16)のようなシナリオを認識すると統合ネットワークをセットアップする。マッチングプロセスにより 2 つの input 空間と generic 空間に文の統語構造、参加者として *action-doer*, *undergoer*、それに RP が共通項目としてあげられている。Input 1 には新規に表現したい内容に関する情報が置かれている。構文 NP RUB NP RP が準備され、参加者は *action-doer* と *patient* がある。Input 2 には既存の知識（規

範) として、構文は Type A 情報 NP break NP RP が来ている。

共通する参加者である *action-doer* の Input 2 での役割は CAUSER、*under-goer* は CAUSEE になっている。

- ② 選択的投影 (selective mapping) は、input 空間から *blend* にいくつかの構造を選択的に投影する。
- ③ *blend* では選択的に投影された構造が合成 (composing/fusion) されて、情報が補完され完結 (completion) する。ここで注意しなければならないことは、*syntax* は input 1 のものが写像されている。つまり NP RUB NP RP が選択されている。その *action-doer* の *identity* (Ken) が CAUSER の役割と組み合わせられ *under-goer* の *identity* (Mary's cheek) が CAUSEE の役割と組み合わされていることである。これは、*action-doer* (Ken) が CAUSER で Mary's cheek (CAUSEE) をバラ色にすることを意味する。
- ④ 完結プロセス (completion) には、背景情報を活性化する誘導的スキーマが含まれる。例えば「頬をこすっても、頬が必ずしもバラ色になるわけではないがこの場合はバラ色になった」というものである。
- ⑤ 最後に、精緻化 (elaboration) の過程で [Ken's rubbing Mary's cheek CAUSE it BECOME rosy] が完成する。

上述のような blending 操作を様々な非状態変化動詞との間で繰り返し経験していくことでタイプ B の結果構文としての形式と意味の組み合わせが言語共同体内で確立されていく。そして Type B 自体が定着し (entrenching) 文法の一部として確立する。

5.4 ModE～PE 期の結果構文の変化

言語変化に関してコセリウの見解で一つ追加しなければならないものがある。

言語は間主観的であるため、話し手は他の人が理解できる方法で話さなければならない。人々が理解したことは、言語知識（言語）の一部となり、その後の発話行動のモデルとなる。聞き手は、話し手が何を言っているのかを理解することに关心があるだけでなく、話し手がそれをどのように言っているのかにも关心がある（コセリウ 1958[1973]: ch.3 1.3）。

彼によると、言語は言語コミュニティで共有されているため、根本的な変化に抵抗する。言語変化は既存の規範からの大きな逸脱を受け入れない。徐々に変化するということである。それを念頭に Type C への変化を想像してみよう。ここでも想像上のシナリオを思い浮かべてみよう。

(17) ModE-PE 期の結果構文の変化：Type B から Type C へ
16世紀の英国、Shakespeare (1564-1616)が活躍し印刷技術も向上し、出版物も増えて読書人口も拡大を続けていた。演劇も盛んであり人々は英語の表現の幅の拡張を求めていた時代である。結果構文についていえば Type A、Type B は当然のように使用されていたが（表 3 参照）、人々は *drink*, *run*, *laugh*, *talk* などの（自動詞や、他動詞でも目的語を下位範疇化しないものが）描写する動作にもそれを原因として結果と呼べるものが付随することがあることに気づいていた。例えば「笑って人を眠らせる」、「死ぬまで走る」、「大海が干上がるまで飲む」などのように他者だけでなく自分自身にも行為の影響が及び、それが何らかの事態の変化を起こすような状況の描写の必要性は身の回りに常にあった。そして人々はそれらの状況を簡便に表現したいと願った。

既に CAUSE を含まない動詞を持つ構文、つまり Type B であっても Type A との構文上の形式の同一性から causality を付与して解釈することができるようになっていた。それであれば他動詞でなくとも、た

とえ本来は自動詞であっても、それに CAUSE を付加して解釈することに進むのは自然の成り行きでもあった。そこに Shakespeare が登場する。彼は無数と言っていいほどの Type C の結果構文の実例を人々にもたらしたのだ。

ここからは Shakespeare が英語にもたらした Type C 結果構文の幾つかを紹介する（表 3 参照）。Shakespeare がその劇中で「ああ、お気の毒に、侯爵が任された仕事は浜の砂の数を数え、海原の水を飲み干そうとするに等しい」（松岡和子訳『リチャード II 世』）というセリフを：

(18) Shakespeare の Type C 1

“Alas, poor Duje, the task he undertakes is numbering sands and drinking Oceans dry.” (Richard II. ii,146, Shakespeare 1597)

と表現してもこの新奇な言い回しを問題なく世間は受け入れた。

またアントニーとクレオパトラで悲劇の女王クレオパトラがアントニーとの思い出に耽っている場面、「あの時、私が大笑いをしたら、あの人は堪忍袋の緒を切った。あの晩、私が大笑いをしたら、あの人は堪忍してくれた。翌朝 9 時前、私はあの人を酔わせて寝かしつけた」（松岡和子訳『アントニーとクレオパトラ』）というところを：

(19) Shakespeare の Type C 2

“That time? O times! I laughed him out of patience, and that night I laughed him into patience, and next morning, Ere the ninth hour, I drunk him to his bed.” (Antony and Cleopatra. II, V,21 Shakespeare 1616)。

と表現した。ここでは 3 つも結果構文、しかも Type C を連続し、簡便にしかも滑らかに描写することに成功している。長々と文を繋いで描写していくはこの自然のリズムと緊迫感は生まれない。冗長なところ

が微塵もない。劇の場面を想像し声に出て読んでみてほしい。

(20) “*I laughed him out of patience, and that night I laughed him into patience, and next morning I drunk him to his bed.*”

2つの事象を一つにし、無駄なく簡潔に事象間の関係を含意する。ここに結果構文の神髄が出ていると思う。劇にはなくてはならない表現方法と言ってよい。

さらに例を続けよう。『から騒ぎ』の第二幕。領主のドン・ペドロとメッシーナの知事レオナートは姪のビアトリスをめぐって立ち話をする場面である。

ドン・ペドロ：夫のことが話題になるのが許せないのだな。

レオナート：それはもう。言い寄ってくる男を片っ端から馬鹿にして追い払ってしまいます。

ドン・ペドロ：あれならベネディックの妻に打ってつけだろう。

レオナート：ああ、とんでもない。殿下！あの二人が結婚でもした日には、一週間とたないうちにお互いしゃべり倒して気がくるってしまいます。（松岡和子訳『から騒ぎ』）

この場面の英語表現は：

(21) Shakespeare の Type C 3

DON PEDRO: *She cannot endure to hear tell of a husband.*

LEONATO: *O, by no means. She mocks all her wooers out of suit.*

DON PEDRO: *She were an excellent wife for Benedick.*

LEONATO: *O Lord! My lord, if they were but a week married they would talk themselves mad.*

(*Much Ado about Nothing* II, I, 331. Shakespeare 1600)

ここでも結果構文が 2 つ現れ、簡潔な描写で場面の流れを作り出している。

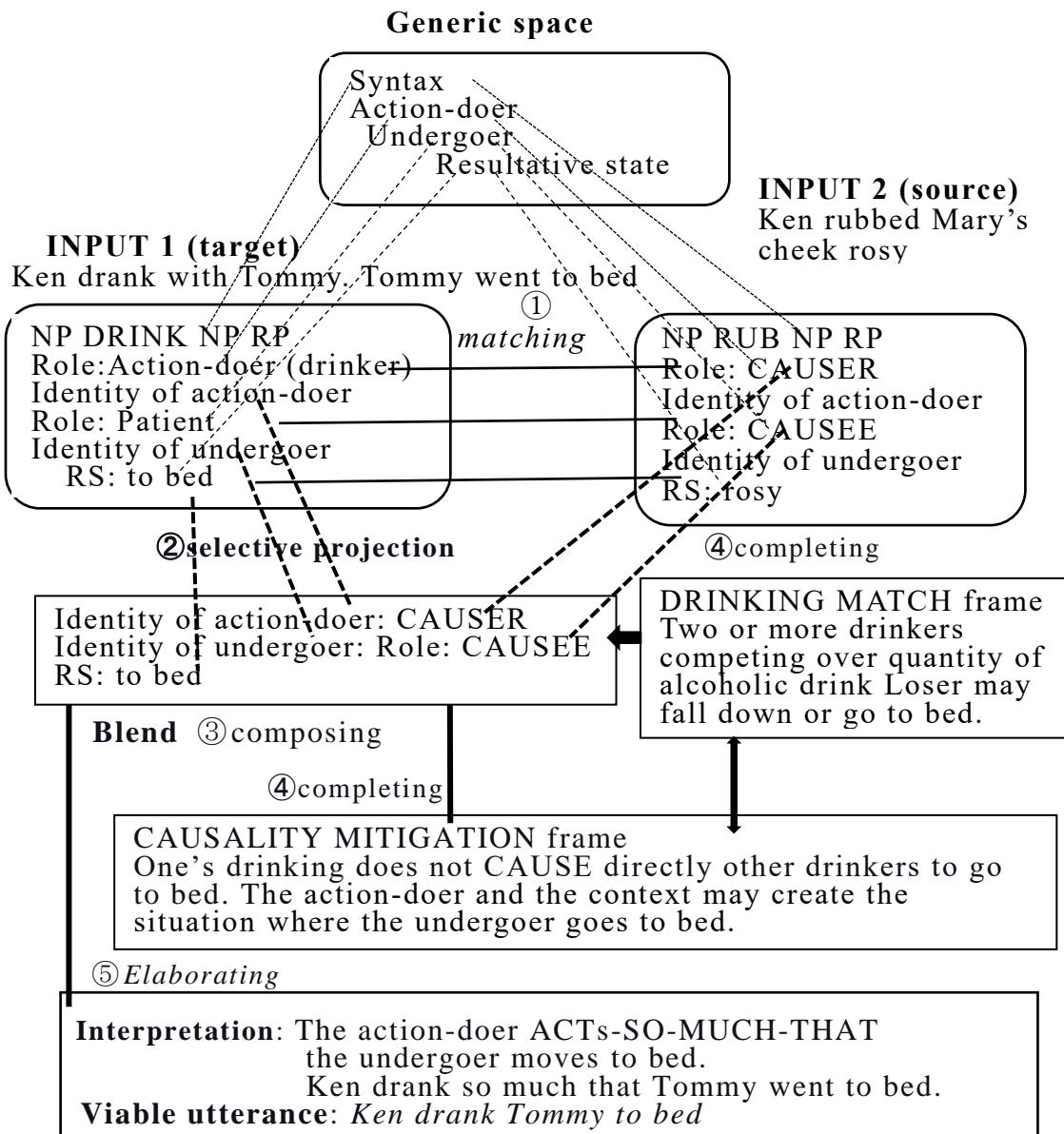
このように Shakespeare 一人とっても彼の作り出した Type C の使用例は無数に存在する。先の表 3 はこの時代の新しい結果構文の例のごく一部でしかない。

ここでコセリウの言葉「体系的創造はそれを許容する文化環境においては増大する」を再度思いおこしてほしい。この時代は「体系的創造を許容する時代」だったのである。

さて、このような Type C について、劇作者の頭の中の創作活動と、人々の受容過程を blending 理論で再現してみよう。

Input 1 に target 情報を配置し、Input 2 に source の情報を配置しその対応を確認する(①matching)。彼らは酒の飲み比べの場面で“*Ken drank with Tommy. Tommy went to bed*”を簡潔に表現するには Input 1 の登場者を、Input 2 の意味構造 NP's V [CAUSE NP BECOME RP]に対応させねばよいということを仮説形成推論によって予測している。要素を選択的に写像し(②selective mapping) Blend 内で結合する(③composing)。さらに背景情報を *drinking match frame* と *causality mitigation frame* より補充する(completing)。最後に elaborating により必要な表現を得る。この一連の操作が下の図に描かれている。

図 5 . Blending operation to produce Type C based on Type B



この blending は、完了段階までは図 4 と同じである。Input 1 の action-doer と undergoer の対象者が Input 2 からの CAUSER と CAUSEE の役割と結合する。その段階で 2 つの背景情報がアクティブになる。1 つ目は drinking match フレームでありこれは飲酒者がアルコールの量を競い合い、多くの場合敗者は床に転がったりテーブルの下に横になったり寝てしまうことがあることを背景情報としても

たらす。2つ目は causality 緩和フレームであり、飲み比べにおいてある人の飲酒行動自体が競争相手を寝かしつける直接的作用 (direct causality) はないことを情報として与える。CAUSE と CAUSEE は直接の因果関係を示すものではない。行動参加者と文脈が複合的に作用し相手が寝てしまうという事態になることがあるというよう緩和されて解釈される。

この全ての情報は精緻化段階(elaborating)の作用により「Ken は相手の Tommy が寝てしまう ほど 飲んだ」(*Ken drank so much that Tommy went to bed*) という「程度」解釈を生み出し、それを人々は *Ken drank Tommy to bed* と表現できることになる。つまり、因果関係的色彩が薄められて「程度」解釈に移行するのである。

異なる動詞による blending プロセスを何度も経験することで人々の言語知識 (ラング) の中に Type C も定着し最終的に文法の一部として認められるようになる。²

6. 日本語の特定結果表現の通時的観察

結果構文に関しては、何度も言うように日本語も英語と同様、語彙起源の因果関係を持つ弱い結果構文を持っている。英語の Type A は OE 時代に存在し、Type B は ME 時代に家族の一員になり、Type C は 15 世紀以降に結果構文のファミリーに加わった。

日本語の複合動詞の構文や、*S₁-hodo S₂* や *S₁-made S₂* などの固有の結果表現は、英語の Type B と C にほぼ意味と機能において対応していることはもうすでに述べた。これらはこれから見るように、上代 (万葉集の時代) から継続して使用されてきたのである。以下の例を考えてみたい。(国立国語研究所 2022 年版より引用。日本語歴史コーパス ver. 2022.3 <https://cird.ninja.ac.jp/chj/>):

(18) 結果の複合動詞の例

- a. 奥山の真木の板戸を 押し開き しゑや出で来ね後は何せむ。

(759年 万葉集 11巻 2519)

b. 待賢門をうちやぶりてわめきて駆け入りけり。

(1246年 平治物語 待賢門の軍の事 新編全集 41 450)

c. 男を刺し殺し首搔き切って捨ててんげり。

(1250年 平家物語 実盛 新編全集 46 43)

d. 義朝をただ一矢に射殺すべかりしものを、助け置きて扶けたれば、今は親の敵になりぬ。

(1223年 保元物語 為朝生捕り遠流に処せらるる事 新編全集 41 385)

以上は複合動詞の例である。「押し開く」は *push the door open* に対応する。また「打ち破る」は *strike the gate down* 「刺し殺す」は *stab him dead* にあたる。「射殺す」は *shoot him dead* である。結果を表す複合動詞はこのように古い時代から多数使われてきたことが分かる。次に「ほど」を見てみよう。

(19) S₁-*hodo* S₂

a. 返し口々したれど忘るほど推し量らなん

(974年 蜻蛉日記上 新編全集 13 172)

b. もの聞かむとおもうほどに泣く稚児

(1001年 枕草子 にくきもの 新編全集 18 66)

c. 平家三万余騎が中へをめいて駆け入りもみにもうで火いづるほどに攻めたりける。

(1250年 平家物語 倶梨迦羅落 新編全集 46 38)

(19a)は「返歌をそれぞれ口にしたけれどたいしたできではなく忘れるほどなので（忘れてしまったので）推し量ってください」ということである。典型的 S₁-*hodo* S₂ の例ではないが「返歌の出来が悪く忘れてしまうほどだった」ということなのでこの「ほど」は明らかに程度

を示している。(19b)は「どうして泣いているのか聞こうかとおもうほど泣いている子供」という意味で「にくきもの」の一例になっている。典型的 S_1 -*hodo* S_2 の例であり「ほど」はここでも程度である。(19c)平家の軍勢が揉みにもめて火が出るほどに攻めてきた」という意味で「ほど」は程度であり、攻め方が大層強烈だったことを表現している。ここでは実際に火災が起こっている。これも典型的な S_1 -*hodo* S_2 表現である。次に「まで」の例を見てみよう。

(20) S_1 -*made* S_2

a. 道にて、車持の皇子血の流るまで打ぜさせたまう。

(900年 竹取物語 新編全集 12 36)

b. いへにきても「などまがまがしく」ととがむるまでいみじう
泣かる。 (974年 蝶蝶日記上 新編全集 139)

c. いと忍び難がたく、苦しきまでおぼえたまへば、
(1010年 源氏物語 夕顔 新編全集 20 154)

d. 一条の大路、所なく、むくつけきまで騒ぎたり。
(1010年 源氏物語 葬 新編全集 21 21)

(20a)は『竹取物語』でかぐや姫に求婚した車持皇子が偽物の宝物を献上し、それを暴露した職人たちを血が出るほどお仕置きをした場面。実際に職人たちが血まみれになったのだから結果状態は実現している。(20b)は「家に帰っても、どうしてそんなに不吉に泣くのかととがめるほど泣いた」との意味で、泣き止まぬ作者を兼家がたしなめる場面である。(20c)が『源氏物語』夕顔の巻で「光源氏が夕顔のことを思い、それでとても忍び難く苦しいとまで感じる」という描写の場面である。(20d)も『源氏物語』葬の巻、「一条の大路が怖いと思うまでの見物の騒ぎだった」と述べている。以上の例は実際に結果状態が起こるまでを指し示している。典型的な S_1 -*made* S_2 の例である。

このように日本語固有の結果表現 (SRs) は長期にわたってその機能を保持してきたように思える。日本語の場合にはもともと弱い結果構文が存在し、強い結果構文にあたる表現も S_1 -*made* S_2 や S_1 -*made* S_2 、あるいは複合動詞がその意味を伝えてきたため、英語のように何らかの blending 操作によって結果表現を弱い結果構造から強い結果構造に拡張する必要は歴史的に存在しなかったのである。

つまり英語の場合、因果関係に関する意味領域に空白があったのでその意味領域の空白を埋めようとして結果構文の領域がかなり強引に拡大された。最後期の Type C では、未だにその受容性の判断に差があり、それらを受け入れるかどうかについての軋轢を生じてきている。

一方、日本語の場合、古来より意味場の空白領域は存在しなかったのである。このように、弱い結果構文と日本語特有の結果表現との意味場の分離は長期にわたって平穏に共存してきたのである。このことを図により明示しよう。

図 6 結果構文・結果表現の意味領域

因果関係の全意味領域	英語	日本語
	OE Type A 出現 ↓	古代 弱い結果構文
	ME Type B 出現 ↓	古代から現在
	ModE~PE Type C 出現 ↓	結果複合動詞 S_1 - <i>hodo</i> S_2 S_1 - <i>made</i> S_2
	?	

7. まとめ

この章での取り上げたテーマは(i)英語結果構文の通時的分析、(ii)コセリウの言語変化理論、(iii) Blending 理論、(iv)仮説形成推論、(v)日本語の結果表現の歴史的検証と多岐に亘った。それらが全て結びついて結果構文、結果表現の変遷の模様を我々に教えてくれる。

英語の結果構文の通時的分析によってその出現の順序が明らかになった。つまり Type A < Type B < Type C である。このような言語変化については一定の理論的理解が必要でありコセリウ理論がそれを提供している。言語は社会共同体の共有物、つまり「間主観的」存在であるから、変化もそれが理解できる範囲で徐々に起こってくることが分かる。既存の言語知識（ラング）が言語運用（パロール）により変化していくのである。Blending 理論はこのような言語変化の理論を取り入れることで歴史的言語変化の理論としても有用であることが明らかになった。

さらにこの理論にはその真の駆動力ともいえる人間の基本推論能力である仮説形成推論の存在がある。人は当惑したり、既存の規範の束縛に苦しさを感じたりする時、そこを乗り越える方策を探る。人は常に合目的的に要素を選択し組み合わせ、推論の予想するように言語の新しい形式と機能を創造するのである。結果構文の場合には Type A と Type B の統語上の共通点をピボットにして、状態変化動詞でないプロセス動詞も因果関係を表現できるのではないかという仮説形成推論に基づき、そのような変化を blending により創造したのである。

ここからさらに Type B から Type C に変化するには英國の時代背景も大きな要因となった。文学が盛んになり、劇も多数上演され、人々もより色彩豊かな言語表現を求めたのである。そのような環境の下に Shakespeare らの作家が登場し、数多くの Type C の結果構文を人々の共有する言語知識（ラング）に付け加えていった。結果構文の歴史はある意味では英國の文化史的一面も持つのである。

最後に日本語の結果表現の歴史も我々に重要な事実を明らかにした。それは英語の結果構文とは状況が大きく異なることも明確になっ

た。我々の言語は、古くからの表現を育み伝えてきたのであり、そのことが古典を探ることで見えてくるのである。

結果構文、結果表現をめぐる歴史の旅は我々に様々なことを思い出させてくれる。我々に備わった、それがなければ変化が推進されないという意味で神秘的な推論能力の存在、文化環境と言語変化の関わりや、偉大な個人が言語社会に残すレガシーとその恩恵の大きさ、変化とそれに対する抵抗という矛盾する要素を抱えた言語というものの性質、その間主観性とコミュニケーションのあり方、さらに言語が今後どのように変化していくのかさえ、それとなく我々に教えてくれるのである。

1.このような統合ネットワークが意識上に起こるのか、それとも無意識下なのか、無意識と意識の中間領域に起こるのかは不明であるが後に述べる仮説形成推論も含めて言語知識は Jackendoff (2002)の言う「機能的心」(f-mind)の働きとしておくことにする。

2. Li (2014:9) は彼の実験によって 3 つのタイプの結果構文の受容性に大きな違いがあることを指摘している。定着性の高さの順序は彼によれば Type A > Type B > Type C である。これはこれらの歴史的出現の順番にもなっている（出現順は Type A→Type B→Type C）。

第 7 章

総括と展望

1. 結果構文の 3 分類と因果関係—第 1 章～4 章に関連して—

この論文の作成に入る前に、「結果構文」に関する多数の書籍や論文を前にして「このテーマはもう語りつくされているのではないか、さらに付け加えることなどないのではないか」と思った。しかし実際に様々な文献、資料にあたるうちに存外語られていないことも多いこと、また数多くの驚くような事実の存在に気がつくことになった。

第 2 章で取り上げた英語の結果構文の分類については、「弱い結果構文」と「強い結果構文」がよく知られていた。様々な学説を読み進めるうちに「強い結果構文」について目的語を下位範疇化するかしないかで二分する方法 (Li 2008, 2014) が正確で良いのではないか、「弱い結果構文」と併せて、概ねこの 3 系統で意味的な差異は捉えられると考えるに至った。そしてその 3 系統を Type A、Type B、Type C と呼称することにした。

しかしその後、第 3 章で結果構文の様々な理論の展開をまとめながら、さらにこの構文の例を見ていると Type C の実例の中に結果状態の実現を含意しないものが多数あることに気づき、それらはもはや結果構文の範疇を外れているのではないかとも思ってきた。英語の結果構文は実はさらに分岐していく過程の最中にあるのではとも思えてくる (Type C で結果状態の出現を⑦含意する、⑧含意しない、⑨両様可能とし区分すると Type A、B と併せて 5 系統: 本章 5 節参照)。その問題意識が第 5 章での議論に繋がり、そこでの結論に反映されている。

第 4 章では因果関係理論をとりあげている。我々がある事象と別の事象との間に「因果関係」があると感じ、それを表現する一つの手段

が結果構文であり結果表現である。従って我々がどのような事態を因果関係と理解しているのか、逆に結果構文や結果表現の示す因果関係とはどのようなものかを理解することは結果構文や表現を深く理解しようとするために必要な要素だと考えた。これが因果関係理論を考えてみようとした動機である。このような動機に基づいて因果関係の哲学を調べていくうちに、結果構文を哲学的因果関係論との対応のもとで考究しようとする先行研究が極めて少ないと感じた。次に述べるのは因果関係とそれを表現する言語に関する私の素朴な問題意識である。

因果関係理論としては Hume をその源とする恒常的継起説、Lewis が発展させた反実仮想的因果理論、Hitchcock の構造的等式フレーム理論、そして最近多くの研究者が注目する確率論的因果理論と様々な学説が提唱されてきた。それらの文献を読みながら考えたのは「因果関係とは一本に絞られるのかどうか」、「因果関係は客観的に実在するのか」という 2 つの疑問である。最初の疑問は様々な理論は因果関係を別の角度から見ているだけで、因果関係自体は単一のものなのか、それともそれ自体が多様なものなのかという問い合わせであった。これについて私は因果関係には 2 つの出来事間の結合の強さが要素としてあり、そのことが諸理論の併存に関連していると考えるようになった。「ある事象が起こると別の事象が必ず起こる、その結びつきが強固なもの」、あるいは「ある事象が起こると別の事象が起こることもある」程度のものというように結合には強弱が認められる。そして結合の強固なものが恒常的継起性、つまり規則的な因果関係であり、英語の結果構文では Type A がその描写に使われる。日本語（またロマネス語）ではこの現象の描写にしか結果構文は使われない。また「人を揺さぶっても相手が目を覚ますとは限らない、しかし今回は実際に相手が目を覚ました、もし揺すらなければ目を覚ますことはなかっただろう」と思われる事態もある。このような事態は反実仮想的因果論の範囲で説明でき、英語の結果構文では Type B が概ねその状況を描写する。日本語では *S₁-made S₂* や複合動詞構文がこれらの事態を描写

する。さらに「ジョッギング走者の一団が長年走ったので舗道が薄くなつたようだが、彼らが走らなかつたならば舗道は薄くならなかつただろうとは明確に言えない」というような、原因一結果の関係が極めて弱い場合には構造的等式フレーム理論がその微かな因果関係を可視化する。英語の結果構文であれば Type C の特殊例がこのような事態を描写できる。日本語なら S_1 -*hodo* S_2 が使われる。

このように 2 つの事象間の因果にはその強弱があり、それに応じて各因果関係理論がその因果を検知し、対応する表現がそれを描写するというような構図になると思う。そういう点で考えれば、英語の結果構文は因果関係の強弱にうまく対応していると言える。日本語やロマンス語では強い因果関係のみを結果構文で描写することにし、その他の弱い因果関係はより具体的にその関係を記述する方式を採用したといえるだろう。

2 つ目の疑問は、因果関係自体が客観的には存在せず、観察者が現象に投げかける解釈に過ぎないのではないかという問い合わせであり、この研究の当初から今に續く根本的疑問である。例えば Hume の理論にしても現象そのものの中に因果が存在するのではなく、2 つの出来事間に必ず起る事態を観察者が「因果関係」と呼んでいるだけのようである。また Lewis 説は因果を命題間の問題に置き換えている。2 つの事象 c 、 e を含む命題 C と E を考え「 $\sim C$ ならば $\sim E$ と言える場合」に e causally depends on c であるとする。この「言える場合」とは誰が言えればよいのか、つまりは観察者の解釈なのではないかとも思う。外世界の事象を命題間の関係に置き換えて解釈して本当にそれで良いのかという疑問がついて回る。しかしあれど観察対象の事態は存在し、それを描写する表現も存在する。問題になるのは対応する事態が客観的には存在しないのに言語表現は存在する場合、それが「一般因果」の問題だ。頭の中だけに「因果関係」が想像される場合である。これについて次に述べる。

因果関係理論研究は欧米では一種のブームのようになっており関連著作も次々出版されている (Beebe, H., C. Hitchcock, & P. Menzies,

2009; Paul, L.A., & N. Hall, 2013; Kutach, D., 2014; J. Pearl, M. Glymour, & N.P. Jewell, 2016; Mumford, S., & R.L. Anjum, 2013 など)。

このブームの背景にあったのは完璧と思われていた Lewis の反実仮想的因果関係論に、第 4 章でも紹介した先取り (preemption) の問題

(2人の狙撃手の問題を思い出して頂きたい) に対処できないという欠点やその他の問題が指摘され、その改善への動きが加速してきたことがある。この中でも Hitchcock による「構造的等式フレーム理論」は画期的なもので、このおかげで結果構文での難問であった “*the joggers ran the pavement thin*” のような preemption を含む場合の因果関係が説明できるようになった。但し最近の因果関係理論をみても未だ本格的議論がなされておらず、それが結果構文の意味論分析にも影を落としている「一般因果」という難問がある。今までいわゆる結果構文として研究対象とされてきたものが、実は「単称因果」 (“*Tom shook his wife awake*” のような過去形で主語が単称の事例) に関するものばかりであって「一般因果」については哲学的探究もなされていないばかりか、意味論的研究も一切なされていないようである。ここでいう「一般因果」、あるいは「総称因果」とはこれも第 4 章で紹介したが、“*Mothers lull their crying babies to sleep*” のような総称文を扱う結果構文に関わる因果関係である。これは過去に起こった事態を扱うのではなく話者の頭の中の判断を描写している。このような事態を説明する因果理論については議論されていないし意味論でも全く議論されていない。この現状を見ると結果構文の意味論理解は、当初考えていた「もう語りつくされたのでは」という予測とは異なり、まだまだ深化させなければならないと思われる所以である。

2. 因果と還元性—第 3 章 結果構文の意味論に關連して—

第 3 章では *causality* をどのように研究者が扱っているのかがテーマであった。彼らの間に一つの共通する問題意識を発見する。それは *causality* がどこから來るのかというテーマに絡んで CAUSE を回避する、あるいは他の要素に完全に還元してしまうとする着想がみられる

ことである。これは CAUSE という関数を、因果関係を示す意味論の記述の中に取り入れて事足れりとするだけでは、実は何も解決しないと気付いた研究者たちが、観察可能な事態のあり方に因果の源を探ろうとした試みの表れであろう。因果関係論でも恒常的継起性や反実仮想文の成立に因果を還元しようとしていることは先ほど述べたが、この動きと意味論での動きとは軌を一にしている。中でも Rothstein (2003, 2004)の理論は整合的で、3章で指摘したように欠点もあるものの、後の第5章での日本語の S_1 -made S_2 構文の意味論にその考え方のエッセンスを取り入れさせてもらった。英語の結果構文の意味論分析に使われたアイデアが日本語の一見、結果表現とは思えない S_1 -made S_2 構文の意味分析に有用であった事実は「因果関係」の捉え方の認識に通底する基盤があることを示している（同時に言語相対性の問題も潜んでいるが）。また多少穿った見方をすれば、日本語では「まで」や「ほど」を使って因果関係を表現しているということは、ある意味で既に因果関係を還元して表現しているとも言える。

3. ロマンス語との共通性と言語相対性—第3章と5章に関連して—

第3章で結果構文の意味を捉えようとする様々な学説を読み進めるうちに、日本語には「弱い結果構文」はあるものの「強い結果構文」は存在しないという事実は確かにそのとおりであるが、そのパターンは実はルーマニア語やイタリア語にも存在することに気が付いた。この発見も驚きであった。さらに「強い結果構文」の意味や機能を引き受ける「結果表現」もこれらの言語に共通に存在し、しかもその中核的意味は2つの事象の継起的接続のあり方に「原因と結果」の解釈を委ねる「まで」表現になっていることが分かり、人間の認知機能の共通基盤の存在を感じた。同時に、異なる結果構文、結果表現の作用パターンを持った諸言語の話者間では、人間として基本的な世界理解の方法である「因果関係」についても、思考の違いが言語相対性という形で存在するのではないかとも思ってきた。もし因果関係が客観的事実としては存在せず、人が投げかける解釈にすぎないとすれば

さらにその可能性は深まる。ある事態を見て、英語話者は自分の馴染んだ結果構文が *causality* 表現の道具であることから、因果的に弱い事象の結合にも因果的色彩の解釈を与えるかもしれない。一方、日本語話者なら自分たちの馴染んだ因果的意味の薄い時間の連接性による「まで」解釈をその同じ事態に投げかけることになるかもしれない。

2つの異なる事象の間に起こった「因果的出来事」を我々が「まで」や「ほど」を使って伝達しようとする時でも、英語話者ならば結果構文という一つの形式にはめ込んで伝えようとする。この時、両言語の話者は同じ事態を見ても同じように因果を捉えていない可能性が存在するのではないだろうか。

例えば“*He cried his eyes out*”や“*She swept the broom to pieces*”などのような「誇張表現」あるいは「イディオム的表現」の場合には結果事態が出現していない状況の描写と予想される。これらの場合、結果述語は主動詞の動作の程度を修飾するものであって、そこから読み取れる結果はあくまで間接的であり程度表現の部類に入ると思われる。しかし英語話者がこれらの表現にどの程度の因果性を関連付けて発話しているのかは本当のところは分からぬ。

第6章での結果構文の変化の動向の議論の際に紹介したが OED には既に *talk* の意義として“*To bring or drive (oneself or another) into some specified state by talking*”と載っている。しかし“*Miss Kitty Perkins, who talked seven warts off my hand when I was fourteen...*” という例には多くの他言語話者は（母語話者も）解釈の際、首をかしげるだろう。この表現は「まだ」にも「ほど」にも対応せず意味的手がかりがない。これは「7つのイボが手から取れた」というように結果状態が実現した事態を描写しているが *talk* にそのような事態変化の意味を我々は読み込めない。「イボが手から取れるまで/ほど話した」では意味不明である。この例に限らず、英語話者がどのような因果性を結果構文、特に Type C に込めているのかは、結局我々には充分には分からぬのではないだろうか。

第5章で日本語の結果表現の形式的な意味理論を展開したがその過

程で、よく似た環境で使用され、時には相互交換が可能な「まで」と「ほど」という表現が全く違うロジックに支えられているらしいことも意外であった。また「ほど」が程度であることから、比較の標準であってそれが示す事象は事実でなくてもよいということが日本語の *S₁-hodo S₂* 構文の意味論に誠に好都合に働くのみならず、英語の Type C の意味解釈にも役立つことが分かった。但し、先ほどの「7つのイボ」の例でも分かるように、「ほど」と結果構文の Type C の幾つかについては、状況の解釈の点で完全に一致しているのではないということは記憶しておかねばならない。

4. 結果構文と結果表現の通時的観察—第6章に関連して—

第6章は英語の結果構文と日本語の結果表現の通時的な分析である。Type A が結果構文として OE に出現し、ME 期には Type B がメンバーに加わり、さらに ModE 期以降、Type C がそのカテゴリーに参入した。この順序も予想した（あるいは期待した）通りの結果が資料の分析から得られた。これも驚きであった。Type C の変容は続いている、本来の自動詞にかなりむりやり状態変化の意味を付与した Type C の例の出現（Miss Perkins の例）や、Type C' のように結果事態の実現を含意しないものと変化が続いている。この結果構文の変化を追いかけていくうち、Coseriu の主張する「うつりゆくこそことばなれ」ということが実感を伴って理解できた。

第6章ではさらに、英語の結果構文の変化をただ追いかけるのではなく、変化のプロセスを可視化する試みを、blending 理論を使って行なった。この blending 理論は、異なるものの共通性のある複数の *input* から選択的に要素を *blend* 空間に写像し (*selective mapping*)、そこで新概念の基礎を組み立て (*composing*)、関連する幾つかのスキーマから必要情報を補填し (*completing*)、それを基盤にして総合して (*elaborating*) 新概念を完成させるという一連のプロセスである。

これは「新概念の創発的誕生をうまく説明している」とも言えるが、同時に「出来すぎた話で虚構に過ぎない」とも言える気がしていた。

この blending 理論には「なぜこの理論で想定しているように人の思考は合目的的に推進していくのか」の論理が欠けているように思える。そこで Peirce の「仮説形成推論」を用いて、それを blending プロセスの推進力にしてみることにした。この試みにより、プロセスの進み方に方向性があることが説明できたと思う。しかしこのようにして出来上がった創発プロセスが本当に結果構文の歴史的变化の背後に存在したのかどうかはもちろん明らかではないし知る由もない。「虚構」であるのは確かであるが、ある程度説明力のある虚構だと信じたい。

また第 6 章では日本語の結果表現(SRs)の歴史的变化を国立国語研究所の『歴史コーパス(2022)』を利用して探ってみた。もちろん日本語においても形態、音韻、構造、意味変化を続けてきたのだが、この結果表現に関しては上代（万葉集の時代）から現在までほぼ同形で、意味もほぼ同じまま受け継がれてきていることが分かった。英語は結果構文の構成メンバーが時代とともに増えていき、その表す意味も変化を受け多様になってきた。つまり英語は意味空間に隙間があり、それを歴史の中で補充してきたが、日本語の結果表現は古来の意味空間を守り続けているとの印象である。

この英語の結果構文の歴史の中で Type C の増加と英国の文芸の興隆の時期とが一致することも興味深い。16世紀後半から17世紀エリザベス朝の英国ルネッサンスの時期、新しい社会的、文化的変化の中で人々が新しい表現を積極的に取り入れようとする時期だったこともあり、劇作家たち、とりわけ Shakespeare の創造によるものが多量に英語の中に取り入れられていった。確かに Coseriu の示唆するように「体系的創造」は変化を好む文化的状況では増大する可能性が高いことは事実であると思われる。同じ言語文化圏でも歴史上、言語変化を許容し寛容である時代とはパロールのエネルゲイアが相対的に強い時代であり、言語変化を許容する風潮と天才的な才能の存在との間には大いなる関係があることが明確に示されている。言語は文化の対象であり、文化の対象において厳密なもの、実証的なものは「自由と意図性」であり(Coseriu 1958 6章 3.1.1)、この「自由と意図」の体現者

が Shakespeare をはじめとするこの時代の劇作家たちであったのである。

この論文をまとめながら頭の中で形を成していった「因果」と「結果表現」に関するイメージがある。「バラバラに壊す」、「薄く切る」などという結果状態の出現を確実に伴う動作を描写する際、つまり因果関係が明確で、ある結果が生じることを物理的な動作が保証する事態の記述には結果構文を使う。ここまで日本語もロマンス語も英語も同じである。しかし因果関係が薄まって、「誰かを目覚めさせようと揺すった」や「花に水をやったら倒れた」などの事態のように、動作が結果を伴うことが 100 パーセント保証されず、たまたまそうなったというような状況の描写には日本語やロマンス語圏では結果構文の使用をあきらめて、原因が結果をもたらしたことを還元し 2 つの事象の時間的継起性や程度の重なりでその関係を表現する。一方、英語話者は「それも因果である」と強弁し結果構文を使い続け、やがてごく希薄な因果性の事象まで結果構文で描写する。

出来上がったイメージとは「因果の存在に鋭敏な言語、強い因果にのみ反応する言語」というものである。そしてこの構文の拡大の時期、開放性とヒューマニズムが溢れた英國ルネッサンス期において人間心理の描写に鋭敏な感受性を持ったシェイクスピアを含む作家達は、因果関係の存在にもその鋭敏さを發揮し冗長性のない引き締まった表現を次々と作り出し、微妙な因果の存在を知らしめる表現を世に送り出したのである。最後にあと 2 例見てみよう。

(1) 捕らえられた兄の釈放を願い出た妹のイザベラのセリフ

But man, proud man,
Dressed in a little brief authority,
Most ignorant of what he's most assured,
His glassy essence, like an angry ape
Plays such fantastic tricks before high heaven
As makes the angels weep, who with our spleens

Would all themselves laugh mortal

W. SHAKESPEARE *Measure for Measure* (1623) II. ii. 126

けれど人間は、傲慢な人間はつかの間の小さな権威をかさに着て、自分の本質がガラスのように脆いということを知らず、まるで怒ったサルのように、天に向かって奇怪な道化を演じ、天使たちを泣かせています。その天使たちがもし人間のように笑いの源である脾臓をそなえていたら、死ぬほど笑うにちがいありません。

(松岡和子訳 『尺には尺を』 ちくま文庫)

(2)ナポリ王に仕える老顧問官のゴンザロのセリフ

GONZALO : Will you laugh me asleep, for I am very heavy?

W. SHAKESPEARE *Tempest* (1623) II. i.

笑い声で私を寝かしつけていただけますか？ひどく眠くなってきた。

(松岡和子訳 『テンペスト』 ちくま文庫)

「笑い」が人が「死ぬ」ことの原因になることは日本語でも「死ぬほど笑う」と言えるように想像がつく。しかし「笑い」が「眠りにつく」ことの原因になることは想像がつきにくく、日本語で「ほど」でも表現できない。「笑い声で私を寝かしつけていただけますか」と具体的な描写に頼っている。人ととの間に介在するこのように微妙な因果関係を簡潔に手際よくシェイクスピアは表現している。

5. 英語の結果構文—その意味と属性の総括

上述した歴史的変化などを考慮した上で、英語の結果構文の意味とその属性について最終的なまとめをしておこう。

(3)英語結果構文の意味と属性

(i) Type A John broke the vase into pieces.

構造 NP₁ V NP₂ RP (動詞は目的語を下位範疇化)

意味 [John's ACT ON the vase CAUSE the vase BECOME BROKEN

into pieces]

属性 この CAUSE は動詞由来。その論理的意味は恒常的継起性理論で規定される。結果状態は出現。

(ii) Type B John shook his wife awake.

構造 $NP_1 V NP_2 RP$ (動詞は目的語を下位範疇化)

意味 [John's shaking CAUSE his wife BECOME awake]

属性 この CAUSE は動詞由来ではなく blending 操作により歴史的意味変化を経てもたらされたもの。その論理的意味は反実仮想条件理論で規定される。結果状態は出現。

(iii) Type C The alarm clock ticked the baby awake.

構造 $NP_1 V NP_2 RP$ (動詞は目的語を下位範疇化していない)

意味 [The alarm-clock's ticking CAUSE the baby BECOME awake]

属性 この CAUSE は動詞由来ではなく blending 操作により歴史的意味変化を経てもたらされたもの。その論理的意味は反実仮想条件理論で規定される。結果状態は出現。

(iv) Type C' John swept the broom to pieces.

構造 $NP_1 V NP_2 RP$ (動詞は目的語を下位範疇化していない)

意味 [John 's sweeping CAUSE the broom BECOME to pieces]

属性 この CAUSE は動詞由来ではなく blending 操作により歴史的意味変化を経てもたらされたもの。結果状態は出現していない。CAUSE は結果状態が出現したとの仮定での解釈。結果状態が出現しなければいかなる因果理論でも規定はできない。この CAUSE 関数は形だけのものになる。そのため下線を施して他と区別している。CAUSE があるのに結果状態が出現していない矛盾から推論が起動し「ほど」解釈が含意として得られる。

推論解釈 : In sweeping the floor, there is a degree of strength of using a broom, which corresponds to the broom's falling

apart. The degree of John's sweeping is on this degree or more.

(v) Type C The joggers ran the pavement thin.

構造 NP₁ V NP₂ RP (動詞は目的語を下位範疇化していない)

意味 [The joggers running CAUSE the pavement BECOME thin]

属性 この CAUSE は動詞由来ではなく blending 操作により歴史的意味変化を経てもたらされたもの。その論理的意味は構造的等式フレーム理論で規定される。結果状態は出現。しかし実際に結果状態が出現していない解釈も可能。その場合構造的等式フレーム理論でも規定できず、推論が起動し「ほど」解釈が含意として得られる。

推論解釈 : Jogging may involve a degree of intensity and continuity of running, described as thinning the pavement. The degree of the joggers' running equals that degree or surpasses it.

英語の結果構文では形式は全て同一であり、それを共通点にして意味の変化が起こった。上の表示は Goldberg and Jackendoff (2004)の結果構文の表現方式に近いが、CAUSE は構文から直接派生しているというのではなく、言語変化を経て Type A との類似性から Type B、C に受け継がれたものと考えている。つまり Goldberg and Jackendoff では因果関係を「構文由来」、つまり C-sub が CAUSE を与えているとしていたが（第 2 章 3.1.1 参）これに歴史的変化に基づく説明を与えたことになる。

Type C については事情が幾分複雑であった。(iii)では結果状態が実現した解釈になり、CAUSE は反実仮想的条件説で規定する因果関係に該当する。Type C'の(iv)では結果状態が実現していない。この場合結果状態の出現を含意する CAUSE との間に矛盾が生じ、そこから推論が始動し、「ほど」解釈を含意として得ることになる。また(v)のように結果状態の出現に関し両様の解釈が可能な場合、結果状態出現解

釈では CAUSE は構造的等式フレーム理論で規定する因果関係に対応し理解される。結果状態が実現していないと解される時には CAUSE との間に矛盾が生じ、そこから推論が始まり「ほど」解釈に至ると考えられる。

英語の結果構文を 3 つの系統 Type A、B、C に分けて考えてきた。これが基本的区分であることは間違いない。Type C についても動詞が目的語（疑似目的語）を下位範疇化しないという共通点があるからである。しかし Type C に関して結果状態の出現/非出現を考慮すれば出現解釈、非出現解釈、両様解釈可能という属性を備えた下位区分が考えられ、(3)の(i)~(v)のように分けることも可能である。

6. 展望

既に述べたようにまだ結果構文の意味論は完成したわけではなくまだ拡充していかなくてはならない。一つは「総称因果」を表現する結果構文の意味論を探ること、また過去形ではない「現在の習性」を示すような結果構文の意味論の完成も待たれる。今までの結果構文は実現した、単称の例のみを対象にしてきたからである。総称文の意味論自体が難しいので、それに因果関係がからんでくると解決の糸口を見つけることも難しいと思われる。総称因果の哲学的分析の進展を待たなくてはならない。

またイタリア語、ルーマニア語で因果を示す「まで」の用法があることは明確だが、結果を含意する「ほど」に対応する用法の存在は明確ではない。この点は今後も探っていかなくてはならない。つまりまだまだ探求は続していくということである。

言葉は変化していく。そして学問は進歩していく。そう信じて筆をおくことにする。

参考文献

- Aliseda, Atocha. (2006) *Abductive Reasoning: Logical Investigations into Discovery and Explanation*. Springer.
- Beebee, Helen., Christopher Hitchcock and Peter Menzies. (2009) *The Oxford Handbook of Causation*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Bittner, Maria. (1999) “Concealed Causatives,” *Natural Language Semantics* 7, pp.1-78.
<http://dx.doi.org/10.1023/A:1008313608525>
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Brisard, Frank. (2002) “The English present,” Frank Brisard (ed.), *Grounding: The Epistemic Footing of Deixixs and Reference*. Mouton de Gruyter, Berlin / New York, pp.251-297.
- Bronnikov, George. (2008) “The Paradox of Clarity: defending the Missing Inference Theory,” Friedman, T., and Ito, S. (eds.), *Semantics and Linguistic Theory* (SALT) 18, Ithaca, NY: Cornell University, pp. 144-57.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall. (1992) “The argument structure and syntactic structure of resultatives,” *Linguistic Inquiry*, vol.23, no2, pp.173-234.
- Chierchia, Gennaro. (2006) “Implicature of domain widening,” *Linguistic Inquiry* 37.4, pp.535-590.
- Chierchia, Gennaro. (2013) *Logic in Grammar: Polarity, Free Choice, and Intervention*. Cambridge, MA: Oxford University Press.
- Chierchia, Gennaro and Sally McConnell-Ginet. (1990) *Meaning and Grammar: An Introduction to Semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Collins, John, Ned Hall. and L.A. Paul (2004). “Counterfactuals and Causation: History, Problems, and Prospects,” J. Collins, Ned. Hall, and L. A. Paul (eds.), *Causation and Counterfactuals* pp.1-57. Cambridge, MA: MIT Press.
- Coseriu, Eugenio. (1958) *Sincronia, Diacronia, E Historia – El problema del cambio lingüístico* – 邦訳『言語変化という問題共時態、通時態、歴史』田中克彦 岩波書店.
- Croft, William. (2012) *Verbs*. New York, Oxford University Press.
- de Swart, H., (1998) *Introduction to Natural Language Semantics*. Stanford: CSLI Publications.
- Deely, John. (1990) *Basics of Semiotics*. Indiana university Press.
- Dowty, R David. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Boston, MA: Reidel Publishing Company.
- Evans, Vyvyan and Melanie Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh, Edinburgh University Press.
- Farkas, Imola-Agnes. (2009) “Some differences between English and Romanian resultative constructions,” *BWPL*.
- Farkas, Imola-Agnes. (2013) *Resultative Constructions in English and Romanian: A comparative analysis*. ISBN:978-973-595-616-5.
- Fauconnier, Gill. (1985) *Mental Spaces*. Cambridge University Press.
- Fauconnier, Gill. and Mark Turner. (1996) “Blending as a central process of grammar,” A. Goldberg (ed.), *Conceptual structure, discourse, and language*. Stanford, CA: CSLI.
- Fauconnier, Gill and Mark Turner. (1998) “Conceptual integration networks,” *Cognitive Science*, 22(2), pp.133-187.
- Fauconnier, Gill. and Mark Turner. (2002) *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind’s Hidden Complexities*. New York: Basic Books.

- Fodor, Jerry A. (1983) *The Modularity of Mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fodor, Jerry A. (1998) *Concepts: Where Cognitive Science Went Wrong*. Oxford: Oxford University Press.
- Folli, Raffaella, and Gillian Ramchand. (2002) “Event structure composition: the case of goal of motion and resultative constructions in Italian and Scottish Gaelic,” Verkuyl, Henk J. (ed.) *Proceedings of Perspectives on Aspect Conference*, OTS, Utrecht.
- Folli, Raffaella and Gillian Ramchand (2004) “Prepositions and Results in Italian and English: an Analysis from Event Decomposition,” Verkuyl, Henk J., Angeliek van Hout and Henriette de Swart (eds.) *Perspectives on Aspect*, 1-20, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Goldberg, Adele E.E. (1995) *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. Chicago: Chicago University Press.
- Goldberg, Adele E.E. and Ray Jackendoff. (2004) “The English Resultative as a Family of Constructions,” *Language*, 80: pp.532-568.
<http://dx.doi.org/10.1353/lan.2004.0129>
- Goldberg, Adele E.E. (2006) *Construction at work: The nature of generalization in language*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E.E. (2013) “Constructionist Approaches,” Thomas Hoffmann, and Graeme Trousdale.(ed.), *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, pp.15-31. New York, NY: Oxford University Press.
- 濱本秀樹 (2009) 「早期英語教育における仮設形成推論の役割」
 近畿大学文芸学部紀要『文学・芸術・文化』20,2:1-32.
- 濱本秀樹 (2015a) 「程度表現の意味論」近畿大学大学院総合文化研究科『混沌』12, pp.1-23.

- 濱本秀樹 (2015b) 「結果構文の意味論再考—2分類をめぐって」
 近畿大学文芸学部紀要『文学・芸術・文化』27, pp.145-158.
- 濱本秀樹 (2018) 「因果関係と意味論」 近畿大学国際学部紀要論文
 集 3, pp.1-19.
- 濱本秀樹 (2018) 近畿大学大学院総合文化研究科『混沌』15, pp.1-25.
- Hamamoto, Hideki. (2022a) "English and Japanese Resultatives Resultative Constructions vs. Lexical Resultatives," *International Journal of English and Cultural Studies* Vol. 5, No. 1: pp.44-58.
 doi:10.11114/ijecs.v5i1.5560
 URL: <https://doi.org/10.11114/ijecs.v5i1.5560>
- Hamamoto, Hideki. (2022b) "Resultatives as an Equative Construction: Evidence from Japanese and Romanian, and its Implication for English," *International Journal of Language and Linguistics* vol.10, 4 pp.248-259. doi: 10.11648/j.ijll.20221004.14
<https://article.sciencepublishinggroup.com/pdf/10.11648>
- Hitchcock, Christopher. (2001) "The Intransitivity of Causation Revealed in Equations and Graphs," *Journal of Philosophy*, 98, pp.273-299.
- Hitchcock, Christopher. (2004) "Do All and Only Causes Raise the Probabilities of Effects?" Collins, John., Ned Hall and L.A. Paul (eds.), *Causation and Counterfactuals*, MIT press.
- Hitchcock, Christopher. (2007) "Prevention, preemption and the Principle of Sufficient Reason," *Philosophical Review* vol.116, no.4: pp.495-532.
- Hoekstra, T. (1988) "Small clause results," *Lingua* 74. pp.101-139.
- 一ノ瀬正樹 (2006) 『原因と理由の迷宮—なぜならばの哲学』
 劲草書房.
- Hoffmann, Thomas and Graeme Trousdale. (2013) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*. New York, NY: Oxford University Press.
- Horn, Laurence. (1972) "On the Semantic properties of Logical Operators in English," distributed by IULC

- Horn, Laurence. (1984b) “Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature,” Schiffzin, D. (ed.), *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications*. Washington: Georgetown University Press.
- Horn, Laurence. (2001) *A Natural History of Negation*. Stanford: CSLI Publications.
- Hu, Xuhui. (2018) *Encoding Events*. Oxford University Press.
- Hume, David. (1748) *An Enquiry Concerning Human Understanding*, P. Millican (ed.), Oxford: Oxford University Press (2007).
- Hume, David. (2000a/1739) *A Treatise of Human Nature*. D.E. Norton, and M.J. Norton (eds.), *Oxford Philosophical Texts*. New York, NY: Oxford University Press.
- Hume, David. (2000b/1748) *An Enquiry concerning Human Understanding*. D.E. Norton, and M.J. Norton (eds.), *Oxford Philosophical Texts*. New York, NY: Oxford University Press.
- Iwata, Seizi., (2006) “Argument resultatives and adjunct resultatives in a lexical construction account: the case of resultatives with adjectival result phrases,” *Language Sciences* 28, pp. 449-496.
<http://dx.doi.org/10.1016/j.langsci.2005.04.001>
- Iwata, Seizi. (2019) *English Resultatives A force-recipient account*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. (2002) *Foundations of language*. New York, NY: Oxford University Press.
- Jackendoff, Ray. (2010) *Meaning and the lexicon*. Oxford University Press.
- Jackendoff, Ray. (2013) “Constructions in the parallel architecture,” Thomas Hoffmann, and Graeme Trousdale (eds.), *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, pp. 70-92. New York, NY: Oxford University Press.

- Jaszczolt, Katarzyna. (2005) *Default Semantics*. Oxford University Press.
- Jaszczolt, Katarzyna. (2009) *Representing Time: An essay on temporality as modality*. Oxford University Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 くろしお出版.
- 影山太郎 (2005) 「辞書的司式と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合に向けて—」影山太郎編『レキシコンフォーラム no.1』 pp.65-101, 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (2006) 「結果構文のタイプロジーに向けて」『人文論及』 56-2. pp.45-61, 関西学院大学.
- 影山太郎 (2007) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」小野尚之編『結果構文研究の新視点』 pp.33-65, 東京: ひつじ書房.
- 神谷昌明 (2008) 「古英語に現れる小節・結果構文」『豊田工業高等専門学校研究紀要』 vol.41: 145-174.
- 神谷昌明 2009. 「中英語に現れる小節・結果構文」『豊田工業高等専門学校研究紀要』 vol.42: 133-152.
- Kamp, Hans. (1981) "A Theory of Truth and Semantic Representation," Groenendijk, J. A.G., Jassen, T.M.V., Stokhof, M.B.J. (eds.), *Truth, Representation and information*, Dordrecht, pp. 277-322.
- Kamp, Hans. and Uwe Reyle. (1993) *From Discourse to Logic*. Boston: Kluwer Academic Press.
- Kamp, Hans. (2001a) "The importance of presupposition," Roherer, C., Roßdeutscher, A., Kamp, H. (eds.), *Linguistic form and its computation*, Stanford: CSLI Publications, pp.1-47.
- Kamp, Hans. (2001b) "Presupposition computation and presupposition justification," Bras, M., Vieu, L. (eds.), *Pragmatic and semantic issues in discourse and dialogue*, Amsterdam: Elsevier.
- Kamp, Hans. (2006) "Temporal reference and outside propositional attitudes" , von Heusinger, K., Turner, K. (eds.), *Where semantics meets pragmatics*, Amsterdam: Elsevier, pp.493-525.
- Kennedy, Christopher. (1999) *Projecting the adjective: The syntax and*

- semantics of gradability and comparison.* New York:Garland.
- Kennedy, Christopher. and Louise McNally. (2005) “Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates,” *Language*, Vol.81, no.2, pp.345-81. <http://dx.doi.org/10.1353/lan.2005.0071>
- Kennedy, Christopher and Beth Levin. (2008) “Measure of change: The adjectival core of degree achievements,” McNally Louise and Christopher Kennedy (eds.) *Adjectives and adverbs*, pp.156-182.
- Kintsh, Walter. (1987) “Contributions from cognitive psychology,” Tierney, R. J., Anders, R. J. and Mitchell, J. N. (eds.), *Understanding Readers: Theory and Practice*. London: Routledge.
- 小林 標 2019. 『ロマンスという言語—フランス語は、スペイン語は、イタリア語は、いかに生まれたか—』
大阪: 大阪公立大学共同出版.
- Kratzer, Angelika. (2005) “Building resultatives,” Maienborn, Claudia. and Wollstein-Leisen, A. (ed.), *Events in syntax, semantics, and discourse*, pp.177-212. Berlin: Niemeyer.
<http://dx.doi.org/10.1515/9783110913798.177>
- Kutach, Douglas. (2014) *Causation*. Polity Press.
- Kvart, I. (2004) “Causation: Probabilistic and Counterfactual Analyses,” Collins, J., Hall, and L.A. Paul (eds.) *Causation and Counterfactuals*, MIT press.
- Levelt, Willem. J.M. (1993) *Speaking*. Cambridge: MIT Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the stic syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MIT Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. (2001) *Argument realization*. Cambridge, MIT Press.
- Lewis, David. (1973) *Counterfactuals*. Cambridge: Harvard University Press
- Lewis, David. (1986) *Philosophical Papers*. Vol II. Oxford: Oxford University Press.

- Lewis, David. (2004) “Causation as Influence,” J. Collins, N. Hall, and L. A. Paul, (ed.), *Causation and Counterfactuals*.pp.75-106. Cambridge, MA: MIT Press.
- Li, Chao. (2009) “On the scare reading of resultatives,” *Language Sciences* 31. pp.389-408.
- Li, Chao. (2014) “A Three-Way Distinction of English Resultatives and Its implication for Resultative Typology,” *Concentric: Studies in Linguistics* 40.2: pp.1-28.
- Mill, J.S. (1911) *A System of Logic: Ratiocinative and Inductive*. London: Longmans, Green.
- 三原健一 (2009) 「スケール構造からみた結果構文」、小野尚之 (編) 『結果構文のタイプロジー』 東京：ひつじ書房, pp. 141-170.
- Mumford, Stephen and Rani Lill Anjum. (2013) *Causation: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University press.
- Paul, L.A., and Hall, N. (2013) *Causation a user's guide*. Oxford: Oxford University Press.
- Pearl, Judea, Glymour, Madelyn and Jewell, Nicholas. (2016) *Causal Inference in Statistics: A Primer*. John Wiley & Sons Ltd.
- Perlmutter, David, M. (1978) “Interpersonal passives and the unaccusative hypothesis,” *Proceedings of the Berkeley Linguistic Society*, 4, pp. 157-189.
- Portner, Paul. (2009) *Modality*. Oxford: Oxford University Press.
- Psillos, S. (2002) *Causation and Explanation*, Chesham: Acumen.
- Psillos, S. (2009) “Regularity Theories,” Beebe, Helen, Hitchcock, Christopher and Menzies, P. (eds.), *The Oxford Handbook of Causation*. New York, NY: Oxford University Press.
- Pustejovsky, James. (1991) “The Syntax of Event Structure,” *Cognition* 41: pp.47-81.
- Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*. MA: MIT Press.

- Randal, Janet H. (1982) "A lexical approach to causatives," *Journal of Linguistic Research* 2.3: pp.77-105.
- Reid, Thomas. (1788) *Essays on the Activity Power of Man*. Edinburgh: John Bell Smart.
- Romagno, Domenica. (2020) "Strong resultative constructions in Romance between usage and norm," *Belgian Journal of Linguistics* 34:295-305.
- Rothstein, Susan. (2003) "Secondary Predication and Aspectual Structure," Lang, Ewald, Cathrine Fabricius-Hansen and Claudia Maienbon (eds.), *Handbook on Adjuncts*. Mouton. pp.209-233.
- Rothstein, Susan. (2004) *Structuring Events: A study in the Semantics of Lexical Aspect*. Oxford: Blackwell.
- Simpson, Jane. (1983) "Resultatives," Levin, L. Rappaport, M. and A. Zaenen (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar* pp.143-157. Bloomington: Indiana University Press.
- Slobin, Dan. Isaac. (2004) "The many ways to search for a frog: linguistic typology and the expression of motion events," Stromqvist, S., Verhoeven, L. (eds.), *Relating events in narrative*, vol.2:*typological and contextual perspectives*. Lawrence Erlbaum Associates, pp. 210-57.
- Smith, Carlota. S., (1991) *The Parameter of Aspect*, Dordrecht: Kluwer Academic Press.
- 鈴木信吾、鈴木エレナ (2008) 『ルーマニア語』白水社.
- 鈴木信吾、菅井健太 (2014) 『まずはこれだけルーマニア語』国際語学社.
- Sperber, Don and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Talmy, L., (1985) "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms," Shopen, T. (ed.), *Language Typology and Syntactic*

- Description 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Tanaka, Eri. Mizutani, Kenta. and Solt, S. (2019) “Existential semantics in equatives in Japanese and German,” *Proceedings of the 22nd Amsterdam Colloquium*. 377-386.
- Tanaka, Eri. Mizutani, Kenta. and Solt, S. (2020) “Equative *hodo* and the polarity effects of existential semantics,” *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAT-AI International Workshops, JURISIN, AI-Biz, LENLS, Kansei-AI yokohama*, Japan.
- Tanaka, Eri. (2022) “Amazing-HODO,” Gotzner, N. and Sauerland (eds.), *Measurements, Numerals and Scales*, Palgrave Studies in Pragmatics, Language and Cognition.
- Tortora, Christina, M. (1998) “Verbs of Inherently Directed Motion are Compatible with Resultative Phrases,” *Linguistic Inquiry*, vol.29 no.2 : pp. 338-345.
- Verkuyl, J. Henk. (1993) *A theory of aspectuality*, Cambridge University Press.
- Visser, F. TH. (1984) *An Historical Syntax of the English Language*. I-III, III second half. Leiden: E.J. Brill.
- Walter, Henriette. (1994) *L'Aventure des langues en Occident: Leur origine, leur histoire, leur géographie*, Paris, Robert Laffont. 邦訳
平野和彦 (2006) 『西欧言語の歴史』 藤原書店.
- 米盛裕二 (1981) 『パースの記号学』 効草書房。
- Washio, Ryuichi. (1997) “Resultatives, compositionality and language variation,” *Journal of East Asia Linguistics*, 6: pp.1-49.
- Wechesler, Stephen. (2005a) “Weighing in on scales: A reply to Goldberg and Jackendoff,” *Language*, vol.81 no.2, pp. 465-473.
- Wechesler, Stephen. (2005b) “Resultatives under the event argument homomorphism model of telicity,” Erteschik-Shir, N., Rapoport, T.

(eds.) *The Syntax of Aspect*, Oxford: Oxford University Press,
pp.255-273.

Wellwood, Alexis. *The Meaning of More*. Oxford, Oxford University Press.

由本 陽子(1996)「語形成と語彙概念構造—日本語の『動詞+動詞』
の複合語形成について」奥田博之教授退官記念論文集刊行会
(編)『言語と文化の諸相—奥田博之教授退官記念論文集』
pp.105-118.英宝社

Corpus:

The Oxford English Dictionary online. 2022. Oxford University Press.

『日本語歴史コーパス』 国立国語研究所. (2022).

資料：

Maron, Margaret (1998) *Home Fires*. Waverly: Occone Spirit Press.

Semantics of English and Japanese Resultatives

Comparison to Romance Languages and Diachronic Analysis

Hideki HAMAMOTO

SYNOPSIS

This paper explores a new way of explaining Japanese and English resultative expressions. In current studies of resultative constructions, there are broadly two basic subclasses in English resultatives: weak and strong. Following an influential view (Li, 2014), the latter can be further classified into strong resultatives with a subcategorized object and those with an un-subcategorized object. It has been said that there are weak resultatives in Japanese but no strong resultatives. However, even in Japanese compound-verb constructions, sentences with an equative relation markers *hodo* or *made* can express the content similar to English strong resultatives of both subtypes. After all, English and Japanese resultatives can be divided into three subtypes.

This paper also focuses on the historical development of English resultative constructions. This diachronic view reveals that the English resultative constructions began with type A, extended to type B, and finally, let in type C. Comparing this developmental process with Japanese resulting expressions such as *hodo* and *made* naturally leads to the inference that English types B and C expanded to fill in the gaps in the semantic field. We also propose that this diachronic expansion is explicable by the blending theory.

Let us consider first some English examples of change-of-state transitive verbs and then the Japanese counterparts. We call this class weak resultatives.

(1) Resultatives with a change-of-state transitive verb

- a. John broke the vase into pieces.
- b. Bill painted the wall green.
- c. Kate bent the iron bar into a U.

English weak resultatives correspond precisely to the Japanese counterparts as in (2), whose standard form is [NP-TOP NP-ACC ni V-tense]. They also have change-of-state transitive verbs.

(2) Japanese resultatives (corresponding to (1))

- a. Kenji-wa kabin-o konagona-ni kowashi-ta.
Kenji-TOP vase-ACC pieces-into break-PAST.
'Kenji broke the vase into pieces.'
- b. Taro-wa kabe-o midori-ni nut-ta.
Taro-TOP wall-ACC green-in paint-PAST
'Taro painted the wall green.'
- c. Keiko wa bou-o uji-ni mage-ta
Keiko-TOP bar-ACC U shape-in bend-PAST
'Keiko bent the iron bar into a U.'

Their function CAUSE derives from the verb meaning precisely like in English. The conceptual structure of the resultative expression with a change-of-state transitive verb is as follows.

(3) John broke the vase into pieces. (= Kenji-wa kabin-o konagona-ni kowashi-ta.)

John's action on the vase CAUSE [the vase BECOME BROKEN] + [adjunct into pieces]

Next, let us turn to strong resultatives, i.e., the resultatives with a non-change-of-state verb. Li (2008, 2014) classifies English resultatives into three subtypes: Type A:

weak resultatives; Type B: strong resultatives with verbs subcategorizing the objects; Type C: strong resultatives whose verbs do not subcategorize the objects.

(4) Type B and C

- a. Mary shook John awake.
- b. Jack hammered the metal flat.
- c. The alarm clock ticked the baby awake.
- d. Kyoko yelled herself hoarse.

Unlike weak resultatives (type A), it should be noted that strong resultatives of type B and C cannot find equivalent Japanese resultatives in the standard form. However, the Japanese resultative expressions in (5) below do not entirely correspond to the meanings of the English sentences but represent very close meanings:

(5) a. Mary-wa John-o yusuri-okoshi-ta

- a' Mary-wa John-ga mezameru-made/*hodo yusu-ta
- b. Jack-wa kinzoku-o tataki-nobashi-ta
- b' Jack-wa kinzoku-ga taira-ni-naru-made/*hodo tatai-ta
- c. Mezamashi-tokei-wa akachan-ga mezameru-hodo/?made kachikochi-nat-ta
- d. Kyoko-wa koe-ga kareru-hodo saken-da

In (5), for representing causality between two events, there appear three ways: compound verbs (5a), S_1 -*made* S_2 (5a', b'), and S_1 -*hodo* S_2 (5c, d) constructions. When used in the S_1 -*made* S_2 construction, S_1 -*made* marks the endpoint of the action depicted by S_2 . In S_1 -*hodo* S_2 construction, S_1 -*hodo* represents a standard degree. They are defined formally as in the following:

(6) Mary-wa John-ga mezameru-made yusut-ta

- i. $t', t'' \subset T$, t : variable of time interval
- ii. $<$ order on time scale

- iii. $\exists t' [\text{become-aware (John) at } t' \wedge \text{shake (Mary, John) at } t'' \wedge t' \subset t'' \wedge \forall t (t \subset t'' \rightarrow t < t')]$

(7) Kyoko-wa koe-ga kareru-hodo saken-da

- i. d^* : degree
- ii. $\exists d^* [\text{sufficient-for-PRO's voice-to-be-hoarse-by-crying } (d^*) \wedge f(\text{amount-of-cry (taro)}) \geq d^*]$ holds true at w'

(6iii) roughly says that the event of “John’s becoming awake” is included by the time interval during which the event of “Mary’s shaking John” takes place and comes at the end of that time interval. (6ii) roughly means that there is a specific degree of crying on which people’s voice becomes hoarse. The degree of Taro’s crying amounts to that standard degree or surpasses it.

To provide the truth condition for English resultative constructions, we must clarify what the CAUSE indicates. We consider the three leading theories of causality: Hume’s regularity theory, Lewis’s counterfactual dependence theory, and Hitchcock’s structural equations framework theory. We have found out that Type A does well with Hume’s approach, and Lewis’s theory can deal with Type B, and Hitchcock’s proposal adapts to Type C. The summary is shown in the following table:

Table 3. English causal resultatives: Type A, B, C

type	Example	complete RS	Hume’s	Lewis’s	Hitchcock’s
Type A weak	John broke the vase into pieces.	✓	✓	✓	✓
Type B strong	Bill shook Lisa awake.	✓	X	✓	✓
Type C strong	Dave drank the pub dry.	X	X	X	✓

As for the diachronic observations of English resultative constructions, we used Visser (1967 : An Historical syntax of the English Language I-III b) and the Oxford English Dictionary to capture the emergence of English resultatives chronologically. From this survey, we expect to clarify the relationship between the appearance periods of each type. Parts of this survey are shown in the following tables:

Table 2. Examples of English resultatives in OE (Based on Visser 1967)

verb	examples and glosses	type
awæscan : wash	gif þu nabbe buteran genoge, awæsc hit swiðe clæne, if you not-have butter enough, wash it very clean	A
bindan : bind	Þæt þu mec þus fæste fetrum ȝebunde æghwæs orwizne That you weak this firmly bind defenceless	A

Table 3 Examples of Enlish resultatives in ME (Based on Visser 1967)

beaten :beat	1399 1460	Take clene whete and bete it small in a morter Take clean white and beat it small in a mortar Bett hym blak and bloo Beat him black and blue	B
bürsten :burst	1446 1450	There came a wind and brast the dores ope There came a wind and burst the doors open He... brest oppyn þe dure. He... burst open the door.	B
chewen :chew	1425	That þey ne chewe þat ost to small The they not chew that ost to small	B

Table 4 Examples of English resultatives in ModE and PE (Based on OED)

	Year	source	examples	type
talk	1600	Shakespear	They would talke themselves madde	C
talk	1623	Shakespear	Talke us to silence.	C
drink	1597	Shakespeare	The taske he vndertakes, Is numbering sands, and drinking Oceans drie.	C
drink	1608	E.Topsell	Where-vnto the vipers coming, easily drinke themselves tame	C
drink	1616	Shakespeare	Ere the ninth hour, I drunke him to his bed.	C

The tables above are excerpts from the original tables. The complete original data give a good indication of the diachronic nature of the English resultatives:

- (i) In the OE period, though we have a small number of instances of resultative constructions, all of them are of Type A.
- (ii) In the ME period, 10 cases out of 18 examples are of Type A, 7 cases of Type B and only one case of Type C.
- (iii) As for ModE and PE, seven verbs are categorized as Type C.
The list may not be exhaustive. However, type C resultatives do not appear before the ModE period.
- (iv) So, the order of appearance of these resultatives is: Type A > Type B > Type C.

As for the theoretical background for linguistic changes, the Blending theory can provide a tool to decipher this developing pattern.

Now we look at the resultative expressions of Romance languages. It has been widely known that Italian and Romanian have weak resultatives but lack strong resultatives. However, it is true that they have resultative expressions which correspond to the semantic contents of English strong resultatives. Consider some examples of these two languages.

Romanian and Italian weak resultatives:

- a. Ion a vopsit gard-ul alb
John has paint-PP fence-the-SG white-SG
John has painted the fence white.
- b. Maria s- a vopsit roșcată blondă
Maria REFL has dye-PP red-SG blonde-SG
Mary has dyed herself blonde.
- c. Giovanni ha dipinto la macchina rossa.
John has paint-PP the-SG car red-SG
John painted the car red.
- d. Maria ha pettinati I cappelli lisci come seta.
Maria has comb-PP the hair-PL smooth like silk
Mary combed hair smooth like hair.

Romanian and Italian examples of resultatives corresponding to English Type C:

- a. Ion l- a bătut pe Paul până ce a murit.
John CL3_{rd}-SG M has beat-PERF Paul UP-TO has die-PP
John beated Paul to death.
- b. Cutremurul a scuturat orașul până la trezire.
Earthquake has shake-PP town until at wakening

- The earthquake shook the town awake.
- c. Giovanni ha battuto Paul fino alla sua morte.
 Giovanni has hit-PP Paul UP-TO his death
 Giovanni hit Paul dead (to his death)
- d. La guardia ha affamato i prigionieri fino a morire.
 the guard has starve-PP the prisoners UP-TO die.
 The guard starved the prisoners dead.

The observation of the behaviors of the Romanian and Italian resultatives shows clearly that these languages share the same semantic behavioral pattern as the Japanese resultatives.

The discussion so far can be summarized as follows:

- (i) Japanese and English have weak resultative constructions in common. The causality involved in this type is of verb origin.
- (ii) Although there are no valid strong resultatives in Japanese, the compound verb constructions and the expressions with *hodo* and *made* can express the contents close to the meanings of the English strong resultatives.
- (iii) The English strong resultatives are distinguished between type B and type C. The former has a transitive verb subcategorizing its object, and the latter has an intransitive verb that does not subcategorize the object. Including type A, there is a three-way distinction of English resultatives.
- (iv) The Japanese specific-resultatives can be divided into two subclasses regarding their status of resultative states, that is, whether the resultative states are complete or not. In addition to the weak resultatives, there is a three-way distinction between Japanese resultative expressions.
- (v) The CAUSE function of type A resultatives is adequately grasped by Hume's and Lewis's causality, type B by Lewis's theory, and type C by Hitchcock's theory.
- (vi) The diachronic analysis reveals that the English resultative construction family has an order in its historical emergence: type A>type B>type C. The blending theory

seems viable to account for this expansion process.

- (vii) Italian and Romanian resultatives are similar to the Japanese resultatives in their behaviors. They have weak resultatives and also resultative expressions, which correspond to the contents of English strong resultatives.